

新東京国際空港
埋蔵文化財発掘調査報告書V

No.2 遺 跡

No.10 遺 跡

1 9 8 5

新東京国際空港公団
財団法人 千葉県文化財センター

新東京国際空港
埋蔵文化財発掘調査報告書V

No.2 遺 跡
No.10 遺 跡

1 9 8 5

新東京国際空港公団
財団法人 千葉県文化財センター

序

関東地方の東部にあって広大な常総台地の南半を占める下総台地は、周囲を海や大河川に囲まれた緑豊かな平坦な地形を成し、古くから人々の生活が営まれてきたことが知られています。

新東京国際空港予定地内においても、先土器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡が数多く所在しており、当センターでは千葉県教育委員会の指導のもとに発掘調査を昭和51年以来計画的に実施しております。

このたび、昭和54年度に発掘調査を実施したNo.2遺跡・No.10遺跡の調査結果がまとまり報告書を刊行する運びとなりました。

No.2遺跡からは、先土器時代の石器群、それに当地域では稀少な古墳時代及び歴史時代の集落跡が発見され、また、No.10遺跡からは、先土器時代の石器群及び縄文時代の陥し穴状土壙群が多数発見されました。

本書は新東京国際空港関連の発掘報告書の第5集にあたりますが、当地域の歴史を解明するうえでまたひとつ貴重な資料が追加できたといえましょう。

本報告書が学術的資料として利用されるばかりでなく、教育資料及び郷土の歴史に対する理解を深める資料として活用されることを望んで止みません。

最後に、新東京国際空港公団をはじめ、関係諸機関各位のご協力とご指導にお礼申し上げるとともに、調査に協力された補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和60年3月

財団法人千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例　　言

1. 本書は、新東京国際空港予定地内に所在するNo.2遺跡及びNo.10遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、新東京国際空港公団の委託を受け、千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は昭和54年度事業として行なわれ、整理作業及び報告書の刊行は昭和58～59年度事業として実施した。
4. 遺跡コードは、No.2遺跡が409-006、No.10遺跡が409-007である。
5. 本書は、新東京国際空港関連の発掘調査報告書の第5集にあたるものである。
6. 発掘調査及び報告書作成作業は、下記の職員がこれにあたった。

(1) 発掘調査（昭和54年度）

調査部長　白石　竹雄

班　長　杉山　晋作

No.2遺跡　調査研究員　三浦　和信・加藤　正信・西口　徹

No.10遺跡　調査研究員　三浦　和信・加藤　正信・西口　徹・西川　博孝
　　　　　　　山口　直樹・柳　　見

(2) 報告書作成作業（昭和58年度）

調査部長　白石　竹雄

部長補佐　根本　弘

班　長　西山　太郎

No.2遺跡　調査研究員　雨宮龍太郎

No.10遺跡　調査研究員　川島　利道

(3) 報告書刊行作業（昭和59年度）

調査部長　鈴木道之助

部長補佐　岡川　宏道

班　長　田坂　浩

調査研究員　川島　利道

7. 本書は、第I篇・第III篇を川島利道、第II篇を雨宮龍太郎が執筆した。

8. 本書の編集は、田坂浩、川島利道が担当した。

9. 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県教育庁文化課、新東京国際空港公団の関係者をはじめ、多くの方々から御指導御助言を頂いた。特に、No.10遺跡の石材の一部については国立科学博物館の加藤昭氏に御鑑定を頂き、衷心より謝意を表します。

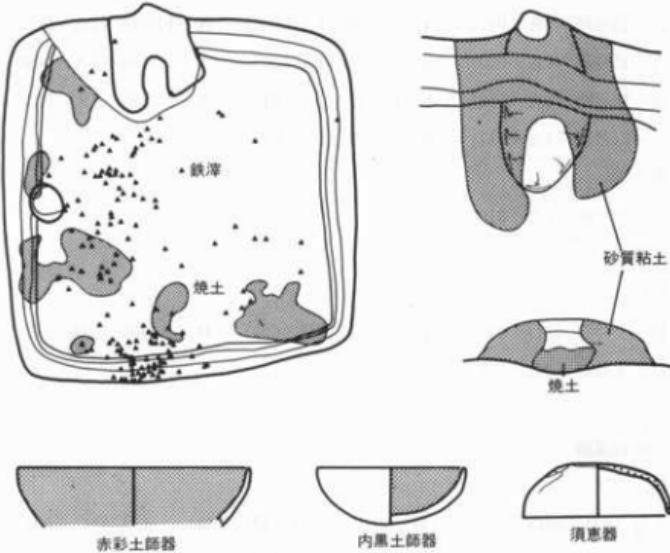
10. また、現場において酷暑の中、寒風の中を我々と苦楽を共に調査に従事して頂いた調査補

助員の方々、及び室内における整理作業に当って頂いた補助員の方々は本書の刊行に不可欠であり、終始御協力を頂き衷心より感謝の意を表します。

凡　　例

1. 挿図中に示したもの以外は下記のとおりである。

No.2 遺跡



No.10遺跡

■ 土壌内炭化物 ■ 土壌内焼土 ■ 繊維混入の土器

2. No.10遺跡における石材のうち玉髓は瑪瑙を含むものとする。

3. 報告遺構名と調査時遺構コードの対照表

() 内は、調査時に大グリッドごとに付した遺構コードであるが、本報告書においては1号・2号のような遺構名に変更した。

No.2 遺跡

A区

住居跡

A-1号跡 (1Aイ001) A-2号跡 (1Aイ011) A-3号跡 (1Aイ013)
A-4号跡 (1Aイ012) A-5号跡 (1Aイ006) A-6号跡 (1Aイ004)
A-7号跡 (1Aイ014) A-8号跡 (1Aイ015) A-9号跡 (1Aイ008)
A-10号跡 (1Aイ016) A-11号跡 (2Aイ001)

土壤

A-12号跡 (1Aイ002) A-13号跡 (1Aイ005) A-14号跡 (1Aイ003)
A-15号跡 (1Aイ020) A-16号跡 (1Aイ007) A-17号跡 (1Aイ009)
A-18号跡 (1Aイ019) A-19号跡 (1Aイ018) A-20号跡 (1Aイ022)
A-21号跡 (1Aイ017) A-22号跡 (2Bイ001)

焼土

A-23号跡 (1Aイ010)

B区

陥し穴

B-1号跡 (2Dイ001) B-2号跡 (2Dイ002) B-3号跡 (3Dイ001)
B-4号跡 (3Eイ001)

No10遺跡

陥し穴状土壤

1号 (0Dイ001)	2号 (0Dイ002)	3号 (1Bイ001)	4号 (1Cイ001)
5号 (1Dイ001)	6号 (1Dイ002)	7号 (1Eイ001)	8号 (2Cイ002)
9号 (2Cイ004)	10号 (2Cイ005)	11号 (2Dイ001)	12号 (2Dイ002)
13号 (2Dイ003)	14号 (2Dイ004)	15号 (2Eイ001)	16号 (3Cイ001)
17号 (3Cイ002)	18号 (3Dイ001)	19号 (3Dイ002)	20号 (3Dイ003)
21号 (3Eイ001)	22号 (3Eイ002)	23号 (3Eイ003)	24号 (4Cイ001)
25号 (4Cイ002)	26号 (4Dイ001)	27号 (5Bイ001)	28号 (5Cイ001)
29号 (5Cイ002)	30号 (5Cイ003)	31号 (5Cイ004)	32号 (5Cイ005)
33号 (5Cイ006)	34号 (5Cイ007)	35号 (5Dイ001)	36号 (5Dイ002)
37号 (5Eイ001)	38号 (5Eイ003)	39号 (6Bイ001)	40号 (6Bイ002)
41号 (6Bイ003)	42号 (6Cイ001)	43号 (6Cイ002)	44号 (6Cイ003)
45号 (6Cイ004)	46号 (6Cイ005)	47号 (6Dイ001)	48号 (6Dイ002)
49号 (6Dイ003)	50号 (6Eイ001)	51号 (6Eイ002)	52号 (6Eイ003)
53号 (6Eイ004)	54号 (6Fイ001)	55号 (7Bイ001)	56号 (7Cイ001)

57号 (7Cイ003) 58号 (7Cイ004) 59号 (7Cイ005) 60号 (7Cイ006)
61号 (7Cイ007) 62号 (7Dイ001) 63号 (7Dイ002) 64号 (7Dイ004)
65号 (7Dイ005) 66号 (7Eイ001)

その他の土壤

1号 (4Dイ002) 2号 (5Eイ004) 3号 (7Cイ002)

目 次

序 文

例 言

凡 例

第 I 篇 空港関係遺跡の概要	1
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第 II 篇 № 2 遺跡	9
第 1 章 調査の概要	11
第 1 節 遺跡の位置と環境	11
第 2 節 調査の経過と方法	12
第 2 章 A 区の調査	15
第 1 節 先土器時代	15
第 2 節 繩文時代	19
第 3 節 古墳～歴史時代	20
第 3 章 B 区の調査	52
第 1 節 先土器時代	52
第 2 節 繩文時代	63
第 3 節 古墳～歴史時代	72
第 4 章 小 結	73
第 III 篇 № 10 遺跡	83
第 1 章 調査の概要	86
第 1 節 遺跡の位置と環境	86
第 2 節 調査の経過と方法	86
第 3 節 遺跡の概要	89
第 4 節 遺跡の層位	89
第 2 章 造構と遺物	93
第 1 節 先土器時代	93
第 2 節 繩文時代	176
第 3 節 その他の時代	229
第 3 章 小 結	253

挿図目次

第1図 三里塚地区と下総台地の主な先土器時代遺跡	4
第2図 空港関係遺跡分布図	5
No.2 遺跡	
第3図 遺跡周辺の地形図	11
第4図 No.2 遺跡発掘調査区域図	13
第5図 A区先土器時代遺物分布図	16
第6図 A-1群遺物出土状況図	17
第7図 A-2群遺物出土状況図	18
第8図 A-2群石器類実測図	19
第9図 A区遺物包含層出土土器実測図	20
第10図 A区遺構配置図	21
第11図 A-1号跡実測図	22
第12図 A-1号跡出土遺物実測図	23
第13図 A-2号跡実測図	24
第14図 A-2号跡出土遺物実測図	25
第15図 A-3号跡実測図	26
第16図 A-3号跡出土遺物実測図	27
第17図 A-4号跡実測図	28
第18図 A-5号跡実測図	29
第19図 A-5号跡出土遺物実測図	29
第20図 A-6号跡実測図	30
第21図 A-6号跡出土遺物実測図	31
第22図 A-7号跡実測図	33
第23図 A-7号跡出土遺物実測図	34
第24図 A-8号跡実測図	35
第25図 A-8号跡出土遺物実測図	36
第26図 A-9号跡実測図	37
第27図 A-9号跡出土遺物実測図	38
第28図 A-10号跡実測図	39
第29図 A-10号跡出土遺物実測図	40
第30図 A-11号跡実測図	41

第 31 図	A-12号跡実測図	42
第 32 図	A-12号跡出土遺物実測図	43
第 33 図	A-13号跡実測図	44
第 34 図	A-13号跡出土遺物実測図	45
第 35 図	A-14号跡実測図	45
第 36 図	A-15号跡実測図	46
第 37 図	A-16号跡実測図	47
第 38 図	A-17号跡実測図	47
第 39 図	A-18号跡実測図	48
第 40 図	A-19号跡実測図	49
第 41 図	A-20号跡実測図	49
第 42 図	A-21号跡実測図	50
第 43 図	A-22号跡実測図	50
第 44 図	A-23号跡実測図	51
第 45 図	A区表面採集遺物実測図	51
第 46 図	B区先土器時代遺物分布図	53
第 47 図	B-1群遺物出土状況図	54
第 48 図	B-1群石器類実測図(1)	55
第 49 図	B-1群石器類実測図(2)	56
第 50 図	B-2群遺物出土状況図	58
第 51 図	B-2群石器類実測図	59
第 52 図	B-3群遺物出土状況図	61
第 53 図	B-3群石器類実測図	62
第 54 図	B区遺構配置図	63
第 55 図	B-1号跡実測図	64
第 56 図	B-2号跡実測図	65
第 57 図	B-3号跡実測図	66
第 58 図	B-4号跡実測図	67
第 59 図	B区包含層出土遺物実測図(1)	69
第 60 図	B区包含層出土遺物実測図(2)	70
第 61 図	B区包含層出土遺物実測図(3)	71
第 62 図	B区包含層出土遺物実測図(4)	71
第 63 図	B区表面採集遺物実測図	72

第 64 図 № 2 遺跡石器類出土層位	74
第 65 図 石材の構成とその変遷	74
第 66 図 石器類組成とその変遷	75
第 67 図 № 2 遺跡出土土器総年図	76
No.10 遺跡	
第 68 図 遺跡付近の地形と発掘調査区	85
第 69 図 小グリッド分割図	86
第 70 図 発掘調査深度図	87
第 71 図 遺構分布図	88
第 72 図 標準層序	90
第 73 図 土層柱状図地点	91
第 74 図 遺跡土層断面図	92
第 75 図 VII 層主体石器群分布図	93
第 76 図 VII 層主体石器群石材別重量比	95
第 77 図 S ブロック遺物出土状況図	96
第 78 図 VII 層主体石器群実測図	97
第 79 図 IV～VI 層主体石器群分布図	99
第 80 図 IV～VI 層主体石器群石材別重量比	100
第 81 図 R ブロック遺物出土状況図	101
第 82 図 IV～VI 層主体石器群実測図	102
第 83 図 III 層主体石器群分布図	105
第 84 図 III 層主体石器群（石器・剝片類）石材別重量比	106
第 85 図 A ブロック遺物出土状況図	107
第 86 図 B ブロック遺物出土状況図	108
第 87 図 C ブロック遺物出土状況図	109
第 88 図 D ブロック遺物出土状況図	110
第 89 図 E ブロック遺物出土状況図	111
第 90 図 F ブロック遺物出土状況図	112
第 91 図 A～F ブロック出土石器実測図	113
第 92 図 G ブロック遺物出土状況図	115
第 93 図 G・H ブロック出土石器実測図	117
第 94 図 G ブロック出土石器実測図	118
第 95 図 H・I ブロック遺物出土状況図	119

第 96 図 J・K ブロック遺物出土状況図	122
第 97 図 L ブロック遺物出土状況図	123
第 98 図 M ブロック遺物出土状況図	124
第 99 図 H～M ブロック出土石器実測図	125
第100図 N・O ブロック遺物出土状況図	128
第101図 P ブロック遺物出土状況図	129
第102図 Q ブロック遺物出土状況図	130
第103図 T ブロック遺物出土状況図	131
第104図 N～Q・T ブロック出土石器実測図	132
第105図 ブロック外出土石器実測図	134
第106図 接合資料実測図	137
第107図 III層直上石器群実測図	151
第108図 I・II層出土先土器時代石器群実測図	152
第109図 III層出土礫分布図	158
第110図 第1～3 磡群分布図	159
第111図 第4～6 磡群分布図	160
第112図 III層出土礫の規模	162
第113図 III層出土礫石材別重量比	163
第114図 III層主体礫群石材別重量比	163
第115図 炭化物片集中個所分布図	170
第116図 第1炭化物片集中個所実測図	171
第117図 第2炭化物片集中個所実測図	172
第118図 第3炭化物片集中個所実測図	173
第119図 第4炭化物片集中個所実測図	174
第120図 第5炭化物片集中個所実測図	175
第121図 脱し穴状土壤分布図	177
第122図 脱し穴状土壤実測図（1・2号）	178
第123図 脱し穴状土壤実測図（3～5号）	179
第124図 脱し穴状土壤実測図（6～8号）	180
第125図 脱し穴状土壤実測図（9～12号）	181
第126図 脱し穴状土壤実測図（13～16号）	182
第127図 脱し穴状土壤実測図（17～20号）	183
第128図 脱し穴状土壤実測図（21～24号）	184

第129図	陥し穴状土壤実測図（25～28号）	185
第130図	陥し穴状土壤実測図（29～30号）	186
第131図	陥し穴状土壤実測図（31～32号）	187
第132図	陥し穴状土壤実測図（33～36号）	188
第133図	陥し穴状土壤実測図（37・38号）	189
第134図	陥し穴状土壤実測図（39～41号）	190
第135図	陥し穴状土壤実測図（42・43号）	191
第136図	陥し穴状土壤実測図（44・45号）	192
第137図	陥し穴状土壤実測図（46～48号）	193
第138図	陥し穴状土壤実測図（49～51号）	194
第139図	陥し穴状土壤実測図（52・53号）	195
第140図	陥し穴状土壤実測図（54・55号）	196
第141図	陥し穴状土壤実測図（56・57号）	197
第142図	陥し穴状土壤実測図（58・59号）	198
第143図	陥し穴状土壤実測図（60・61号）	199
第144図	陥し穴状土壤実測図（62・63号）	200
第145図	陥し穴状土壤実測図（64～66号）	201
第146図	その他の土壤実測図（1～3号）	205
第147図	縄文時代グリッド別遺物分布図	207
第148図	第1群土器拓影図(1)	208
第149図	第1群土器拓影図(2)	209
第150図	第1群土器拓影図(3)	210
第151図	第1群土器拓影図(4)	211
第152図	第1群土器拓影図(5)	212
第153図	第1・2群土器拓影図	213
第154図	第3群土器拓影図(1)	214
第155図	第3群土器拓影図(2)	215
第156図	第3群土器拓影図(3)	217
第157図	第3群土器拓影図(4)	218
第158図	第3群土器拓影図(5)	220
第159図	第3・4群土器拓影図	221
第160図	縄文土器底部実測図	222
第161図	縄文時代石器実測図(1)	224

第162図	縄文時代石器実測図(2).....	225
第163図	溝状遺構分布図.....	230
第164図	溝状遺構実測図（1号）.....	231
第165図	溝状遺構実測図（1号）.....	232
第166図	溝状遺構実測図（1号）.....	233
第167図	溝状遺構実測図（2号）.....	234
第168図	溝状遺構実測図（2号）.....	235
第169図	溝状遺構実測図（2号）.....	236
第170図	溝状遺構実測図（3・7号）.....	237
第171図	溝状遺構実測図（3・4・5号）.....	238
第172図	溝状遺構実測図（3号）.....	239
第173図	溝状遺構実測図（3号）.....	240
第174図	溝状遺構実測図（4号）.....	242
第175図	溝状遺構実測図（4号）.....	243
第176図	溝状遺構実測図（4号）.....	244
第177図	溝状遺構実測図（4・6号）.....	245
第178図	溝状遺構実測図（5・6号）.....	246
第179図	溝状遺構実測図（5・6号）.....	247
第180図	溝状遺構実測図（5・6号）.....	248
第181図	溝状遺構実測図（5・6号）.....	249
第182図	溝状遺構実測図（5・6号）.....	250
第183図	溝状遺構実測図（4・5・6号）.....	251
第184図	その他の時代の遺物実測図.....	252

図版目次

- No. 2 遺跡
- 図版 1. 航空写真
- 図版 2. 先土器時代石器群出土状況
- A—1号跡全景
- 図版 3. A—2号跡全景
- A—3号跡全景
- 図版 4. A—4号跡全景
- A—5号跡全景
- 図版 5. A—6号跡全景
- A—7号跡全景
- 図版 6. A—8号跡全景
- A—9号跡全景
- 図版 7. A—10号跡全景
- A—11号跡全景
- 図版 8. A—12号跡全景
- A—13号跡全景
- 図版 9. B—1号跡全景
- 同土層断面
- B—2号跡全景
- B—3号跡全景
- B—4号跡全景
- 同土層断面
- 図版10. 先土器時代遺物 (A—2群)
- 先土器時代遺物 (B—3群)
- 図版11. 先土器時代遺物 (B—1群)
- 図版12. 先土器時代遺物 (B—2群)
- A区包含層出土遺物
- 図版13. A区包含層出土遺物
- B区包含層出土遺物
- 図版14. B区包含層出土遺物
- 図版15. A—1、A—2、A—3、A—5、A—6、A—12号跡出土遺物

図版16. A-7、A-9、A-10号跡出土遺物

No.10遺跡

図版17. 航空写真（東から）

図版18. 航空写真（北から）

同上（西から）

図版19. 調査風景

同上

図版20. 6D07土層断面

図版21. S ブロック遺物出土状況

R ブロック遺物出土状況

図版22. III層主体石器群出土状況（北から）

同上（南から）

図版23. C ブロック遺物出土状況

D ブロック遺物出土状況

図版24. E ブロック遺物出土状況

F ブロック遺物出土状況

図版25. G ブロック遺物出土状況

H ブロック遺物出土状況

図版26. J ブロック遺物出土状況

K ブロック遺物出土状況

図版27. L ブロック遺物出土状況

P ブロック遺物出土状況

図版28. VII層主体石器群

図版29. IV～VI層主体石器群

図版30. A～F ブロック出土石器

図版31. G・H ブロック出土石器

図版32. G ブロック出土石器

図版33. H～M ブロック出土石器

図版34. N～Q・T ブロック出土石器

図版35. ブロック外出土石器

図版36. 接合資料B

接合資料A

図版37. III層直上石器群

- 図版38. I・II層出土先土器時代石器群
- 図版39. 磬群構成礫接合例
- 図版40. 陥し穴状土壤 (1~6号)
- 図版41. 陥し穴状土壤 (8・10・11・13・19・20号)
- 図版42. 陥し穴状土壤 (21・23・24・26・27号)
- 図版43. 陥し穴状土壤 (28~30・34・35号)
- 図版44. 陥し穴状土壤 (36~39・42号)
- 図版45. 陥し穴状土壤 (43・47~50号)
- 図版46. 陥し穴状土壤 (52・54・55・57・64・66号)
- 図版47. 第1群土器(1)
- 図版48. 第1群土器(2)
- 図版49. 第1群土器(3)
- 図版50. 第1群土器(4)
- 図版51. 第1群土器(5)
- 図版52. 第1・2群土器
- 図版53. 第3群土器(1)
- 図版54. 第3群土器(2)
- 図版55. 第3群土器(3)
- 図版56. 第3群土器(4)
- 図版57. 第3群土器(5)
- 図版58. 第3・4群土器
- 図版59. 繩文時代石器(1)
- 図版60. 繩文時代石器(2)
- 図版61. 溝状遺構 (1号)
同覆土断面
- 図版62. 溝状遺構 (2号)
同覆土断面
- 図版63. 溝状遺構 (3号)
溝状遺構 (4号)
- 図版64. 溝状遺構 (4・5・6号)
- 図版65. その他の時代の遺物

表 目 次

第1表 空港関係遺跡一覧表

No.2 遺跡

第2表 No.2 遺跡製鉄集落民の生活形態の可能性

No.10 遺跡

第3表 VII層主体石器群一覧表

第4表 IV～VI層主体石器群一覧表

第5表 III層主体石器群一覧表

第6表 III層直上石器群一覧表

第7表 I・II層出土先土器時代石器群一覧表

第8表 III層出土礫一覧表

第9表 陥し穴状土壙一覧表

第10表 繩文時代石器群一覧表

第 I 篇 空港関係遺跡の概要

1 地理的環境

成田空港のある三里塚地区は、北流して旧鬼怒川谷（現在の利根川下流域）へ注ぐ河川と東へ下って九十九里の太平洋へ注ぐ河川の分水界をなしており、北東から南西へ続く標高約40mの平坦な広い台地と狭小な谷津から構成されている（第1図）。

この広い台地面は、下総上位面といわれ（杉原1970）、この辺では上部から表土黑色腐植土層、立川ローム層、武藏野ローム層、常緑粘土層、成田層という堆積を示している。

成田層が堆積した頃はこの辺は古東京湾という海を形成しており、その後の海退で陸化が進行し、古東京湾が消滅する頃には沼沢地や湿地帯となり常緑粘土層（下末吉ローム層上半部）が形成されたと考えられている。そして、その上に武藏野・立川両ローム層が降下堆積したのであるが、この頃関東造盆地運動が活発に働き、関東堆積盆地の南東部を占める下総台地は、南東から北西へ高度が下る現在のような姿に次第になって行ったと考えられる（鈴木尉元他1980）。

このように下総台地においては造盆地運動により比較的新しい時期に地形が変化していると考えられ、先土器時代をはじめ考古学的遺跡を理解するうえで注意が必要である。

2 歴史的環境

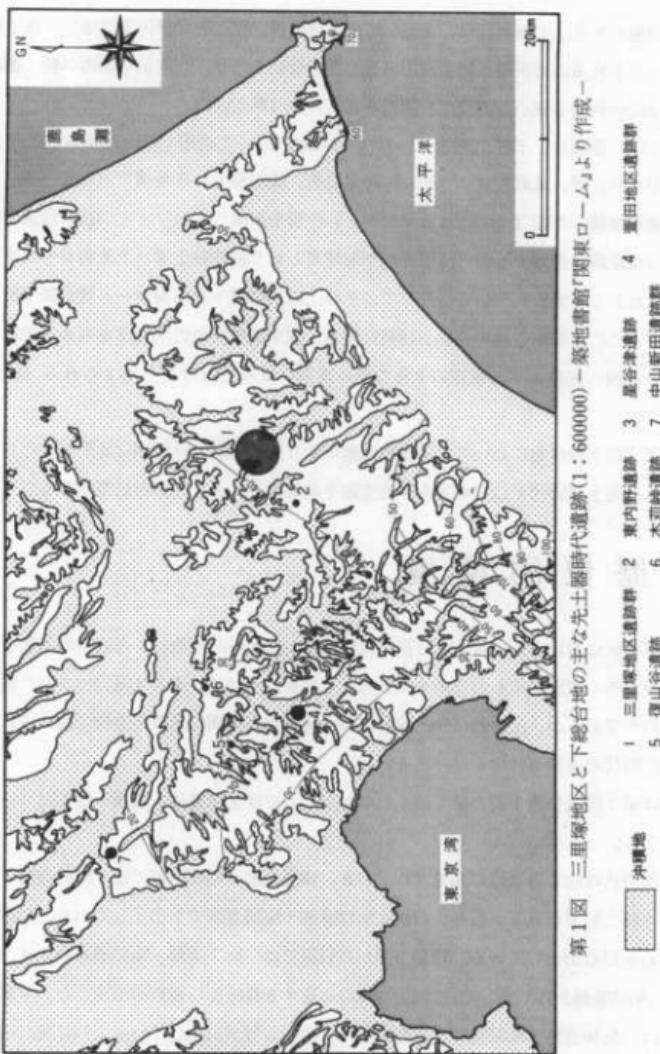
三里塚地区における広い台地面と狭小な谷津という地形の特色は、考古学的对象となる人々の生活を大きく規制するものであったと考えられる。それは、過去4冊刊行された報告書をみれば明らかであるが、圧倒的に先土器時代から縄文時代早期の遺構・遺物で占められており、その他の時代の資料が稀なことである。

詳細は第2図及び第1表を見て頂くとして、ここでは主な遺跡・遺構・遺物について述べることにする。

先土器時代は全ての遺跡で発見されている。VII層上部～VII層下部では、No61遺跡・No67遺跡の石斧を伴う石刀石器群があり、石斧はNo12遺跡・No55遺跡でも出土しており、局部磨製・打製を合わせ13点出土している。VII層上部からVI層では、No7遺跡・No65遺跡のナイフ形石器群があり、No65遺跡から1ブロックで400～500点に達する良好な石器群が出土した。V層～III層下部からは、No10遺跡・No65遺跡で良好なナイフ形石器群が出土している。特にNo65遺跡では良好な砾群を伴っている。III層中部～上面では、No60遺跡・No66遺跡・No67遺跡等において槍先形尖頭器や細石刃を主体とする石器群が出土している。

縄文時代も全ての遺跡から出土している。特に早期のものが非常に多く、その他は前期のも

第1図 三里塚地区と下総台地の主な先土器時代遺跡(1:600000)－篠地書館「関東ローム」より作成－





1:50,000 成田

1000 0 1000 2000 3000

第2図 空港関係遺跡分布図

—この地図は国土地理院発行の5万分の1地形図(成田)を使用したものである—

第1表 空港関係遺跡一覧表

遺跡	調査年度	主な時代及び遺構・遺物	備考
No.2	1979	先土器時代(ナイフ形石器) 縄文時代(早・中・後期) 古墳時代・歴史時代(鬼高～真間期、製鉄遺構)	本報告書
No.3	1971	縄文時代(燃系文期住居跡)	No.3遺跡群中の東端部「三里塚」所収
No.5	1976	先土器時代(ナイフ形石器、槍先形尖頭器)	『木の根』所収
No.6	1977	先土器時代(ナイフ形石器) 縄文時代(陥し穴状土壤群、燃系文)	『木の根』所収
No.7	1977～78	先土器時代(ナイフ形石器、槍先形尖頭器) 縄文時代(燃系文期住居跡、陥し穴状土壤群)	『No.7』所収
No.10	1979	先土器時代(縄群、ナイフ形石器、槍先形尖頭器、細石刃) 縄文時代(陥し穴状土壤群、条痕文、中期切頭)	本報告書、未調査分あり
No.12	1983～84	先土器時代(大形炭化物片、石斧) 縄文時代(草創期、隆起線文、有舌尖頭器、槍先形尖頭器)	
No.13	1971	縄文時代(早期)	台地中心部は削平され、南側縁辺のみ調査、「三里塚」所収
No.14	1971 及び78	縄文時代(条痕文、黒曜石製石器群)	『No.14』所収
No.18	1971	縄文時代(沈縄文期住居跡)	
No.19	1971	縄文時代(沈縄文期住居跡)	
No.20	未調査 で消滅		工事用作業棟建設による
No.21	未調査 で消滅		工事により全面削平された
No.22	1972	取香牧の捕馬	実測のみ実施「三里塚」所収
No.51	1971	縄文時代(燃系文期住居跡、阿玉台期炉址)	No.3遺跡群中の中央部「三里塚」所収
No.52	1971	先土器時代(細石刃) 縄文時代(阿玉台期炉址)	No.3遺跡群中の西端部「三里塚」所収
No.55	1971～72	先土器時代(石斧)	No.14遺跡群中の中央部「三里塚」所収
No.56	1971	縄文時代(沈縄文期の住居跡)	No.14遺跡群中の西端部「三里塚」所収
No.60	1978～80	先土器時代(ナイフ形石器、槍先形尖頭器) 縄文時代(燃系文期住居跡) 歴史時代(国分期、製鉄遺構)	「取香製鉄跡」を含む、未調査分あり
No.61	1979～80	先土器時代(石斧、ナイフ形石器) 縄文時代(沈縄文・条痕文) 弥生時代(後期住居跡) 歴史時代(真間～国分期、製鉄遺構)	「御幸畑製鉄跡」を含む
No.62	1978～79	先土器時代(ナイフ形石器) 縄文時代(沈縄文) 弥生時代(後期住居跡) 歴史時代(真間～国分期住居跡)	
No.63	1980～81	先土器時代(ナイフ形石器) 縄文時代 歴史時代(真間～国分期住居跡)	
No.65	1982	先土器時代(縄群、ナイフ形石器) 縄文時代(燃系文) 歴史時代(製鉄遺構)	調査中断 本調査未調査分あり
No.66	1982	先土器時代(槍先形尖頭器、細石刃) 縄文時代(沈縄文・条痕文)	
No.67	1981～83	先土器時代(ナイフ形石器、石斧) 縄文時代(沈縄文期住居跡、陥し穴状土壤群、炉穴群)	未調査分あり
No.68	1981	先土器時代(ナイフ形石器) 縄文時代(条痕文)	

のが目に付くぐらいで、中期以降のものは極端に少ない。草創期では、No12遺跡において陸起線文土器を伴い多量の有舌尖頭器を主体とする遺物群が出土しており注目される。早期前半では、No6遺跡・No60遺跡において燃糸文土器を多量に出土するとともに住居跡が検出されている。早期後半では、No61遺跡・No62遺跡・No67遺跡から多量の沈線文土器・条痕文土器が出土し、No67遺跡からは沈線文期の住居跡が10数基検出されている。また、No6遺跡・No7遺跡・No10遺跡・No67遺跡からは多量の陥し穴状土壙が検出されている。さらに、No12遺跡・No14遺跡からは早期のものと思われる多量の黒曜石製石器群が出土している。

弥生時代としては、No60遺跡・No61遺跡・No62遺跡の隣接した3遺跡からのみ住居跡が検出されており興味深い。なお、土器は北関東系あるいは印手系が主体と思われる。

古墳時代以後としては、No2遺跡・No7遺跡・No60遺跡・No61遺跡・No62遺跡の各遺跡から住居跡あるいは製鉄関係の工房址が検出されている。なかでもNo60遺跡とNo61遺跡の南向斜面からは大規模な製鉄関連構造群（各々取香製鉄址、御幸畠製鉄址と呼称している）が検出されている。この他多くの遺跡で鉄滓が出土することなどから、かつてこの地域で盛んに製鉄作業が行なわれていたことが知られるのである。

引用・参考文献

- 大原正義他（1978）『佐倉市星谷津遺跡』財団法人千葉県文化財センター
関東ローム研究グループ（1965）『関東ローム—その起源と性状—』筑地書館
杉原重夫（1970）『下総台地西部における地形の発達』地理学評論43-12
鈴木尉元他（1980）『特集=関東堆積盆地』アーバンクボタNo18
鈴木道之助（1974）『木戸崎遺跡』『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書III』財団法人千葉県文化財センター
—
清藤一順・田中豪他（1984）『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書II—花前I・中山新田II・中山新田III—』財団法人千葉県文化財センター
田村隆他（1982）『復山谷遺跡』『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VII』財団法人千葉県文化財センター
戸田哲也・株原正・並木忠良（1977）『東内野遺跡発掘調査概報』富里村教育委員会
西川博孝・西口徹他（1984）『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV—No7遺跡—』財団法人千葉県文化財センター
—
西野元他（1971）『三里塚—新東京国際空港用地内の考古学的調査—』財団法人千葉県北総公社
野口行雄（1983）『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書III—No14遺跡—』財団法人千葉県文化財センター
橋本勝雄（1984）『八千代市椎現後遺跡—壹田地区埋蔵文化財調査報告書I—』財団法人千葉県文化財センター
宮重行・池田大助他（1981）『木の根』財団法人千葉県文化財センター

第II篇 No.2 遺跡

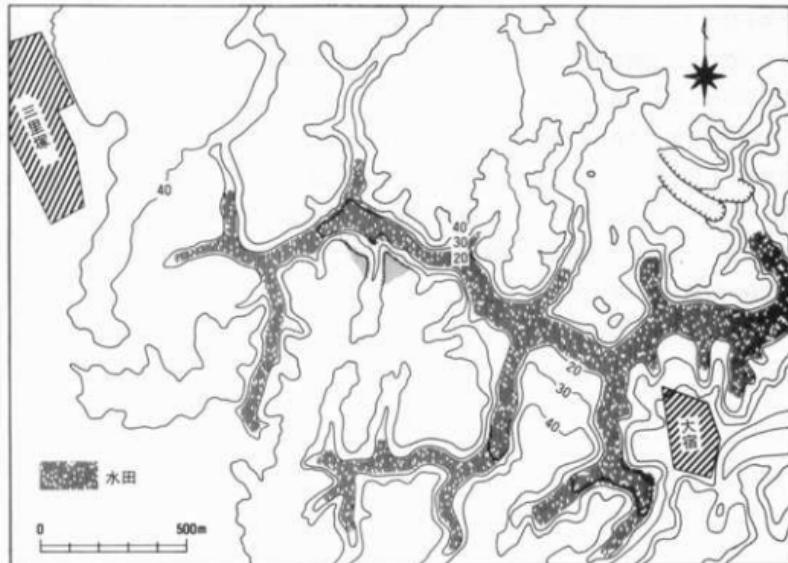
第1章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と環境

No.2 遺跡は山武郡芝山町岩山字中袋2016他に所在し、新東京国際空港の南端に位置する。

遺跡付近は西流する九十九里方面への水系と北流して利根川に注ぐ水系との分水嶺となっており、なだらかな丘陵地が展開し、浅い小支谷が八方に入り込んでいる。

遺跡は九十九里に注ぐ栗山川に合流する高谷川と木戸川との解折作用によって形成された支台上に存在し、芝山町岩山地区を東流する高谷川の一支部の水源地付近に位置している。遺跡をのせる小台地はその四周を小支谷によって包囲された海拔41m余りの半島状を呈している。周囲の水田面との比高は約22mを測る。遺跡はこの小台地の北端に位置し、その中央部は小支谷による侵食を受けて、地形的には東、西の両高燥地から構成されている（第3図）。



第3図 遺跡周辺の地形図 (1/20000)

第2節 調査の経過と方法

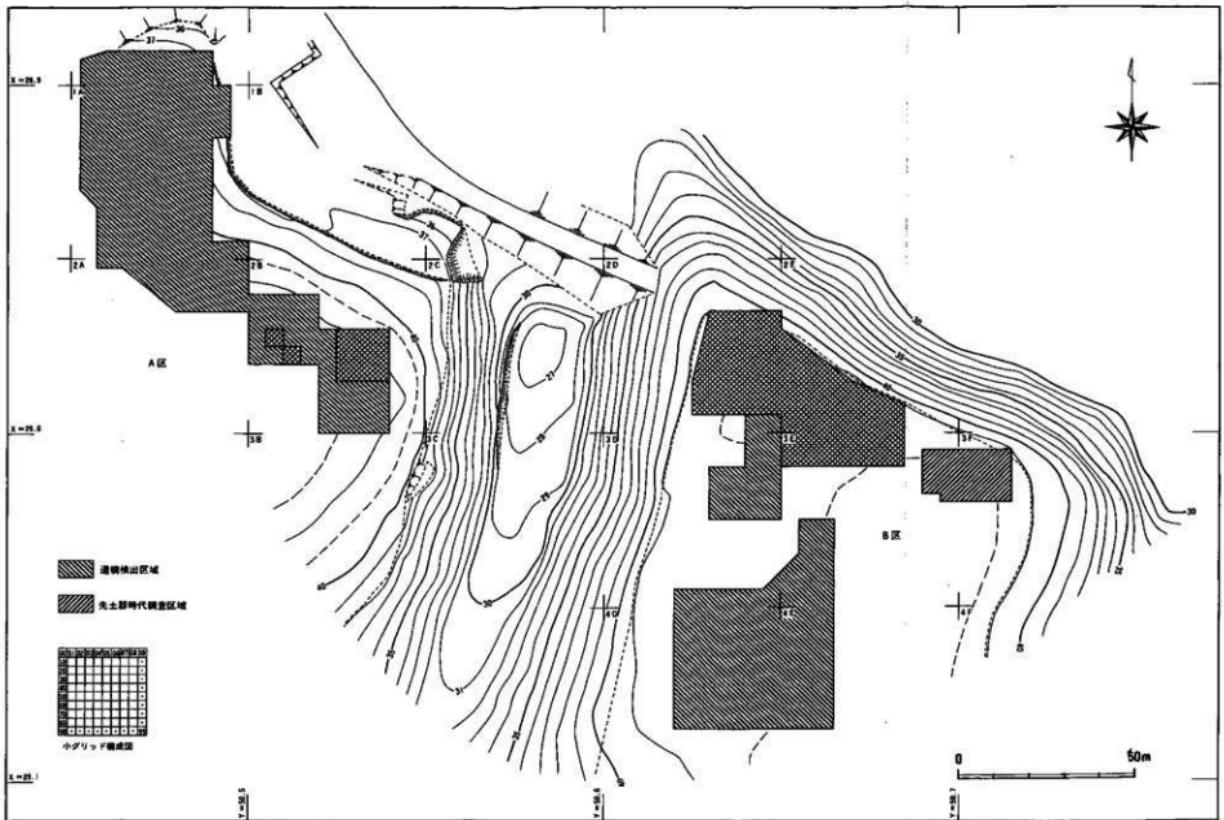
発掘調査は20,000m²を対象に、確認調査を昭和54年7月2日から9日まで、本調査を昭和54年8月17日から11月19日まで行なった。

発掘調査を実施するに際して次のような遺跡区画単位を設け、確認調査の進行や現場における遺構・遺物の取扱いはこれに従って行なわれた。

まず公共座標に基き50m方眼単位の大グリッドを設定し、その大グリッドをさらに5m方眼単位の小グリッドに細分して1単位大グリッドが100単位小グリッドから構成されるようにした。グリッド名称は大グリッド縦列を西から東へA、B、C……とし、横列を北から南へ0、1、2、……として、これらを組合わせて個々の大グリッドを1A、3D等と呼称した。大グリッドに包括される小グリッド名称は北西隅から横方向に00から99までの2連番号を順次付して南東隅に到るように設定した。

上記方法による調査対象区域のグリッド設定後、遺構・遺物の分布状況を把握し本調査区域を設定するための確認調査を実施した。確認調査の試掘坑は2×2mで、これを調査対象区域全体に均等に配分した。試掘坑の総面積は調査対象区域面積の約5%である。試掘は表土よりすべて人力で行なわれ、第III層直上まで掘り下げる土器片の多寡、遺構の有無等を調査した。遺構が検出されない場合はさらにローム層を第IX層直上まで掘り下げる先土器時代の遺物の有無を調査した。遺構が検出された場合は本調査における遺構調査の終了後に、同様の手続きで先土器時代の確認調査を実施した。

本調査では確認調査の結果を承けて、A区では先土器時代遺物包含層および古墳・歴史時代遺構群、B区では先土器時代遺物包含層および縄文時代遺物包含層・遺構群の精査を行なった。A区の古墳・歴史時代遺構のプランは腐植土層中の暗黄褐色テフラ層（第II b層）直上ではほぼ検出できた。またB区の縄文時代遺物包含層の調査は、出土した遺物を小グリッド毎に一括して記録・収納した（第4図）。



第4図 №2 田町発掘調査区域図 (1/1,000)

第2章 A区の調査

第1節 先土器時代（第5図、図版2）

A区からは2箇所の炭化粒集中地区と1箇所の石器類集中地区が検出されている。西側の台地奥部の地区をA-1群、東側の台地縁辺部の地区をA-2群として、その内容を報告する。

A-1群（第6図）

層序は全体として西から東へ緩く傾斜している。ここからは炭化粒のみが検出された。小規模な北西群と大規模な南東群とに分かれる。

北西群は径1m程の広がりを有し、散漫な分布状況を示す。VI層からVII層上層にかけて分布している。

南東群は径3m程の広がりを有し、比較的密に分布する。IV～V層からVII層にかけて検出された。

A-2群（第7図）

炭化粒と石器類の混在群である。地形的にはA-1群地区から連続した地区で、層序はA-1群同様に全体として西から東へ緩やかに傾斜している。

炭化粒は調査区域内に広範に分布するが、その密度の濃い地点は2B55グリッド中央部、2B56グリッド北西部、2B66グリッド南東部から2B67グリッド南西部にかけての地点である。出土層位はその大半がIV～V層からVII層にかけて検出された。

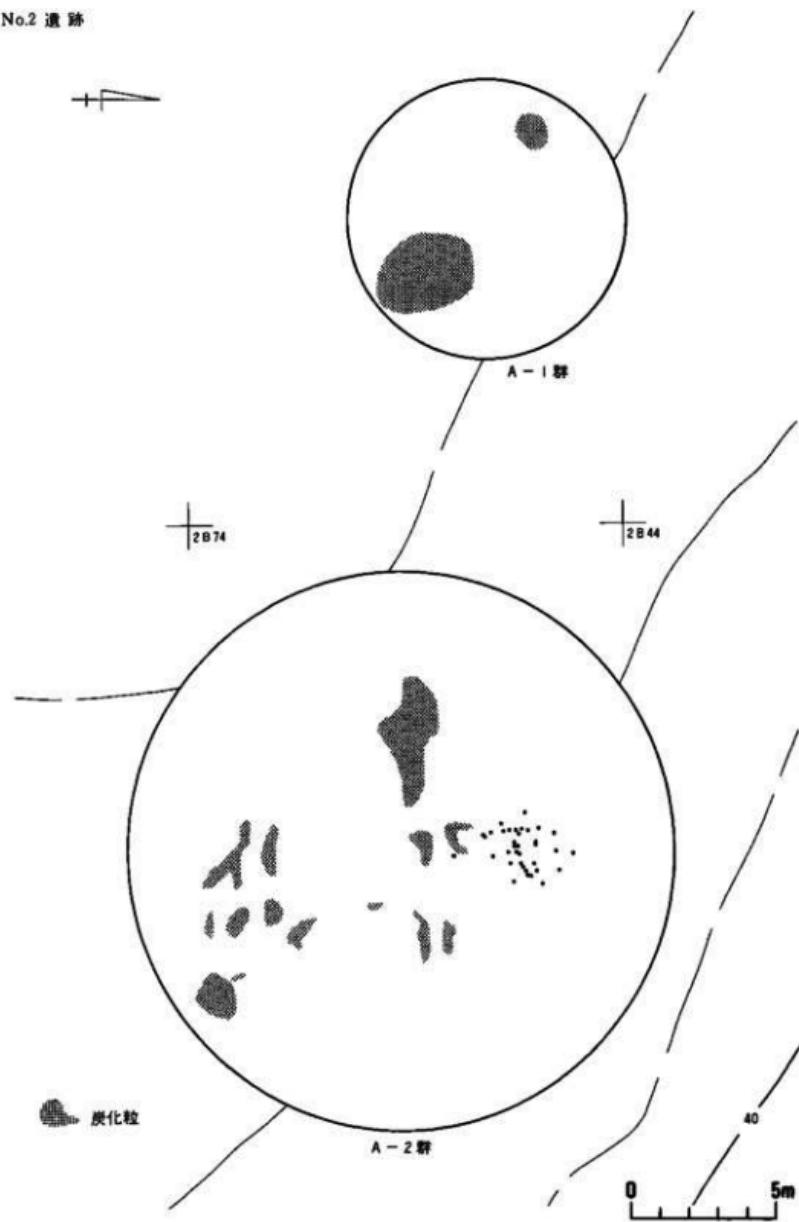
石器類は調査区域の北部に集中し、前述の2B56グリッド北西部の炭化粒密集地点と隣接している。出土層位はVII層からVIII層にかけて検出されているが、後述する接合フレークの各片はVII・VIII両層にわたって出土しており、文化層としては一括的に把握することができる。

石器類の出土点数は安山岩製34点、砂岩製2点、計36点で、その大半が無調整の剝片・小片類であり、器形を整えたトゥールは皆無であった。ここでは使用剝片及び接合剝片について報告する。

A-2群石器類（第8図、図版10）

1は砂岩製の使用剝片でVII層下部から出土した。器肌は幾分風化しており、リングの所在はかろうじて判別できた。表面左側縁に小範囲の使用痕がある。

2は安山岩の接合の剝片でVII層からVIII層にかけて各片が検出されており、接合点数は9点で



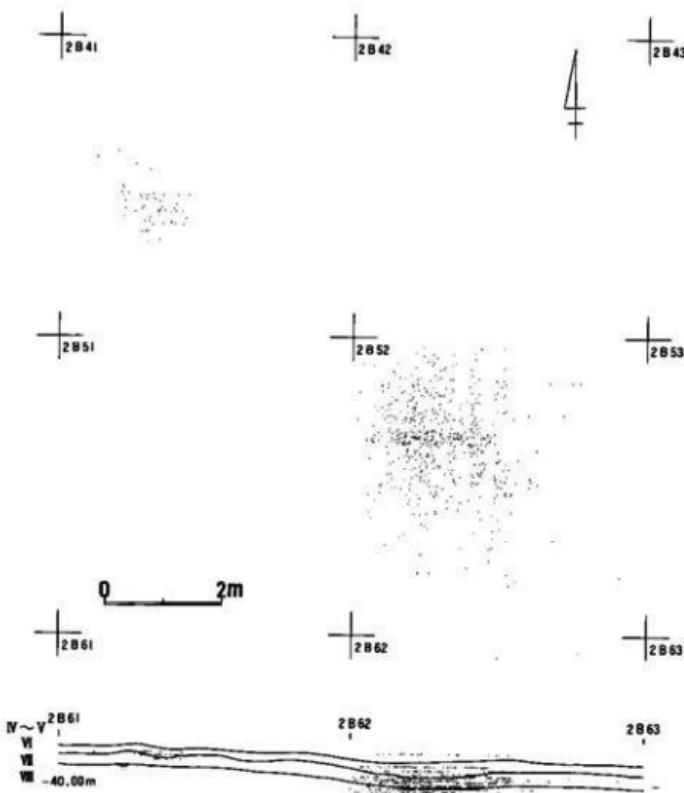
第5図 A区先土器時代遺物分布図 (1/200)

ある。各片はすべて無調整だが、裏面下端付近には細かな敲打痕の集中箇所が認められた。分割前の母岩をハンマーとして使用した痕跡かも知れない。

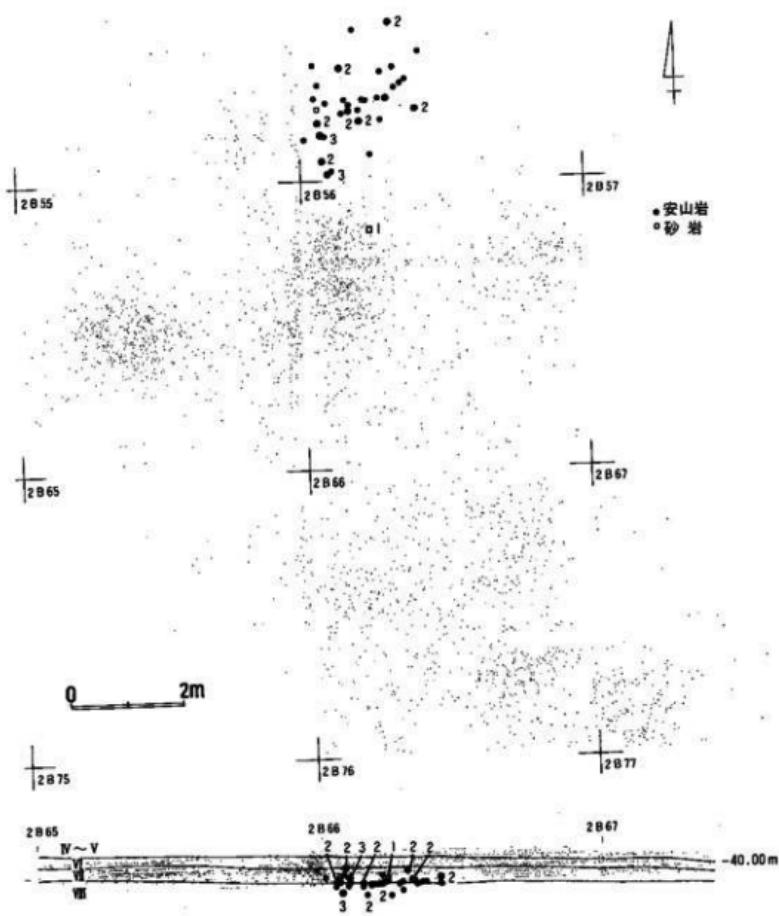
3は安山岩の接合剝片2片から構成されており、各々VII層とVIII層から出土した。

表面採集遺物（第45図）

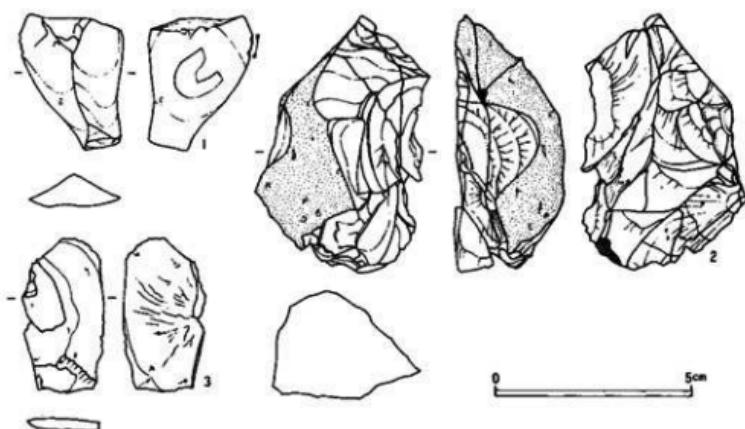
3 B07グリッドより採集された頁岩製の剝片である。



第6図 A-1群遺物出土状況図 (1/100)



第7図 A-2群遺物出土状況図 (1/100)



第8図 A-2群石器類実測図 (2/3)

第2節 繩文時代（第9図、図版12～13）

A区では明瞭に縄文時代に属する遺構は検出されなかった。しかしながら当該期遺物包含層の調査において若干数の土器片が出土したので、主な資料を報告しておく。

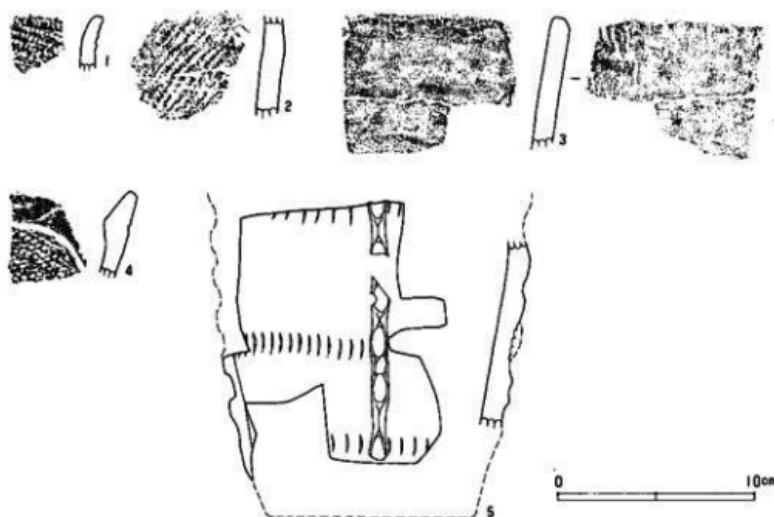
1はR Lの横走燃糸文である。縄文時代早期初頭の燃糸文系土器である。

2は胸部破片でL Rの斜繩文が施されている。胎土中には纖維が混入している。前期前半に属するものであろう。

3は無文であるが裏面口縁直下には爪状工具による浅い擦痕列が見られる。胎土には砂が多く、雲母片が混入する。中期前半の粗製土器である。

4はR L斜繩文を磨り消した波状口縁の一部である。後期前半に属する。

5は4本の隆起懸垂文を貼付し、器面には貝殻状工具による連続刻目文を施している。中期前半の土器である。



第9図 A区包含層出土遺物実測図 (1/3)

第3節 古墳～歴史時代（第10図）

調査区域西北部の台地縁辺上に住居跡を中心とする竪穴遺構が集中している。これらより東方にやや離れてA-22号跡が検出された。遺物が出土しなかったために時期決定の困難な遺構もあるが、一括して本項で取り扱うこととする。

遺構数は23基であり、その内訳は次のとおりである。

住居跡………11基（A-1～11号跡）

鍛冶工房跡………2基（A-12・13号跡）

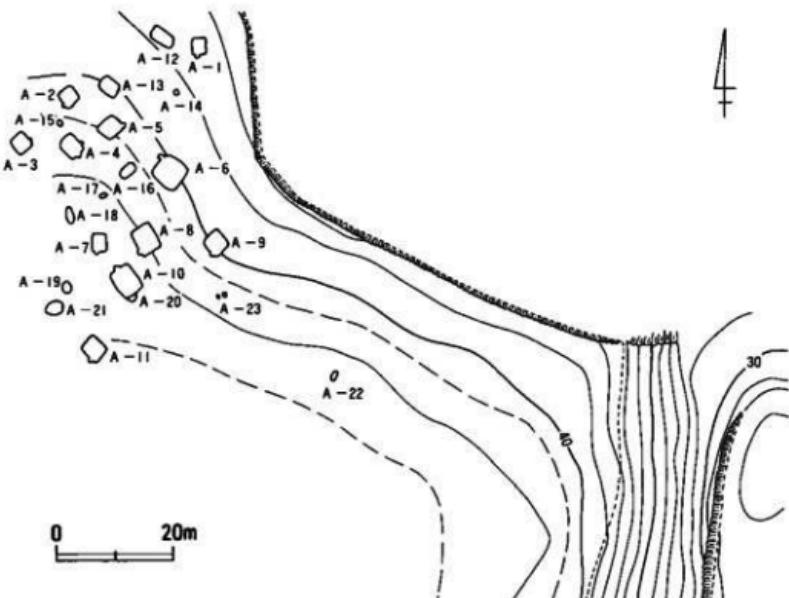
土 墓………9基（A-14～22号跡）

焚火跡………1基（A-23号跡）

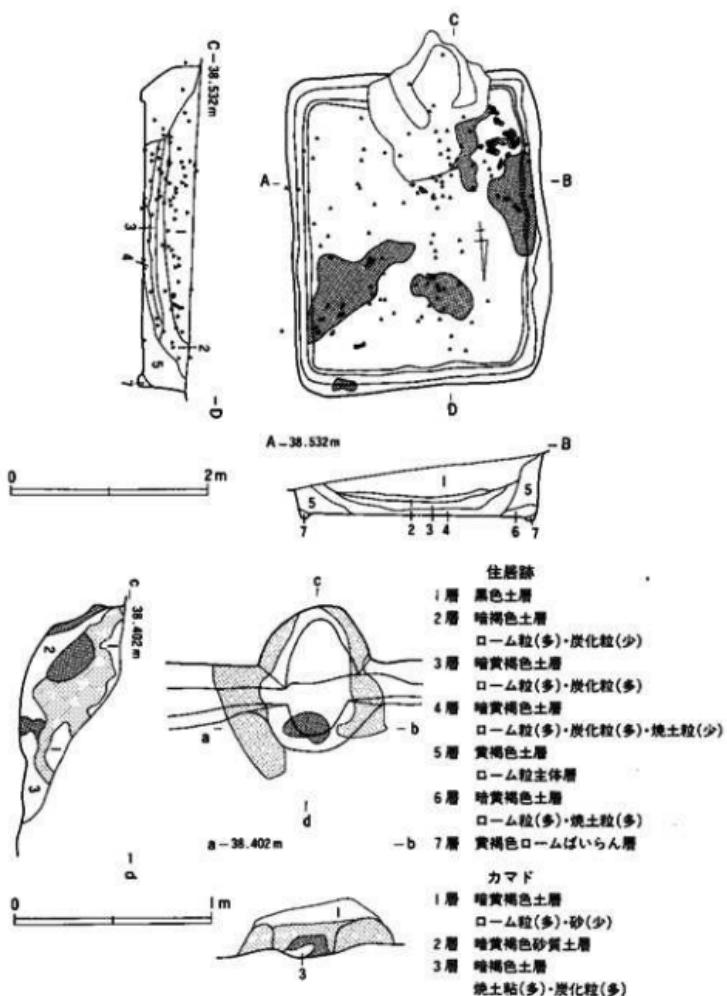
多くの住居跡の床面上には焼土が散布していたが、床面には明瞭な赤変硬化箇所が認められず、状況的に住居の上部構造を暗示させる炭化材の出土も見られないことから、これらの焼土は後述の鉄滓とともに住居跡内に投棄されたものと考えられる。

住居跡内からは多数の鉄滓が検出された。これらの鉄滓の殆どは磁石に引かれ、鉄錆色を呈する径2cm前後の粒状鍛冶滓であるが、少数ではあるが磁石に引かれず、暗褐色や青褐色を呈する製錬滓も混在していた。これらの鉄滓は鍛冶工房等で行なわれた鍛冶作業後に前述の焼土とともに住居跡内に投棄されたものと考えられる。

なお調査区域外の後背台地を踏査したが、当該時期の土器片は殆ど見られなかったので、調査区域外に本集落跡の主体部があるとは考え難い。検出された遺構群でほぼその全貌を現わしていると見做してさしつかえなかろう。



第10図 A区遺構配置図 (1/1000)



第11図 A-1号跡実測図 (1/60・1/30)

A-1号跡 (第11図、図版2)

長軸がほぼ南北方向に沿った長方形プランで、床面は北方にやや傾斜する。側溝が全周し、柱穴は検出されなかった。南壁中央から東よりの部分にカマドが設定されている。

カマドは側溝を中心に煙道部下のピットを壁外へ80cm、燃焼部ピットを住居内へ40cm程延ばした卵形プランのピット上に構築されている。上部施設は両袖部の下半が残存しており、中央部は陥没していた。

床面上には焼土が広く分布し、南東コーナー付近には炭化材の集中箇所が検出された。

粒状鍛冶滓が多数出土したが、その殆どは覆土中からのもので、床面からの出土例は少ない。

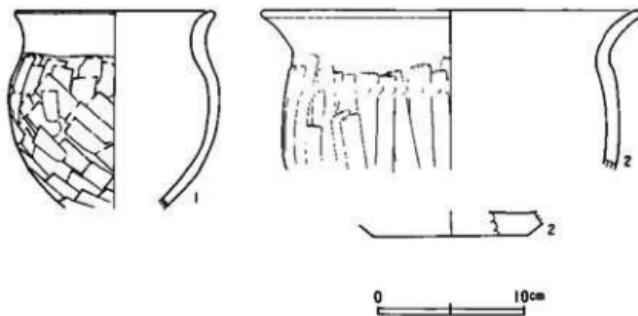
出土遺物 (第12図、図版15)

1は小型甕 (土師器) で口径13.6cm、現高13.5cmを測る。茶褐色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は板木材木口部でヘラケズリ、胴部内面はナデ処理である。内面口縁付近は器肌が荒れ、径2mm程の浅い剥落痕が多数見られる。

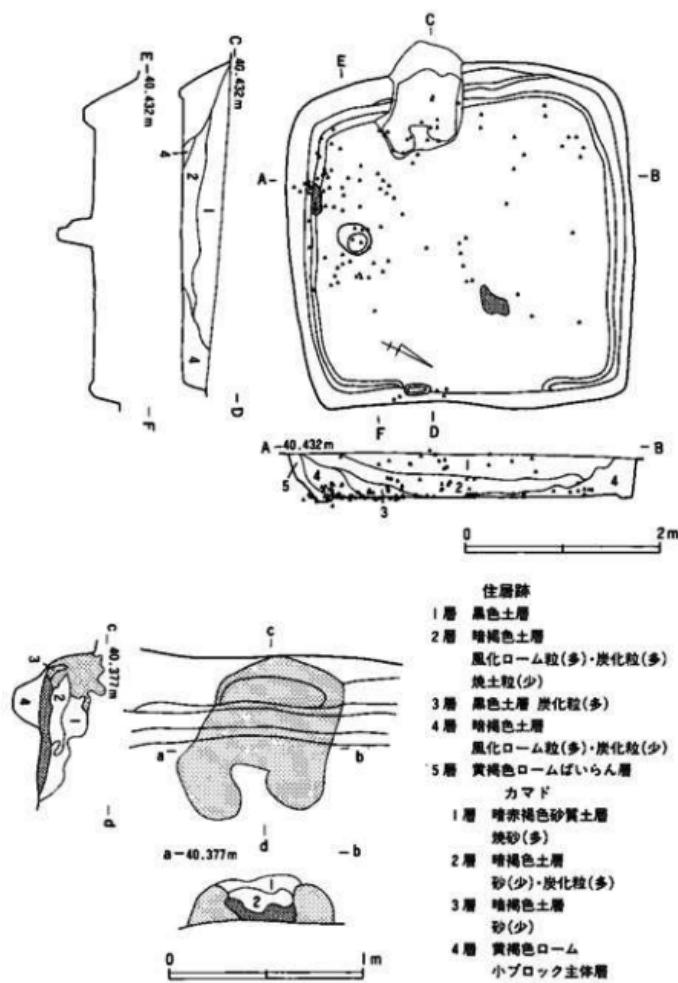
遺構の中央部よりやや北側、覆土上層から散乱した状態で出土した。

2は大型甕 (土師器) で口径26.1cm、底径10.4cm、上部現高10.6cmを測る。暗褐色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面ヘラケズリ、同内面はナデしている。ヘラケズリの上端附近には連続指頭圧痕がめぐっているが、これは下部ヘラケズリの際に土器を固定させるために当該部の内外面を指で強くオサエたために生じたものであろう。また外面には煤が若干付着し、内面は3~4mmの浅い剥落痕が少々見られる。胎土中の砂粒はやや多い。

1の東隣の覆土上層から散乱した状態で出土した。



第12図 A-1号跡出土遺物実測図 (1/4)



第13図 A-2号跡実測図 (1/60・1/30)

A-2号跡（第13図、図版3）

胴張りぎみの正方形プランを呈する。柱穴は南東壁中央付近に1基確認された。側溝は北東壁では完周せず、南西壁側では壁より離れてめぐっている。カマドはそこに生じた平坦面をまたぐように設置されていた。

カマドの下部施設は壁面を多少修正し、深い側溝を暗褐色土で埋めていた。上部施設は両袖部下半が遺存する。

床面上には狭い焼土域が2箇所確認された。

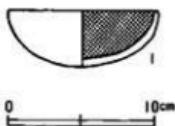
粒状鍛冶滓が多数検出されたが、遺構西半部からの出土が多かった。床面出土例とともに覆土中かなり浮いた部分からの検出例も目立つ。

出土遺物（第14図、図版15）

1は杯（土師器）で口径10.1cm、器高3.8cmを測る。色調は外面明褐色、内面黒色を呈する。

外面はヘラケズリの後ヘラナデ、内面はヘラミガキである。なお体部外面に大きな黒斑がある。

カマドの手前東寄りの地点、床面から一括出土した。



第14図 A-2号跡出土遺物実測図 (1/4)

A-3号跡（第15図、図版3）

ほぼ正方形のプランで、側溝・柱穴は存在しない。中央からやや北コーナー寄りに浅い擂鉢状の不整形なピットが存在する。羽口の出土はなかったが、鍛冶炉の可能性がある。カマドは北東壁の東コーナー付近に設置される。なお南東壁中央からカマドに向かって攪乱溝が走っていた。

カマドは壁外へ20cm程突出した煙道部下のピットと壁際に設けられた半楕円形プランの燃焼部ピットの上に構築されている。現状では両袖部下半が残存し、中央部は陥没していた。

床面上には南西壁に沿って焼土が分布していた。

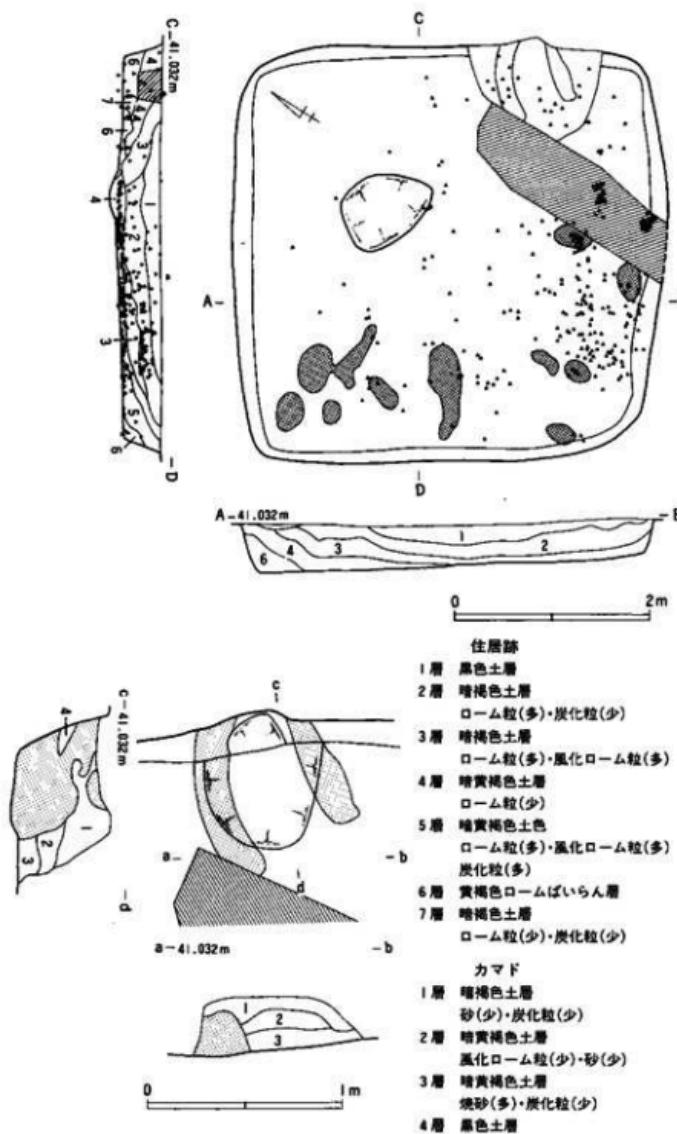
粒状鍛冶滓が多数出土したが、製鍊滓が15点混在する。これらは遺構南東側からのものが多く、その中でも床面出土例と覆土2層中出土例とに大分されるようである。

出土遺物（第16図、図版15）

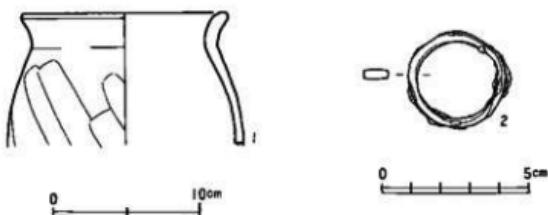
1は小型甕（土師器）で口径13.8cm、現高9.1cmを測る。暗赤褐色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は粗雑なヘラケズリ、同内面は横方向のヘラミガキを施す。

カマドの手前、東コーナー付近の覆土中層から散乱した状態で出土した。

2は鉄環で直径3.3cm、厚さ3mmを計る。表面が剥離する程度に銹化が進んでいる。鍍金の有無は不明。遺構中央部の覆土上層から単独出土した。



第15図 A-3号跡実測図 (1/60・1/30)



第16図 A-3号跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)

A-4号跡 (第17図、図版4)

不整長方形プランを呈し、柱穴・側溝は存在しない。南東壁には張り出し部が設けられている。カマドは北東壁の東コーナー付近に造られている。

カマドの煙道部下のピットは壁を10cm程削りとっただけのもので、燃焼部ピットは壁から30cm離れた場所に浅く楕円形に掘り込まれている。上部施設は両袖部の基部が遺存していた。

カマドの周囲の床面上には焼土が分布していた。

粒状鍛冶滓が多数出土したが、製錬滓が2点混在する。これらの多くは床面から少し浮いた覆土2層中から検出された。

本住居跡はカマドは付設されているが、平面的には鍛冶工房跡としたA-12・13号跡に類似している。階段状のテラスは見られないが相当部分には張り出しが存在する。また他の住居跡に比べ、遺構の掘り方が浅い点もA-12・13号跡と共通している。これらのことから、「カマド」が鍛冶炉として使用されたのであるまい。

A-5号跡 (第18図、図版4)

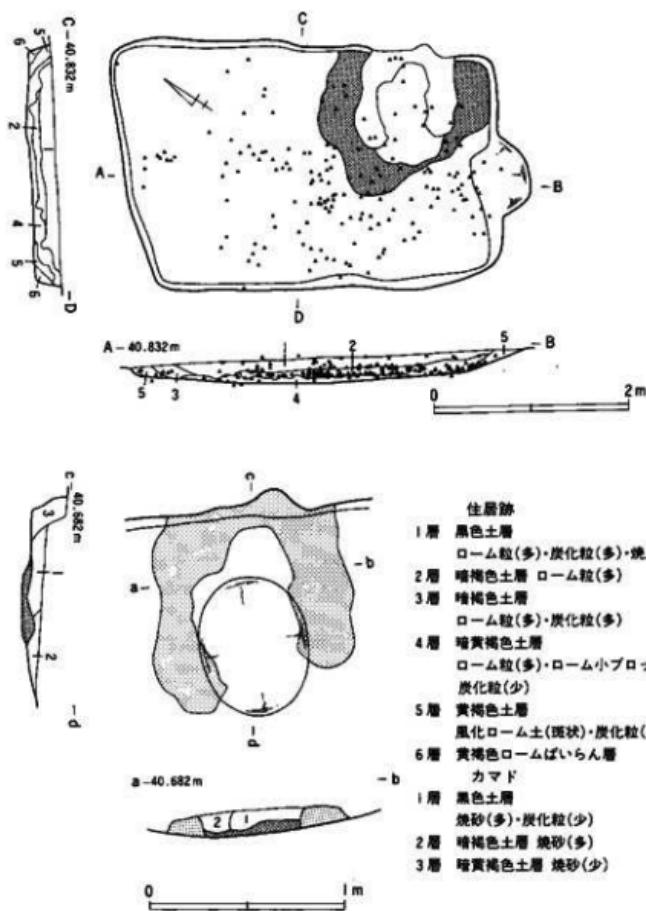
不整方形プランを呈し、とくにカマド設置箇所は壁線の出入りが激しい。柱穴・側溝は存在しない。カマドは北東壁の東コーナー付近に設置されている。

カマド煙道部下の壁は僅かに外方へ掘り広げられ、燃焼部のピットは壁際から浅く掘り下げられている。カマドの上部施設は煙道部と両袖部下半が遺存しており、中央部は陥没していた。

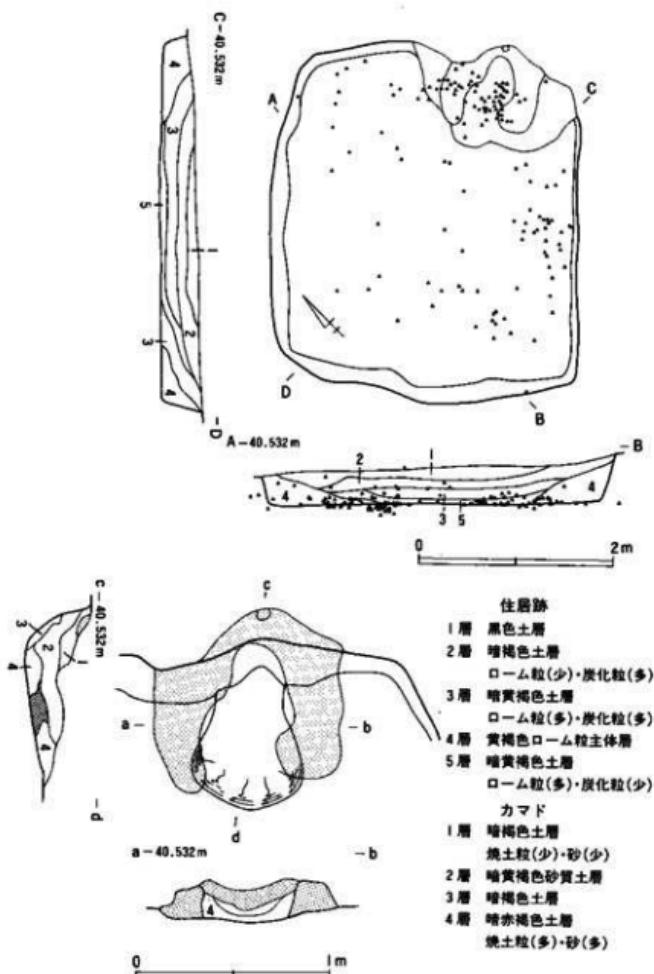
粒状鍛冶滓が多数検出されたが、遺構東半部からのものが多く、なかでもカマド内より集中的に出土した。床面上からの出土例が多い。

出土遺物 (第19図、図版15)

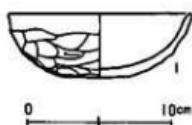
1は杯(土器)で口径12.6cm、器底4.3cmを測る。明褐色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、体部から底部にかけて外面は深いヘラケズリ、内面は横ナデ調整である。胎土中には小石・砂がやや多い。北コーナー付近の床面から、ほぼ完形で出土した。



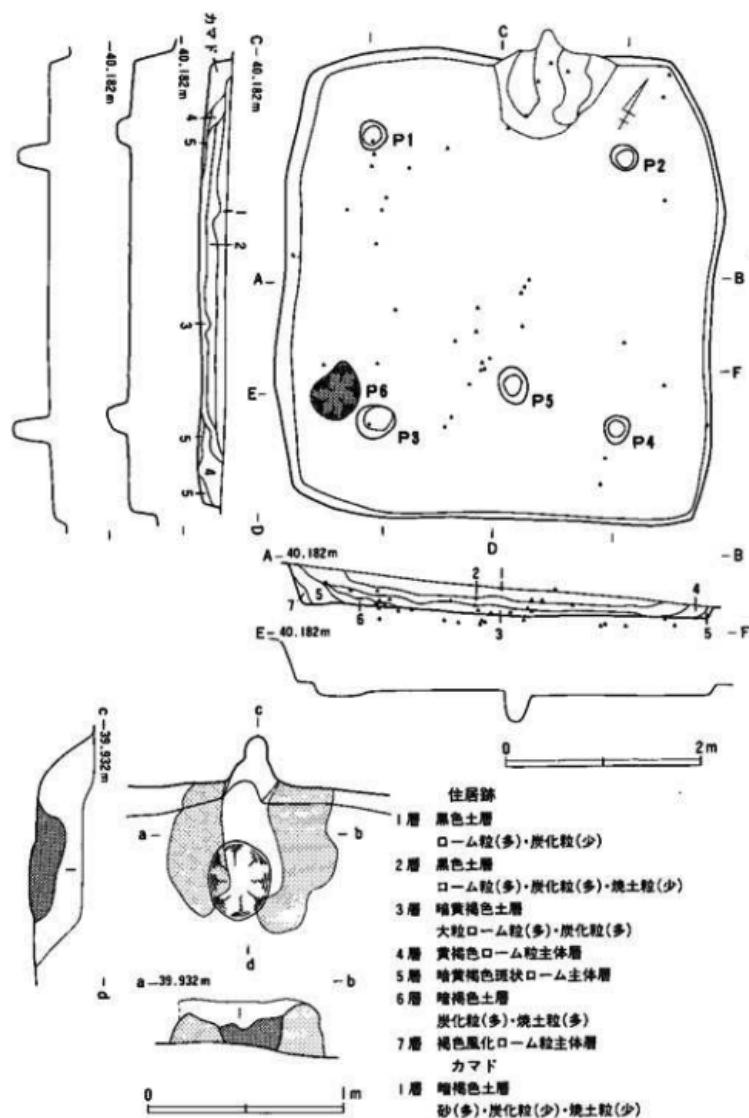
第17図 A-4号跡実測図 (1/60・1/30)



第18図 A-5号跡実測図 (1/60・1/30)



第19図 A-5号跡出土遺物実測図 (1/4)



第20図 A-6号跡実測図 (1/60・1/30)

A-6号跡（第20図、図版5）

略正方形を呈する胸張りのプランである。柱穴は5基（P₁・P₂・P₃・P₄・P₅）検出されたが、P₁・P₃はP₂・P₄に比し浅くなっている、P₅はそれらの中間的深さである。柱穴の深さが柱の高さに比例するとすれば、この住居跡の上部構造は一方向のみに傾斜する片流れ式であり、出入口には東側に設けられたものと思われる。P₄は浅い摺鉢状の不整形ピットで、その覆土には焼土が充填していた。このピットは壁や柱穴に接近し過ぎているため鍛冶炉としての使用は困難であったと思われる。側溝は存在しない。カマドは北西壁の北コーナー付近に設置されていた。

カマド煙道部のピットは壁より25cm程突出して掘り込まれ、燃焼部のピットは壁より20cm程離れた箇所に楕円形に浅く掘られていた。カマドの上部施設は両袖部下半が遺存する。

粒状鍛冶滓が少数出土したが、その中に製錬滓が7点混在する。分布は散漫で床面上からの出土が多かった。

出土遺物（第21図、図版15）

1は小型壺（土師器）で口径12.2cm、現高5.1cmを測る。色調は外面赤褐色、内面暗赤褐色を呈する。口縁部内外面横ナデ、胸部外面下から上方向のヘラケズリ、同内面ヘラナデ調整がなされている。口唇部は水平に外方に延びているが、これは胸部ヘラケズリの際に土器を倒置したためと思われる。内外面共器肌の剥落が見られるが、とくに内面において著しい。

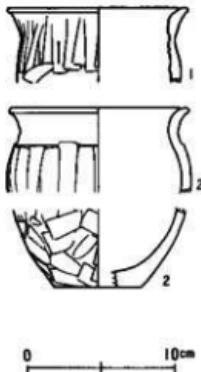
南コーナーを中心とした覆土上層から散乱した状態で出土した。

2は小型壺（土師器）で上部と下部に分かれると接合しない。口径12.1cm、現高上部5.6cm、同下部5.2cm、底径5.8cmを測る。明褐色を呈し、口縁部内外面横ナデ、胸部外面ヘラケズリ、同内面はナデである。頸部の横ナデは強く肩部との境は明瞭な稜をなす。胸部外面には若干の剥落部がある。胎土は比較的キメが細かい。

遺構南東部の覆土上層において、かなり散乱した状態で出土した。

A-7号跡（第22図、図版5）

北壁がやや短かい方形プランを呈する。柱穴は1基確認された。側溝は存在しない。カマドは南壁の南西コーナー付近に設置されている。



第21図 A-6号跡出土遺物実測図（1/4）

カマドの煙道部は壁を若干掘り広げ、燃焼部には浅い皿状のピットが造られている。上部施設は煙道部と両袖部下半が遺存していた。

床面上には各所に焼土が散布していた。

粒状鍛治滓がやや多量に検出された。その多くは床面上からの出土である。

出土遺物（第23図、図版16）

1は杯蓋（須恵器）で口径9.9cm、器高3.2cmを測る。明灰色を呈し、体部はナデが行き届き平滑だが、天井部はヘラ切り後無調整である。体上部に「の」形のヘラ記号状の陰刻がある。ロクロは右回転で、胎土中の小石・不純物は少ない。カマド手前の南西コーナー付近、床面からほぼ完形で出土した。

2は杯（土師器）で口径7.4cm、現高1.9cmを測る。暗褐色から黒色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラケズリの後ナデ、同内面にはナデが施される。胎土中の小石・砂はやや少ない。北壁中央部付近、覆土下層から出土した。

3は杯（土師器）で口径10.5cm、器高3.5cmを測る。色調は暗褐色で内面は黒味が強い。口縁部内外面は横ナデ、体部から底部にかけて外面はヘラケズリの後ナデ、内面はナデが行なわれる。胎土中には小石・砂がやや多い。南東コーナー付近、床面から一括出土した。

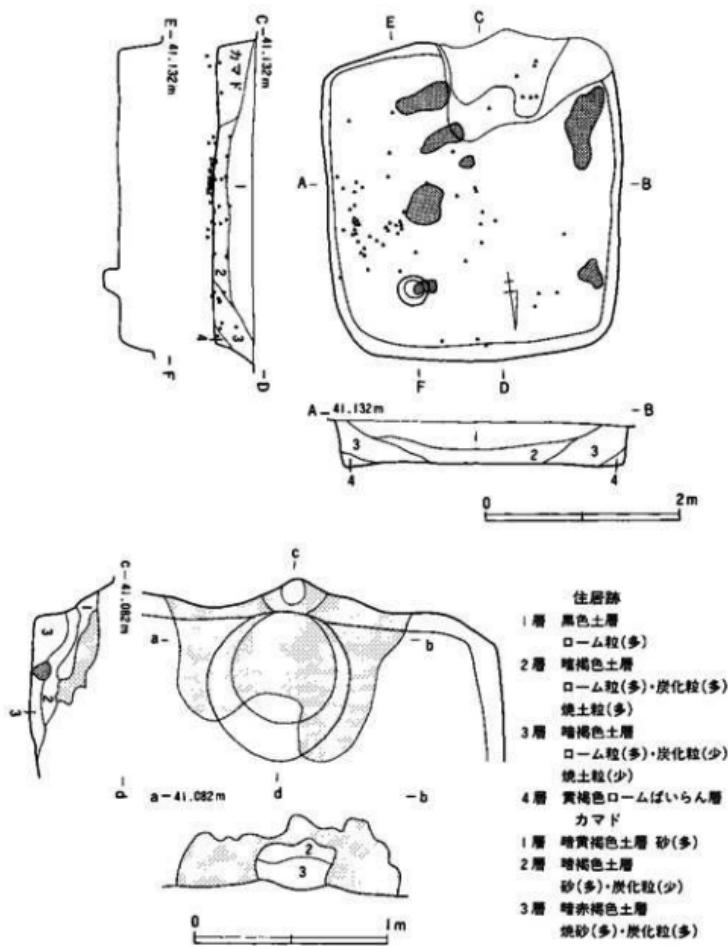
4は小型壺（土師器）で、口径13.5cm、底径8.0cm、器高14.5cmを測る。暗茶褐色を呈し、口縁部内外面は弱い横ナデ、胴部外面ヘラケズリ、同内面はナデ調整される。胴下部外面は器肌の剥落が著しく、上部にも径5mm程のアバタ状剥落痕が見られるが、内面は荒れていない。また胴部外面には煤が付着する。胎土は砂を多く含む。1に南隣して床面から一括出土した。

5は壺（土師器）で胴下半部のみ残存した。底径8.4cm、現高12.0cmを計る。色調は赤褐色を呈し、外面には赤味の強い部分があるが、塗彩痕か否かは不明。胴部外面はヘラケズリの後ヘラナデがなされ平滑であり、同内面はナデられているが器肌の剥落が著しく凹凸が激しい。胎土中の小石・砂は少ない。カマドの手前やや西よりの地点、覆土下層から一括出土した。

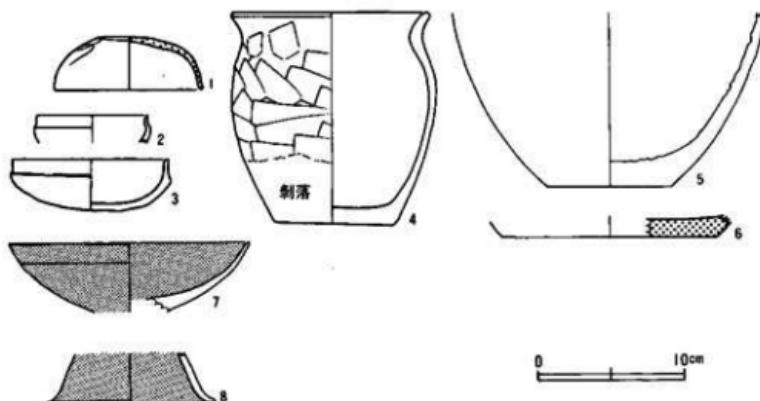
6は底部破片（須恵器）で、壺か瓶のものであろう。底径14.4cm、現高1.4cmを測る。器表面は暗青紫色だが、断面では暗青紫色と赤紫色とが横縞状に成層している。胎土中には径2mm程の小石・ガラス質微細砂粒・黒色炭化有機物が含まれる。なお現形は四角形の破片で、割れ口は鋭い稜を成しているが、一角のみ磨滅して鋭利な角がとれている。破片の再利用を考えさせる。3に東隣した南東コーナー、覆土中層から出土した。

7は高杯（土師器）で、脚上部が接合しない。口径16.2cm、脚端径11.4cm、杯部現高4.7cm、脚部現高3.3cmを測る。赤褐色を呈し、杯部外面には口縁下に細沈線が1条めぐっている。内外面共丁寧にナデられ、その上から赤色化粧土をハケで二度塗りしている。胎土は精良で小石・砂は殆ど見られない。

カマド内床面から散乱した状態で出土した。



第22図 A-7号跡実測図 (1/60・1/30)



第23図 A-7号跡出土遺物実測図 (1/4)

A-8号跡 (第24図、図版6)

床面の浅い遺構で、とくに東壁は遺存状態が悪い。長方形プランを呈し、側溝は存在しない。柱穴は2基 ($P_1 \cdot P_2$) 確認されており、 P_2 の方が P_1 よりも深い。本住居跡の上部構造も A-6号跡と同様な片流れ式ではあるまいか。とすれば出入口は東側になるであろう。カマドは西壁の南西コーナー付近に設置されている。

カマドの煙道部は壁を20cm程掘り広げて突出させ、燃焼部には梢円形の浅いピットを穿っている。上部施設は両袖部基部のみが遺存する。

床面上からは2箇所の焼土散布域が見られた。

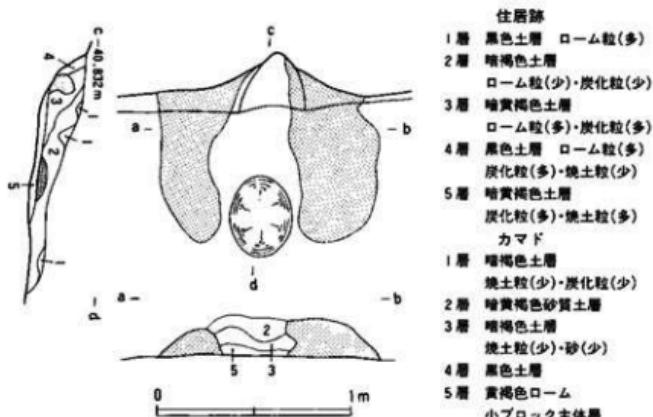
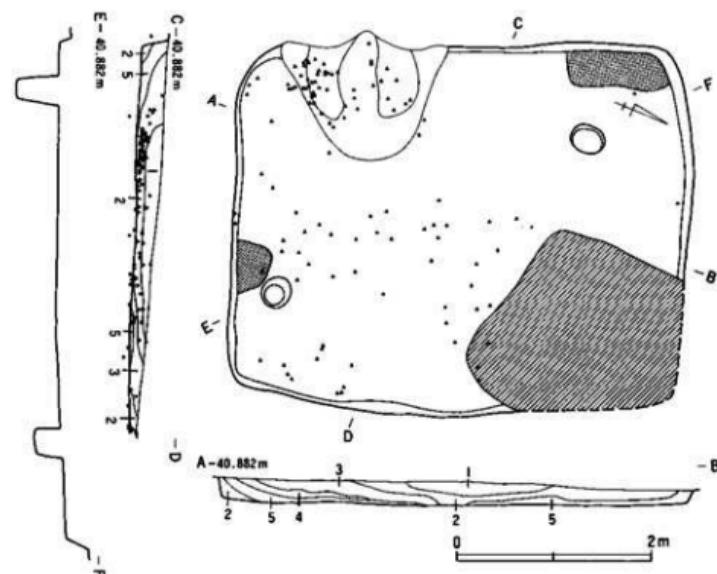
粒状鐵冶滓が多数検出されている。南半部からの出土が目立ったが、とくにカマド付近に集中している。床面あるいはその付近から検出されたものが多い。

なお北東コーナーは攪乱を受けており検出不能だった。

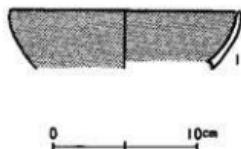
出土遺物 (第25図)

1は杯(土師器)破片で口径15.5cm、現高5.0cmを測る。暗赤褐色を呈し、外面はヘラケズリの後ナデ、内面はミガキに近いヘラナデである。内外面共赤彩が施されるが、外面には黒斑が見られる。胎土中には砂がやや多い。

カマド南脇の覆土下層から、やや散乱した状態で検出された。



第24図 A-8号跡実測図 (1/60・1/30)



第25図 A-8号跡出土遺物実測図 (1/4)

A-9号跡 (第26図、図版6)

北西壁が短かい台形状を呈する。側溝は全周している。南東壁中央部付近にピットが存在するが、深さや掘られた方向からして柱穴とは考えられない。カマドは南西壁中央からやや南コーナー寄りの箇所に設置されている。

カマドは側溝を中心に壁側を若干掘り広げ、床面部は半梢円形の浅いピットを穿って、排出したローム土で側溝を埋めて下部施設を形成した後に、上部施設を構築している。上部施設の遺存度は良好であり、煙道部が明確に検出された他、土器挿入部もほぼ本来の位置を保っていた。

遺構東半部の床面上には焼土が広範に散布していた。

粒状鍛冶滓が多数検出されたが、製鍛滓が1点混在する。分布は遺構東半部に偏っており、床面出土のものは少なく、覆土中出土例が目立つ。

出土遺物 (第27図、図版16)

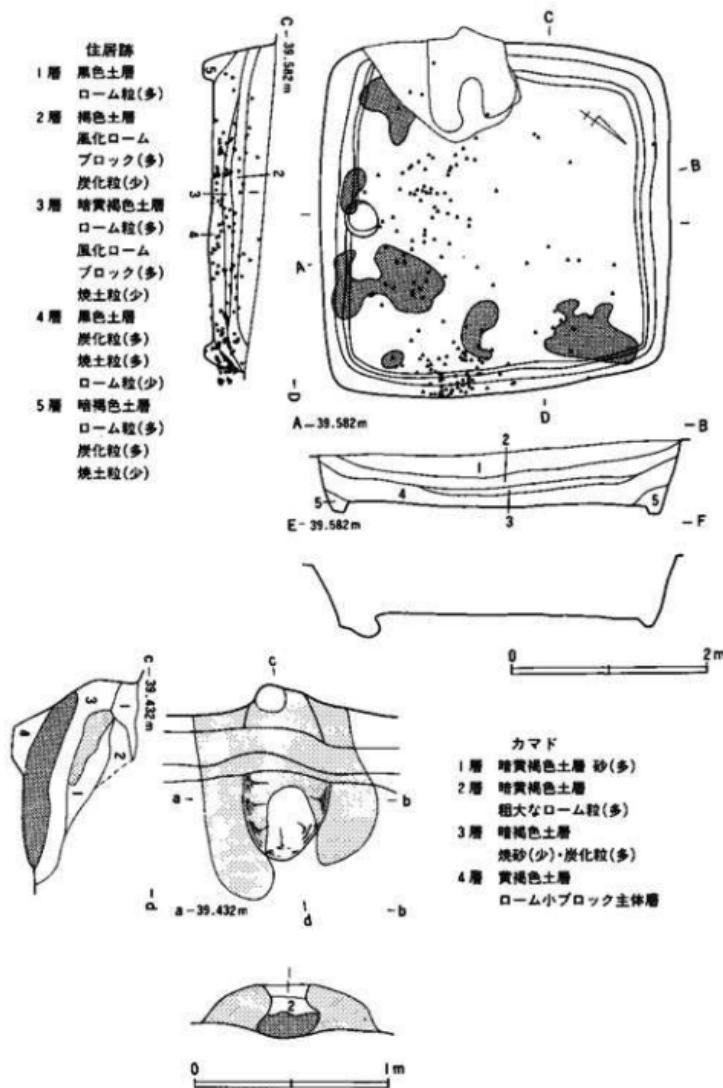
1は小型壺（土師器）で口径13.8cm、底径4.4cm、胸部最大径13.6cm、器高5.4cmを測る。茶褐色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、胸部外面へラケズリ、内面はナデが施されている。胸部のヘラケズリは弱く、ナデに近いために器面は僅かに光沢をもつ。胎土中の小石・砂はやや少ない。

カマドと南東壁に狭まれた空間の覆土中層から下層にかけて散乱した状態で出土した。

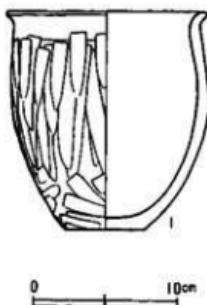
A-10号跡 (第28図、図版7)

A-20号跡を切って構築された遺構である。本来の長方形プランを一部拡張した不整長方形プランを呈する。拡張後にはローム土を敷き詰め貼床をしている。拡張前には2基の柱穴と側溝が存在した。側溝は一部掘り過ぎたため不明部分があるが、西コーナー付近で途切れている。拡張時にはこれらはすべて埋められている。カマドは北西壁中央部に設置されていた。

カマドの下部施設は壁を30cm程外方に突出させ、床面には不整円形ピットを穿っている。上部施設は遺存が比較的良好で、煙道部と両袖部下半が残存していた。



第26図 A-9号跡実測図 (1/60・1/30)



第27図 A-9号跡出土遺物実測図 (1/4)

床面上には北コーナー付近を除き焼土が広範に分布し、炭化材も検出された。

また東コーナーからは製錬原料と思われる14.6kgの砂鉄堆積が発見された。

粒状鍛冶滓が少數検出された。すべて覆土中からの出土である。

出土遺物（第29図、図版16）

1は杯蓋（須恵器）で口径16.3cm、器高4.2cmを測る。明灰色を呈し、外面は口縁部から体部にかけて回転ヘラケズリ後回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリのみ、内面は回転ナデである。ロクロは右回転で、胎土には小石を少量含む。なお口縁部の一部には煤が付着している。カマド正面手前の覆土下層から散乱した状態で出土した。

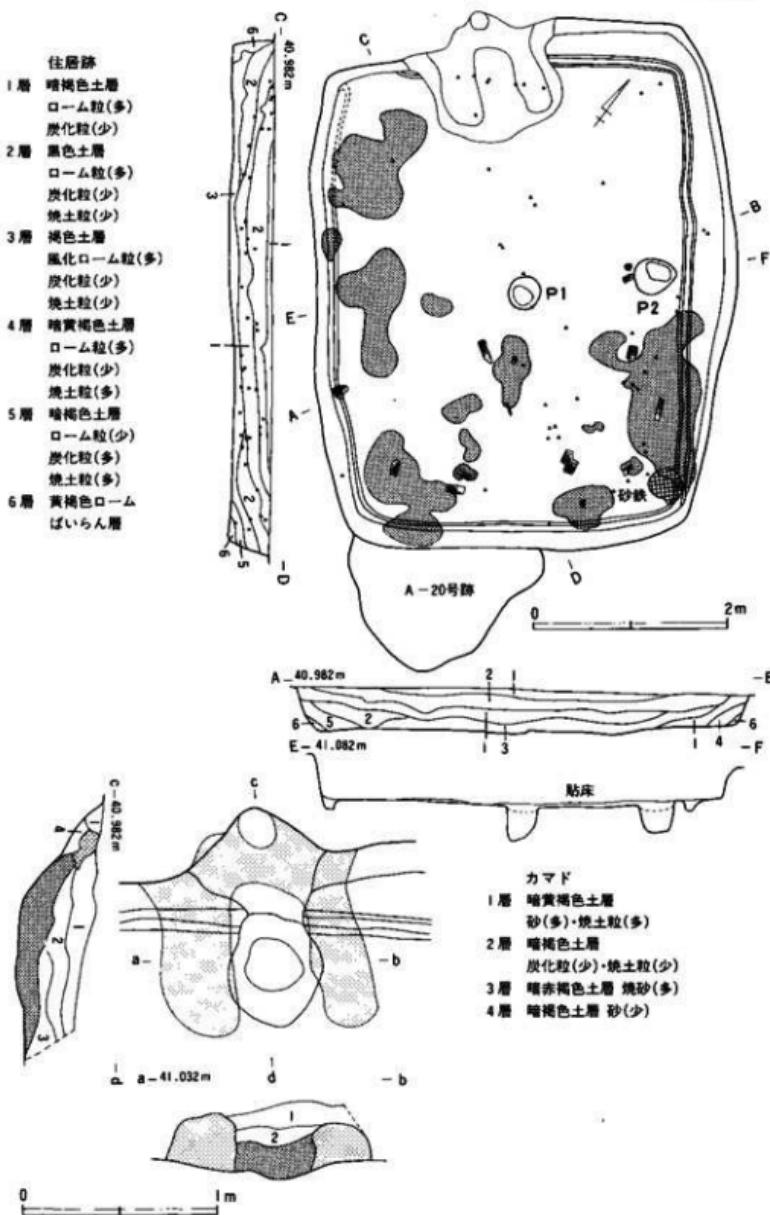
2はフラスコ形長頸瓶（須恵器）で口径10.1cm、器高25.2cmを測る。胸部はその最大径が図示した角度では17.1cm、90°回転させると15.3cmとなり、ラグビーボールに近い形状を呈する。暗灰色で、外面は回転ナデが行き届き平滑だが、口頸部内面には水びき痕がそのまま残される。底部周辺には幅3mm程のワラ状物による焼成前に付された短い擦痕がとりまっている。胸部外面には器肌の剥落が著しい部分がある。また肩部から胸部にかけて煤の付着が見られる、胎土中の小石は少ない。カマド東脇の覆土下層から散乱した状態で出土した。

3は、鉄鎌である。現在先端部が欠失し、刃部中央から折離している。基部を8mm程折曲げ、刃部は中央あたりから湾曲の度合いを強めている。董状の木質部が付着した部分が数か所ある。南西壁際において、南コーナー付近と中央より西コーナー寄りの地点とに分離して出土した。

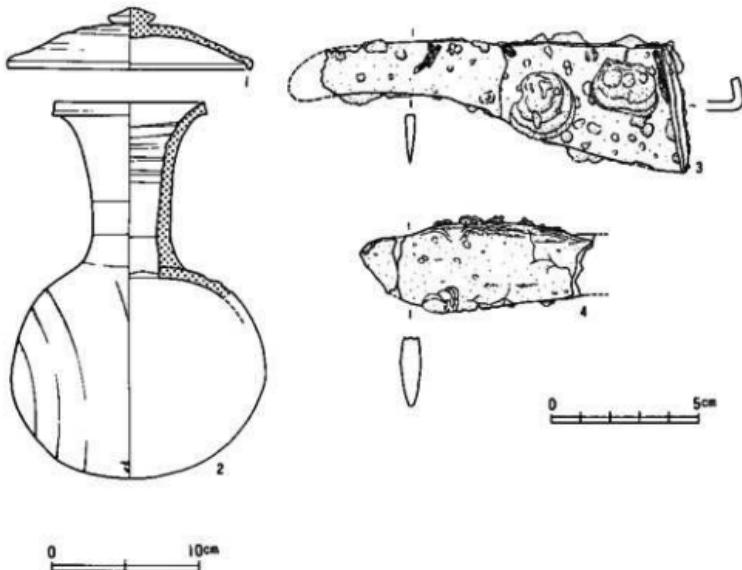
出土層位は覆土中層である。

4は刀子の切先部である。先端部が折損している。銹化が進行し鏽ぶくれが著しく、図示した断面も本来の厚みではない。現長8.0cmを測る。

カマドの南1mの地点、覆土最上層より出土した。



第28図 A-10号跡実測図 (1/60・1/30)



第29図 A-10号跡出土遺物実測図 (1/2・1/4)

A-11号跡 (第30図、図版7)

正方形に近い長方形プランを呈する。柱穴と思われるものは2基 (P_1 ・ P_2) 確認されたが、 P_2 の方は極端に浅い。本住居跡もA-6・8号跡同様な片流れ式とすれば、その出入口は南東側になろう。側溝は全周している。カマドは南西壁の南コーナー付近に設置されている。

カマドの下部施設は壁を若干突出させ、床面には円形のピットを掘り込んでいる。側溝を埋めた形跡はない。上部施設は煙道部はつぶれているが、比較的遺存良好である。

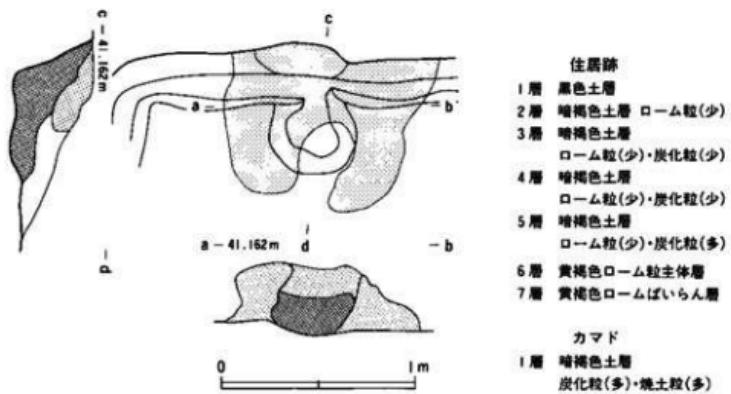
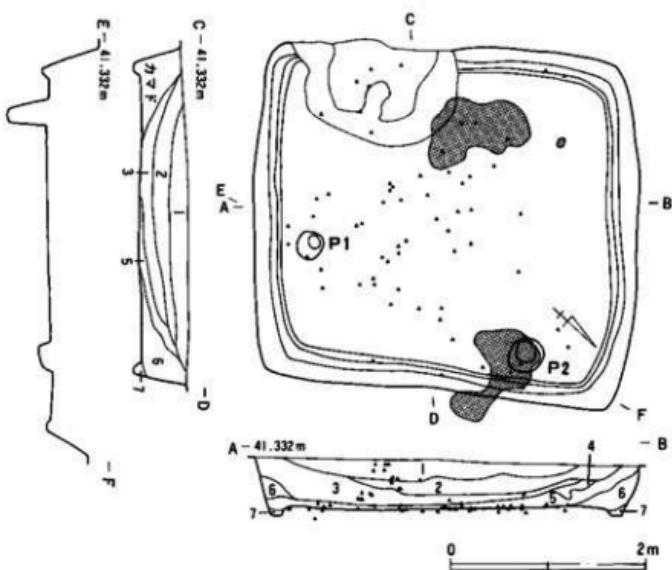
床面上には焼土の散布が見られた。

粒状鍛冶滓が少數検出され、4点の製練滓が混在する。床面からの出土が多くかった。

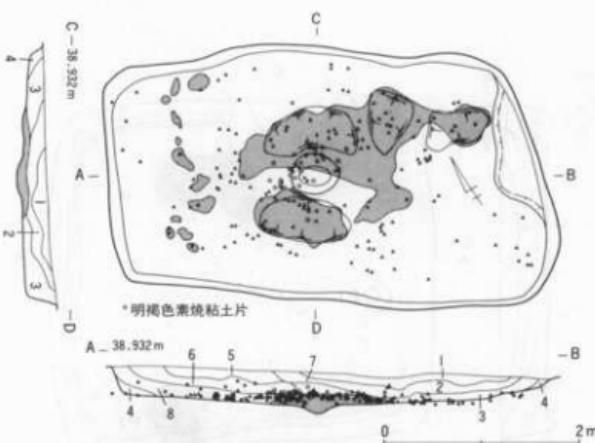
A-12号跡 (第31図、図版8)

不整な長方形プランを呈する。東壁付近は床面が僅かに高くなっている。中央には不整形の浅いピットがあり、その周囲には浅いくぼみ状の落ち込みが4箇所確認された。

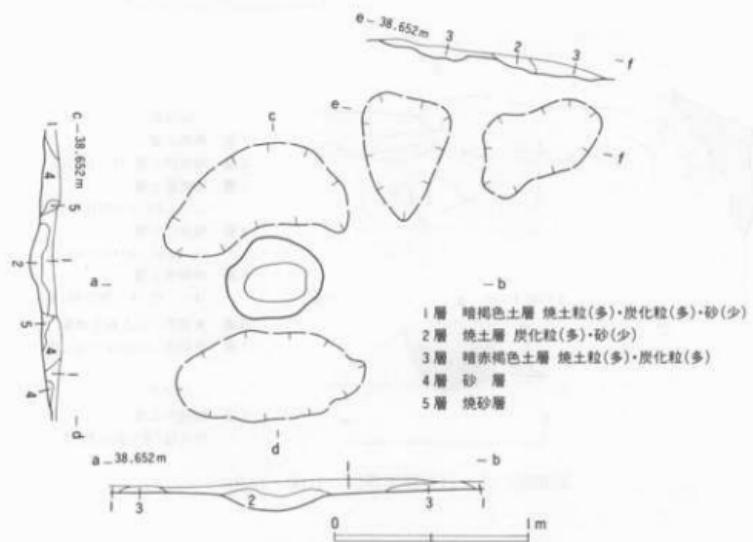
このピットには焼土が充填しており、それを取りまく2つの落ち込みには鍛冶炉の壁材と思われる山砂が残存しており、ピットに面する部分は赤く焼けて硬化していた。またこのピットの周囲には径2cm前後の明褐色を呈する炉壁材外方部と見られる素燒粘土片が床面からやや浮



第30図 A-11号跡実測図 (1/60・1/30)



- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 1層 嗜褐色土層 | 5層 嗜褐色土層 炭化粒(少)・燒土粒(少) |
| 2層 黃褐色土層 | 6層 茶褐色土層 煤化ローム粒(多) |
| ローム粒(多)・炭化粒(少)・燒土粒(少) | 7層 嗜褐色土層 炭化粒(少)・燒土粒(少) |
| 3層 嗜褐色土層 炭化粒(少) | 8層 嗜黃褐色土層 烧土粒(多)・ローム粒(多) |
| 4層 黃褐色ロームばいらん層 | |



- | |
|-----------------------------|
| 1層 嗜褐色土層 烧土粒(多)・炭化粒(多)・砂(少) |
| 2層 烧土層 炭化粒(多)・砂(少) |
| 3層 嗜赤褐色土層 烧土粒(多)・炭化粒(多) |
| 4層 砂 層 |
| 5層 烧砂層 |

第31図 A-12号跡実測図 (1/60・1/30)

いた状態で散乱していた。

遺構の床面にはこれらピットや落ち込みを被覆するように焼土が広範に散布していた。

粒状鍛冶滓が多数検出され、製錬滓が1点混在する。床面からの出土例が多い。

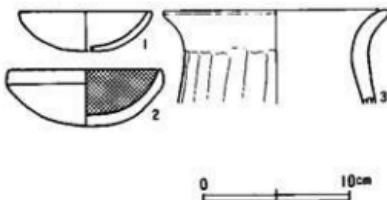
出土遺物（第32図、図版15）

1は杯（土師器）で口径8.8cm、器高2.7cmを測る。明褐色を呈し、外面はヘラケズリの後に粗雑なヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを施す。口縁部内面には煤が付着する。胎土は精良で小石・砂は少ない。南コーナー床面から一括出土した。

2は杯（土師器）で口径10.3cm、器高3.9cmを測る。色調は外面暗茶褐色、内面黒色を呈する。調整は外面が口縁部横ナデ、体部から底部にかけてはヘラケズリの後ミガキに近いヘラナデで弱い光沢をもつ。内面は横方向のヘラミガキである。内面には細かいヒビ割れが全面に見られる。胎土には小石がやや多い。西コーナーの東70~80cmの付近、覆土上層からやや散乱した状態で出土した。

3は小型壺（土師器）で口径15.4cm、現高6.3cmを測る。色調は外面黒色、内面明褐色を呈する。口縁部内外面は横ナデ。胴部外面は弱いヘラケズリ。内面はナデが施されている。内面の器肌の剥落が著しい。胎土には砂粒がやや多い。

北東壁中央壁際床面から一括出土した。



第32図 A-12号跡出土遺物実測図（1/4）

A-13号跡（第33図、図版8）

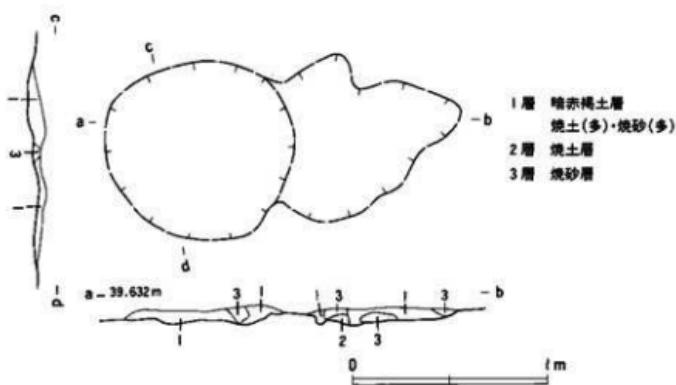
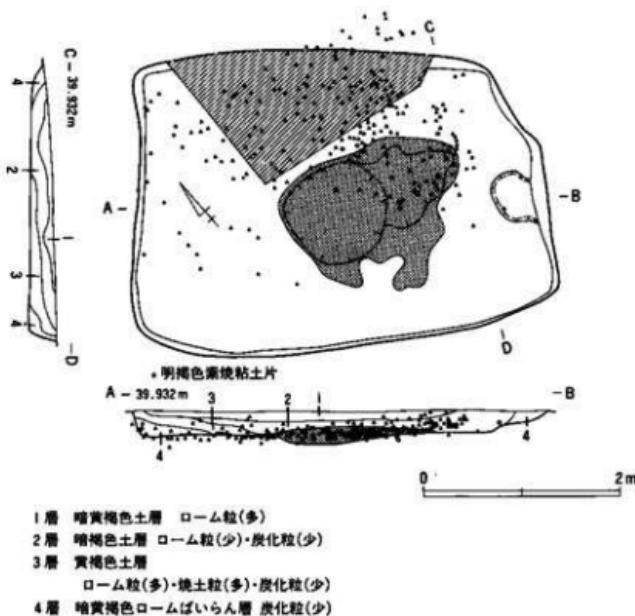
不整な長方形プランを呈する。南東壁の中央部には階段状に高くなったテラスが形成されている。遺構中央部には浅いくぼみ状の落ち込みが確認された。

この落ち込みには焼土が充填しており、部分的に焼砂が残存していた。また落ち込み中とその周囲からはA-12号跡と同様な明褐色素焼粘土片が若干検出されている。

床面上には落ち込みを被覆するように焼土が散布していた。

遺構の北東半部を中心に粒状鍛冶滓が多数検出された。その多くは床面からの出土である。

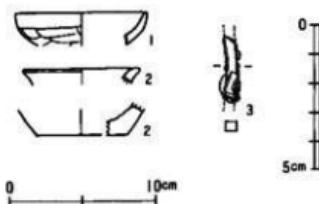
なお遺構の北東壁は攪乱を受けている。



第33図 A-13号跡実測図 (1/60・1/30)

出土遺物（第34図）

1は杯（土師器）で口径9.0cm、現高2.3cmを測る。色調は明褐色を呈する。外面は口縁部は粗雑なヘラミガキ、体部から底部にかけてはヘラケズリ、内面は横方向のヘラミガキである。胎土は精良で小石・砂は少ない。中央部落ち込みの北脇床面から単独出土した。

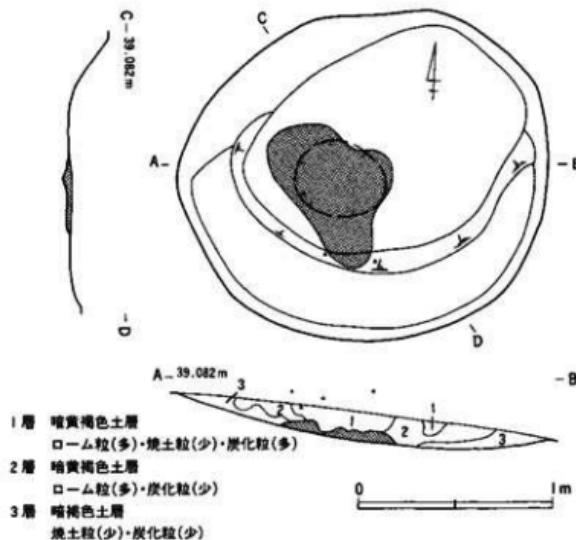


2は小型壺（土師器）の口縁部及び底部破片である。他に胴部片が若干あるが接合しない。

口径8.0cm、底径6.2cmを測る。暗赤褐色を呈し、口縁部内外面は横ナデ、胴下部外面へラケズリ、内面ナデが施されている。内面は器肌の剥落が著しい。胎土中には白砂が多い。中央部落ち込み南側の床面上より散乱した状態で出土した。

3は鉄鎌の茎部片である。現長2.1cmを測る。

西コーナーから90cm東の地点、覆土下層から出土した。



第35図 A-14号跡実測図 (1/30)

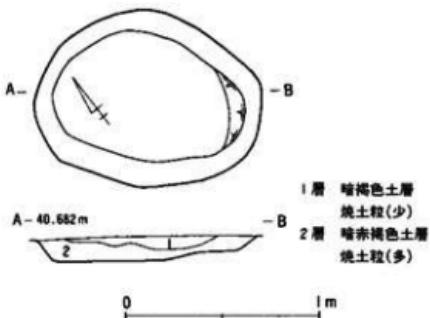
A-14号跡 (第35図)

不整な円形プランを呈する。掘り方は北側が深くなる浅い皿状で、中央部には卵形の深い落ち込みが確認された。この落ち込みには焼土が充填し、その周囲にも焼土の散布が見られた。粒状鍛冶滓が4点検出されたが、いずれも遺構覆土上層中からの出土である。

A-15号跡 (第36図)

不整椭円形プランの浅い皿状の遺構である。

覆土中には焼土粒が多く含まれており、底面も焼き締まっている。遺物は出土していない。



第36図 A-15号跡実測図 (1/30)

A-16号跡 (第37図)

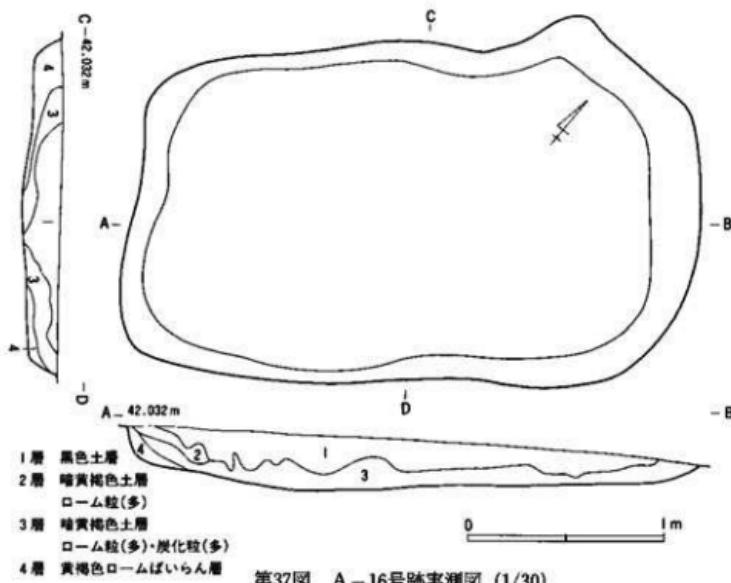
不整長方形プランを呈する。遺物は出土していない。

A-17号跡 (第38図)

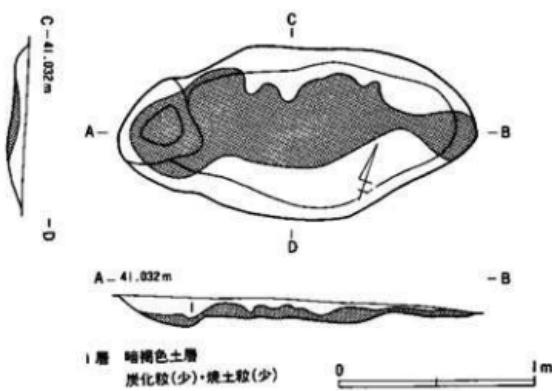
不整椭円形プランで、西端部は一段深く掘り下げられている。底面上には長軸方向に沿って焼土が散布していた。遺物は出土していない。

A-18号跡 (第39図)

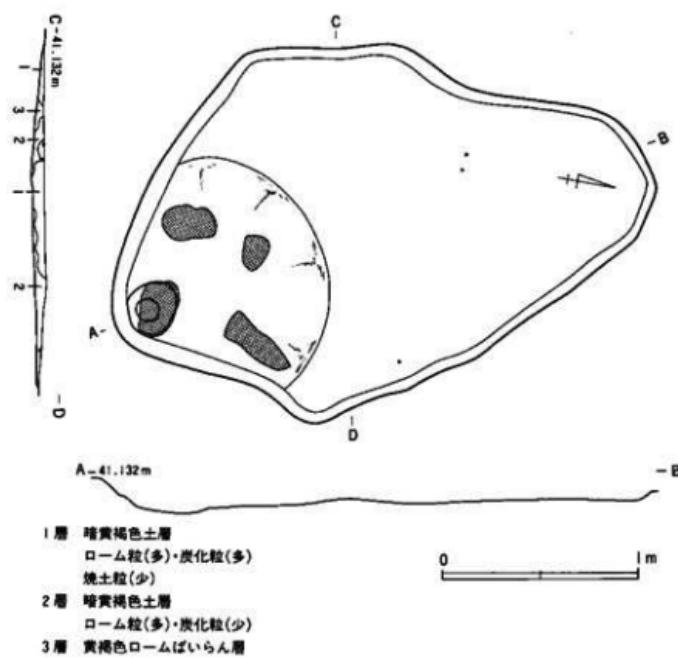
不整形プランの浅い落ち込みである。南側のやや深くなった底面には焼土が若干散布していた。覆土中からは粒状鍛冶滓が3点出土している。



第37図 A-16号跡実測図 (1/30)



第38図 A-17号跡実測図 (1/30)



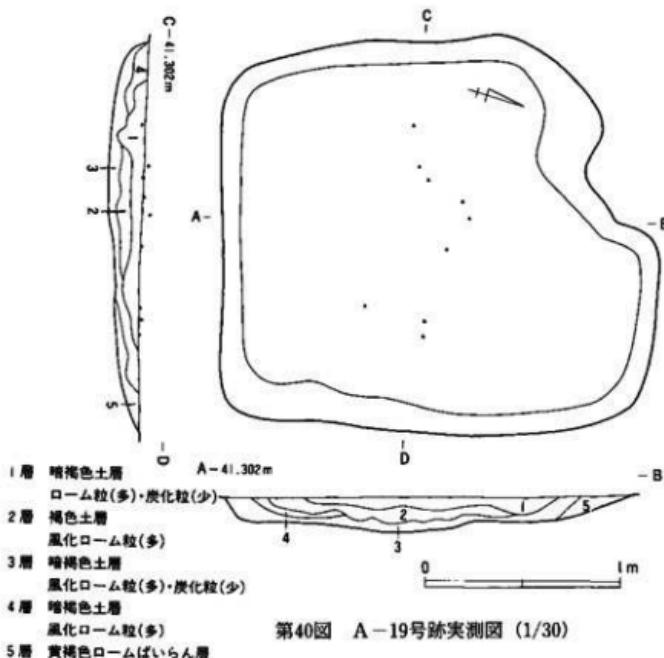
第39図 A-18号跡実測図 (1/30)

A-19号跡 (第40図)

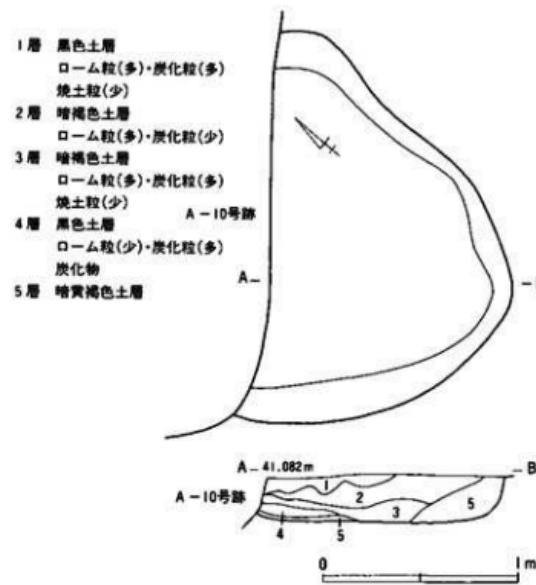
三隅が角を成す不整形プランを呈する。遺構確認面上で9点の粒状鉛冶滓を検出した。覆土中には焼土粒は見られない。

A-20号跡 (第41図)

北側をA-10号跡によって擾乱されている遺構である。覆土中には炭化粒が多く含まれていた。遺物は出土していない。



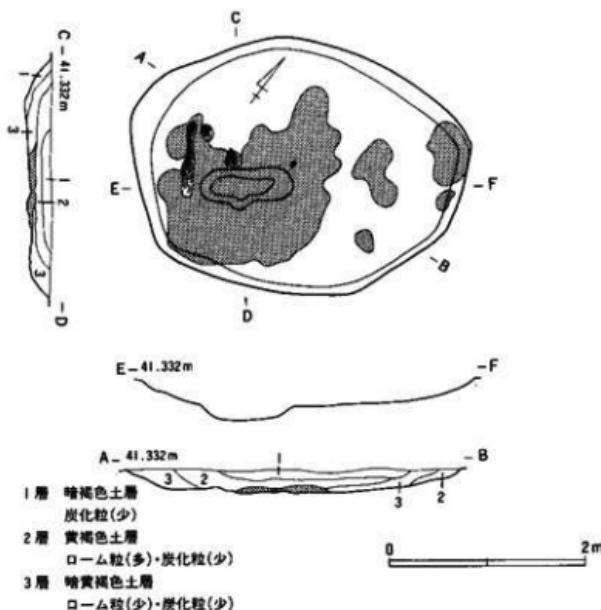
第40図 A-19号跡実測図 (1/30)



第41図 A-20号跡実測図 (1/30)

A-21号跡 (第42図)

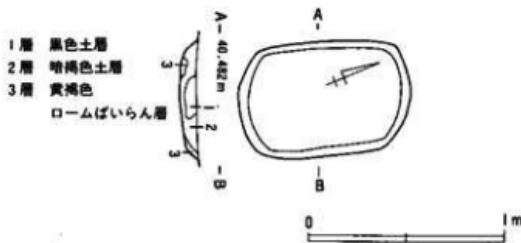
梢円形のピットで中央やや南西寄りにさらに小ピットが穿ってある。底面はこの小ピットを中心に焼土が広範に散布していた。小ピットの西側から炭化材が検出されている。



第42図 A-21号跡実測図 (1/60)

A-22号跡 (第43図)

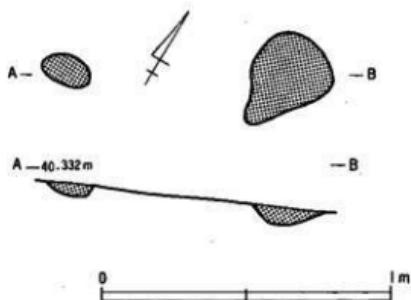
短辺が膨らむ方形プランの小ピットである。遺物は出土していない。



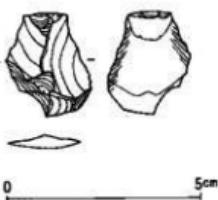
第43図 A-22号跡実測図 (1/30)

A—23号跡（第44図）

A—9号跡の南7mの地点に位置する焚火跡である。



第44図 A—23号跡実測図 (1/20)



第45図 A区表面採集遺物実測図 (2/3)

第3章 B 区の調査

第1節 先土器時代（第46図）

B区においては台地の北側縁辺部に沿う様にして3箇所の石器類集中地区が検出された。これらを西からB-1群、B-2群、B-3群としてその内容を報告する。

B-1群（第47図）

層序は全体として南から北に緩く傾斜している。石器類はこの区域の中でも2D65グリッド東部・2D68グリッド北西部・2D59グリッド南西部に集中が見られる。出土層位はIII層下部からIV～V層に及ぶが分布の中心はIV～V層最上部である。なお2D68グリッドの小群には焼礫片群が含まれている。

石器類の出土点数は安山岩製11点、凝灰岩製11点、チャート製9点、頁岩製6点、花崗岩製4点、玄武岩製2点、瑪瑙製1点で、計44点である。

無調整の剝片・小片が多数を占めるが、トゥールとして、ナイフ形石器2点、スクレイバー3点、ドリルまたはノッチ1点が検出され、他に石核2点、ハンマーストーン1点、調整剝片4点、加熱された接合礫片等が出土している。

B-1群石器類（第48～49図、図版11）

1はチャート製の石核で、橢円筒形を呈する。上面は平坦に整えられ、側面は上下両方向からの剥離痕が認められる。IV～V層最上部出土。

2は瑪瑙製の石核で、1よりも不整形な多面体である。剥離方向も一定していない。IV～V層下部出土。

3はチャート製で両縁調整の典型的な茂呂型ナイフ形石器である。IV～V層最上部出土。

4はチャート製のナイフ形石器で、表面右側辺上半部が刃部となっている。III層下部出土。

5は両面調整のスクレイバーで凝灰岩製である。III層下部出土。

6は片面調整のスクレイバーでチャート製である。IV～V層出土。

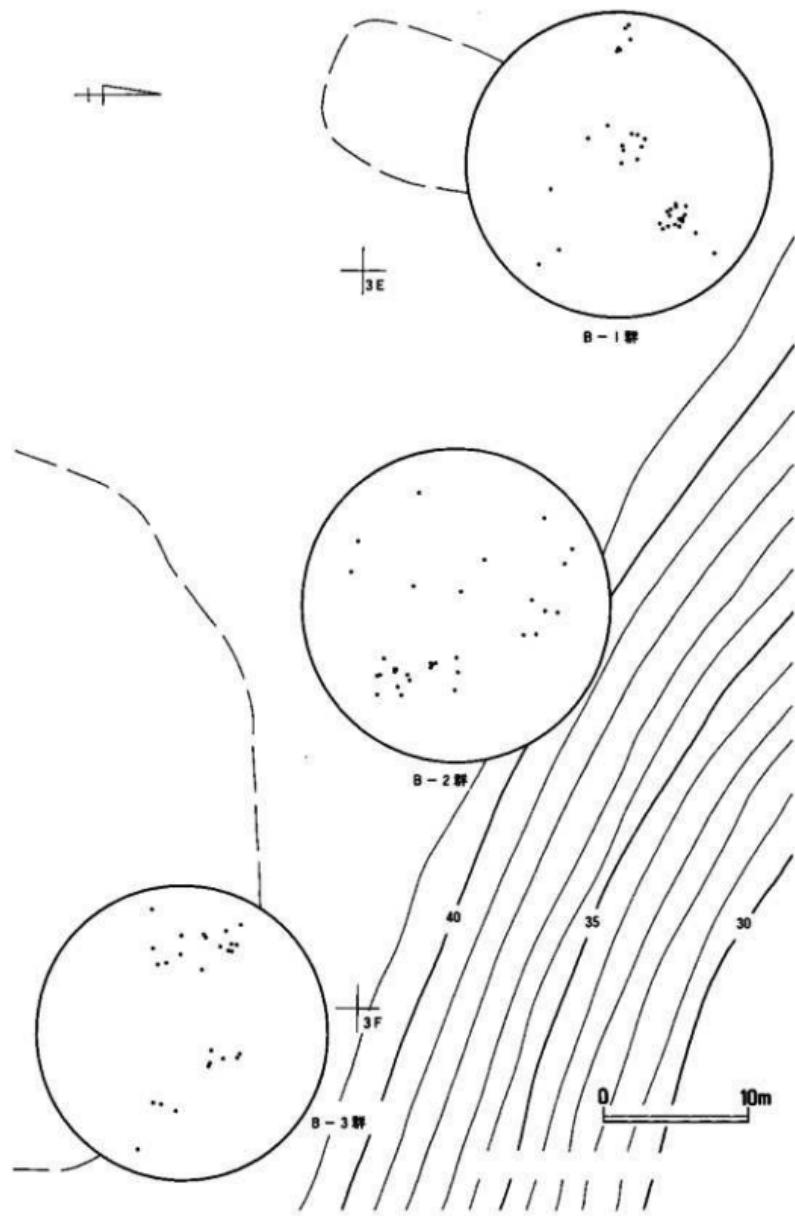
7はチャート製の両面調整剝片である。IV～V層上部出土。

8はチャート製のスクレイバーで、1側縁にプランティング状の剥離を施し、末端には微細な調整を加えている。IV～V層出土。

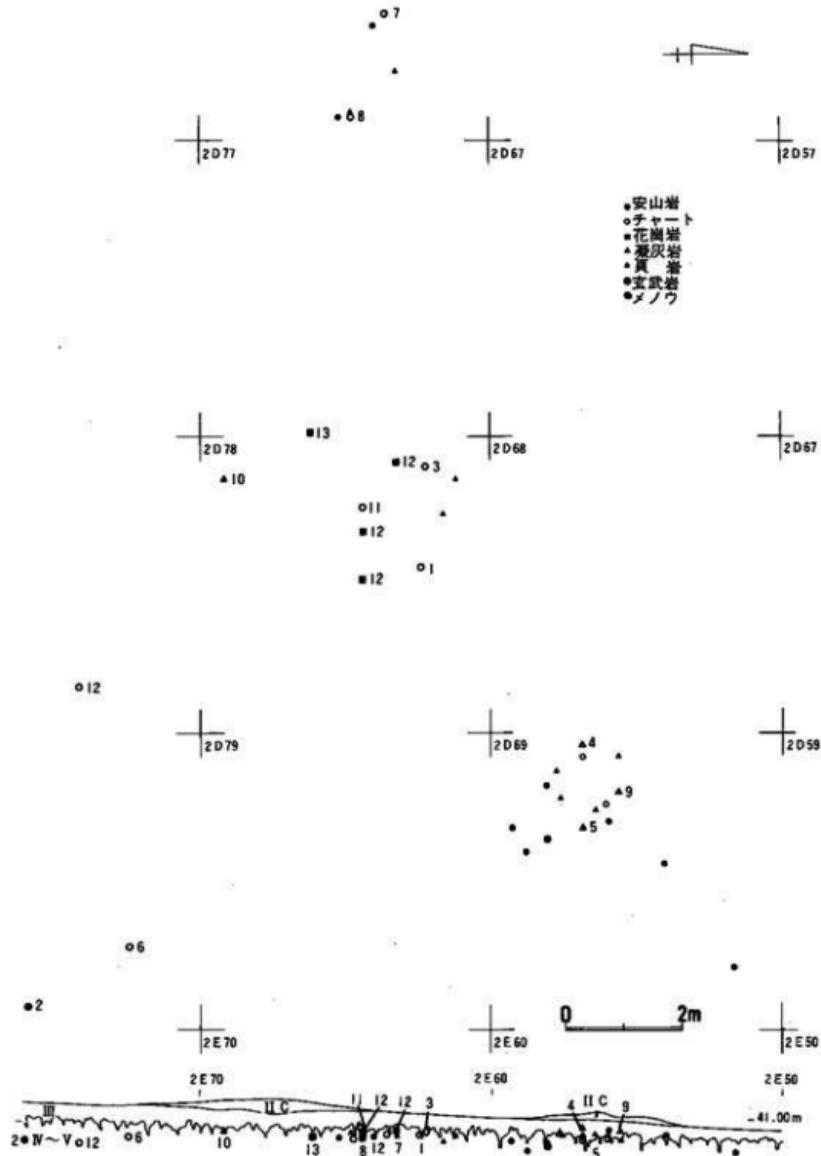
9は側縁の一端を調整した頁岩製の剝片である。III層下部出土。

10も9と同様な凝灰岩製の調整剝片である。IV～V層最上部出土。

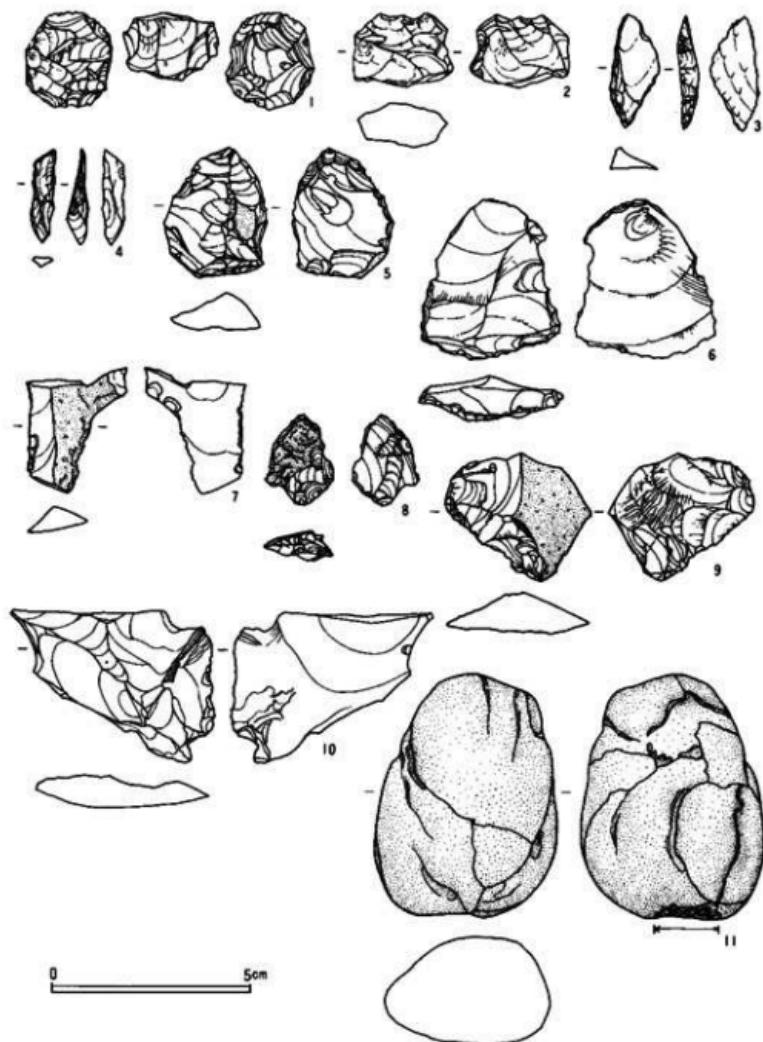
11はチャート製のハンマーストーンで、末端部には多数の敲打痕が見られる。加熱されても



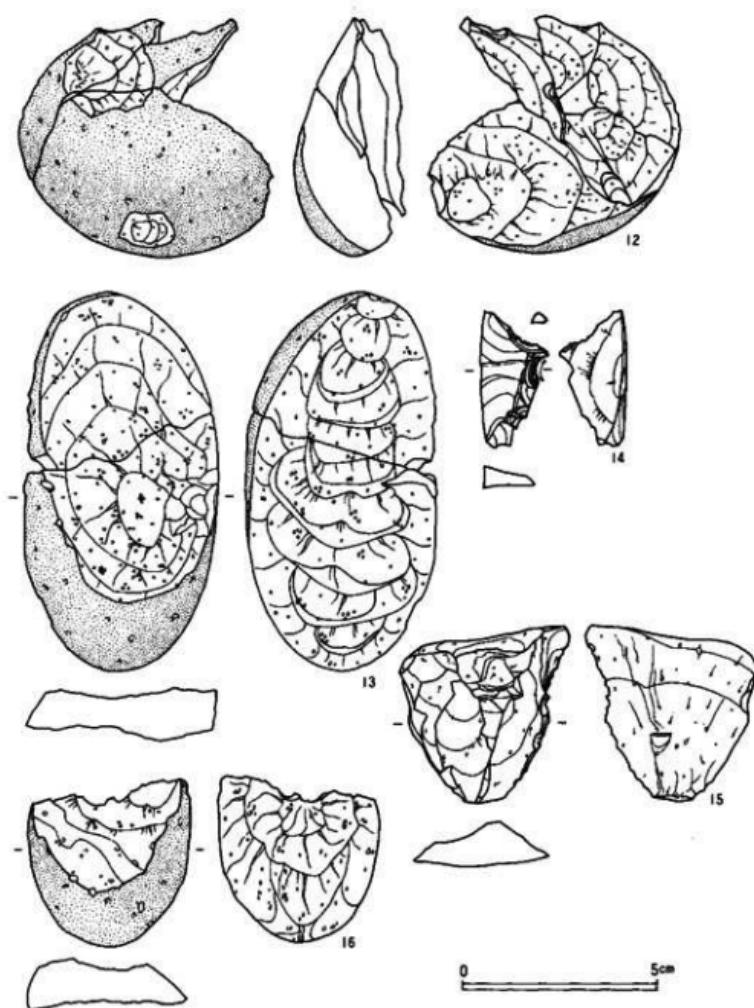
第46図 B区先土器時代遺物分布図 (1/40)



第47図 B-1群遺物出土状況図 (1/100)



第48図 B-1群石器類実測図(1) (2/3)



第49図 B-1 群石器類実測図(2) (2/3)

ろくなつておらず、発見時には7片に分かれて一括出土した。III層下部出土。

12は花崗岩製の接合礫片で3片に分かれてIV～V層上部から検出された。加熱されて自然面が赤味を帯びている。

13も花崗岩製の礫片で、2片に分かれてIV～V層上部から一括出土した。12同様加熱されて自然面が赤味を帯びている。

14は凝灰岩製のドリルまたはノッチである。抉入部は磨滅して光沢をもつ。2D67グリッドの擾乱土層中から検出された。

15は安山岩製の調整剝片で、石刃状剝片の末端部を利用して1側縁にサイドスクレイパー風の並列調整を加えている。2D68グリッドの擾乱土層中から出土した。

16は花崗岩製礫片で、12・13と同様に加熱されて自然面が赤味を帯びている。2D78グリッドの擾乱土層中から出土した。

B-1群における主要遺物は以上であるが、14・15・16は遺物出土状況図には記入しなかつた。

B-2群（第50図）

層序は全体として南から北に緩く傾斜している。石器類の平面的な分布状況は散漫であるが、2E95グリッドでは集中度が比較的高くなっている。出土層位はすべてVII層下部である。

石器類の出土点数はチャート製18点、安山岩製10点、粘板岩製2点、凝灰岩製1点、頁岩製1点で計32点を数える。

無調整の剝片・小片が多数を占めるが、調整剝片7点、使用剝片2点が伴なっている。

B-2群石器類（第51図、図版12）

1は両面調整剝片でチャート製である。側縁部には断続的に並列する浅く細かい調整剝離が見られる。表面右側縁部は磨滅している。

2も1と同様なチャート製の両面調整剝片である。

3は片面調整の剝片でチャート製である。

4は打面再生剝片を利用した使用剝片でチャート製である。

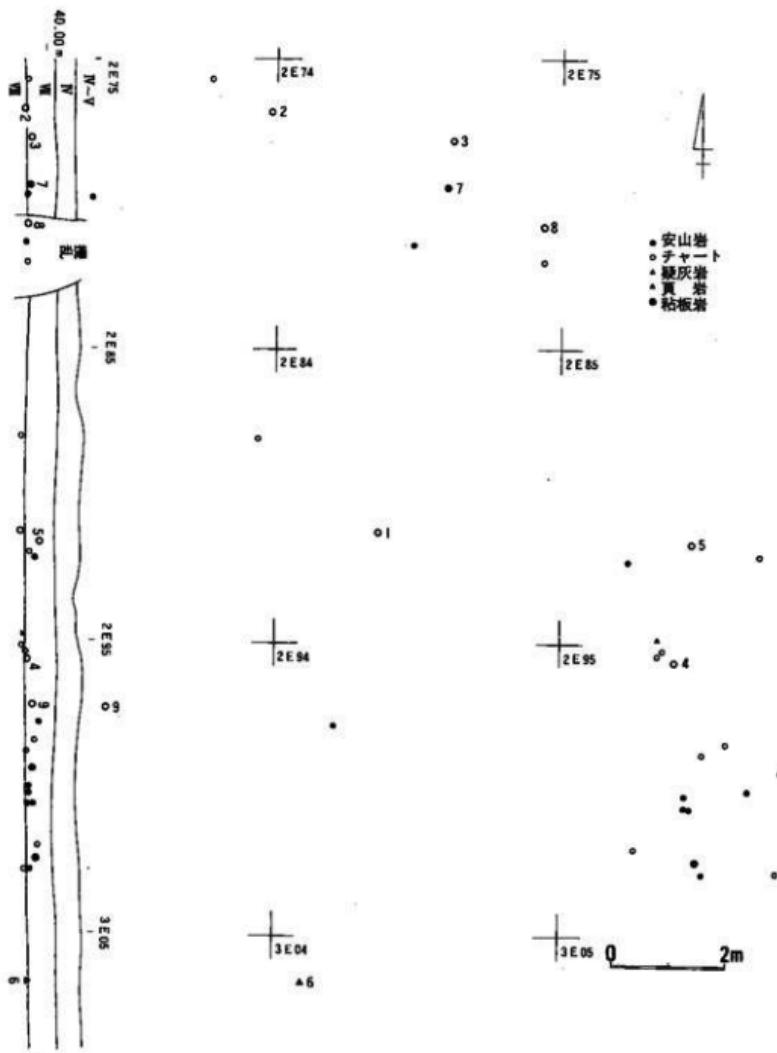
5はチャート製で基部片側両面に深い調整剝離を施したものである。もう一方の側縁には使用痕が認められる。

6は両極打法を示す縱長剝片の抉入部に、並列する片面調整を加えた頁岩製の剝片である。両側縁とも使用痕が認められ磨滅している。

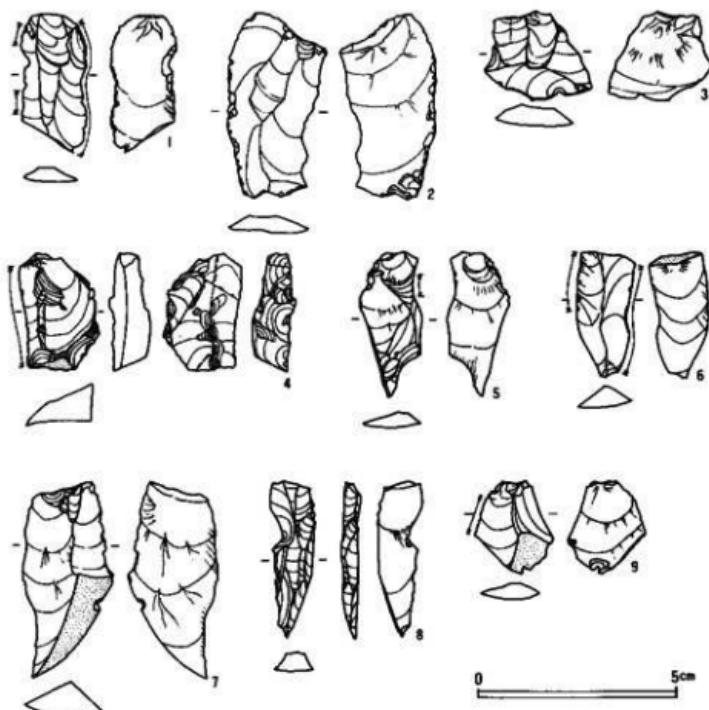
7は裏面の小抉入部に微細な調整を加えた安山岩製の剝片である。

8は表面側縁に小範囲の調整を加えたチャート製の剝片である。

9はチャート製の使用剝片である。



第50図 B-2群遺物出土状況図 (1/100)



第51図 B-2群石器類実測図 (2/3)

B-3群（第52図）

層序は全体として南から北へ緩く傾斜している。遺物の分布状況は3F18グリッド南西隅を中心として3E29グリッドに広がる西群と、3F20グリッド北東隅を中心とする中央群、3F21グリッドの東群に3分される。遺物出土層位はすべてIII層中であるが、図示した土層断面図は測量位置が不適当で遺物出土レベルとの相関関係を正しく伝えていないことをお断わりしておく。

石器類の出土点数はチャート製17点、安山岩製6点、砂岩製2点、頁岩製1点の計26点を数える。

このうちトゥールとしてはナイフ形石器2点、ノッチ2点、鋸歯縁石器1点があり、この他に石核1点、使用剝片1点、接合礫片等が検出された。

B-3群石器類（第53図、図版10）

1は砂岩製の石核である。表面の風化が著しく、稜線やリングが判然としないので、識別できる部分のみを図化した。両極打法が採用されている。

2はチャート製のナイフ形石器で刃部には使用痕が認められる。

3は安山岩製のナイフ形石器で表面は母岩の自然面をそのまま残している。基部調整は片側だけ行なわれ、プランティングはほぼ垂直である。

4はチャート製のノッチで側縁中程に單一剝離を施したものである。

5はナイフ形石器を素材としたノッチである。チャート製。

6はチャート製の鋸歯縁石器である。鋸歯縁と反対側の側縁にはプランティングを施す。

7は頁岩製の使用剝片である。

8は母岩の自然面を残したチャート製の石刃である。

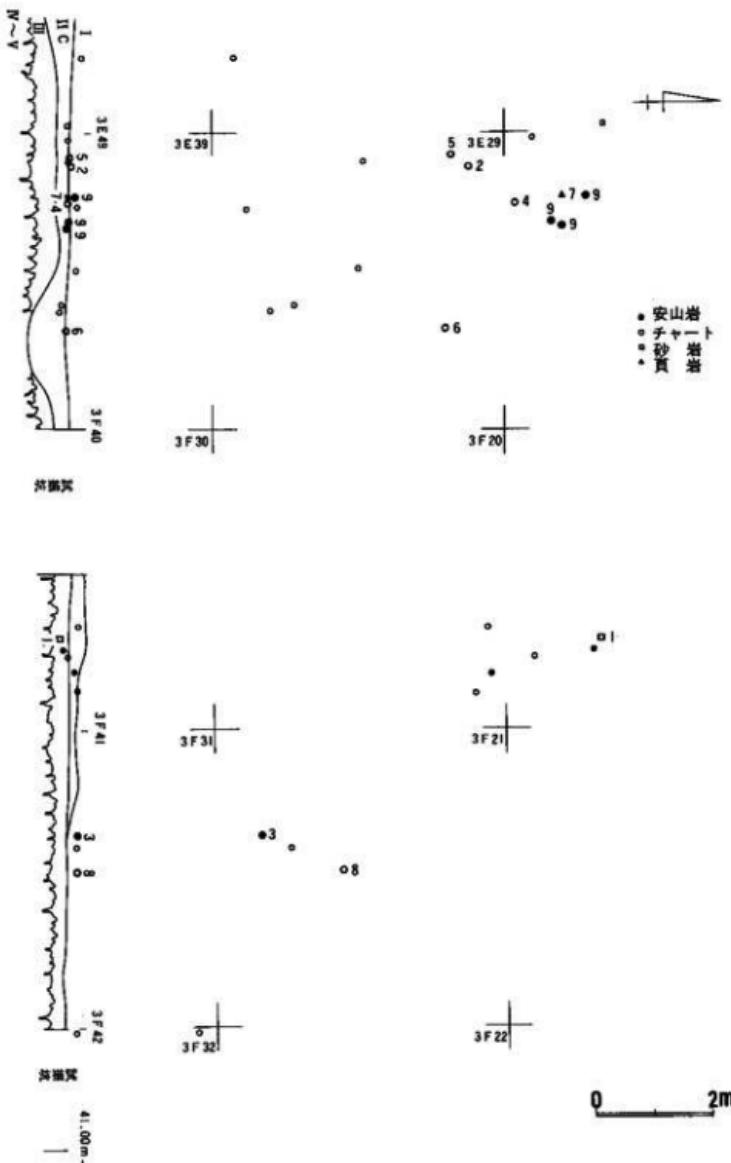
9は3片からなる安山岩製の接合礫片である。

遺物包含層の石器（第62図、図版13）

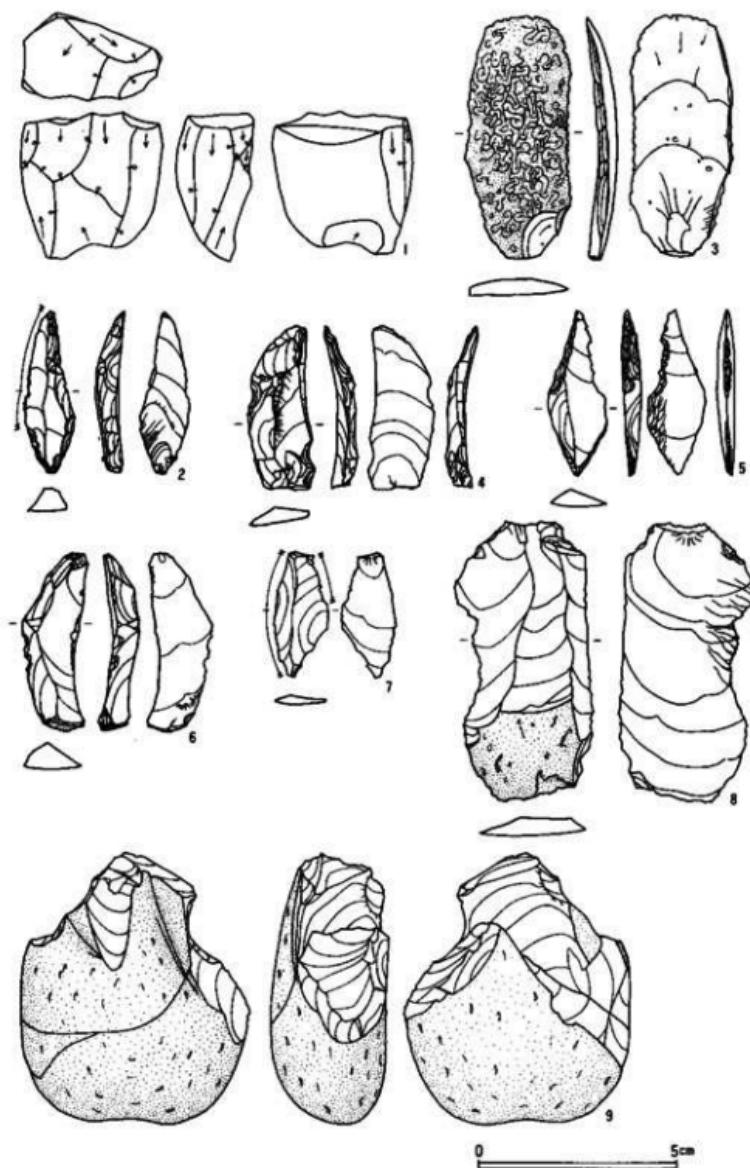
6は先土器時代の両面調整ポイントである。チャート製。

表面採集の石器（第63図）

2は先土器時代の角錐状石器片である。チャート製の横長剝片を素材として片面調整を加えている。



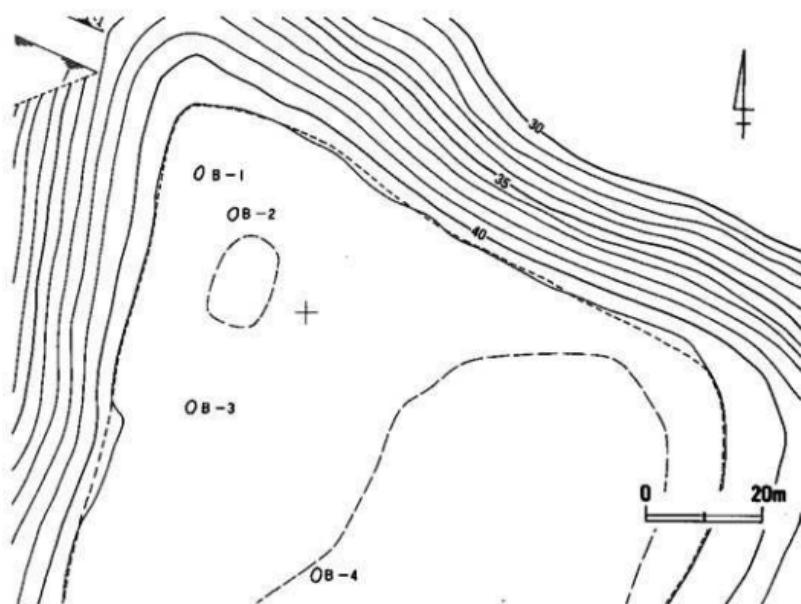
第52図 B-3群遺物出土状況図 (1/100)



第53図 B-3群石器類実測図 (2/3)

第2節 繩文時代（第54図）

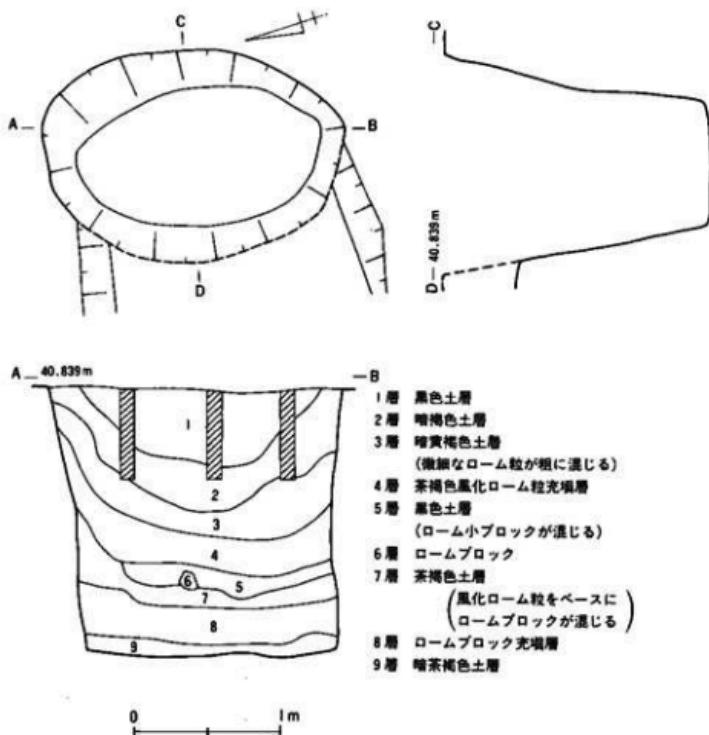
B区からは4基の陥し穴状土壙、および遺物包含層中より土器片1,000点余り、石器若干数が検出された。



第54図 B区遺構配置図 (1/1000)

B-1号跡 (第55図、図版9)

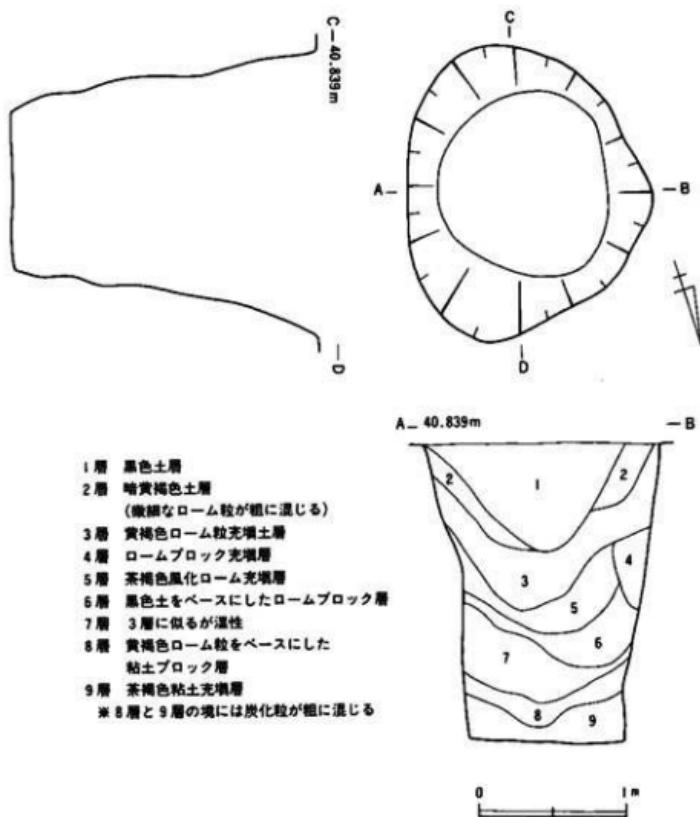
梢円形プランで、底面は広く平坦である。覆土層序は腐食土と風化ローム土との互層状となっている。遺物は出土しなかった。



第55図 B-1号跡実測図 (1/40)

B-2号跡 (第56図、図版9)

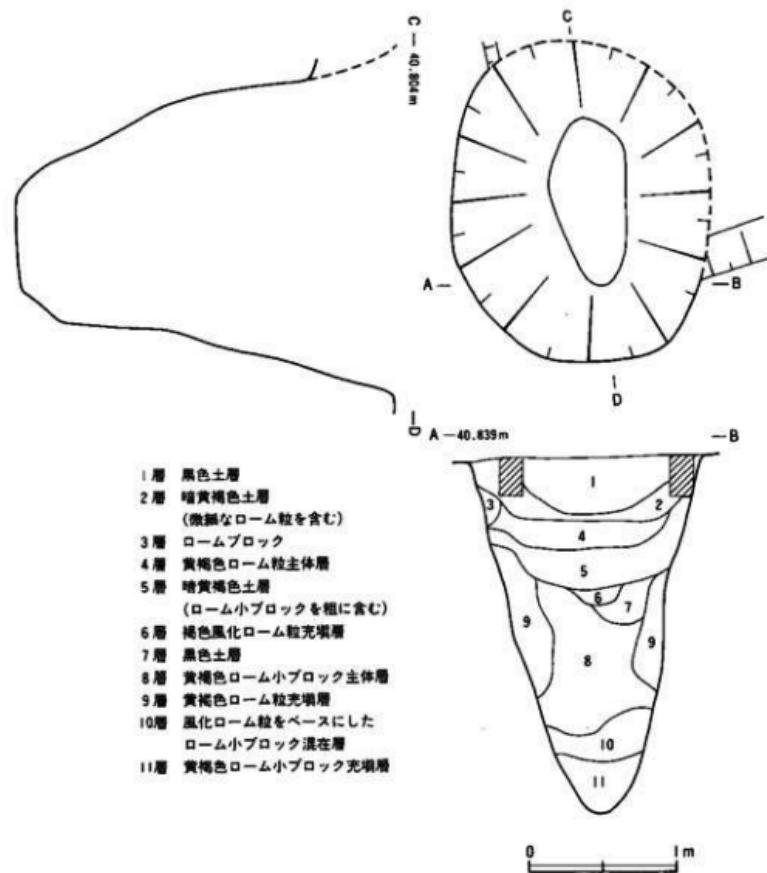
不整形プランで、底面は広く平坦である。覆土層序中、8層と9層との境面には炭化粒が粗に散布していた。遺物は出土しなかった。



第56図 B-2号跡実測図 (1/40)

B-3号跡 (第57図、図版9)

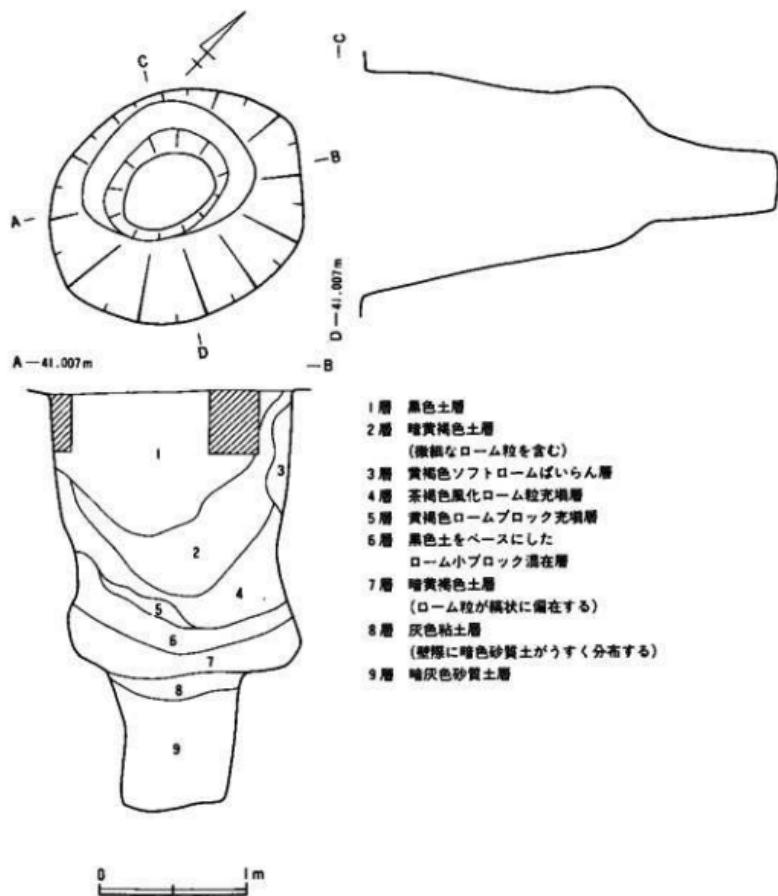
横円形プランで、底面は狭長である。覆土中にはロームブロックが多量に混入している。遺物は出土しなかった。



第57図 B-3号跡実測図 (1/40)

B-4号跡（第58図、図版9）

楕円形プランで、掘り方は中位で一担袋状に膨らみ、さらに深く落ち込んでいる。覆土は最下部に砂質土、その上を粘土が覆い、上層はローム土が主体的となる。遺物は出土しなかった。



第58図 B-4号跡実測図 (1/40)

遺物包含層の土器（第59～61図、図版14）

(1) 早期（第59図1～23）

1～10は燃糸文系土器群である。

1～4は井草式土器で、口唇頂部にも横走斜繩文が施される。口縁部文様帯は1・3が肥大した口唇直下から横走燃糸文、2は少なくとも1条以上のR L原体押捺文、4は幅4mm程の無文体を設けて横走燃糸文を付している。

5～7は大丸式土器で口唇部の斜繩文は側縁部に限られ、口縁部には無文帯が形成され、胴部には縱走燃糸文が付される。

8・9は夏島式土器で、8は口唇部が肥大するが、9は単純な成形である。口縁部から胴部にかけては縱走燃糸文が施される。

10は稻荷台式土器で、平滑でしまった器面に間隔の広い縱走燃糸文が浅く施文される。

14・15は波状口縁土器群である。焼成が堅緻で14には無節の横走結節斜繩文が付く。花輪台I式併行か。

11～13は花輪台II式の無文土器群である。11には縱方向の細く浅い擦痕が付され、12・13の器表面には小粘土片を無秩序に貼りつけた様な痕跡が残っている。

16～23は胎土中に纖維が含まれる土器群である。

19は田戸上層式土器で、微量な纖維を含み、細沈線が縱走する。16は口縁部の条痕が横走しており、子母口式土器か。その他は茅山式系土器群である。

(2) 中期（第59図24～第60図48）

24・25は肥大した口唇部直下に1条の粘土紐を貼付して、上下から交互に刺突する。五領ケ台式。

26～32は阿玉台式土器で、胎土中には雲母片が含まれる。27は口縁内面に断面三角形の突帯をめぐらしている。29は山形突起部の破片である。

39・57も阿玉台式併行期の土器である。

39は胎土が砂質で、口縁部には長梢円形の微隆起区画文が配される。57は口唇部が内側に肥大し、胴上半は輪積痕を明瞭に残す無文土器である。

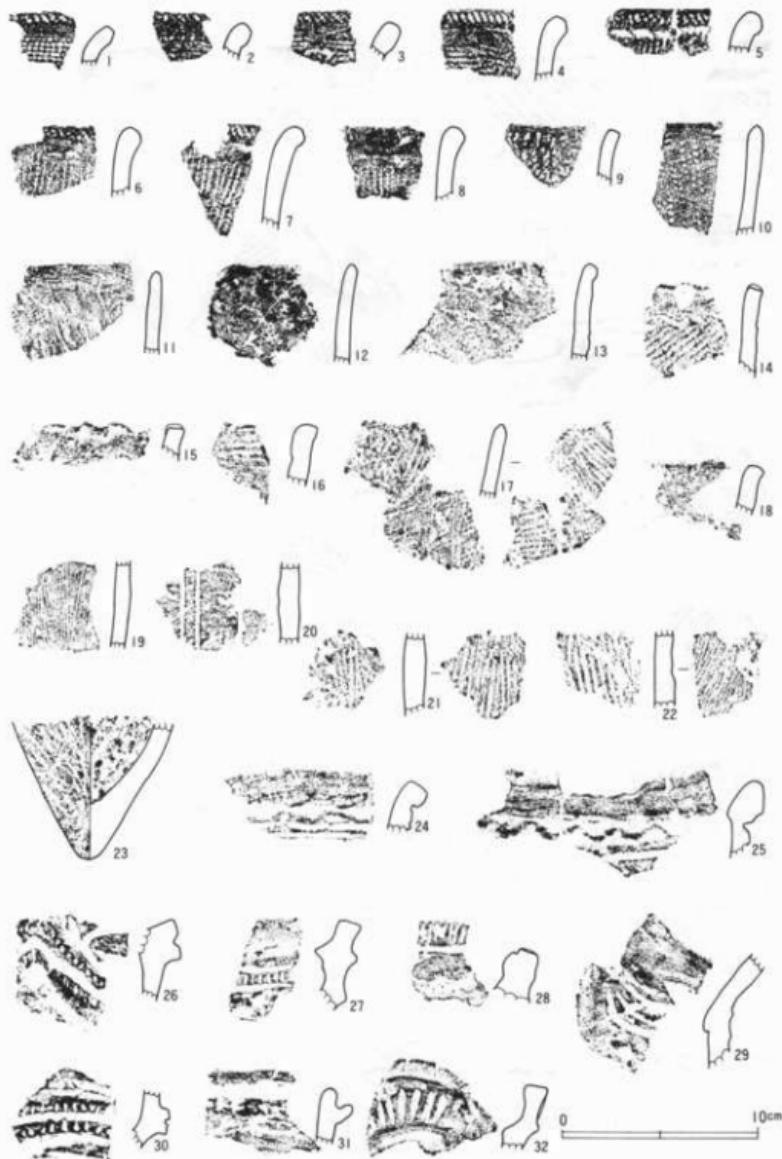
33～38・40～48は加曾利E式系土器群である。

33・41は加曾利E I式、40の環状把手片も同式併行である。34・35・42は加曾利E II式。46は胴部垂下沈線が連結した加曾利E III式。36～38・43・44は加曾利E式末に属する。45・47・48は加曾利E II式あるいはIII式の胴部破片である。

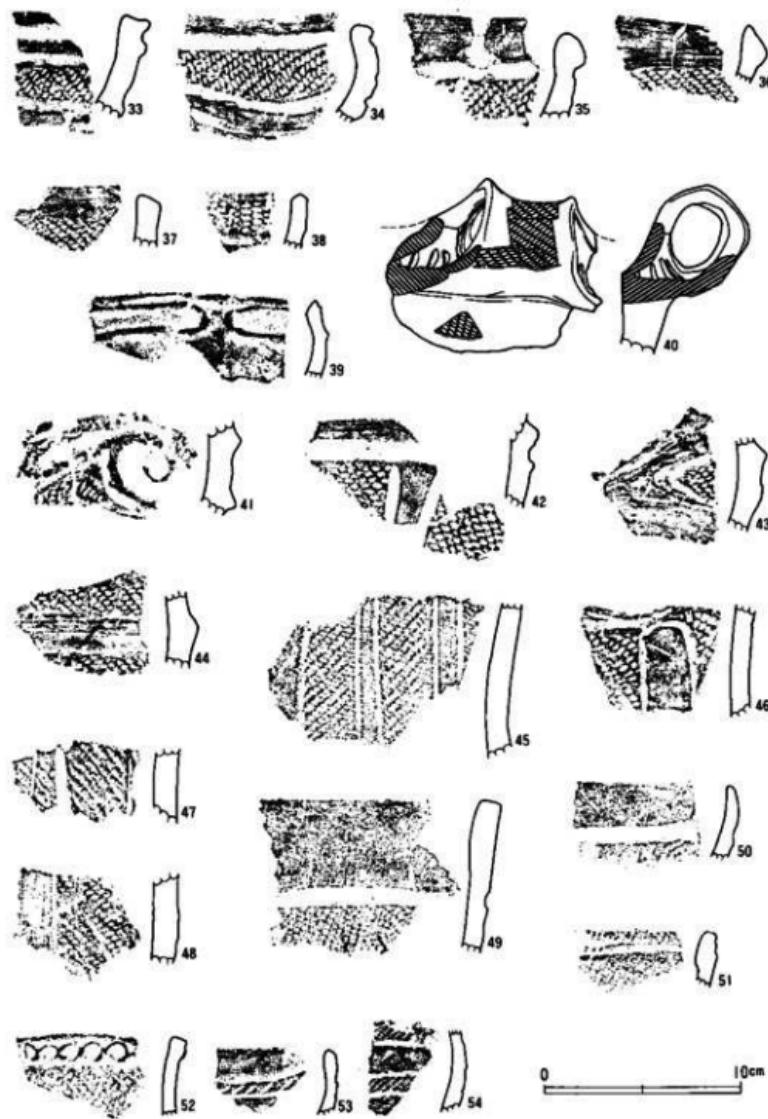
(3) 後期（第60図49～第61図56）

49～51・56は堀之内I式土器である。

49・50は口縁部無文帯を太い沈線で画し、胴部地文は斜繩文を付す。51は細い原体の斜繩文



第59図 B区包含層出土遺物実測図(1) (1/3)



第60図 B区包含層出土遺物実測図(2) (1/3)

を配した後、口縁に沈線をめぐらしている。56は環状突起の破片で、環部内面には赤彩が残る。

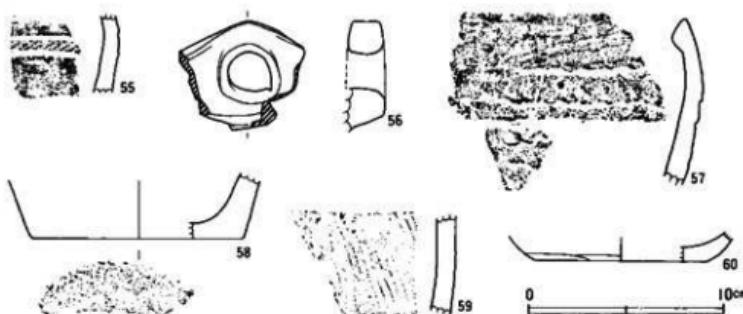
52は堀之内II式土器である。

53～55は加曾利B II式土器で、器壁が薄く堅緻で、磨かれている。

53は刻目突帯、54・55は磨消繩文帯である。

(4) その他（第61図58）

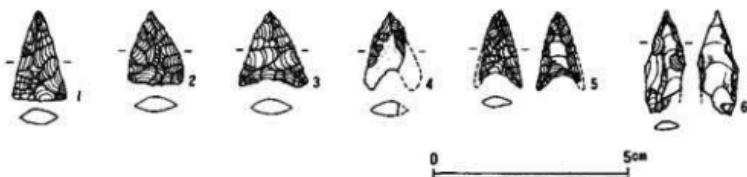
58は繩文土器の底部で、網代痕が認められる。



第61図 B区包含層出土遺物実測図(3) (1/3)

遺物包含層の石器（第62図）

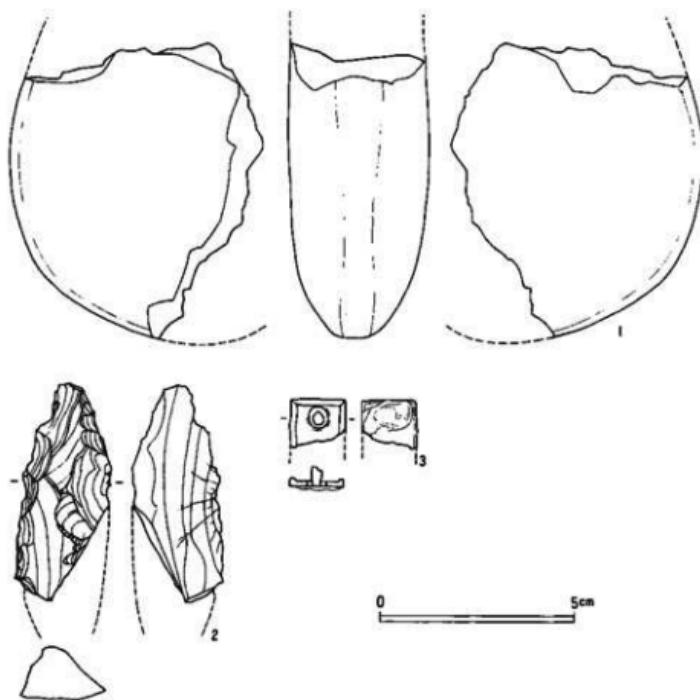
1～5は石鏃で、4は瑪瑙製、他はチャート製である。4の下半部は風化が著しい。



第62図 B区包含層出土遺物実測図(4) (2/3)

表面探集遺物（第63図）

1は縄文時代の磨石片である。砂岩製。器表面は平滑で、表裏側面共磨かれている。



第63図 B区表面探集遺物実測図 (2/3)

第3節 古墳～歴史時代

B区では古墳～歴史時代の遺構は認められない。わずかに次に示す遺物が出土したのみである。

表面探集遺物（第61図59・60、第63図3）

59は古墳時代の須恵器壺片で、外面には平行叩き目があり、自然釉がかかっている。

60は奈良時代後期のロクロ土師器杯片で、底部調整は手持ちヘラ削りである。

3は性格不明の鉄製品である。釘（紙）の残存が認められる。

第4章 小 結

前章までにNo.2遺跡の内容を報告したが、本遺跡が先土器時代・縄文時代・古墳～歴史時代の遺跡・遺物を包含する複合遺跡であることが判明した。なかでも先土器時代および古墳～歴史時代には質量ともに好資料が得られたので、これら両時代の調査成果をまとめておきたい。

1 先土器時代

(1) 炭化粒群について

炭化粒群はA-1・A-2群から検出された。

A-1群では炭化粒のみの出土で、石器類は伴わない。炭化粒のまとまりは大小の2小群に細分されるが、その集中層位は各々VII層下部、VI層下部であり、レベル的にも格差が見られるので、炭化粒が自然地表面上に落下したものであるならば、これら2小群は同時期の所産とは言えない。

A-2群では炭化粒集中地区に北接して石器類が共伴している。炭化粒のまとまりはその分布密度からいくつのか小中心が存在する。これら小群のうち北側すなわち2B55・2B56小グリッドに分布する小群は、集中層位がVII層中心で、密集度が高い。いっぽう南側すなわち2B66・2B67に分布する小群は集中層位がVI層中心で、密集度が低い。南北の小群の分布状況にはこのような差異が存在するが、レベル的には大きな違いは見られない。地形・各小群間の距離・土中に長期間埋在する間の上下動等を考慮すれば、むしろA-2群炭化粒は全体として同時期にかかわると見做してさしつかえないであろう。石器類との関係については土層断面への投影図を見る限り、石器類の方がやや下に位置するようだが、これだけの手掛りでは何とも言えない。

このA-2群炭化粒とA-1群中の大群に属する炭化粒はレベル的にも層序的にも符合しているので、この両群は同時期とすることができる。

以上を要約するとA-1群の小群に含まれるもの以外のA区検出の炭化粒はすべて同時期の所産であると言えよう。また石器類との関係は距離的・層位的には接近しているが不明である。

炭化粒の性格に関しては、考察材料が乏しく自然的なものか人工的なものの判断は困難であった。

(2) 石器類について（第64～66図）

No.2遺跡ではA・B区合わせて4箇所の石器類集中地区が検出された。層位的にはこれら4群はA-2群（VII層下部～VIII層上部）→B-2群（VII層下部）→B-1群（III層下部～IV～V

層上部) → B-3群(III層)の順序で推移していった(第64図)。ここでは石材と石器組成を中心的に総括する。

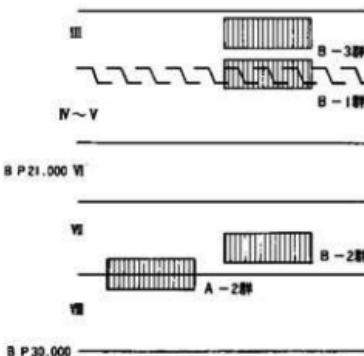
まず石材であるが、前章にも述べたように群別の内訳はA-2群が安山岩34点(94.4%)、砂岩2点(5.6%)、B-2群がチャート18点(56.3%)、安山岩10点(31.3%)、粘板岩2点(6.2%)、凝灰岩1点(3.1%)、頁岩1点(3.1%)、B-1群が安山岩11点(25.0%)、凝灰岩11点(25.0%)、チャート9点(20.5%)、頁岩6点(13.6%)、花崗岩4点(9.1%)、玄武岩2点(4.5%)、瑪瑙1点(2.3%)、B-3群がチャート17点(65.4%)、安山岩6点(23.1%)、砂岩2点(7.7%)、頁岩1点(3.8%)となっている(第65図)。しかしA-2群についてはトゥールが存在しないこと、36点中9点までが接合して単一石塊を構成してしまうこと等を考慮すれば、他の3群とは同列に論じることはできない。

本遺跡ではIV~V層下部からVII層上部にわたる資料に欠けているが、上記諸事実から判明することは次のとおりである。

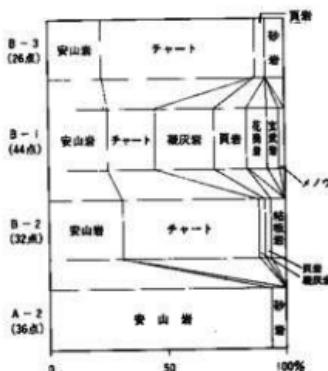
- (1) 本遺跡の石器石材構成は一貫してチャート・安山岩が主流を占めている。
- (2) しかしながらIII層下部からIV~V層上部に位置するB-1群では凝灰岩・頁岩等の比率が高くなり、チャート・安山岩の優位が相対化されている。
- (3) 黒曜石は1点も含まれていない。

次に石器組成の面からまとめてみよう。まず製品化の度合いを見るために全石器類を石核・トゥール・調整剥片・無調整剥片に分類して群別の内訳を調査した。それによればA-2群が無調整剥片36点(100%)、B-2群が調整剥片7点(21.9%)、無調整剥片25点(78.1%)、B-1群が石核2点(4.5%)、トゥール6点(13.6%)、調整剥片4点(9.1%)、無調整剥片32点(72.8%)、B-3群が石核1点(3.8%)、トゥール5点(19.2%)、無調整剥片20点(77.0%)となっている(第66図)。

各群ともに無調整剥片が圧倒的に多く、石器製作跡としての性格を明瞭に表わしているが、



第64図 No.2 遺跡石器類出土層位



第65図 石材の構成とその変遷

B-1群には加熱された礫片が混在しており、群内あるいはその付近で火を焚いたことが想定され、この群の複機能的性格を物語っている。

次に調整剝片とトゥールとの出土比率を見ると、B-2群では調整剝片のみ、B-1群ではトゥールが調整剝片を上回り、B-3群に到つてトゥールのみとなる。県下他遺跡の事例ではB-2群の時期に局部磨製石斧、ナイフ形石器等が既に登場するが、それにしてもこのにおける調整剝片の数量はトゥールのそれを大幅に上回るのではないか。

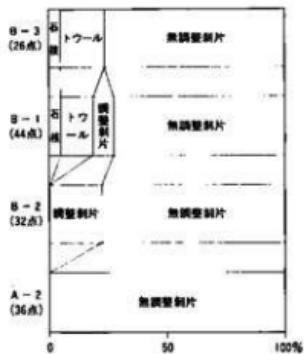
またおしなべて調整剝片と称される石器類の中でも、B-2群の1・2は縦長剝片の側縁部をかなり長距離にわたって連続的に片面あるいは両面調整を施している点、さらに素材の薄さから階段状剝離が行なわれない点で共通している。これらと類似した石器類は藤沢遺跡1群(VII層) (註1)、三里塚馬場遺跡Iブロック (VII層) (註2)、水砂遺跡Cブロック (V層) (註3)、復山谷遺跡Jブロック (VII層) (註4) 等からも出土しており、小地域を超えて類型的に製作されていたことが知られる。

最後にB-1群とB-3群のトゥールを比較してみよう。まずB-3群の縦長剝片の多用が目につく。これはB-3群における石刃ないし石刃状剝片の増加、両群の石核の形態比較等からも裏づけることができる。縦長剝片が他の不定形剝片を駆逐していく過程で後者を素材として長期間製作されてきた調整剝片が消滅していく。この傾向はナイフ形石器の基本形にも大きな変化を与え、以前にもまして狭長な器形が量産されるようになった。この段階で前代未の多様な短小ナイフ形石器は著しく減少したであろう。さらにこれら一連の変化の最終的副産物として、狭長なナイフ形石器を素材としてノッチや鋸歯縁石器が製作されたこともB-3群の特徴である。B-1群に見られたスクレイバー類がB-3群には現われないことも上述の変化となんらかの関係があるものと考える。

2 古墳～歴史時代

(1) 土器の編年 (第67図)

A区における22基の遺構中、11基から年代の判別可能な土器が出土している。これらの土器は須恵器・土師器の杯形土器の型式的変化を跡づけることによって、次のような3時期に区分・編年することができる (第67図)。



第66図 石器類組成とその変遷

須惠器杯	須惠器長柄瓶	土師器杯	土師器小型盤	土師器大型盤	土師器萬杯
新 I 期 A - 7 号跡		A - 7 号跡			A - 7 号跡
			A - 7 号跡	A - 1 号跡	
			A - 3 号跡	A - 6 号跡	
			A - 1 号跡	A - 12 号跡	
			A - 12 号跡	A - 13 号跡	
			A - 7 号跡	A - 2 号跡	
			A - 12 号跡	A - 8 号跡	
			A - 2 号跡	A - 5 号跡	
			A - 10 号跡		
					A - 10 号跡

第67圖 No.2 遺跡出土土器編年圖

第Ⅰ期はA—7号跡出土土器群に代表される段階である。

A—7号跡出土土器のうち古墳時代に通有な合子形須恵器杯蓋、同時代の須恵器杯身を模倣した大形の土師器杯、土師器小型壺、同高杯がこの段階に含まれる。

1の須恵器杯蓋はその口径値から見て合子形タイプの最終段階に属することが明らかである。和泉陶邑ではこのタイプの杯は蓋身を逆転した形で、7世紀前半の第III型式第1段階まで焼成されている(註5)。また大和藤原京周辺では7世紀第2四半期の飛鳥II期まで残存することが判明している(註6)。これらのことからA—7号跡出土の須恵器杯蓋は遅くとも650年までには製作されていたとすることができる。

3の須恵器杯身模倣の大型土師器杯は立上がり部が直立して古式を留めるものの、その口径値はさきの須恵器杯蓋に対応すること、最終調整としてナデが施されること等新しい要素が目立つので須恵器杯蓋と同段階のものとすることができる。

4の土師器小型壺は次期のものに比べ口頸部のくびれがやや強く、「く」字状に屈曲し、底径も大きく安定感がある。

7の土師器高杯は充実した柱状部を形成せずに、脚部付根から大きく開く器形である。このタイプの高杯は本期末から次期にかけて製作されたものと思われる。

第Ⅱ期は土器を出土した全遺構が関係している。本集落跡が形成・廃絶された主要時期に相当する段階である。土師器杯は古相と新相に型式細分することができるが、諸他の土器は一括して取扱う。

土師器杯の古相は古墳時代の合子形須恵器杯を模倣した最後の段階である。A—7号跡2、A—12号跡2、A—13号跡1がこれに含まれる。A—12号跡2は口縁部が屈折して内傾ぎみに立上がる器形で、須恵器杯蓋を意識的に模倣した最終形態である。A—13号跡1は前者よりも体部の屈曲度が弱くなっている。A—7号跡2は立上がり部がつまみ出した程度に退化した須恵器杯身模倣の最終形態である。小破片で底部形態が判明しないが、ヘラ切り無調整の個体を模倣していれば平底となるはずである。この段階は前期よりも口径が小さくなり、最終調整にナデが多用される。

土師器杯の新相は

A類 土師器独自の器形

B類 平底の須恵器杯身を模倣した器形

の両類が併存した段階である。

A類の典型としてはA—2号跡1、A—12号跡1がある。器形は丸底を呈する楕形で、古相同様に小口径でナデが多用される。A—8号跡1はこれが大型化したもので、時期的にはやや後出的である。

B類にはA—5号跡1がある。平底の底部から湾曲しつつ外反ぎみに開く器形を呈する。最

終調整は体部では深いヘラケズリ、口縁部は横ナデである。陶邑における第III型式第2ないし3段階に相当する製品を模倣したものと思われる。

第II期に属するその他の土器として須恵器フラスコ形長頸瓶、土師器小型甕、同大型甕が見られる。

フラスコ形長頸瓶は主要生産地の東海地方では6世紀末から7世紀前半を中心に生産されたと見られているが(註7)、A-10号跡2は口頸部が全体の1/2近く伸び、口縁直下の頸部突帯も消失していることから、その最終段階の所産と見做すことができる。なおフラスコ形長頸瓶は船橋市本郷台遺跡第1号跡からも第II期古相の土師器杯と併出している(註8)。以上のことからA-10号跡2の製作された時期は古く見ても650年以前には遡らないであろう。

土師器小型甕はA-1号跡1、A-3号跡1、A-6号跡1、同2、A-9号跡1、A-12号跡3等が含まれる。器形的・調整的に多様だが、前期に比べ口頸部のくびれが弱い点、底部径が縮小すると思われる点が共通している。

土師器大型甕はA-1号跡2の1点のみである。胴部最大径は口頸部よりもやや下位にあり、口縁部先端はまだ水平化するに致らない。

第III期に属する土器はA-10号跡1の須恵器杯蓋1点のみである。偏平な宝珠状ツマミが付され、口縁部は既にカエリが消失し折曲口縁となっている。陶邑におけるこのタイプの初出は7世紀終末から8世紀初頭の第IV型式第1段階であり、藤原京周辺ではほぼ同時期の飛鳥IV期にカエリを伴う旧式の杯蓋と相半ばする割合で出土している。A-10号跡1はフラスコ形長頸瓶との共伴関係から見て、その出現期に製作された土器と考えることができ、7世紀終末の年代が与えられる。

以上各期の絶対年代については、須恵器製作年代の検討から第I期が7世紀中葉、第II期が7世紀後葉、第III期が7世紀終末を中心にして起きたと考えられる。

第II期土師器杯の新古二相細分は土器の製作時期に主眼を置いた型式論的把握であり、他遺跡では共伴する例も少なくない。比較的短期間に継起して製作された土器は、使用期間中に混在する場合が生じても不思議ではない。その土器が幾年間使用されるかは全く偶然に左右されている。同一型式と見做される土器でも、だから、使用開始直後に毀損して捨てられるものもあれば、運よく生き延びて次型式とともに出土するものもある。蛇足の嫌いもあるが、窯跡での編年はその型式が製作され続けた面期を示し、集落跡での編年はその型式が製作され、使用され続けた面期を表現している。製作期間であれば人間の意志がかなり介入してくるので、一度新型式が導入されれば比較的速やかに旧型式にとって換わる。しかしながら使用期間は人間の意志よりも偶然性が優先する。たとえ諸型式の製作時期が継起的に移行しても、その使用期間は「型式」のカテゴリではなく、個々の土器の運命に任された結果の産物である。したがって資料数に恵まれた遺構では、複数型式の混在率から单一型式出土遺構よりもいっそう厳密

な相対年代の比定が可能となるのである。

(2) 遺構の編年

前節での成果から土器を出土した遺構については次のように編年することができる。

第Ⅰ期 A-7号跡

第Ⅱ期 A-1・2・3・5・6・8・9・12・13号跡

第Ⅲ期 A-10号跡

ただし各期の中で建築・使用・廃絶が完了するわけではない。第Ⅰ期のA-1号跡は土器内容から見て、諸他の遺構よりも一足先に建築・使用されたことはまちがいないが、第Ⅱ期に属する土器を1点含んでいることから、A-1号跡の廃絶時点では既に第Ⅱ期の諸遺構が建築・使用されていたと思われる。また第Ⅲ期のA-10号跡は諸他の遺構の廃絶後にも使用され間もなく廃絶されたと見られるが、第Ⅱ期に属する土器を出土したことから、第Ⅱ期の諸遺構がまだ使用されている期間に建築・使用されたと思われる。したがってこれら諸遺構は時間的に密接な一体性をもっていることが明らかで、全遺構が第Ⅱ期のある時期には併存していた可能性もある。

住居跡の中ではA-4・11号跡に土器の出土がなく、時期が判明しないが、集落の大勢から判断して第Ⅱ期に属するものと考えてさしつかえないであろう。

次に土壤群の年代について述べてみたい。土壤群として取扱った遺構のうちA-20号跡は住居跡のA-10号跡に切られていたので、住居跡の年代よりも古いことは明らかである。遺構の集中地区から離れているA-22号跡は別として、他の土壤群についても集落跡より古く見てもさしつかえないであろう。というのもこれらの遺構の覆土中の底面付近からは鉄滓は検出されず、検出される場合にはA-14・18・19号跡のように覆土最上層から遺構確認面にかけての深度から発見されている。このことは集落が営まれて鍛冶工程から生じた鉄滓を投棄した時には、土壤群は既に埋没していたことを意味するものである。

以上の検討結果から集落跡と土壤群とは時期を異にし、直接には結びつかないことが明らかとなった。したがって集落跡の構成は住居跡11基（このうちA-4号跡は鍛冶工房跡の可能性がある）、鍛冶工房跡2基となる。

1基の住居に夫婦1組とその子供3人が居住するとすれば、この集落の総人口は60人程度、そのうち男子労働人口は、17～8人程度であったろう。

(3) 製鉄集落について

i) 製鉄集落の特異性

7世紀後半のある期間には本集落跡の11基の住居跡と2基の鍛冶工房跡は併存して活用され

ていたと思われる。住居の上部構造は片流れ式を主体としたため、その景観は低地に占拠し、寄棟方式を主体とした一般的堅穴集落とは趣を異にしていたであろう。すべての住居跡のカマドが壁隅に偏して造られているのも、上部構造との関係から理解すべきである。

さらに本集落跡の住居跡には一般的堅穴集落に通有な「単位集団」的結合が明瞭に把えることができず、私的な消費生活よりもむしろ、製鉄作業の能率を優先する配置となっていたことがうかがわれる。これらのことから本集落構成員は低地の一般的農耕集落の「単位集団」ないしその複合体とは出自を異にしていることが想定できる。これらの特異性に加えて、他の一般的稻作農耕民とは異なる作業に従事しているという事実は、現実・意識の両面においてかれら相互の团结力をいっそう強固なものとするのに役立ったであろう。

ii) 製鉄作業の復原

本集落はA-10号跡より砂鉄を出土したことから、製錬・鍛冶の一貫作業を行なっていたことが明らかである。製錬は砂鉄や鉄鉱石を製錬炉中で還元焼成して溶融させ、チタン等の不純物を鉄滓として除去して金属鉄を得る工程であり、鍛冶は製錬工程でできた鉄塊を鍛冶炉中で酸化焼成して脱炭とともに加熱して成形加工する工程である。鉄滓の化学分析成果によれば、鍛冶に含まれる2工程の成分比的識別が可能とされるが(註9)。分析を経ていない本遺跡の資料については不明という他はない。それゆえ製鉄の一貫作業といつても当地で製品化して低地の集落地域に運搬したのか、あるいは当地では鉄塊または鉄挺等の半製品までを担当し、製品化は他處で行なうという分業システムをとっていたかどうかについては明確な解答が得られない。

しかしながらもし当地で製品化段階まで行なわれていたとすれば、住居跡から検出された鉄器類はその質量ともに余りにみすぼらしいものではあるまいか。本集落跡出土鉄器は鉄環1(A-3号跡)、鉄鎌1(A-10号跡)、小刀片1(同)、鉄鎌片1(A-13号跡)のみである。もし製品まで生産していたとすれば、それらの一部は日常的用途に流用され、現状よりも多彩・多量の鉄器類の出土を見たであろう。当地の製鉄集落民は、それゆえ、半製品を生産・搬出し、最終工程は搬出先で行なわれたと考えるべきである。加工工程(いわゆる小鍛冶)は原理的にはここで行なわれた中間工程(いわゆる大鍛冶)の延長線上に把えることが可能であるが、その作業内容は製品の種類に応じた工芸的熟練を要し、それ自体独自に発展し得る性格をもっている。かれらが加工技能を持っていなかったといえば言い過ぎになるが、製錬-中間工程と加工工程の間にはそれくらい深い溝が存在したのではないだろうか。

次に集落内分業についてまとめてみよう。本遺跡で行なわれた製鉄関連作業は製錬原料たる砂鉄の採取・炭材の伐採・炭窯および製錬炉体粘土の採掘・炭窯の構築・炭焼・製錬炉の構築・製錬・製錬鉄塊の選別・鍛冶等に及んでいる。製錬炉と炭窯は本遺跡の発掘調査区域からは検出されなかつたが、遺跡周辺の緩斜面に構築されていたものと思われる。前述のごとく本集落

跡の男子労働人口は17~8人と想定されるが、かれらが上記諸作業を分担して行なっていたかどうかを示す明確な手掛りは今回の調査では得られなかった。

しかし集落を構成する住居跡と鍛冶工房跡の配置を見ると、北側では2基の鍛冶工房跡を挟んでA-1~5号跡が東北東~西南西の方向に、また南側ではA-6~11号跡が北東~南北の方向に各々直線的に並んでいるように見える。前者を北群、後者を南群と呼称すれば、北群は鍛冶部門に専業した可能性が高いのである。その理由は本集落跡のすべての鍛冶工房跡（といっても2基はあるが）が北群に取込まれていること、本文記載のようにA-4号跡は鍛冶工房としても使用された可能性があること、A-3号跡の摺鉢状ピットは鍛冶炉の可能性があること等である。北群が鍛冶部門の専業集団であるとすれば、南群は当然のことながら製錬部門を専業的に受持っていたであろう。南群のA-10号跡から出土した砂鉄はそれを傍証するよう思われる。以上のように南群が製錬部門を、北群が鍛冶部門を各々専業的に担当していたとすれば、製錬部門の労働人口は10人程度、鍛冶部門のそれは7~8人であったろう。

iii) 製鉄集落民の生業と生活

この問題は個別的な資料から解明の糸口を見つけ出すことは極めて困難であるが、ここでは本遺跡の製鉄集落民の農耕との関係と居住期間について展望を与えて問題点を整理しておきたい。まず第1に、本集落跡は半世紀近くにわたり継続的に営まれてきたのであるが、その間年間を通して恒常に集落民が居住・生活していたのか、それとも1年間の一定期間を限って、即ち季節的に人々がこの地に仮住して製鉄業に従事したのか。後者であるならば谷間から吹き上げる季節風が強まって製錬炉の通風条件が良好になる冬期が選ばれたであろう。そして第2に、かれらは当地で自活するに足る規模の農耕を営んでいたかどうか。当地での集落生活が季節的仮住に過ぎないものであれば、その期間は前述のごとく冬期に限られるから、農耕を営む前提条件が欠けてしまうので、この問題は当地での集落生活が年間を通して恒常に営まれた場合に限定することができる。

以上の居住期間・製鉄・農耕の諸関係をまとめると第2表のようになる。本遺跡の製鉄集落民の生活形態は表中のいずれかのタイプに帰結するものと考えられる。この3つの可能性をさらに限定するためには当地における農耕の適否、および四季を通じた製錬炉の操業の可否についての明確な見通しをもたなければならぬ。A₁は当地において自給可能であり、A₂は食糧を支給されねば生存できず、Bは春から秋にかけて低地で農耕を営んだ場合は自給可能、製鉄関連作業に従事している場合は自給不能である。いうまでもなく製鉄集落民の自給率の度合いは第3者にたいする依存率の度合いと表裏関係にあり、その依存のあり方は近世的でも中世的でもなく、古代的でしかあり得なかつたはずである。

最後に集落の廃絶理由にふれて結びとしたい。本集落跡は比較的短期間に形成・廃絶された小規模集落であるが、集落の規模や存続期間のこのような傾向は周辺の他の製鉄関連集落にも

タイプ	居住形態	生活サイクル	食糧調達
A ₁	常住	春～秋農耕、冬製鉄	自給
A ₂	常住	年間を通して製鉄	支給
B	仮住	春～秋下山、冬製鉄	不明

第2表 No.2 遺跡製鉄集落民の生活形態の可能性

あてはまるようである。おそらく半世紀近くに操業した結果、周辺の砂鉄や樹林等の原料資源が枯渇したために移動を余儀なくされたのであろう。かれら製鉄集落民は資源に恵まれたこの水源地域を世代を超えて放浪したのではないだろうか。

註

- 註1 高橋博文他「藤沢遺跡」「千葉市奈木台・藤沢・中芝・清水作遺跡」財団法人千葉県文化財センター(1979)
- 註2 小林清隆「成田市三里塚馬場遺跡」財団法人千葉県文化財センター(1982)
- 註3 田中豪他「水砂遺跡」「常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書I」財団法人千葉県文化財センター(1982)
- 註4 清藤一順他「復山谷遺跡」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VI」財団法人千葉県文化財センター(1978)
- 註5 田辺昭二「陶邑古窯跡群I」平安学園(1966)
中村浩他「陶邑III」財団法人大阪文化財センター(1978)
- 註6 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告書」奈良国立文化財研究所(1978)
- 註7 「鬼墳古墳」赤羽根町教育委員会(1978)
- 註8 「本郷台」本郷台遺跡調査団(1979)
- 註9 大澤正己「千葉県下出土の製鉄関係遺物の分析調査」「研究紀要7」財団法人千葉県文化財センター(1982)

第III篇 No.10遺跡



第68図 遺跡付近の地形と発掘調査区 (1/5000)

第1章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と環境（第68図）

No.10遺跡は、山武郡芝山町香山新田字新山106他に所在する。遺跡東側は谷津の谷頭部にあたり、緩斜面となっている。この谷津は周囲の谷津と合わさり高谷川となり下流で栗山川に注ぎ九十九里浜で太平洋に繋っている。また、ここから2km程北へ行くと現在は利根川となっている旧鬼怒川谷（霞ヶ浦低地帯）に注ぐ谷津が入っており、この辺が分水界を成していることがわかる。

付近の遺跡としては、南西にNo.7遺跡、北西にNo.14遺跡、No.62遺跡、北にNo.16遺跡が各々約500m程の距離に所在する。

なお、本来のNo.10遺跡は、調査区外の東側や南東側の谷津に接する舌状部をも含むもので、かえって地形的にはこれらの方が良好であり、遺跡の主体をなす可能性が強いと思われる。

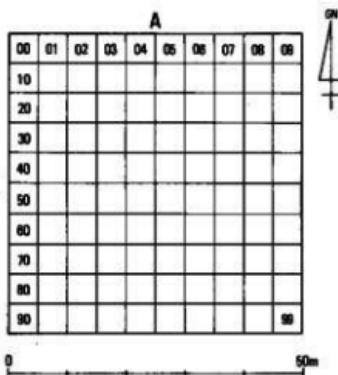
本報告書は、No.10遺跡の西側約半分の調査結果であって、遺跡の全容を知るには東側及び南東側の調査を待たねばならない。

第2節 調査の経過と方法

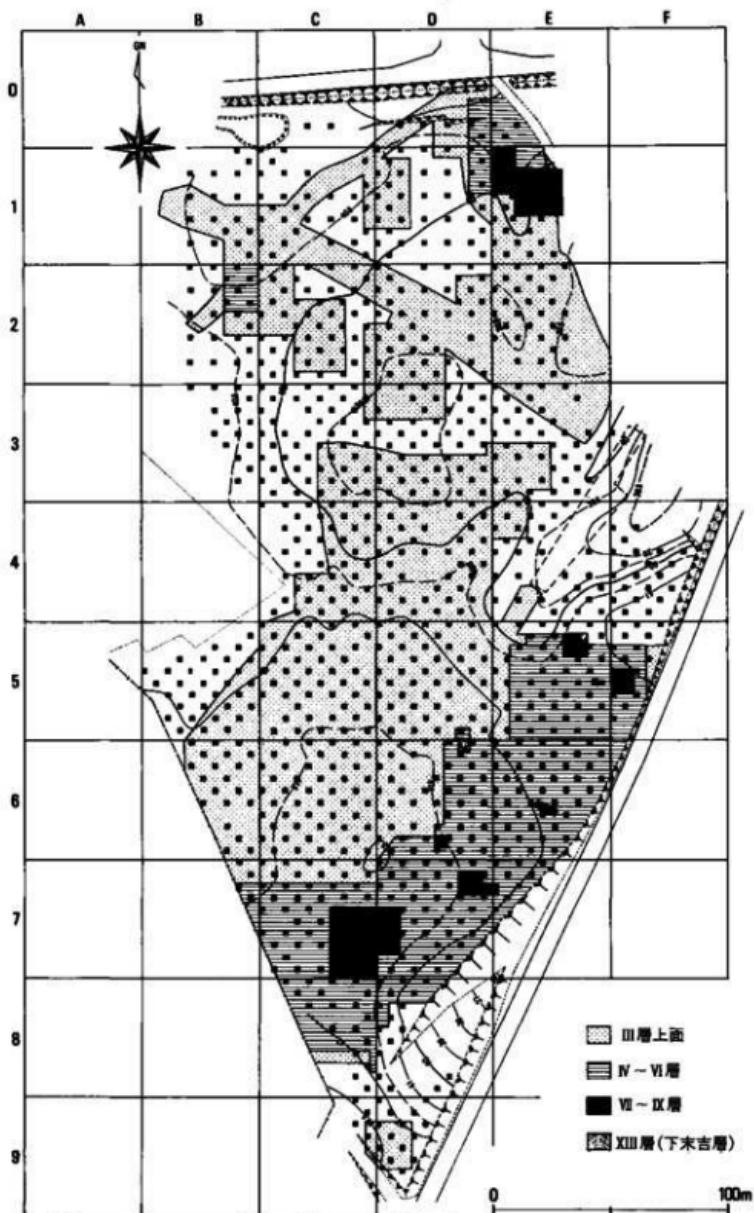
発掘調査は、確認調査と本調査に分けられ、確認調査は、65,000m²を対象にその8%約5,000m²を調査することにし、昭和54年7月6日から7月31日まで約1ヶ月間行なった。

調査は、発掘調査区全域に公共座標に基づき50m方眼を設定して大グリッドとし、さらにこの大グリッドを縦横各10個計100個の小グリッドに分け、1小グリッドは5×5mとした（第69図）。そして、基本的にはこの小グリッドの北西隅に2×2mの確認調査用グリッドを市松模様に入れ、武藏野ローム層直上まで掘り下げた（第70図）。

その結果、本調査面積は、縄文時代以後の構造調査を中心とした上層の調査範囲が41,500m²、下層の先土器時代の調査範囲が15,550m²、計57,050m²となり、昭和54年9月18日から昭和55



第69図 小グリッド分割図（1/1000）



第70図 発掘調査深度図 (1/2500)



第71図 遺構分布図 (1/2500)

年3月31日まで実施した。

なお、確認調査の結果縄文時代の遺物が少なかったとの、広範囲に分布する遺構調査の効率を考え、I層はもちろんII層の大部分もバックホールにより除去した。

第3節 遺跡の概要（第71図）

先土器時代としては、VII層主体石器群1、IV～VI層主体石器群1、III層主体石器群18の計20ブロックの石器群を検出した。なお、III層主体石器群には小規模ながら礫群が6ブロックにおいて併出した。また、炭化物片の集中を5個所検出した。

縄文時代としては、陥し穴状土壙66基、その他の土壙3基を検出した他、土器・石器がややまとまって出土した地点が1個所ある。特に多数の陥し穴状土壙の検出は注目される。

その他の時代としては、7条の溝状遺構と若干の土師器・古鉄等が出土したにとどまった。

このように、本遺跡は、先土器時代から縄文時代が主体を占める三里塚地区の諸遺跡の中でも、その典型的な内容をもつものである。

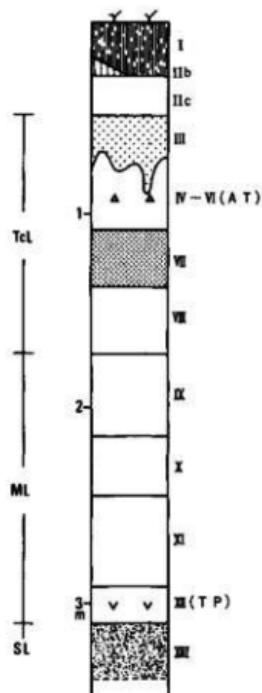
第4節 遺跡の層位

No.10遺跡は、地形面としては下絶上位面に位置して、上部から表土黒色腐植土層、立川ローム層、武藏野ローム層、常緑粘土層（下末吉ローム層上半部）、成田層の順で堆積している（第72・74図）。

第I層 黒色～黒褐色土層 表土で耕作土などの擾乱層。厚さ約20～30cm。

第II b層 暗黄褐色土層 いわゆる「新期テフラ」と呼ばれている層で、本遺跡ではそのほとんどが第I層に取り込まれていると考えられ、ごく稀に斜面などに存在した。この層は、縄文時代後期～晩期に降下した「新期富士降下火山灰層」と考えられ、この時期に富士山のテフラを噴出する活動が活発であったようである（町田1964）。三里塚地域の遺存の良いところで観察すると厚さ約15cm程である。

第II c層 暗褐色土層 ほぼ遺跡全域で確認され、縄文時代の主たる遺物包含層で、厚さ約20cm。この層はいわゆる「富士黒土層」に相当すると考えられ、火山活動の極めて静穏な時期に降下した細粒火山灰を母材にして生成した土壙と思われる（町田1964）。下部のソフトローム層との境は漸移的である。この辺ではソフトローム層の堆積の終了時期が給源火山の近くよりもいくらか早くかつその後の火山灰の供給も少なかったと推定されるので、II c層がソフトローム層を取り込んでいると考えられる。このことは細石刃及び細石刃核などがIII層よりもかえってII c層から多く発見されることからも窺える。



第III層 黄褐色ローム層。立川ローム層最上部の軟質ローム層でいわゆるソフトローム層である。下部のハードローム層をかなり取り込んでいると思われ、遺跡によっては上下の2つの層に分けられるところもある。厚さ約25~30cm。

第IV~VI層 明黄褐ローム層。上部のソフトローム層と下部の暗褐帯との間層で、厚さ約30cmで硬い。この辺ではAT(姶良丹沢火山灰)層が目立つため、それを鍵層として識別される層で、ATは遺跡平坦部では厚さ約20cmの幅をもって上下に拡散しているが、斜面では場所により厚さ約5cm程のブロック状あるいは帯状に堆積している。本遺跡ではIV~V層(第1暗色帯以上のハードローム層)の大半がIII層のソフトローム層に取り込まれていると考えられる。

第VII層 暗褐色ローム層。立川ローム層第II暗色帯であるが、あまり濃いものではない。赤褐色スコリアを多量に含み硬い。厚さ約30cm。

第VIII層 褐色ローム層。立川ローム層最下部層で赤褐色スコリアを少し含む。厚さ約35cmで上層より軟質、下部はやや青味を帯びる。

第IX層 褐色ローム層。武藏野ローム層最上部層。クラックが発達しやや軟質で、少し水を被った感じである。厚さ約40cm。

第X層 褐色ローム層。IX層より赤味を帯びて硬質である。厚さ約30cm。

第XI層 褐色ローム層。IX層と同様青味が強く、下部へ行く程粘質が強まる。厚さ約45cm。

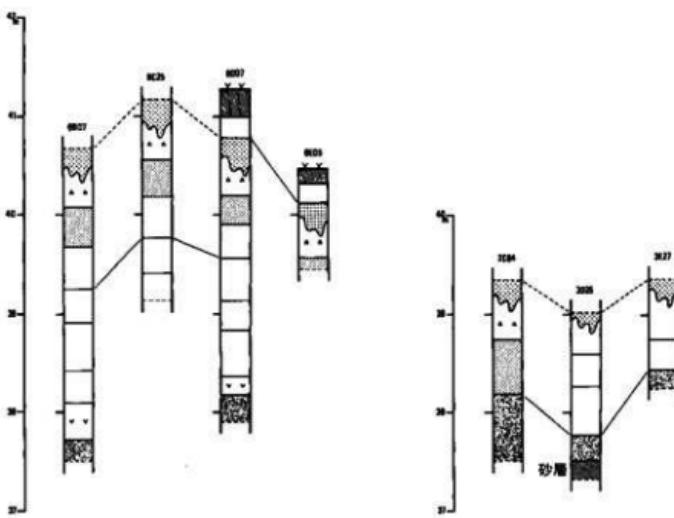
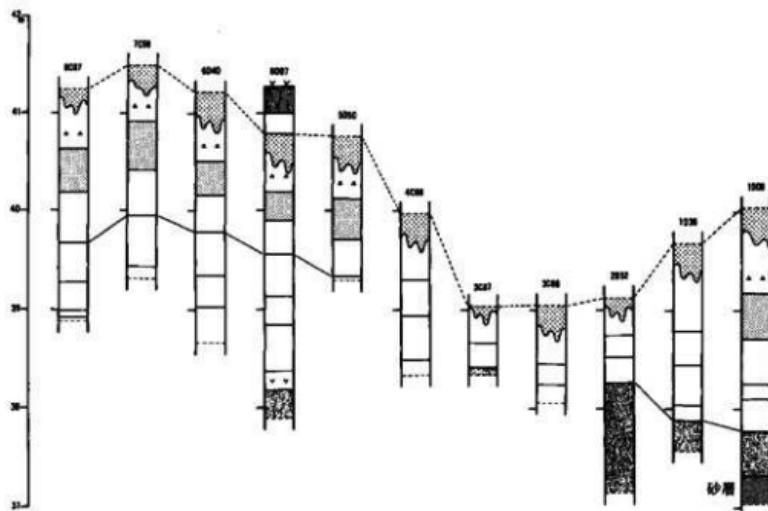
第XII層 黄橙色輕石層。東京パミスで厚さ約15~20cm。台地平坦部よりも斜面部の方が一般に識別が容易である。

第XIII層 白色粘土層。常総粘土層(下末吉ローム層上部相当層)と呼ばれるもので下部へ行く程砂質を帯びる。厚さは地形によりかなり異なるが、約50cm~1m位である。この下には海成層の成田層が厚く堆積している。

遺跡斜面部の標高40m以下ではVII層以下に変化がみられ、立川ローム層下部を欠いたり、武藏野ローム層も一部しかみられないところがある。しかし、白色粘土層はあまり地形に関係なく標高38m前後が上面を成す(第73・74図)。



第73図 土層柱状図地点 (1/2500)



第74図 遺跡土層断面図 (1/60)

第2章 遺構と遺物

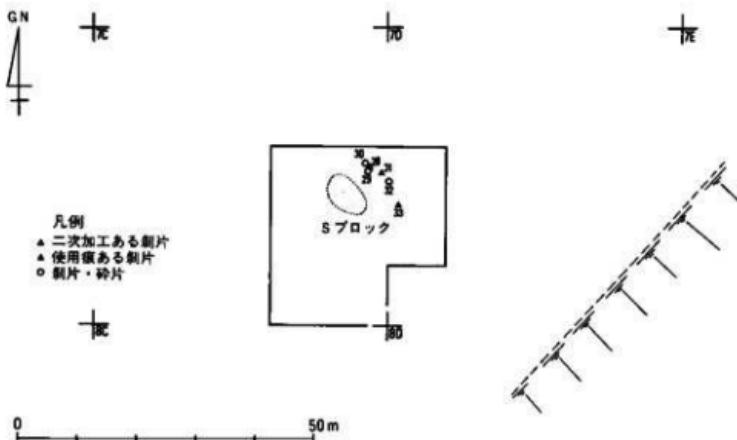
第1節 先土器時代

1 VII層主体石器群

遺跡南端に近い7C58グリッド付近からVII層を主体とする石器群が検出された。この辺は谷頭に近いところではあるが、緩斜面から少し内側のためほぼ平坦な地形を呈している。

石器群は石器・剥片類のみで構成され、ブロック1個所（Sブロック）とその周辺から計33点出土した（第75・76図、第3表）

なお、層位的に近いと思われる炭化物片の集中が2個所検出された（第117・118図）。



第75図 VII層主体石器群分布図 (1/1000)

(1) Sブロック (第77・78図、図版21・28)

出土状況 7C58グリッドを主体に径約5m程の広がりをもち、あまりまとまりを示さない。出土層位はVII層上部～中部である。

出土遺物 出土した石器群は、彫器1点、ハンマーストーン1点、二次加工ある剝片3点、使用痕ある剝片2点、石核3点、その他剝片・碎片16点、計26点である。

24は小形のやや不定形な剝片を素材とした彫器である。背面右方向から1条、さらにそれと

は直角に近く末端から基部方向へ1条の彫刀面を作出している。彫刀面近くの主要剥離面縁辺には使用痕ともみられる微細な剥離痕がある。

14は小形の縦長の二次加工ある剝片である。主要剥離面右側縁基部及び左側縁中程には微細な加工痕があり、特に末端部の急斜な加工痕及び入念な頭部調整などはナイフ形石器とも考えられるものである。

13・21は使用痕ある剝片で、13は基部と末端を欠損しているが、鋭い二側縁を持つ先細りの良好な石刃状剝片であると考えられ、両側縁には微細な使用痕が顕著である。21はやや縦長の剝片で末端部を欠損している。

18・19・26はいずれも剝片であるが、19は頭部調整が施されている石刃状剝片で、末端を欠損しているうえ風化が進んでおり、二次加工の有無は明らかではないが、形態的・技法的に19と似ておりナイフ形石器の可能性がある。

18は下半を欠くため明確ではないが縦長の剝片と考えられ、平坦な打面を広く残している。14と同一個体である。

26はやや横広の剝片で21と同一個体である。

22は平たい円盤の角張ったところに打痕を残すハンマーストーンである。

この他小形の石核が3点出土しているが、いずれも既設の剥離面を打面として不定形の小剝片を剥取している。

(2) ブロック外出土石器（第78図、図版28）

ブロック外からは7点出土し、1E20グリッド出土のピエスエスキ-21点を除き全てSブロック周辺からの出土である。

28・31はいずれも二次加工と使用痕の両方が認められる縦長剝片である。28は背面に不規則な剥離面がみられ、厚さも不均衡で石核調整剝片ではないかと思われる。左右両側縁には微細な使用痕がみられ、末端には抉入状のやや急斜な加工が施されスクレイパーとも考えられる。

31は背面右側縁下半に使用痕がみられ、末端には粗い加工が施されている。

33は末端にわずかに使用痕が認められる不定形の小剝片である。

(3) VII層主体石器群のまとめ

VII層を主体とした石器群はSブロック及びその周辺の他には1点の出土をみたのみであり、また、このブロック内外の石器群はその出土状況などから同一のグループと考えられるので、これについて述べてまとめとしたい。

組成及び石材 組成としては、彫器1点、ハンマーストーン1点、二次加工と使用痕の両方がある剝片2点、二次加工のみある剝片3点、使用痕のみある剝片3点、石核3点、その他剝

片・碎片19点、計32点であり、該期の組成としてはナイフ形石器とスクレイパーが欠如することになる。しかし、14や19はナイフ形石器の可能性をもち、28もスクレイパーの可能性があり、こうしてみると一応の器種をもった石器群とも考えられる。

石材は、流紋岩20点、頁岩11点（硬質頁岩7点、珪質頁岩4点）、デイサイト1点で、デイサイトのハンマーストーン1点を除けば流紋岩と頁岩の2種から構成されていることになる。

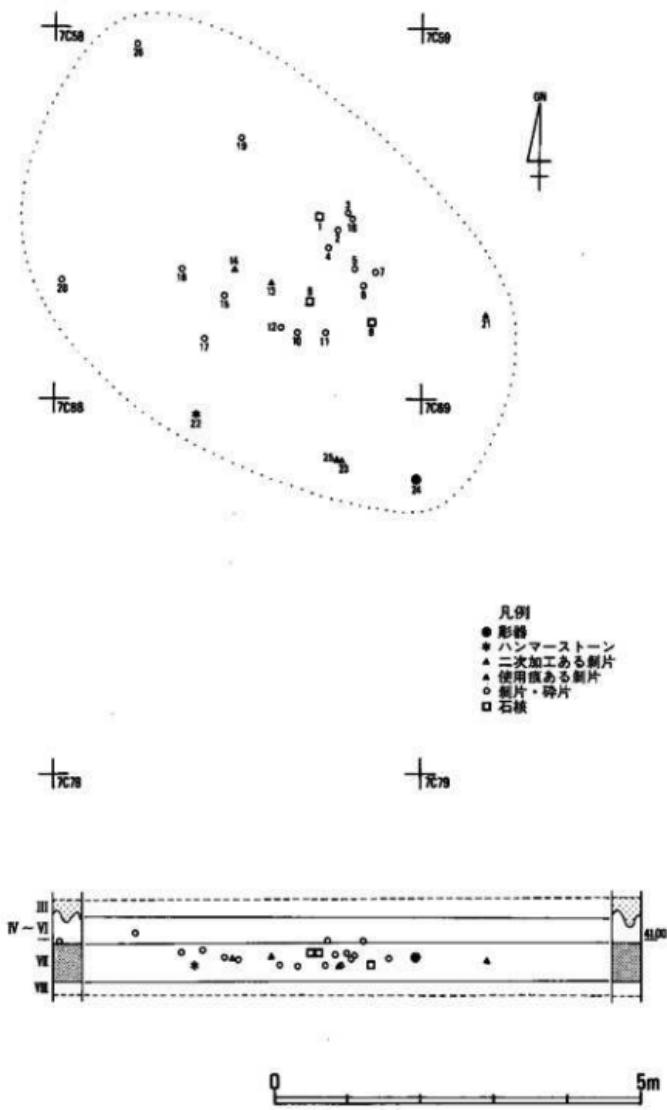
剥片剝離技術 剥片には縦長の石刃状剥片とやや横広の不定形ともいえる剥片の2種があり、どちらも打面はほとんど調整されないようである。しかし、石刃状剥片には頭部調整が施され、ナイフ形石器の素材として用いられていることが推定される。また、やや横広の不定形の剥片を剥取したと思われる石核が出土しており、一定の打面をもたず、既設の剥離面を打面として剥片剝離を繰り返している。

調整加工技術 彫器を除けば明確なツールがみられず、調整加工技術を窺うのは難しいが、出土資料からみると、あまり素材の形状を変えないものと考えられ、目的的剥片の剥取前に施される石核調整がより重要な働きをしており、言いかえれば、二次加工よりも剥片剝離段階の占める割合が相対的に高かったものと考える。

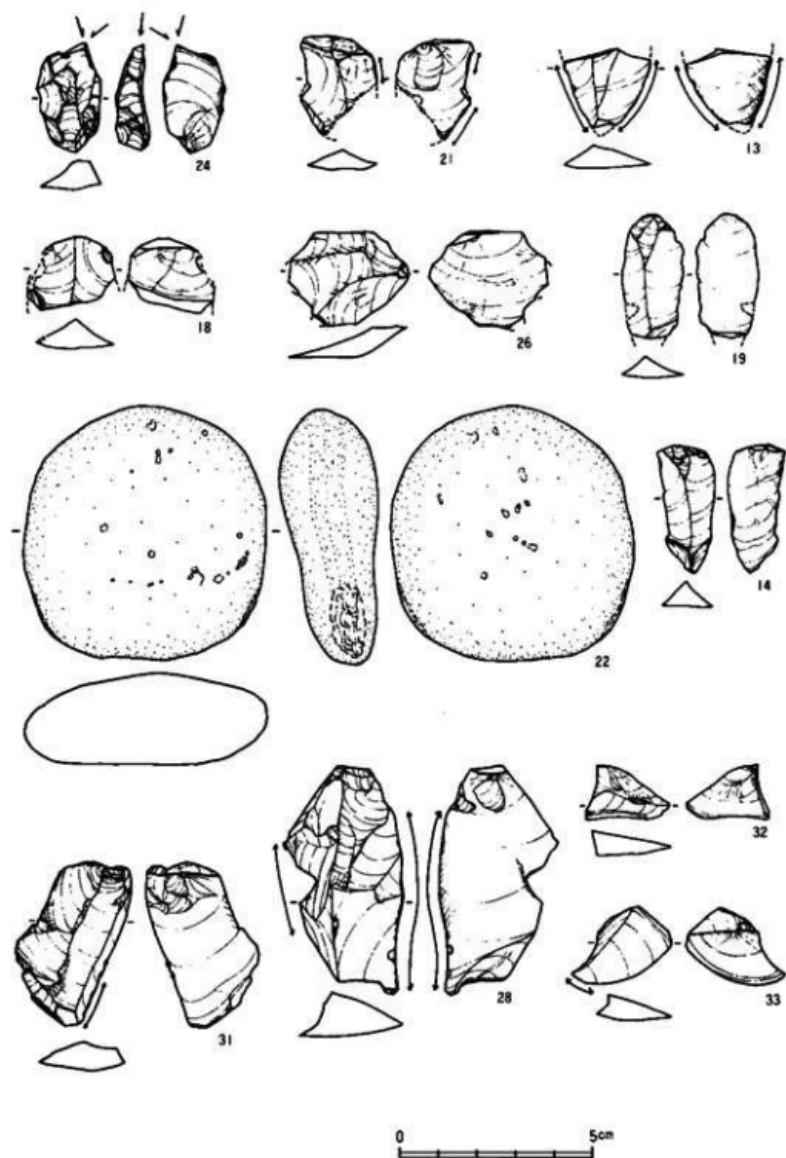
編年的位置 空港No.7遺跡A地点第7石器群（西川・西口他1984）、権現後遺跡第5文化層出土石器群（橋本他1984）などが近いと思われ、武藏野第I C期前半、相模野第II期前半に位置付けられる。



第76図 VII層主体石器群石材別重量比



第77図 Sブロック遺物出土状況図 (1/800)



第78図 VII層主体石器群実測図 (2/3)

第3表 VII層主体石器群一覧表

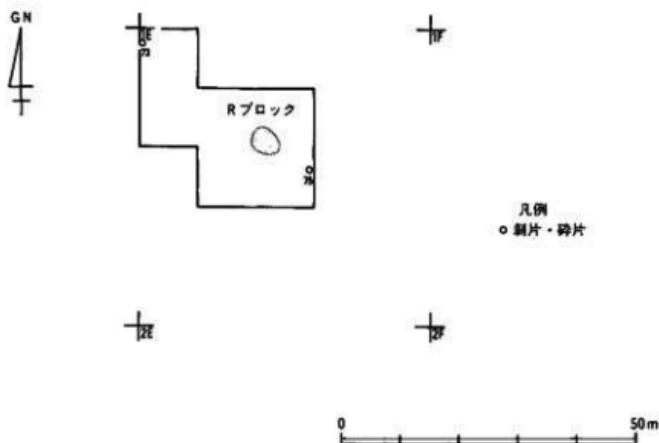
番号	プロック	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	打角(剝離角)	登録番号
1	S	石核	流紋岩	2.4	1.8	3.0	12.9		7C58-8
2	S	碎片	流紋岩	0.7	0.8	0.2	0.1		7C58-9
3	S	碎片	流紋岩	0.9	0.7	0.2	0.1		7C58-10
4	S	剥片	流紋岩	2.1	1.3	0.3	0.8	110°	7C58-11
5	S	碎片	流紋岩	1.4	1.2	0.5	0.6		7C58-12
6	S	剥片	流紋岩	2.2	1.8	0.8	2.0	110°	7C58-13
7	S	碎片	流紋岩	0.8	0.8	0.1	0.06		7C58-14
8	S	石核	流紋岩	2.0	2.6	3.6	12.4		7C58-15
9	S	石核	珪質頁岩	2.0	2.0	2.6	4.2		7C58-16
10	S	碎片	硬質頁岩	1.7	1.0	0.5	0.8		7C58-17
11	S	剥片	珪質頁岩	2.2	1.1	0.6	0.9	105°	7C58-18
12	S	剥片	珪質頁岩	1.2	1.4	0.5	0.7	100°	7C58-19
13	S	使用痕ある剥片	流紋岩	(2.1)	(2.3)	(0.7)	2.2		7C58-20
14	S	二次加工ある剥片	硬質頁岩	3.3	1.4	0.8	2.6		7C58-21
15	S	碎片	硬質頁岩	1.2	0.6	0.3	0.2		7C58-22
16	S	剥片	流紋岩	(2.0)	(1.6)	(0.3)	0.7	105°	7C58-23
17	S	碎片	硬質頁岩	1.0	0.6	0.2	0.1		7C58-29
18	S	剥片	硬質頁岩	(2.0)	(2.3)	(1.0)	3.0	115°	7C58-35
19	S	剥片	流紋岩	(3.2)	1.6	0.6	2.0	110°	7C58-6
20	S	碎片	流紋岩	1.0	0.9	0.2	0.2		7C58-26
21	S	使用痕ある剥片	流紋岩	(2.6)	(2.1)	(0.7)	2.2	115°	7C59-5
22	S	ハンマーストーン	デイサイト	6.6	6.1	2.4	136.9		7C68-4
23	S	二次加工ある剥片	流紋岩	1.3	1.5	0.4	0.4	95°	7C68-31
24	S	彫器	流紋岩	2.8	1.7	0.9	3.6		7C68-32
25	S	二次加工ある剥片	流紋岩	0.8	1.9	0.6	0.6		7C68-36
26	S	剥片	流紋岩	(2.7)	(3.0)	0.7	3.8	125°	7C58-4
27	プロツ ク外	ビエスエスキーユ	珪質頁岩	2.3	1.6	0.6	2.2		1E20-4
28	プロツ ク外	二次加工及び使用痕ある 剥片	珪質頁岩	5.8	2.3	2.0	6.2		7C49-4
29	プロツ ク外	碎片	硬質頁岩	1.1	0.7	0.6	0.3		7C49-5
30	プロツ ク外	剥片	流紋岩	(1.4)	(1.4)	(0.4)	0.5	120°	7C49-6
31	プロツ ク外	二次加工及び使用痕ある 剥片	流紋岩	(4.2)	(3.0)	(0.9)	7.5	110°	7C49-10
32	プロツ ク外	剥片	硬質頁岩	1.4	2.2	0.8	1.6		7D50-5
33	プロツ ク外	使用痕ある剥片	流紋岩	2.2	2.7	0.7	2.1	160°	7D50-7

2 IV～VI層主体石器群

遺跡の北東隅に当る1E34グリッドを中心にIV～VI層を主体とする石器群が検出された。この辺も谷頭部に当り、北西から南東へ緩やかに傾斜している。

石器群は石器・剥片類のみで構成され、ブロック1個所（Rブロック）とその近傍から計43点出土した（第79・80図、第4表）。

また、層位的には若干上部になると思われるが、やはりIV～VI層を主体とする炭化物片の集中が1ヶ所検出された（第116図）。



第79図 IV～VI層主体石器群分布図 (1/1000)

(1) Rブロック (第81・82図、図版21・29)

出土状況 1E34グリッドを主体に径4～5m程の広がりをもつが、中でも1E44グリッド杭付近に大部分が集中する。出土層位はIV～VI層下部のものが多く、ほぼVI層の石器群といえるであろう。

出土遺物 出土した石器群は、彫器1点、二次加工と使用痕の両方がある剥片1点、二次加工のみある剥片2点、使用痕のみある剥片2点、その他剥片・碎片33点、計39点である。

71は彫器である。背面左上方からの剥離の後、右上方から1条の彫刀面が作出され、さらに右方向から1条の浅い彫刀面を作出している。素材の形状ははっきりしないが、末端が部厚いやや大きめの剥片が使用されているようである。彫刀面近くには小剥離が施されている。

72は打面を除く全周に二次加工及び使用痕がみられる縦長剝片である。打面は若干の調整がされていると思われる、剥離面の交点を打点としている。

70はねじれたやや縦長の剝片で、末端に若干の二次加工が施されている。

62は背面左下半の側縁に使用痕のある剝片である。

43・52・65はいずれも剝片であるが、43は石核調整剝片と考えられ、部厚なもので背面下部には躁面を大きく残している。52・65は共に剥離面の交点を打点としており、65には入念な頭部調整が施されている。

(2) ブロック外出土石器（第82図、図版29）

ブロック外からは4点出土し、76以外はRブロック近辺からの出土である。

74は二次加工ある剝片であるが、背面上部には大きな剥離が施され、背面右側の欠損個所の断面にも小剥離が施されている。

73はやや横広、76は横長の剝片である。

この他打面再生剝片が1点出土しているが、それには2個所に打面が作られており、打面が一定したものでないことを窺わせる。

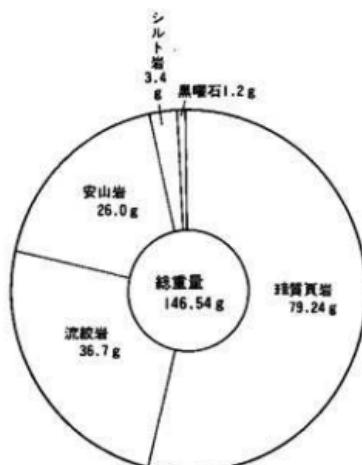
(3) IV～VI層主体石器群のまとめ

組成及び石材 石器組成は彫器1点、二次加工と使用痕の両方がある剝片1点、二次加工のみある剝片3点、使用痕のみある剝片2点、打面再生剝片1点、その他剝片・碎片35点、計43点であり、彫器の他は明確なツールが見当らず、剝片に二次加工あるいは使用痕のみられるものが目付く。

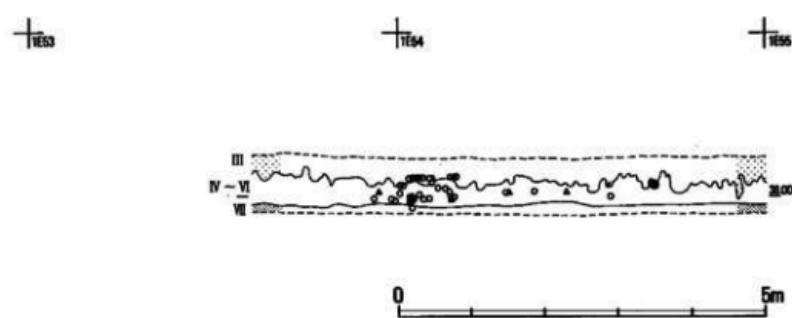
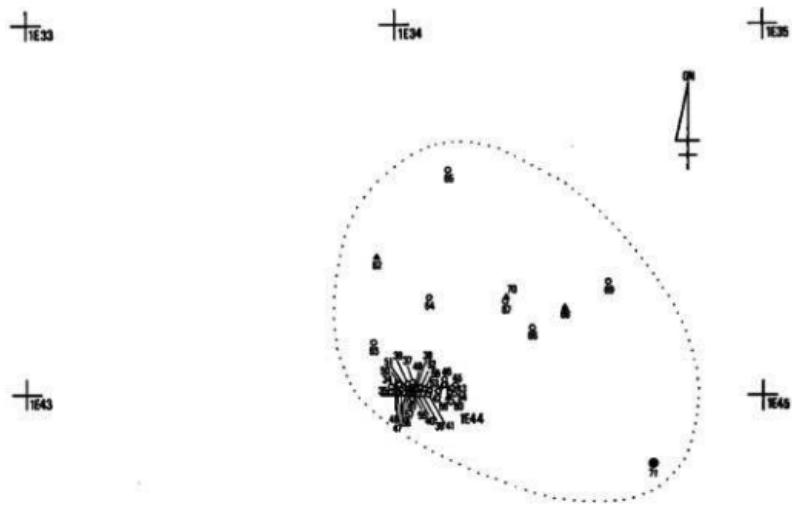
石材は、珪質頁岩が多用されていることに特徴がある。

剝片剥離技術 打面調整は少し施され、その際の剥離面の稜を打点として剝片が剥取されていると考えられるが、剝片の形状には縦長と横広の2種が認められる。ただこれらの剝片とツールとの関係は明確なツールが彫器のみのため明らかではない。

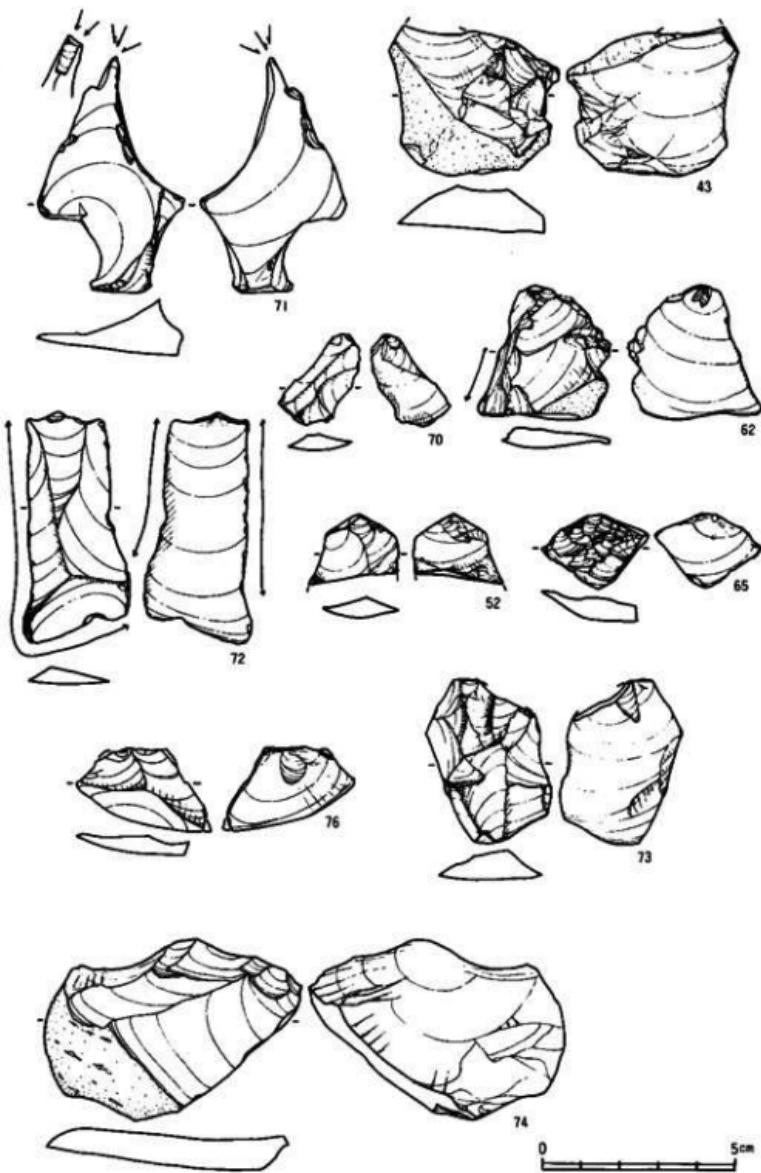
調整加工技術 これも彫器以外に明確なツールを欠く状況のため判然としないが、二次加工ある剝片及び使用痕ある剝片の比重が高い石器群であることを考えると、素材となる剝片の



第80図 IV～VI層主体石器群石材別重量比



第81図 R ブロック遺物出土状況図 (1/80)



第82図 IV～VI層主体石器群実測図 (2/3)

第4表 IV~VI層主体石器群一覧表

番号	プロック	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	打角(側面角)	登録番号
34	R	碎	片珪質頁岩	0.9	1.2	0.2	0.1		1E33-4
35	R	碎	片珪質頁岩	(0.3)	(0.7)	(0.2)	0.02		1E33-5
36	R	剥	片珪質頁岩	(1.4)	(1.8)	(0.5)	0.8	100°	1E34-4
37	R	碎	片珪質頁岩	1.3	0.4	0.3	0.04		1E34-5
38	R	剥	片珪質頁岩	(1.0)	(1.0)	(0.4)	0.2	110°	1E34-6
39	R	碎	片珪質頁岩	(0.7)	(1.1)	(0.3)	0.15		1E34-7
40	R	碎	片珪質頁岩	0.9	0.8	0.2	0.1		1E34-8
41	R	剥	片珪質頁岩	(0.9)	(1.8)	(0.5)	0.6		1E34-9
42	R	剥	片珪質頁岩	2.5	1.5	0.3	0.6		1E34-10
43	R	剥	片珪質頁岩	(3.9)	(4.3)	(1.4)	24.7		1E34-11
44	R	剥	片珪質頁岩	(1.6)	(1.8)	(0.3)	0.5	120°	1E34-12
45	R	剥	片珪質頁岩	(1.4)	(1.6)	(0.4)	0.5	110°	1E34-13
46	R	剥	片珪質頁岩	(1.6)	(2.2)	(0.7)	1.3	130°	1E34-14
47	R	剥	片珪質頁岩	(0.9)	(1.2)	(0.3)	0.3	95°	1E34-21
48	R	剥	片珪質頁岩	0.9	1.6	0.1	0.1		1E34-22
49	R	剥	片珪質頁岩	(1.1)	(1.4)	(0.2)	0.15		1E34-23
50	R	碎	片珪質頁岩	(0.4)	(0.7)	(0.1)	0.01		1E34-24
51	R	碎	片珪質頁岩	(0.5)	(0.5)	(0.1)	0.01		1E34-25
52	R	剥	片珪質頁岩	(2.1)	(2.1)	(0.7)	2.0	110°	1E34-26
53	R	碎	片珪質頁岩	0.5	1.0	0.2	0.05		1E34-27
54	R	碎	片珪質頁岩	(0.3)	(0.8)	(0.1)	0.02		1E34-28
55	R	剥	片珪質頁岩	(0.8)	(1.6)	(0.3)	0.2		1E34-29
56	R	碎	片珪質頁岩	0.9	1.2	0.3	0.2		1E34-30
57	R	碎	片珪質頁岩	0.5	0.9	0.1	0.03		1E34-31
58	R	剥	片珪質頁岩	(1.1)	(2.5)	(0.3)	0.7		1E34-32
59	R	使用痕ある剥	片珪質頁岩	1.7	1.7	0.5	0.8	115°	1E44-4
60	R	剥	片珪質頁岩	(0.9)	(1.3)	(0.3)	0.3	110°	1E44-6
61	R	碎	片珪質頁岩	0.6	0.9	0.2	0.06		1E44-7
62	R	使用痕ある剥	片珪質頁岩	3.5	3.7	0.5	5.4	90°	1E33-6
63	R	剥	片珪質頁岩	1.0	1.5	0.3	0.4	105°	1E33-7
64	R	碎	片珪質頁岩	1.0	0.9	0.2	0.2		1E34-15
65	R	剥	片珪質頁岩	1.9	2.8	0.6	2.3	100°	1E34-16
66	R	剥	片珪質頁岩	(3.7)	2.0	0.9	5.5		1E34-17
67	R	碎	片珪質頁岩	0.8	1.4	0.3	0.2		1E34-18
68	R	二次加工ある剥	片珪質頁岩	(3.1)	5.0	2.2	21.0		1E34-19
69	R	剥	片珪質頁岩	(1.8)	(3.1)	(0.4)	1.9		1E34-20
70	R	二次加工ある剥	黑曜石	2.5	1.4	0.4	1.2	100°	1E34-33
71	R	彫	器流紋岩	6.2	3.8	1.6	17.1		1E44-5
72	R	二次加工及び使用痕ある	珪質頁岩	5.8	2.8	0.6	7.8	110°	1E44-8
73	プロツ	剥	片流紋岩	4.1	3.3	0.8	8.4	115°	1E00-4
74	プロツ	剥	片安山岩	(4.5)	(6.6)	(0.9)	26.0		1E34-2
75	プロツ	打面再生剥	片流紋岩	3.7	2.9	1.2	11.2		1E45-4
76	プロツ	剥	片シルト岩	2.0	3.5	0.5	3.4	120°	2D60-4

形状をあまり変更しないものと思われる。

縦年の位置 空港No.7遺跡A地点第6石器群（西川・西口他1984）、さらには本遺跡のSブロック出土石器群も近いものと思われ、武藏野第I C期中頃、相模野第II期中頃に位置付けられる。

3 III層主体石器群

III層を主体とする石器群は、遺跡南東部の谷頭に面した緩斜面から谷に沿って18ブロック763点（石器・剝片類518点、礫245点）が検出された（第83・84図、図版22、第5表）。

これらは層位的にはソフトローム層を主体として出土したという共通性はあるものの、時間差のあるいくつかのグループに分かれるものと考えられるが、まずブロック別に検討した後にグループ分けをすることにする。

(1) Aブロック（第85・91図、図版30）

出土状況 6E30グリッド付近から径3m程の広がりをもって出土した。出土層位はIII層中～下部である。

出土遺物 小規模な礫群（第1礫群、15点）が主体のブロックであり、石器・剝片類は小剝片のみ3点と少ない。

77・78・79はいずれも不定形の小剝片である。石材は77がチャートで他は流紋岩である。

(2) Bブロック（第86図）

出土状況 6D48からの出土で径2m程の小礫群（第2礫群、12点）のみからなる。出土層位はIII層下部付近である。

(3) Cブロック（第87・91図、図版23・30）

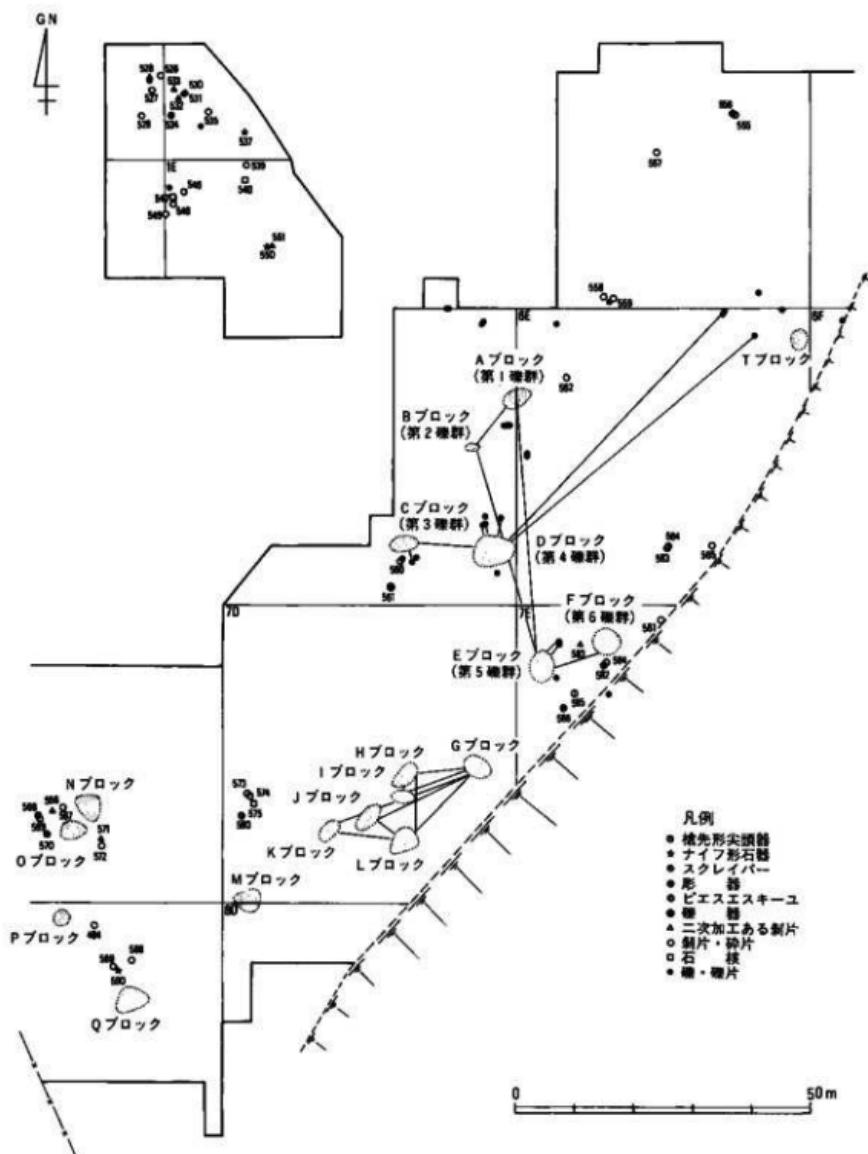
出土状況 6D76付近から径3～4m程の広がりをもって出土し、層位はIII層中～下部である。

出土遺物 このブロックも礫群（第3礫群、33点）が主体で、石器・剝片類は少なく、スクレイパー1点、二次加工ある剝片1点、その他剝片・碎片4点、計6点である。

83は礫面を打面とした小形の剝片の末端に傾斜の緩やかな刃部を作出したスクレイパーである。

80・81・82・85はいずれも剝片で、81と85は接合するがともに礫面を打面としている。

技術的特徴 資料が少ないため多くを語ることは出来ないが、この6点に限ってみれば、礫



第83図 III層主体石器群分布図 (1/1000)

面を打面とするなど打面調整はほとんど行なわれず、幅広の不定形とも思える剝片を剥離していると考えられる。石材は81・82・85が砂岩、80がシルト岩、83が泥岩、84が流紋岩である。

(4) Dブロック (第88・91図、図版23・30)

出土状況 6D89を中心にして6m程の範囲から出土、層位はIII層下部である。

出土遺物 やはり疊が多く(第4疊群、76点)、石器組成は、ナイフ形石器4点、二次加工ある剝片1点、石核4点、小石核1点、その他剝片・碎片20点、計30点である。

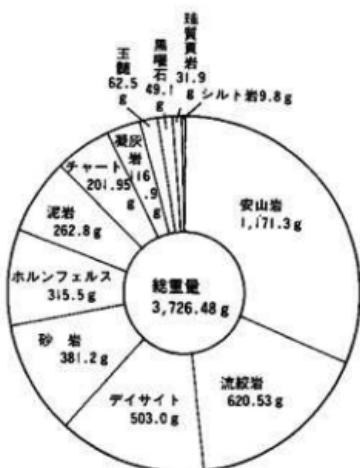
90と110はナイフ形石器である。90は小形の不定形な剝片を素材とし、基部両側縁及び背面先端右側を折断してそこにも調整剝離を施している。このうち左側縁基部の加工のみ背面から主要剝離面へ施している。打点部は除去されている。110は横広の剝片を素材として打点部を除去するとともに、剝片の末端を折断して背面右側縁基部には折断面から背面に向って緩やかな調整剝離を施して、いわゆる切出形のナイフ形石器としている。

100は2cmにも満たない小形の石核である。打面は既設の剝離面を利用していると思われるが、剥取される剝片は非常に小さなものである。

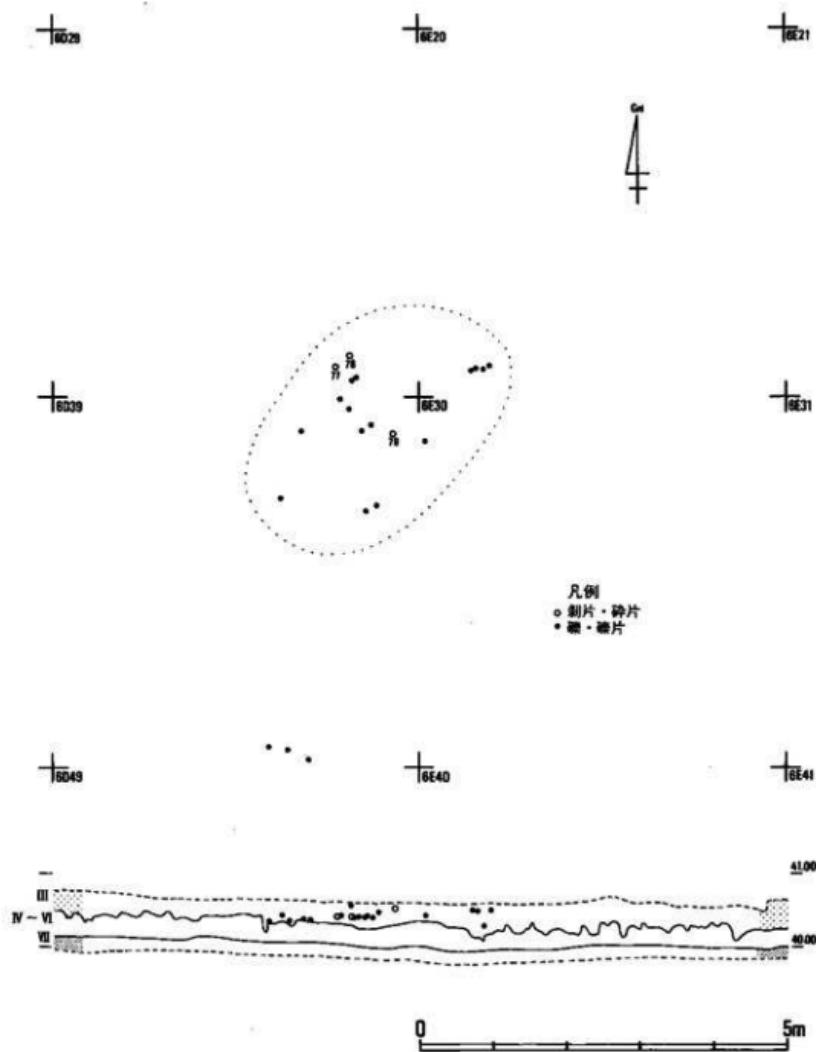
95は頭部調整が施されているずんぐりとした剝片である。

この他2点の小形のナイフ形石器があるが、いずれも横広の剝片を素材として打点部を右に置くいわゆる切出形のナイフ形石器である。また、石核と考えられるものが4点出土しており、そのうち2点は安山岩で既設の剝離面を打面として不定形の小剝片を剥取している。他の1点は平たい砂岩の円礫を使用して、打面に礫面をもつ幅広の剝片を剥取している。残る1点は珪質頁岩製で、節理面と思われる打面の周囲から小剝片を剥取している。

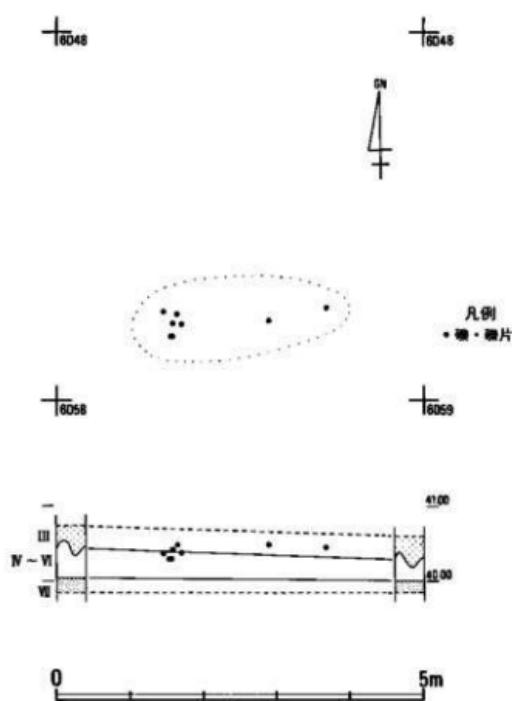
技術的特徴 横広及び小形の剝片を素材として、折断技法をもつ基部加工のナイフ形石器を主体とする石器群と考えられる。石材は安山岩13点、砂岩6点、チャート4点、流紋岩3点、泥岩2点、珪質頁岩・黒曜石各1点である。



第84図 III層主体石器群(石器・剝片類)
石材別重量比



第85図 A ブロック遺物出土状況図 (1/80)



第86図 B ブロック遺物出土状況図 (1/80)

(5) E ブロック (第89・91図、図版24・30)

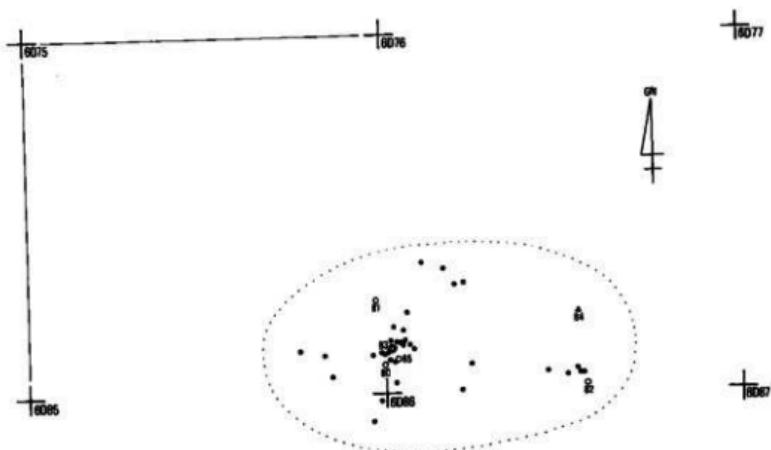
出土状況 7 E20グリッド付近からの出土で、径3~4mの広がりをもつ。出土層位はIII層中部である。

出土遺物 石器群の組成は、ナイフ形石器2点、スクレイバー2点、石核1点、その他剝片・碎片16点、計21点である。また縄は21点出土している(第5縄群)。

116・122はナイフ形石器である。116はやや縱長の剝片を素材に用いていると思われるが、その末端部を折断し、打面から主要剝離面左側縁に対して背面から急斜な調整剝離を施している。形態的には剝突具というよりも切削用と考えられているものである。122は横長の小剝片を素材として、打面側及び基部を主体に調整剝離を施した小形のいわゆる切出形のナイフ形石器である。

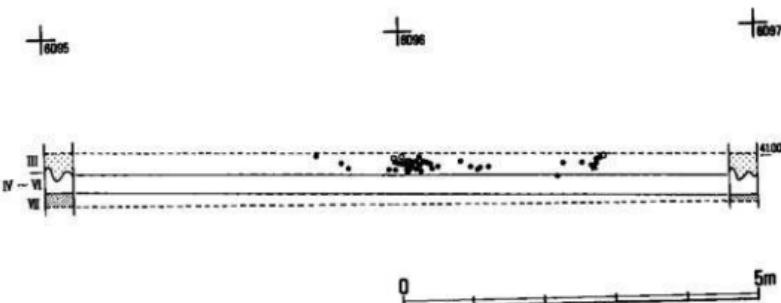
135は打面と背面の末端に縫面をもつ幅広の剝片である。

この他不定形の剝片の一側縁に刃部を付したスクレイバーが2点出土している。

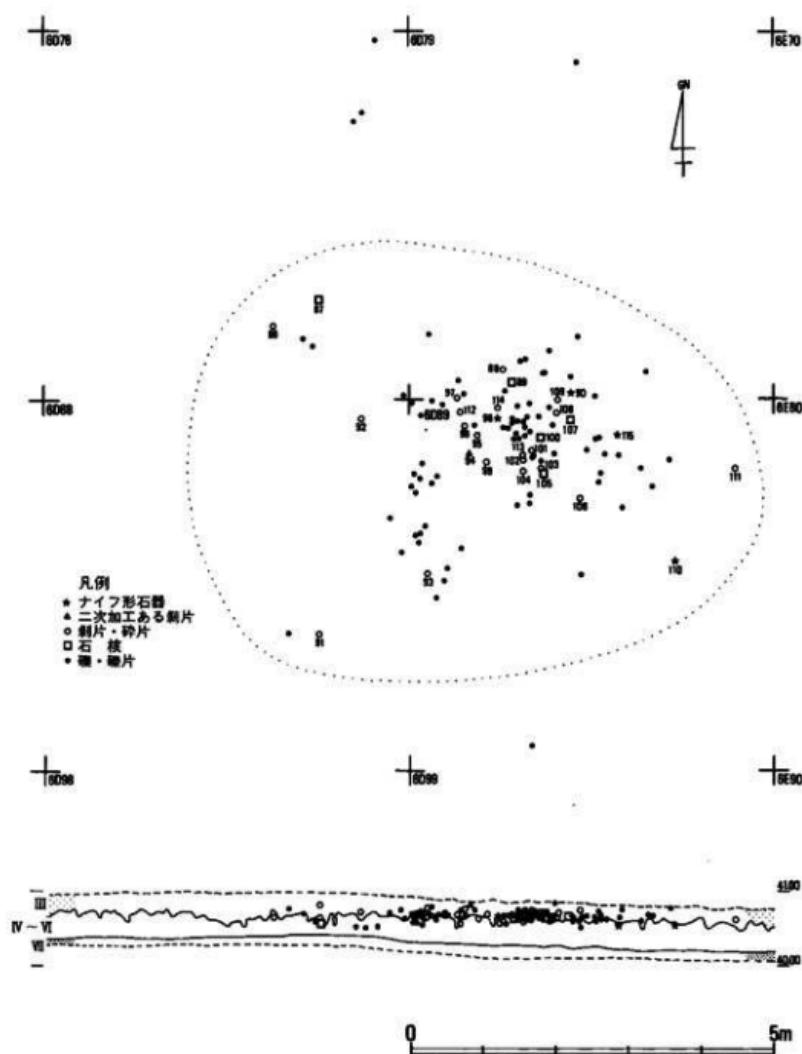


凡例

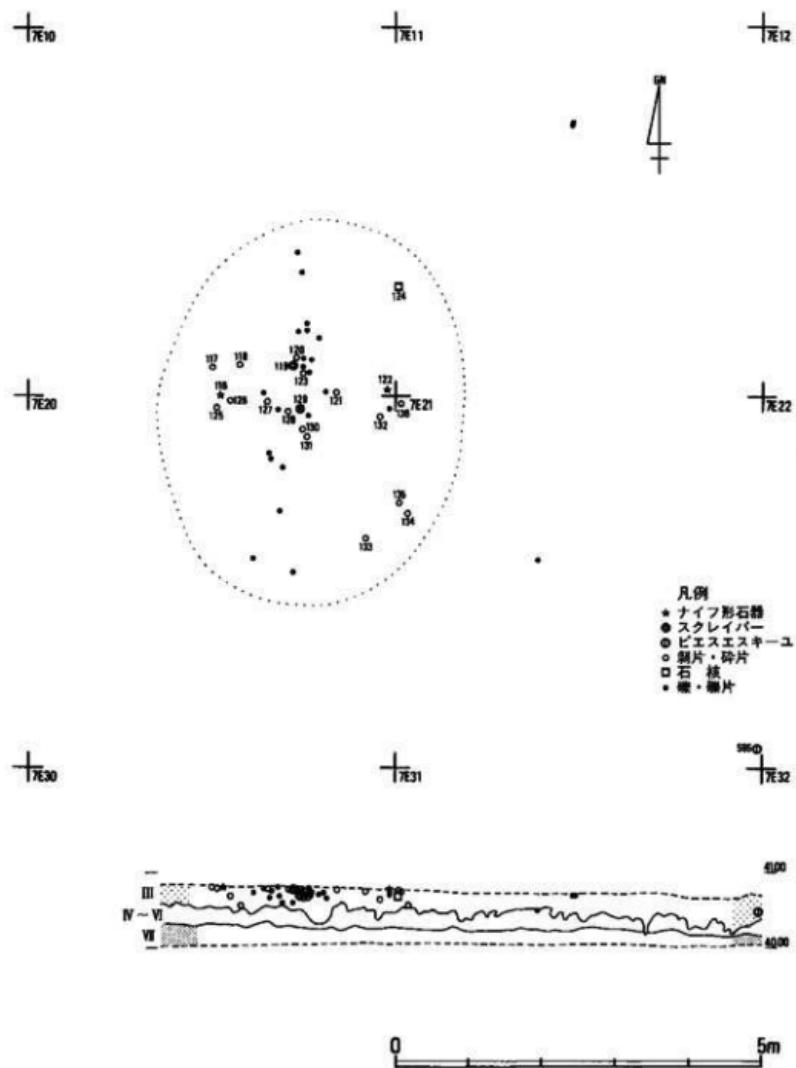
- スクレイパー
- ▲ 二次加工ある剣片
- 剣片・鉢片
- 磨・研片



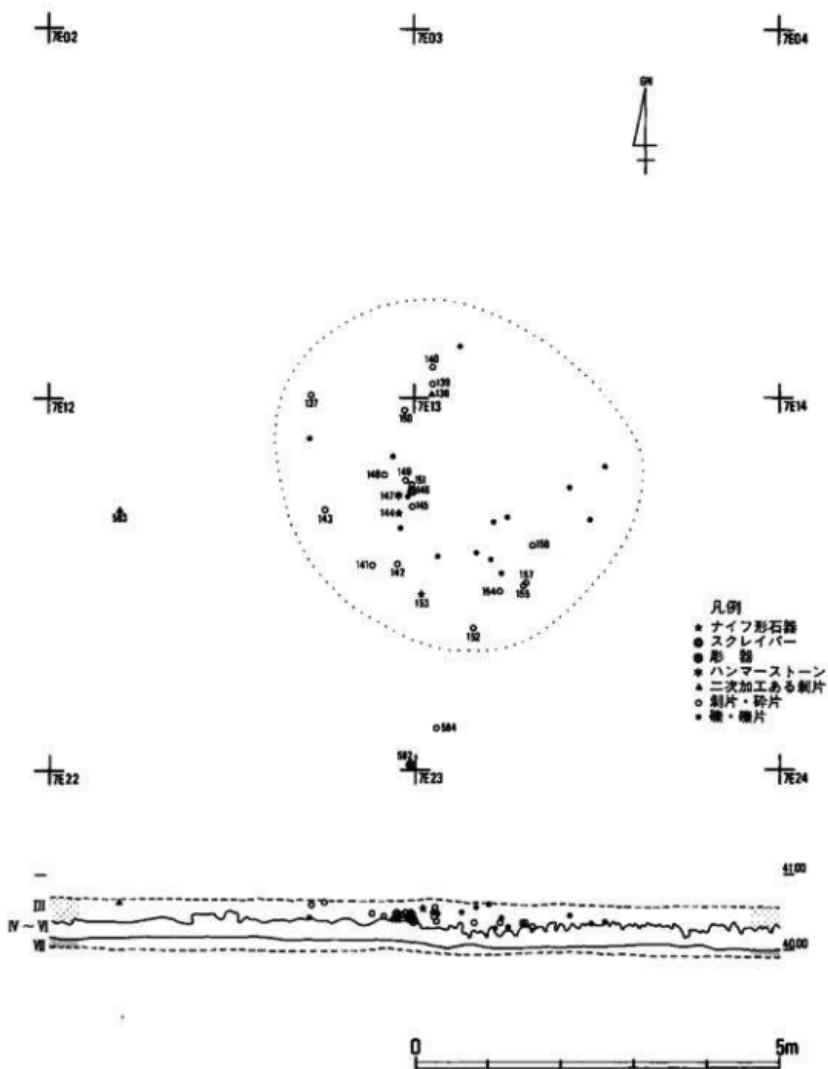
第87図 Cブロック遺物出土状況図 (1/80)



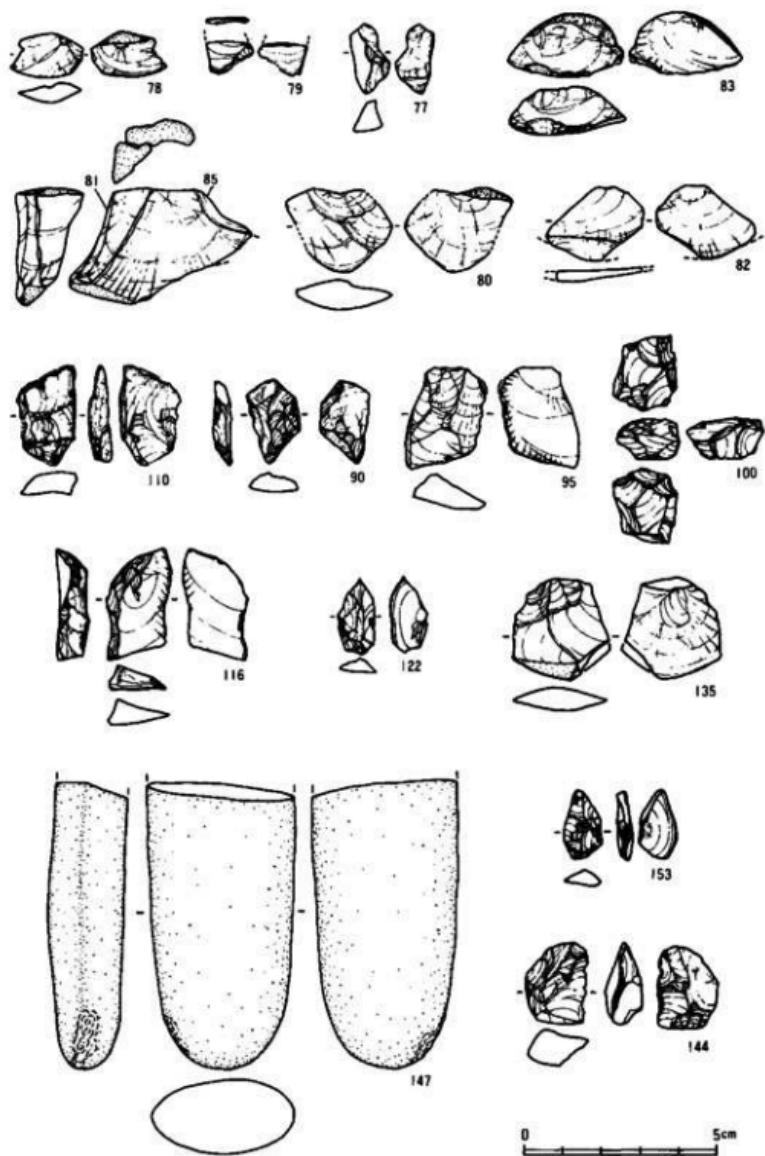
第88図 Dブロック遺物出土状況図 (1/80)



第89図 Eブロック遺物出土状況図 (1/80)



第90図 Fブロック遺物出土状況図 (1/80)



第91図 A～F ブロック出土石器実測図 (2/3)

技術的特徴 特に打面調整を行なわず、縦面などを打面として不定形とも思える幅広の小剝片を剝離していると思われるが、出土したナイフ形石器の素材となるようなものもみられず明らかではない。石材は砂岩11点、チャート7点、ホルンフェルス2点、流紋岩1点である。

(6) F ブロック (第90・91図、図版24・30)

出土状況 7 E 13グリッドを中心に径4m程の広がりをもって出土し、層位はIII層中～下部である。

出土遺物 石器組成は、ナイフ形石器2点、スクレイバー1点、ハンマーストーン1点、二次加工ある剝片2点、その他剝片・碎片18点、計24点である。また、縦は18点出土している(第6縦群)。

144と153はナイフ形石器である。153は横長の小剝片の背面打面部及び基部を中心に調整剝離が施された小形のいわゆる切出形のナイフ形石器である。144は厚みのある小形の幅広の剝片を素材として、先端の一部を残し他の縁辺に調整剝離を加えたいわゆる切出形のナイフ形石器である。

147は上部を欠損しているが、細長く平たい円縦の一端に打痕が認められるハンマーストーンである。

この他小剝片に刃部を付したスクレイバーが1点ある。

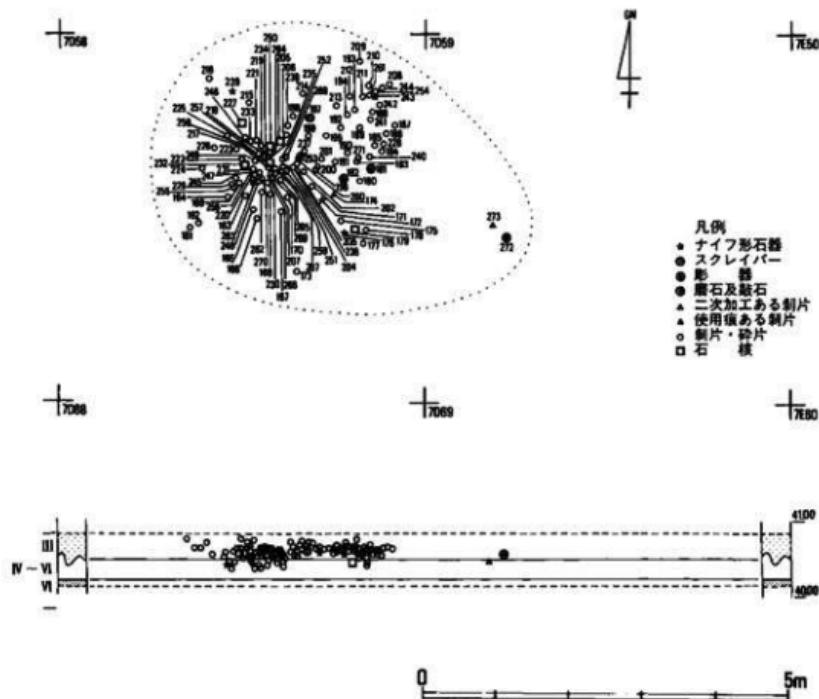
技術的特徴 Eブロックと近似して、ほとんど打面調整を施すことなく幅広の小剝片が剝離され、これが小形のいわゆる切出形のナイフ形石器や小形のスクレイバーの素材となっているようだ。石材は砂岩9点、チャート7点、流紋岩5点、ホルンフェルス・シルト岩・泥岩各1点である。

(7) G ブロック (第92～94図、図版25・31・32)

出土状況 7 D 58グリッドを中心に径4m程からかなり密集して石器群が出土した。出土層位はIII層最下部前後である。

出土遺物 石器組成は、ナイフ形石器3点、スクレイバー1点、彫器1点、磨石及び敲石2点、二次加工ある剝片3点、使用痕ある剝片1点、石核6点、その他剝片・碎片97点、計114点である。

172・176はナイフ形石器である。172は背面に小高い稜をもつ縦長の剝片を素材として、主要剝離面側からだけでなく、この稜からも調整剝離を施している。ただ調整加工は稜の左側のみに限られ、右側には施されていない。断面の形状は部厚な三角形をなし、先端には剝片剝離以前に石核に対して施された打面とは反対方向からの調整剝離がみられる。176も部厚い縦長の剝片が素材に用いられ、先端の1側縁を除き主要剝離面側から急斜な調整剝離が施されている。



第92図 Gブロック遺物出土状況図 (1/80)

断面の形状は三角形をなし、先端部には172と同様の剥片剥離以前の石核調整剥離がみられる。

263は背面の末端と右側縁に調整剥離が施された縦長の剥片であるが、上下を逆にしてナイフ形石器としてもよいかもしれない。

243は背面左側縁に微細な使用痕のある縦長剥片であるが、これも172同様背面の中央付近に小高い稜をもつ。

178・192・269・274はいずれも剥片であるが、192は石刀状、269と274はそれに近いものである。

181と182は磨石兼敲石であり、大きさが異なるだけでどちらも石材はディサイトを使用し、よく似ている。

技術的特徴 石核において打面の位置をほとんど変えずに剥片剥離を行なうものと、打面調整を行ないながら石核を左右に回転させて打面を移動させるものとの2種がみられる。また、打角(剥離角)は110°~115°前後のものが多い。石材は安山岩33点、流紋岩22点、チャート21

点、玉髓17点、泥岩9点、デイサイト2点、シルト岩1点である。

(8) H ブロック (第95・99図、図版25・33)

出土状況 7D56グリッドを主体に4×2.5m程の広がりをもち、さらに遺物の集中度から大きく2個所に分け、北側をH a、南側をH bと呼称する。出土層位はIII層下部付近である。なお、H ブロックに接して南側にはI ブロックがある。

出土遺物 H a ブロックからはナイフ形石器1点、二次加工ある剝片1点、石核2点、その他剝片・碎片7点、計11点の石器群、それに礫が1点出土した。

284もG ブロックの172同様背面に1条の小高い稜をもち、主要剝離面からと背面の稜からの両方から調整剝離を施している。そして背面の稜の左側のみに調整を施して、右側は素材のままである点も172によく似ている作りである。

この他H a ブロックからは2点の石核が出土しており、いずれも背後に礫面を残し、数回の剝離により打面を作出している。打面調整は顕著ではない。これからは主に縦長剝片を剥取している。

H b ブロックからはナイフ形石器4点、二次加工ある剝片1点、石核1点、その他剝片・碎片5点、計11点の石器群が出土している。

289は厚みのあるやや寸づまりの縦長剝片の末端に調整剝離を施したナイフ形石器である。

293はやや幅広の剝片で背面の末端には二次加工の小剝離があり、主要剝離面右側縁には微細な使用痕がみられる。

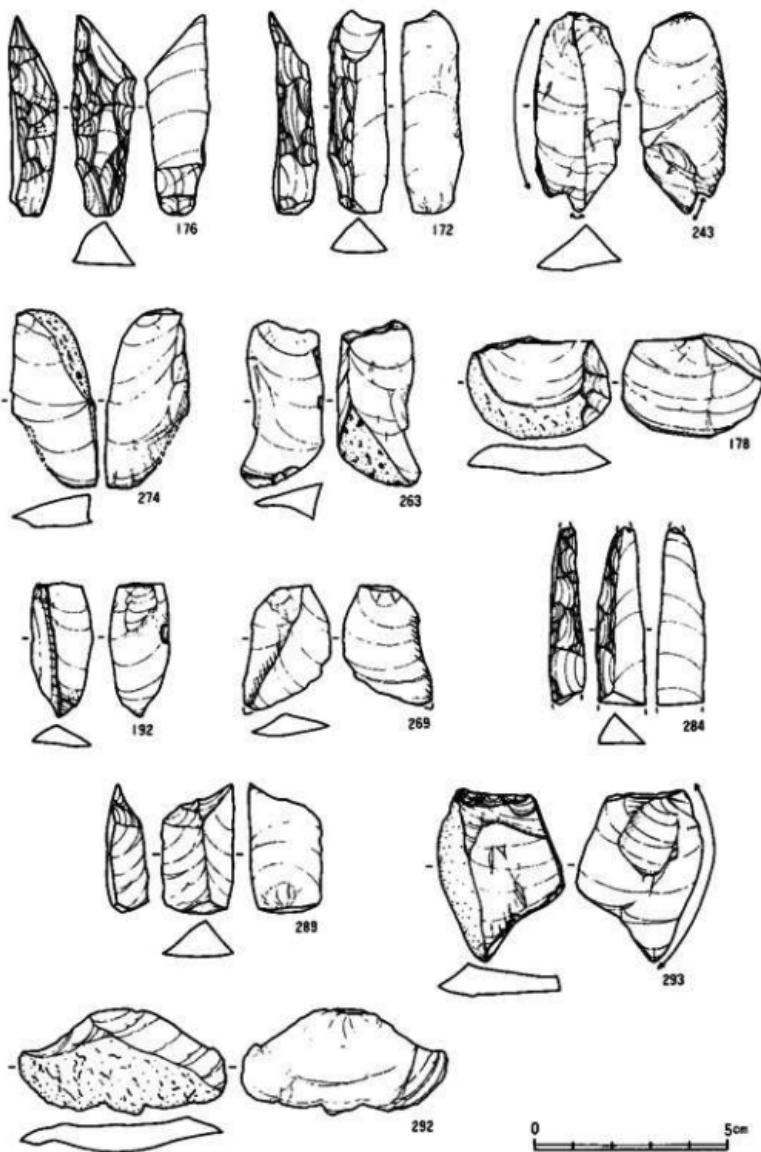
292は横長の剝片で背面には大きく礫面を残している。

この他石核が1点出土している。それは既設の剝離面を打面として交互に剝離を繰り返して小形不定形の剝片を剥取るもので、残核は小形のチョッピングツールのような形状をしている。

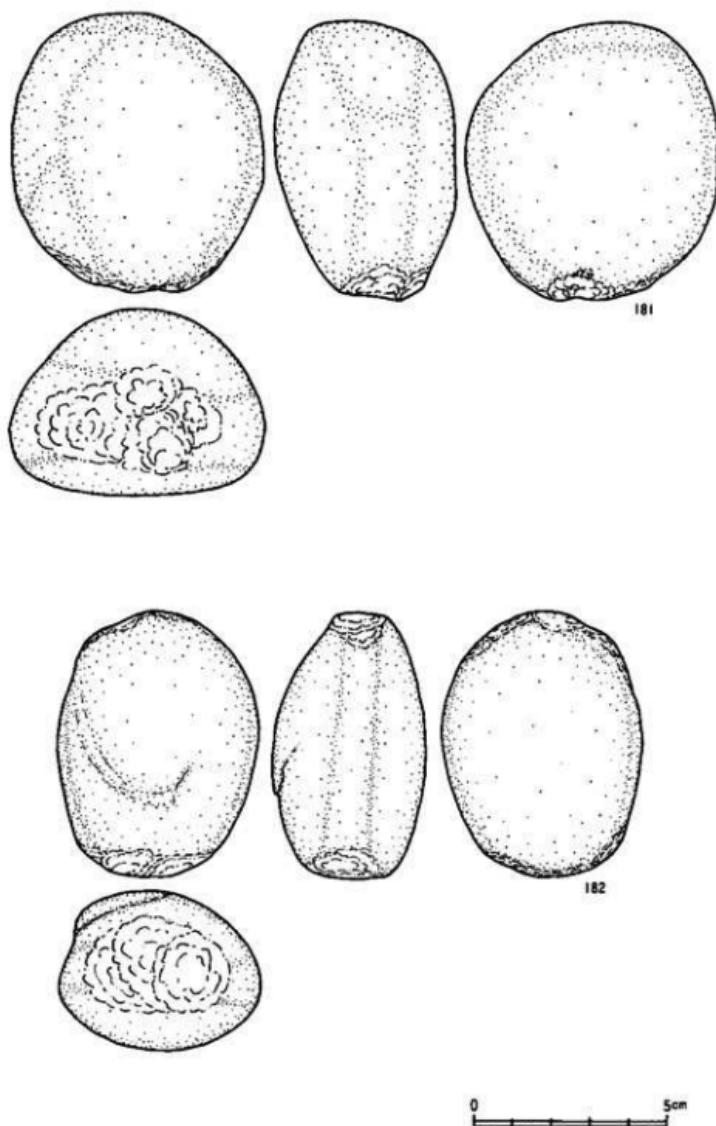
H a ブロックとH b ブロックの組成はよく似た内容であるが、石材はH a ブロックが流紋岩6点、安山岩5点と2種のみで構成されているのに対して、H b ブロックは安山岩5点、泥岩5点、流紋岩1点という違いがみられる。

技術的特徴 ここではH a とH b を合わせH ブロックとして検討する。

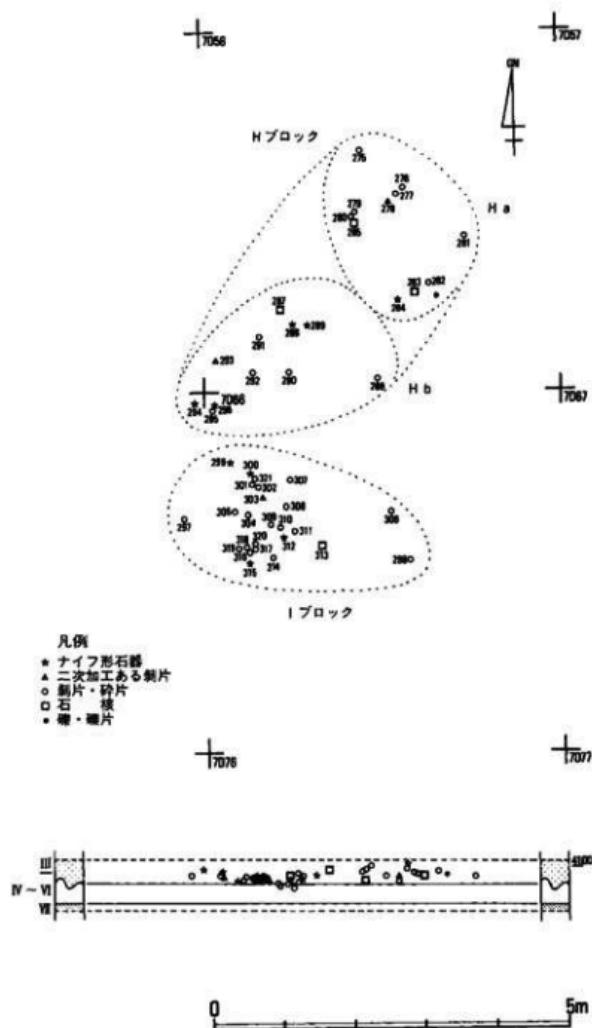
石核からは異なる2種の剝片剝離のあることが窺われたが、横長（広）の剝片の存在からそれらを目的として剝離する技術の存在することが推定される。



第93図 G・Hブロック出土石器実測図 (2/3)



第94図 G ブロック出土石器実測図 (2/3)



第95図 H・I ブロック遺物出土状況図 (1/80)

(9) I ブロック (第95・99図、図版33)

出土状況 7 D66グリッドを中心にHブロックの南に接して出土した。出土層位はIII層下部である。

出土遺物 石器組成は、ナイフ形石器4点、二次加工ある剝片1点、石核1点、その他の剝片・碎片19点、計25点である。

315はナイフ形石器の下半部で上半部の288はH b ブロックに所属する。この資料は主要剝離面が図上では中央の稜の左側に来るという少し変わった用い方をしている。ただ中央に小高い稜をもち、それの左右どちらか一方にのみ調整剝離を施している（この場合右側にのみ）など、Gブロックの172やH a ブロックの284とほぼ同様な作りである。

この他接合資料A（第106図、図版36）を構成する299・305・307などがある。

技術的特徴 2種類の剝片がみられ、ひとつは接合資料Aや288と315が接合するナイフ形石器のような綫長の剝片で、もうひとつは横広の不定形の剝片である。前者はナイフ形石器の素材を提供していると思われるが、後者は他の器種がほとんどないため明らかにしえないが、Lブロック出土のスクレイパー（第99図385・387）のようなものとの結び付きを考えられる。石材は安山岩15点、泥岩8点、流紋岩1点である。

(10) J ブロック (第96・99図、図版26・33)

出土状況 7 D75グリッドを中心に径3～4m程の広がりをもって出土した。出土層位はIII層下部である。

出土遺物 二次加工ある剝片1点、打面再生剝片1点、その他の剝片・碎片7点、計9点、それに礫3点が出土した。

325は背面に大きく礫面を残した剝片である。

この他打面再生剝片は末端に礫面が残るもので、2点の綫長剝片を剥取したことが窺われる。

技術的特徴 資料数が少なくあまり多くを語れないが、背後に礫面を残す石核の存在が推定される。石材は安山岩4点、泥岩2点、玉髓・流紋岩・砂岩各1点である。

(11) K ブロック (第96・99図、図版26、33)

出土状況 7 D73グリッドから径3～4m程の広がりをもって出土した。層位はIII層下部である。このブロックも集中度から大きく2箇所に分けられ、北側をK a、南側の密度の高い方をK bと呼ぶことにする。

(K a ブロック)

出土遺物 石核3点、剝片・碎片18点、計21点が出土した。

技術的特徴 石核は3点とも既設の剝離面またはその交点を打面として不定形の剝片を剥取

するもので、そのうち2点は厚みのある剥片を石核にしている。

石材は安山岩10点、流紋岩6点の他は珪質頁岩・泥岩・チャート・玉髓・デイサイト各1点である。

(K b ブロック)

出土遺物 ナイフ形石器1点、石核4点、剥片・碎片9点、計14点である。

363は下半を欠損したナイフ形石器で、縦長の剥片を素材に用いていると思われる。

技術的特徴 石核は4点とも背後に縫面を残した单設打面で、あまり打面調整を施すことなくやや幅広で寸づまりのものあるいは縦長に近いものを剥取している。

石材は安山岩10点、流紋岩4点である。

ここでK aとK bを較べてみると、組成においては類似した内容を示すが、石材はK bが2種で構成されるのに対して、K aは主体となる2種の他1点づつ5種のものが混じっている点異なる。また、石核にも個々のブロックのところで検討したように違いがみられる。この剥片剥離技術上の相違が同一石器群が本来合わせもつものかどうかさらに検討を要するところである。

12 L ブロック (第97・99・106図、図版27・33・36)

出土状況 7D76グリッドを中心に径4m程の広がりをもって出土した。出土層位はIII層中～下部で下部が主体。

出土遺物 ナイフ形石器3点、角錐状石器4点、スクレイバー2点、二次加工ある剥片4点、石核1点、その他剥片・碎片40点、計54点の石器群と縫1点が出土した。

386は縦長剥片の末端に調整剥離を施したナイフ形石器である。打面部を欠くが、欠損ではなく折断により除去したものと考える。

395・399・405は接合して角錐状石器となるもので、ややねじれた縦長の剥片を素材とし、主要剥離面から両側縁全体に角度のあるやや鋸歯状の調整剥離を施している。背面中央には平坦な面が残り、断面は台形状を呈する。

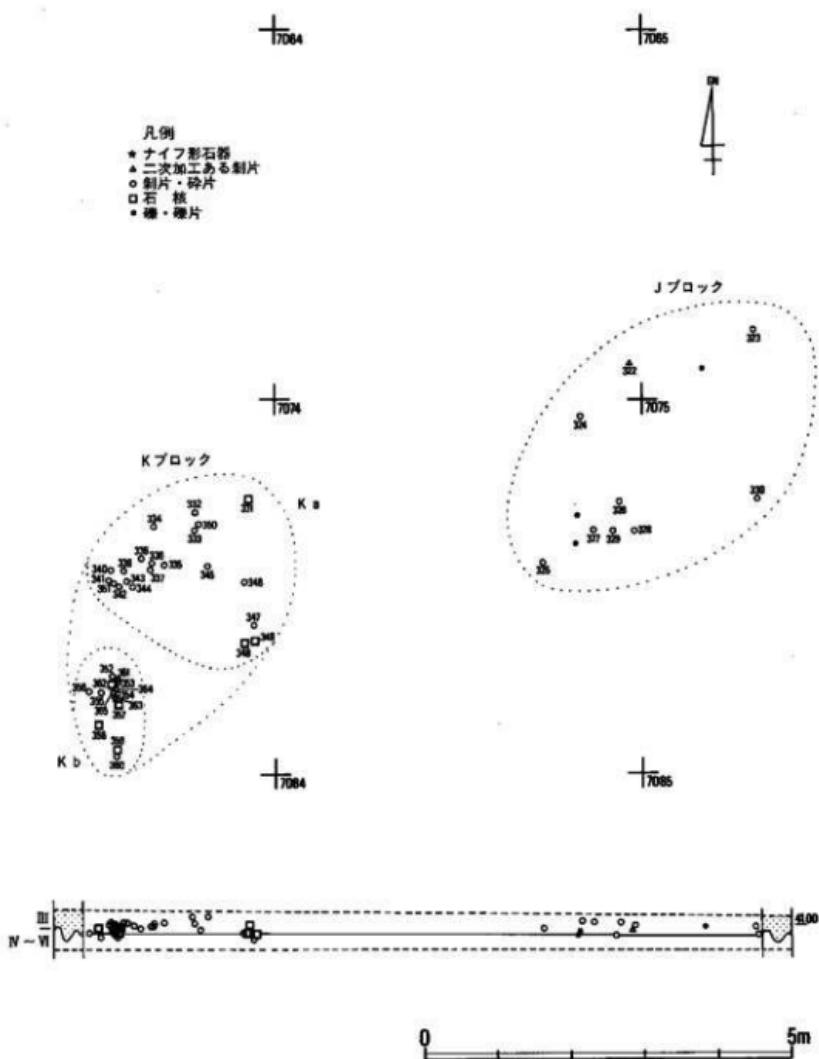
416も縦長剥片を素材とした角錐状石器で、作りは前述のものとよく似ているが、先端は尖り、背面上の平坦な面も少ない。また、主要剥離面基部にも調整剥離が施されている。

385と387は接合してスクレイバーとなるものである。横広の剥片の末端に傾斜のあるやや鋸歯状の刃部を作出している。

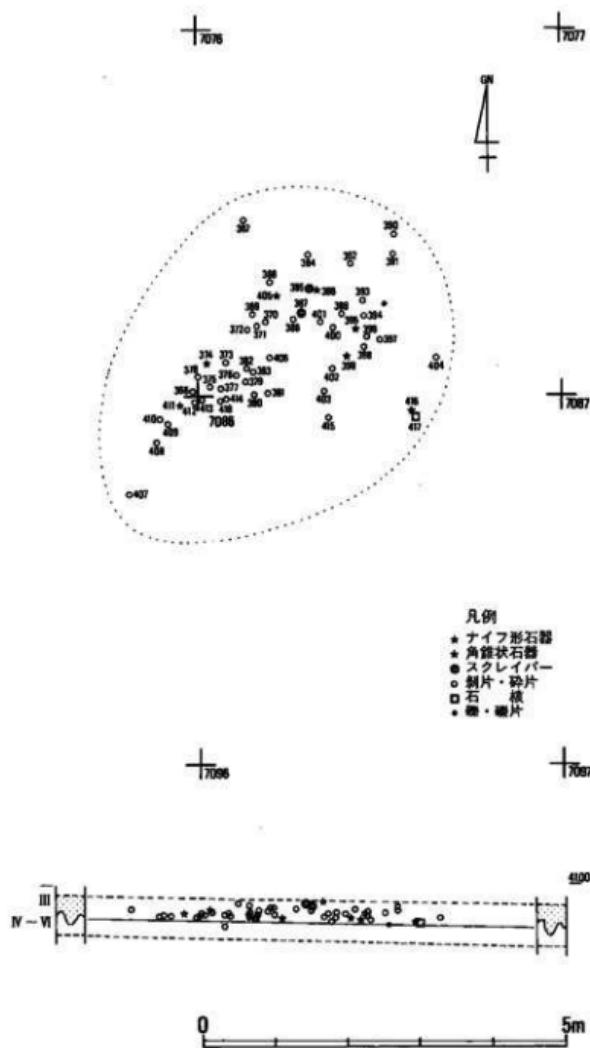
397は打面再生剥片である。背面に残る旧打面は平坦な1枚の剥離面からなる。

371は背面左側縁部に縫面を残す縦長剥片である。

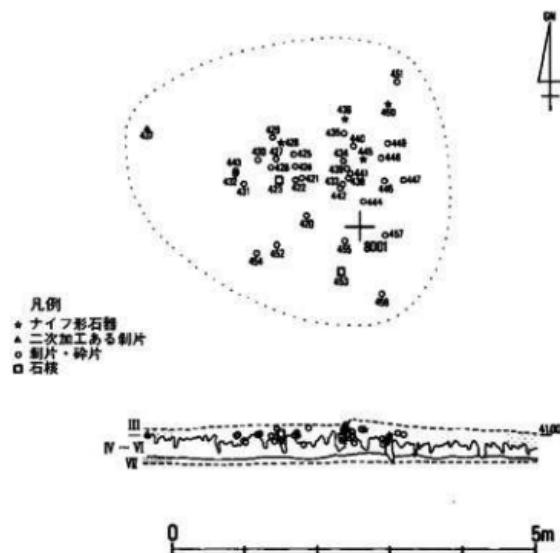
この他本ブロックのみからなる接合資料B(第106図、図版36)があるが別項でふれることにする。



第96図 J・Kブロック遺物出土状況図 (1/80)



第97図 レブロック遺物出土状況図 (1/80)



第98図 Mブロック遺物出土状況図 (1/80)

技術的特徴 剥片剥離においては縦長剥片と横長剥片を生産する技法が看取され、それがまた前者はナイフ形石器や角錐状石器と後者はスクレイパーと結びついているらしいことがわかる。そして調整加工は鋸歯状の調整剥離が行なわれている。

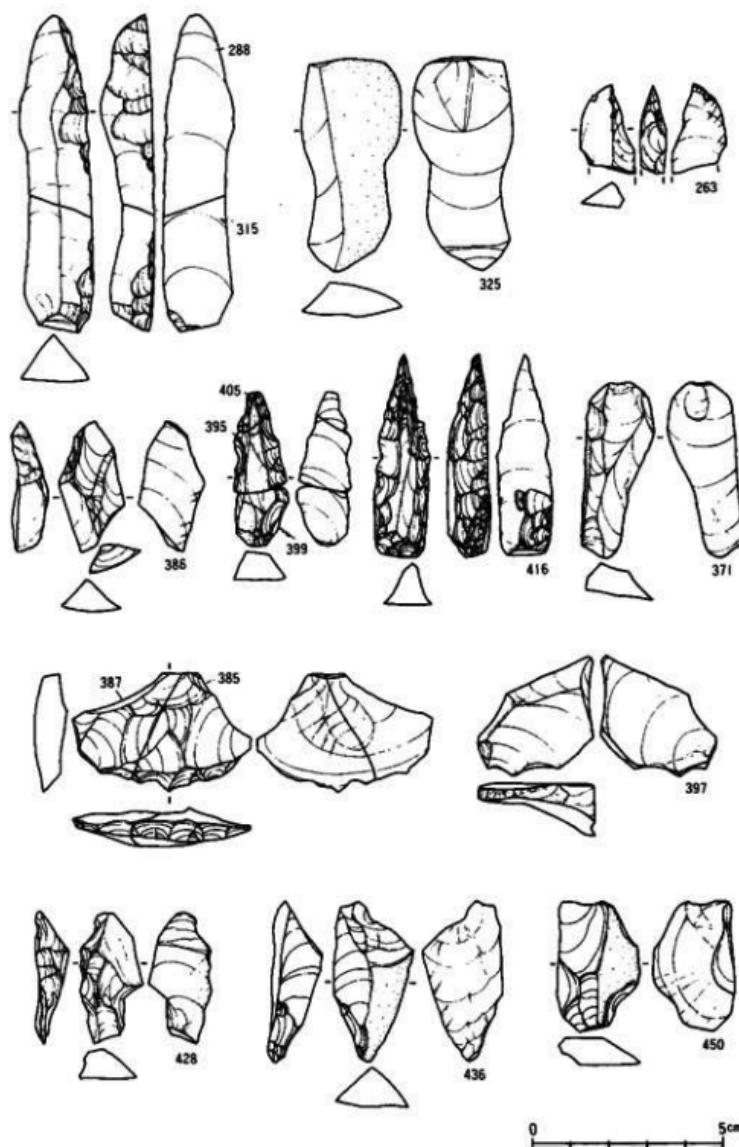
石材は安山岩23点、凝灰岩16点、砂岩6点、泥岩4点、流紋岩3点、珪質頁岩1点である。

(1) Mブロック (第98・99図、図版33)

出土状況 7D90グリッドを中心に径3~4m程の広がりをもって出土した。層位はIII層下部である。

出土遺物 ナイフ形石器4点、二次加工ある剥片1点、石核2点、その他剥片・碎片31点、計38点である。

428・436・450はいずれもナイフ形石器である。428は左側縁にのみ調整剥離を施したもので、背面基部は石核上においてすでに薄く調整されたものと考える。436は縦長剥片の打面部をナイフ形石器の先端部としたもので、調整剥離を施して打面部を除去している。450は幅広の剥片を素材としたもので打面は除去されている。



第99図 H～Mブロック出土石器実測図 (2/3)

技術的特徴 剥片には良好な縦長剥片が見当らず、横広の不定形な剥方が多い。また、ナイフ形石器にはやや縦長なものと横広のものとの両者の剥片を素材として用いている。

石材は全て安山岩である。

04 N ブロック (第100・104図、図版34)

出土状況 7C65~75グリッドにかけて分布し、径4m程の広がりをもつ。出土層位はIII層上部である。このブロックには密な部分とまばらな部分がみられるため、前者をN b、後者をN aと呼称する。

(N a ブロック)

出土遺物 細石刃1点、二次加工ある剥片1点、その他剥片・碎片6点、計9点の石器剥片類と2点の礫がある。

458は黒曜石の細石刃である。長さ2.8cm、幅0.6cmと細長いもので、両側縁には使用痕と思われる微細な剝離痕がある。

その他は不定形の剥片のみである。

石材は黒曜石・ホルフェルス各3点、チャート・玉髓・安山岩各1点である。

(N b ブロック)

出土遺物 石核1点、剥片・碎片6点、計7点である。

470は泥岩の剥片で背面左側縁部に礫面が残る。

また、石核が1点出土しており、既設の剝離面を打面として小形不定形の剥片を剥取している。

石材は黒曜石・チャート各2点、泥岩・流紋岩・ホルンフェルス各1点である。

N a と N b を較べると資料的に制約され、技術的なものは検討しにくいが、石材とともに大差のないことが感じられる。

05 O ブロック (第100・104図、図版34)

出土状況 N ブロックの南東に接して7C74グリッドを中心に径4m程の範囲から出土したがあまりまとまりをもたない。出土層位はIII層上部である。

出土遺物 細石刃核1点、ビエスエスキュー1点、二次加工ある剥片2点、その他剥片・碎片6点、計10点の石器・剥片類と礫4点がある。

477は黒曜石の細石刃核である。背後に礫面を残し、高さは2.2cmである。N ブロック出土の細石刃と同一の石器群ではないかと推定されるが、この2点のみの比較では細石刃の長さが異っている。

482は黒曜石のビエスエスキューである。主要剝離面左上に打点部が円形に残存している。

474は流紋岩、480は黒曜石で、共に広く平坦な打面を残しており、打角(剝離角)は120~130°を測る。

その他は不定形の剥片のみである。

石材は黒曜石7点の他は流紋岩・泥岩・安山岩が各1点である。

09 P ブロック (第101・104図、図版27・34)

出土状況 8C04グリッドから出土し、径3m程の広がりをもつ。出土層位はIII層中部である。

出土遺物 ナイフ形石器9点、二次加工ある剥片1点、石核2点、その他剥片・碎片8点計20点である。

484~503は全て小形のナイフ形石器である。

486・503はどちらも小形幅広の剥片を素材とし、打面を横位置に置くもので、水平な1側縁を先端としている。486は左側縁にのみ調整剝離を施している。503は背面には先端を除く側縁全周に、主要剝離面では先端部にわずかに調整剝離を施している。また、この2点の打面にはこれを剥取する時の打点部に接してもう1つの打点部が残っており、この2点が剥片を石核として剥取されたことがわかる。

487・494は幅広の、496は打面とねじれた関係のやはり幅広の剥片が素材となっている。そしていずれも打面部は除去されている。494・496はどちらも先端の1側縁を除く全周に主要剝離面から調整剝離を施している。487は背面に左側縁から1つの大きな剝離が施され、打面部が除去されるとともに、器体を薄くしている。

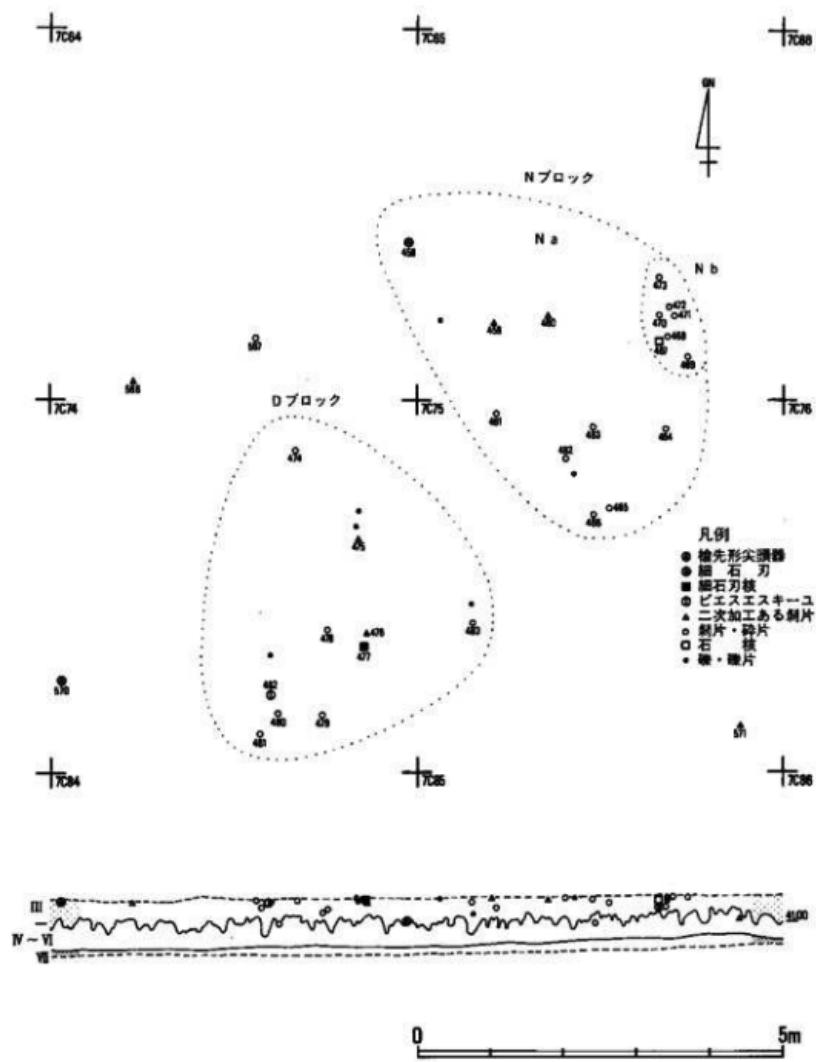
481・491・501はいずれも整ってはいるがやや縦長の剥片を素材としており、主要剝離面の左端には3点とも同じような亀裂が打点あるいはその近くから走って、他の部分とは様相が異っている。また、調整剝離は501が右側縁に、他の2点は右側縁基部のみに施されている。

497は二次加工ある剥片とも考えられるが、背面上部や右側にみえる剥片剝離痕を残した石核であろう。厚みのある剥片が用いられており、背面には疊面が残る。

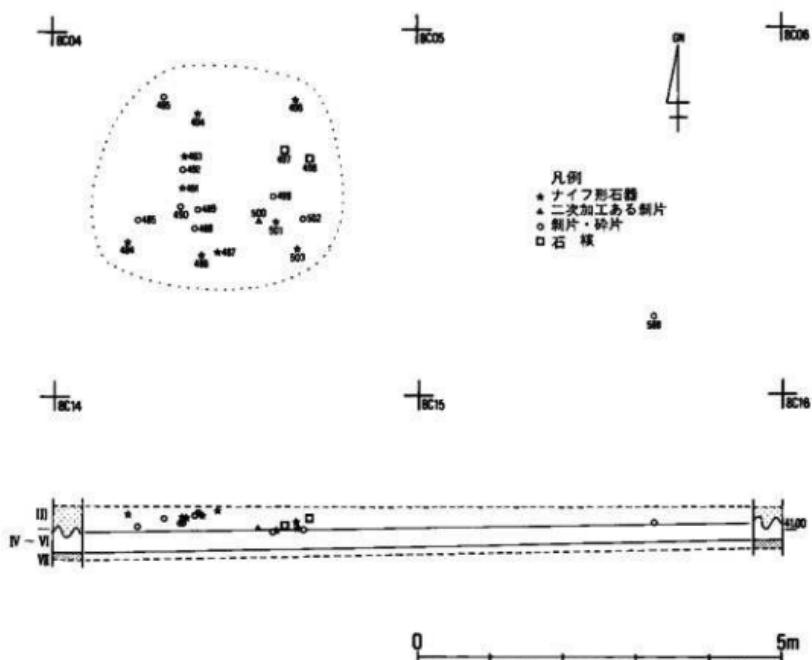
技術的特徴 剥片を石核としたものから剥取された小形不定形の剥片を素材として作られる小形のナイフ形石器群で、幾何形ともいえるものがある。石材は全て流紋岩である。

10 Q ブロック (第102・104図、図版34)

出土状況 8C37グリッドを中心にして3~4m程の広がりをもち、あまりまとまりがない。出土層位はIII層中部である。



第100図 N・Oブロック遺物出土状況図 (1/80)



第101図 P ブロック遺物出土状況図 (1/80)

出土遺物 ナイフ形石器 3点、二次加工ある剥片 2点、その他剥片・碎片10点、計15点である。

504・507・513はいずれもナイフ形石器である。507・513はともに横広の小剥片を横位置に用いたもので打面を残している。調整剥離は打面と背面が交わる稜を中心に施され、相対する側縁には微細なものが若干施されるだけである。504も横長の剥片を横位置に用いたもので、調整剥離を施して打面部を除去している。

技術的特徴 ナイフ形石器 3点をはじめ、他の剥片も全て幅広の不定形の小剥片である。

石材は流紋岩 8点、黒曜石 5点の他は泥岩・チャート各 1点である。

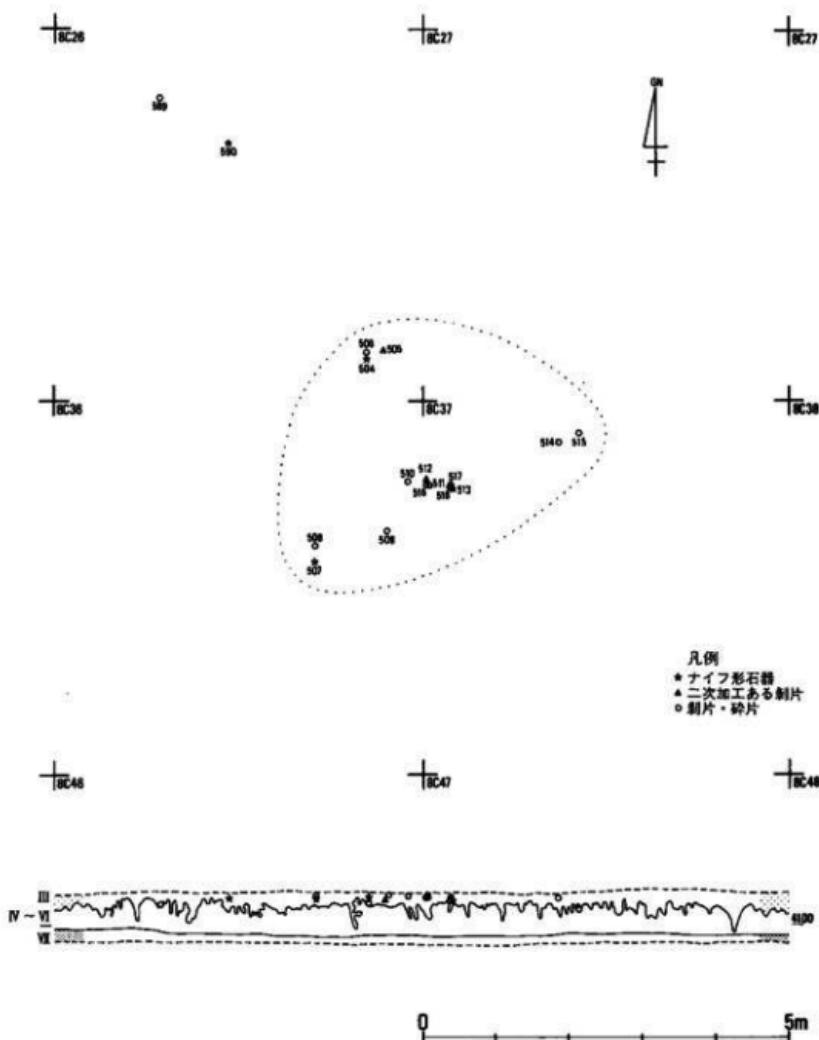
10 T ブロック (第103・104図、図版34)

出土状況 6E09グリッドから6E19グリッドにかけて、径2.5m程の広がりをもって出土した。出土層位はIII層上部である。

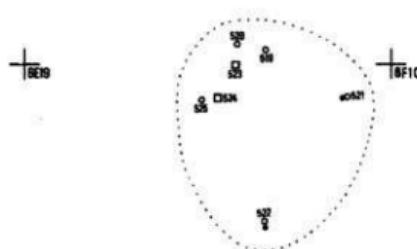
出土遺物 石核 2点、剥片・碎片 5点の計 7点が出土している。

523はスクレイパーとも考えられたが、小剝片を剥取する石核と判断した。同様なものが他にも1点出土している。これらは部厚い剝片を石核に用いている。

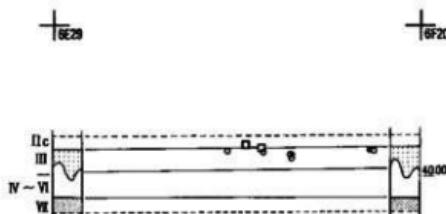
この他背面が疊面のものや、疊面を周囲に残す輪切りのような不定形の剝片が出土している。石材はホルンフェルス3点、砂岩2点、流紋岩・安山岩各1点である。



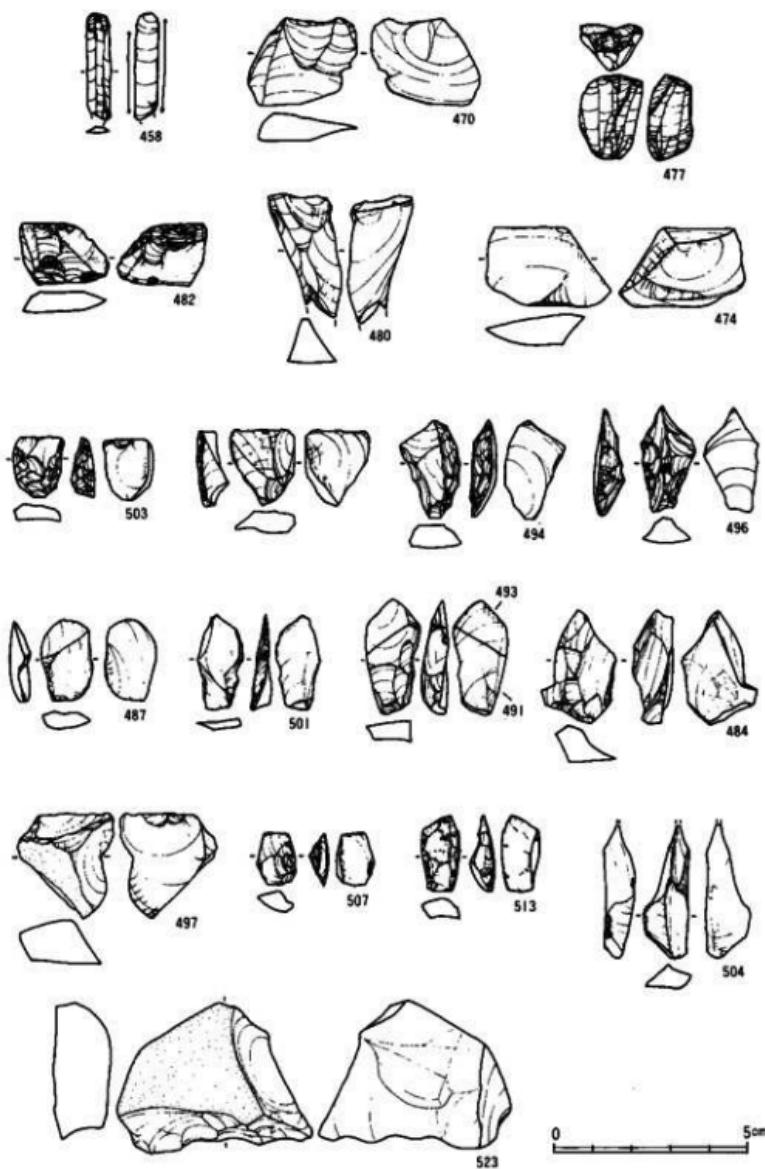
第102図 Qブロック遺物出土状況図 (1/80)



凡例
 □ 石 横
 ● 制片・碎片
 • 縞・縞片



第103図 Tブロック遺物出土状況図 (1/80)



第104図 N～Q・Tブロック出土石器実測図 (2/3)

⑯ III層ブロック外出土石器 (第83・105図、図版35)

ブロック外からは槍先形尖頭器 3点、ナイフ形石器 6点、スクレイパー 3点、彫器 2点、ビエスエスキュー 1点、礫器 1点、二次加工と使用痕の両方のあるもの 1点、二次加工のみあるもの 8点、石刃状剝片 1点、石核調整剝片 2点、その他剝片・碎片、38点、計69点が出土した。

556は周辺加工の小形の槍先形尖頭器である。基部に平坦な打面が残り、調整剝離は表面・裏面とも左側縁を重点的に行なっており、素材の剝片を左右に回転させて同一方向から施したと思われる。

570は基部を欠損した両面加工の槍先形尖頭器である。調整剝離は前述のものと同様な方法がとられている。

586は基部にわずかに打面を残した半両面加工の槍先形尖頭器である。表面・裏面とも未調整部分が広く残り、周辺加工に近いものである。

577は先端及び基部を欠損したナイフ形石器である。右側縁にのみ調整剝離が施され、背面には小高い稜が残るなど G・H・I 各ブロックでみられたものと同グループである。

580は彫器で石核調整剝片を素材に用いていると思われる。打面を除去して主要剝離面から調整剝離を施した後、左右に各 1 条の彫刀面を作出している。

528と541はともに二次加工ある剝片である。528は背面左側縁に角度のあまりない丁寧な調整剝離が施されており、ナイフ形石器に近いものである。礫面を打面としている。

541は末端に小剝離が施され、背面左側縁には使用痕と思われる微細な剝離がある。

551は先端の石刃状剝片である。

526は縦長の剝片を折断した折断剝片でナイフ形石器の可能性も考えられる。

555は基部を欠損しているが、石核調整剝片と思われる。

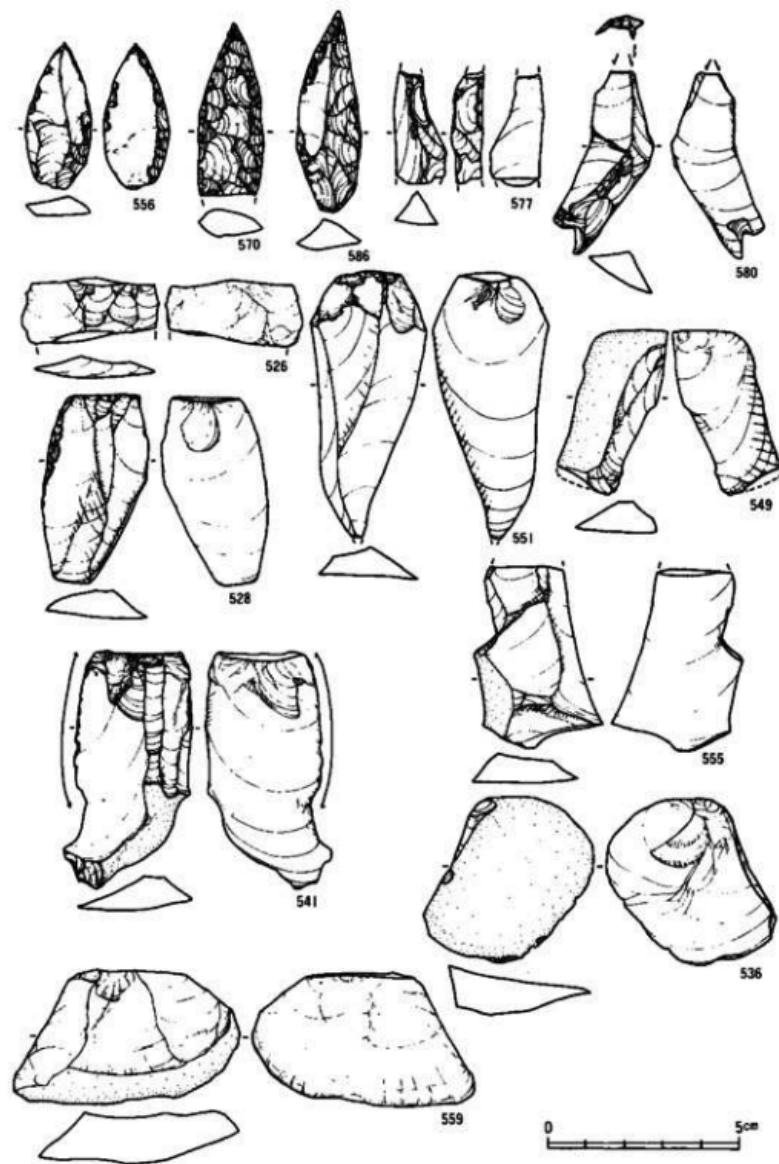
536、549、559はいずれも礫面を打面とした剝片である。536は礫面を背面とし、549、559は背面に礫面を広く残している。

⑰ 接合資料 (第106図、図版36)

接合資料 A

泥岩を石材として、ナイフ形石器 5点 (H b ブロックの294、296、I ブロックの299、7D68 の578、579)、縦長剝片 3点 (G ブロックの175、H b ブロックの290、I ブロックの307)、石核調整 (頭部調整) 剝片 1点 (I ブロックの305)、計 9 点で構成される。この他接合はしないが同一個体と思われるものにナイフ形石器 1点 (I ブロックの300)、縦長剝片 2点 (J ブロックの325、L ブロックの419)、調整剝片 4点 (I ブロックの304、311、317、321) の計 7 点がある。

剝片剝離作業の復原 本資料からは以下の 8 つの剝片剝離作業とそれから派生する 7 つの作



第105図 ブロック外出土石器実測図 (2/3)

業過程が復原出来る。

- ① 305の石核調整（頭部調整）剥片が剝離される。
- ②（打面調整剥片が剝離されたものと推定される。）
- ③（296+578）の素材たる縦長剥片が剝離される。
- ④ a （296+578）の素材たる縦長剥片に調整加工を施してナイフ形石器に仕上げる。
- ⑤ b （296+578）のナイフ形石器が2つに折れて、296がH b ブロックに、578が7D68グリッドに残される。
- ⑥（打面調整剥片が剝離されたものと推定される。）
- ⑦ 290の縦長剥片が剝離される。
- ⑧（打面再生剥片及び打面調整剥片が剝離されたものと推定される。）
- ⑨（175+307）の縦長剥片が剝離される。
- ⑩ a （175+307）の縦長剥片が2つに折れて、175がGブロックに、307がIブロックに残される。
- ⑪（294+579+299）の素材たる縦長剥片が剝離される。
- ⑫ a （294+579+299）の素材たる縦長剥片に調整加工を施してナイフ形石器に仕上げる。
- ⑬ b （294+579+299）のナイフ形石器が2つに折れて先端部の299がIブロックに残される。
- ⑭ c （294+579）の先端部の折れたナイフ形石器に再調整を施す。
- ⑮ d （294+579）の再調整後のナイフ形石器が2つに折れて、294がH b ブロックに、579が7D68グリッドに残される。

以上の諸過程には、さらに①以前と⑩以後の作業過程が予想され、①以前には石核の両側面の調整などが行なわれており、⑩の結果残された石核もまだ十分に目的的剥片の剝離が行なえるものである。

本資料及び7点の個別資料に係わる剥片剝離作業の諸過程が行なわれた場所については、①以前及び⑩以後の諸作業の大部分は本遺跡で確認出来ないため、そう遠くない他の遺跡で行なわれたと推定される。問題はH b・I・G・J・Kの各ブロックと7D68グリッドに分散して残されたものについてであるが、位置的にはH b ブロックとI ブロック、G ブロックと7D68グリッド、それにJ ブロック、L ブロックの計4グループに分けることが出来る。そしてそのほとんどがH b・I グループに所属しているためそこが中心になって行なわれたことは明らかである。またJ ブロックとK ブロック出土の縦長剥片については、H b・I グループなどから持ち込まれたかあるいは各ブロックにおいて剝離されたと考えられる。残るG・7D68グループの175・578・59の3資料は全てH b・I グループと接合関係にある破損品と考えられ、破損品がH b・I グループから持ち込まれたとは考えにくい。しかし破損品と解釈せずに、ナイフ形石器や縦長剥片が折断されてその一部が運ばれたと考える、つまりナイフ形石器や縦長剥片の一

部には折断されて使用されたものがあるのではないかと考えれば分散して残されることに何の不思議もない。ただ、そうなるとナイフ形石器の機能、用途の問題と深く関わってくる問題となるが、この資料に限らず本遺跡の資料には、2つばかりではなく3つに折れているものもいくつか見受けられる。このように破損とみるか、折断とするかはなかなか難しい問題である。完成品と思われるナイフ形石器をさらに意図的に折断して、その一部を単独あるいは複数の新たな石器として利用することが行なわれていたと推定されるが、それを確認するには多くの資料の検討が必要であり、今回は資料の提示にとどめ今後の検討課題としたい。

技術的特徴 剥片剥離技術は頻繁に打面再生及び打面調整を行ないながら連続的に縦長剥片を剥離しており、石核は背後に擗面を残し、单設打面のものが推定される。ナイフ形石器にみられる調整加工は、素材となる縦長剥片の厚みのある一側縁を薄くするように施されており、素材の形状を大きく変えるものではない。

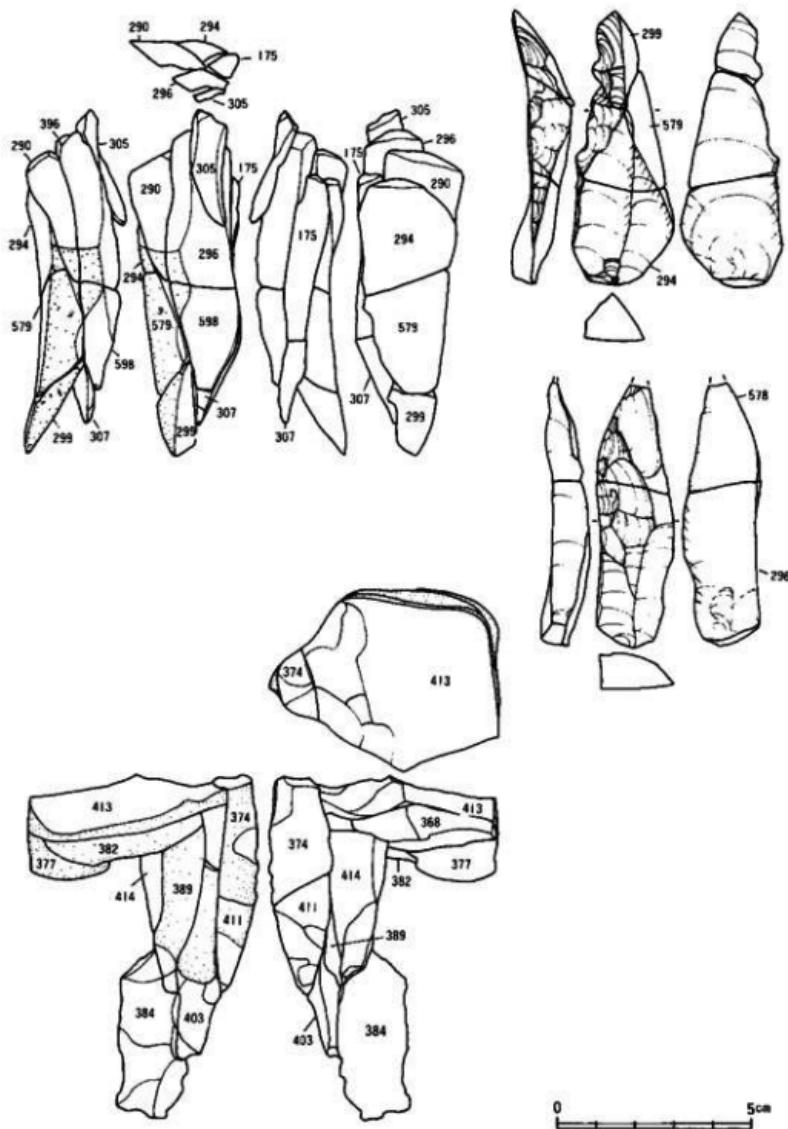
接合資料B

凝灰岩を石材として、ナイフ形石器2点(374+411)、縦長剥片3点(389、403、414)、打面再生剥片3点(368+377、413)、打面調整剥片1点(382)、石核調整剥片1点(384)、計10点で構成され、全てLブロックからの出土である。この他接合はしないが同一個体と思われるものに縦長剥片1点(381)、打面再生剥片3点(375+401+412)、調整剥片2点(400、407)、計6点があり、これも全てLブロック出土である。

剥片剥離作業の復原 本資料からは以下の10の剥片剥離作業とそれから派生する3つの作業過程が復原出来る。

- ① (374+411) のナイフ形石器の素材たる縦長剥片が剥離される。
- ①a (374+411) の素材たる縦長剥片に調整加工を施してナイフ形石器に仕上げる。
- ①b (374+411) のナイフ形石器が2つに折れて374と411になる。
- ②413の打面再生剥片が剥離される。
- ③403の縦長剥片が剥離される。
- ④382の打面調整剥片が剥離される。
- ⑤ (打面調整剥片が剥離されたものと推定される。)
- ⑥ (368+377) の打面再生剥片が剥離される。
- ⑥a (368+377) の打面再生剥片が2つに折れて368と377になる。
- ⑦389の縦長剥片が剥離される。
- ⑧ (縦長剥片が剥離されたものと推定される。)
- ⑨414の縦長剥片が剥離される。
- ⑩384の石核調整剥片が剥離される。

以上の作業過程にはさらに①以前と⑩以後の作業過程が予想され、①以前にすでに剥片剥離



第106図 接合資料実測図 (2/3)

は始められており、⑩の結果残された石核もまだ十分に目的的剝片の剥離が行なえるものである。

これら本資料及び6点の個体別資料に係わる剝片剥離作業の諸過程はもちろんLブロックが主体となって行なわれたことはまちがいないが、①以前の諸過程及び⑩以後の諸過程の大部分は本遺跡において確認することが出来ないため、そう遠くない他の遺跡において行なわれたと推定される。

技術的特徴 本資料から窺われる剝片剥離技術は、背後に礫面を残した单設打面の石核から打面再生及び打面調整を頻繁に行ないながら目的とする縦長剝片を剥離している。また、ナイフ形石器にみられる調整加工は、頭部調整はあまり行われず剝片の先端部に調整加工が施されるもので、素材となる縦長剝片の形状を大きく変えないものである。

第5表 III層主体石器群一覧表

番号	プロック	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	打角(斜面角)	登録番号
77	A	剝片	チャート	1.8	1.2	0.7	1.0	90°	6D29-5
78	A	剝片	流紋岩	1.2	1.8	0.5	0.8	120°	6D29-6
79	A	剝片	流紋岩	(0.8)	(1.2)	(0.2)	(0.2)		6D39-6
80	C	剝片	シルト岩	2.3	2.7	0.7	4.0	120°	6D75-13
81	C	剝片	砂岩	3.1	0.9	1.4	2.0	95°	6D75-18
82	C	剝片	砂岩	1.9	2.6	0.4	2.0		6D76-8
83	C	スクレイバー	泥岩	1.8	3.0	1.1	4.6		6D76-13
84	C	二次加工ある剝片	流紋岩	(1.0)	(1.6)	(1.2)	(1.9)	120°	6D76-27
85	C	剝片	砂岩	3.0	4.7	0.8	9.0	95°	6D76-42
86	D	剝片	砂岩	2.0	2.7	1.0	3.9	80°	6D78-6
87	D	石核	砂岩	2.0	5.7	4.2	40.4		6D78-7
88	D	碎片	チャート	0.7	1.6	1.3	1.3		6D79-8
89	D	石核	安山岩	(2.1)	(3.1)	(1.4)	7.5		6D79-9
90	D	ナイフ形石器	チャート	2.2	1.4	0.5	1.3		6D79-16
91	D	剝片	チャート	2.0	1.6	0.7	1.7	120°	6D88-6
92	D	剝片	チャート	1.5	3.3	1.1	5.9	120°	6D88-11
93	D	剝片	安山岩	1.9	2.4	0.8	3.7	120°	6D89-6
94	D	二次加工ある剝片	流紋岩	(2.1)	(2.5)	(0.6)	2.7	115°	6D89-20
95	D	剝片	泥岩	2.6	2.1	0.8	3.9		6D89-21
96	D	剝片	安山岩	0.9	2.9	0.6	1.4		6D89-22
97	D	剝片	安山岩	(1.6)	(2.5)	(0.6)	2.4	120°	6D89-28
98	D	ナイフ形石器	安山岩	1.8	1.3	0.5	1.3		6D89-29
99	D	剝片	泥岩	2.4	2.4	0.5	3.4		6D89-31
100	D	小石核	流紋岩	1.7	1.9	1.0	3.4		6D89-44
101	D	剝片	安山岩	1.4	2.1	0.4	1.0	110°	6D89-45
102	D	剝片	安山岩	2.4	1.4	0.4	1.3	130°	6D89-46
103	D	碎片	砂岩	1.0	0.5	0.2	0.1	120°	6D89-50

番号	プロック	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	打削面角	登録番号
104	D	剝核	片流紋岩	(1.4)	(1.6)	(0.5)	(1.0)	130°	6D89-51
105	D	石核	安山岩	(1.6)	(3.1)	(0.9)	4.8		6D89-52
106	D	碎核	片砂岩	1.3	0.9	0.2	0.4		6D89-58
107	D	石核	?珪質頁岩	1.2	1.9	0.9	2.3		6D89-67
108	D	剝核	片砂岩	4.1	4.1	1.1	19.1		6D89-68
109	D	剝核	片安山岩	(1.5)	(1.2)	(0.6)	0.7		6D89-69
110	D	ナイフ形石器	黒曜石	2.6	1.6	0.6	2.1		6D89-73
111	D	剝核	片砂岩	1.2	1.4	0.4	0.8	125°	6D89-75
112	D	剝核	片安山岩	1.3	1.6	0.5	1.0	120°	6D89-77
113	D	剝核	片安山岩	(1.8)	(1.6)	(0.6)	1.3	110°	6D89-78
114	D	剝核	片安山岩	(2.1)	(1.6)	(0.9)	2.8		6D89-82
115	D	ナイフ形石器	安山岩	(2.5)	1.4	0.6	1.7		6D89-83
116	E	ナイフ形石器	チャート	(3.1)	(1.9)	(0.7)	3.2		7E10-4
117	E	剝核	ホルンフェルス	(4.2)	(2.6)	(0.7)	9.3		7E10-5
118	E	剝核	チャート	(1.3)	(2.0)	(0.6)	1.1		7E10-6
119	E	スクレイバー	一流紋岩	1.9	2.5	1.0	4.2		7E10-9
120	E	碎核	片砂岩	(1.2)	(1.2)	(0.2)	0.3		7E10-10
121	E	碎核	片砂岩	(1.3)	(1.5)	(0.3)	0.6		7E10-21
122	E	ナイフ形石器	チャート	1.9	0.9	0.4	0.6		7E10-22
123	E	剝核	片砂岩	1.5	1.4	0.3	0.5		7E10-27
124	E	石核	砂岩	3.4	4.9	2.5	60.4		7E11-9
125	E	剝核	片砂岩	2.2	4.0	1.1	7.7	120°	7E20-4
126	E	剝核	片砂岩	2.6	3.0	1.3	10.9	100°	7E20-5
127	E	剝核	片砂岩	2.2	2.5	1.6	4.6	110°	7E20-6
128	E	剝核	チャート	1.8	1.3	0.4	0.8		7E20-8
129	E	スクレイバー	チャート	2.2	2.3	0.8	3.6		7E20-9
130	E	剝核	片砂岩	1.2	0.9	0.4	0.3	110°	7E20-11
131	E	剝核	片チャート	2.6	2.5	1.0	5.2		7E20-12
132	E	剝核	片チャート	(2.2)	(1.5)	(1.1)	2.3		7E20-17
133	E	剝核	ホルンフェルス	(3.2)	(3.1)	(0.8)	7.8		7E20-19
134	E	剝核	片砂岩	4.0	2.2	2.6	24.6		7E21-4
135	E	碎核	片砂岩	2.7	2.5	0.7	4.3	115°	7E21-5
136	E	碎核	片砂岩	0.9	2.2	0.5	0.6		7E21-6
137	F	剝核	片チャート	1.2	1.3	0.3	0.4	105°	7E02-4
138	F	二次加工ある剝核	チャート	1.2	1.4	0.5	0.8	115°	7E03-4
139	F	剝核	片砂岩	2.6	3.2	0.7	5.7		7E03-5
140	F	碎核	片流紋岩	(0.8)	(1.2)	(0.1)	(0.2)		7E03-6
141	F	剝核	片チャート	1.6	1.5	0.9	2.3	120°	7E12-8
142	F	剝核	片シリート岩	2.1	1.8	0.6	2.8	115°	7E12-9
143	F	碎核	片チャート	0.9	1.1	0.4	0.3		7E12-12
144	F	ナイフ形石器	片流紋岩	2.1	1.6	1.0	2.8		7E12-14
145	F	剝核	片流紋岩	(1.3)	(0.6)	(0.2)	0.2		7E12-15
146	F	スクレイバー	チャート	(1.6)	(1.5)	(0.7)	1.3		7E12-17
147	F	ハンマーストーン?	砂岩	(7.2)	(3.9)	(2.0)	89.3		7E12-18
148	F	剝核	片流紋岩	(1.7)	(1.3)	(0.7)	1.0		7E12-19
149	F	碎核	片チャート	(0.9)	0.8	0.3	0.1		7E12-20

番号	プロック	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	打角(剝離角)	登録番号
150	F	剝	片流紋岩	2.1	1.3	0.6	1.5		7E12-23
151	F	剝	片砂岩	2.8	4.6	1.6	14.7	110°	7E12-24
152	F	剝	片砂岩	1.5	2.1	0.6	2.1	120°	7E13-6
153	F	ナイフ形石器	チヤート	1.8	1.0	0.4	0.6		7E13-7
154	F	剝	片砂岩	1.9	1.2	0.4	1.0	115°	7E13-14
155	F	剝	片砂岩	1.2	1.9	0.4	0.8		7E13-15
156	F	剝	片砂岩	1.7	1.4	0.8	1.9	85°	7E13-16
157	F	剝	片砂岩	2.3	3.5	1.0	7.1		7E13-26
158	F	碎	片流紋岩	1.1	2.0	0.4	0.9		7E13-3
159	F	二次加工ある剝片	ホルンフェルス	(4.5)	(6.3)	(1.4)	41.2		7E13-24
160	F	剝	片泥岩	2.1	3.7	0.6	4.1		7E13-25
161	G	剝	片安山岩	1.8	2.3	0.8	2.3	130°	7D58-4
162	G	剝	片?	1.8	2.1	0.6	2.5	120°	7D58-5
163	G	剝	片流紋岩	2.9	1.7	0.9	3.7	120°	7D58-6
164	G	剝	片流紋岩	2.2	1.8	1.0	3.5	130°	7D58-7
165	G	剝	片流紋岩	1.5	1.1	0.4	0.4	125°	7D58-8
166	G	剝	片安山岩	1.8	2.0	0.3	1.2	120°	7D58-9
167	G	剝	片ホルンフェルス	3.1	1.4	2.0	7.1	60°	7D58-10
168	G	剝	片安山岩	1.6	1.1	0.4	0.6	115°	7D58-11
169	G	剝	片流紋岩	3.7	2.6	1.6	6.7	110°	7D58-12
170	G	剝	片安山岩	5.6	3.8	1.5	28.5	115°	7D58-13
171	G	剝	片チヤート	(2.4)	(3.0)	(0.9)	6.3	115°	7D58-14
172	G	ナイフ形石器	安山岩	5.3	1.6	1.2	8.5		7D58-15
173	G	剝	片流紋岩	1.7	1.3	0.4	0.5	115°	7D58-16
174	G	二次加工ある剝片	流紋岩	2.3	2.9	0.6	3.2	120°	7D58-17
175	G	剝	片泥岩	(4.2)	1.9	0.9	6.0	115°	7D58-18
176	G	ナイフ形石器	安山岩	5.2	1.6	1.2	9.0		7D58-19
177	G	剝	片安山岩	3.4	2.3	0.7	5.7	125°	7D58-20
178	G	剝	片ホルンフェルス	3.2	3.5	0.8	10.4	135°	7D58-21
179	G	石核	安山岩	3.7	2.1	2.8	22.5		7D58-22
180	G	剝	片安山岩	1.6	3.1	0.4	1.7	115°	7D58-23
181	G	磨石及敲石	デイサイト	7.1	6.5	4.7	313.5		7D58-24
182	G	磨石及敲石	デイサイト	6.8	5.2	4.1	187.8		7D58-25
183	G	剝	片安山岩	2.9	2.6	0.9	5.5	110°	7D58-26
184	G	剝	片流紋岩	1.5	0.7	0.2	0.2	130°	7D58-27
185	G	碎	片チヤート	0.8	1.0	0.1	0.05		7D58-28
186	G	剝	片チヤート	2.7	3.3	1.2	7.6		7D58-29
187	G	剝	片チヤート	2.1	2.5	0.8	3.6		7D58-30
188	G	剝	片安山岩						7D58-31
189	G	剝	片泥岩	3.2	3.0	1.0	7.6		7D58-32
190	G	剝	片チヤート	2.0	1.5	0.5	1.3	105°	7D58-33
191	G	剝	片流紋岩	(1.2)	(1.6)	(0.3)	0.4		2D58-34
192	G	剝	片安山岩	3.5	1.6	0.5	3.1	100°	7D58-35
193	G	剝	片チヤート	(1.7)	(1.9)	(0.4)	0.9	120°	7D58-36
194	G	剝	片チヤート	4.3	2.3	0.8	5.3	110°	7D58-37
195	G	剝	片玉髓	2.2	4.3	0.9	5.8	115°	7D58-38

番号	プロ ック	器 種	石 材	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	打 角 (側面角)	登録番号			
196	G	剥	片	玉	織	1.5	1.6	0.3	0.5	125°	7D58-39	
197	G	スクレイバ	一	流	紋	3.0	2.7	1.2	9.4		7D58-40	
198	G	碎	片	安	山	1.5	1.0	0.8	1.0		7D58-41	
199	G	剥	片	安	山	(2.0)	(2.0)	(0.3)	0.7		7D58-42	
200	G	剥	片	玉	織	2.7	3.1	1.2	6.6	115°	7D58-43	
201	G	剥	片	玉	織	1.4	1.2	0.4	0.6		7D58-44	
202	G	剥	片	流	紋	2.9	2.3	1.2	5.1	120°	7D58-45	
203	G	剥	片	玉	織	2.0	2.2	0.8	2.9		7D58-46	
204	G	剥	片	安	山	(4.4)	(2.8)	0.9	7.7		7D58-47	
205	G	石	核	流	紋	3.9	3.5	2.0	21.0		7D58-48	
206	G	剥	片	チヤ	一ト	3.4	6.4	1.7	38.0	120°	7D58-49	
207	G	碎	片	玉	織	0.9	1.1	0.3	0.3	100°	7D58-50	
208	G	剥	片	チヤ	一ト	1.7	2.3	0.7	1.8		7D58-51	
209	G	剥	片	チヤ	一ト	1.7	1.7	0.6	0.8	90°	7D58-52	
210	G	剥	片	チヤ	一ト	4.2	3.2	0.9	9.7	120°	7D58-53	
211	G	剥	片	チヤ	一ト	4.3	1.8	0.6	3.7	110°	7D58-54	
212	G	碎	片	玉	織	0.8	1.3	0.3	0.2		7D58-55	
213	G	剥	片	チヤ	一ト	2.9	3.0	1.4	15.7	110°	7D58-56	
214	G	剥	片	安	山	4.2	2.3	1.2	6.5	100°	7D58-57	
215	G	剥	片	玉	織	1.4	1.9	0.4	0.6	90°	7D58-58	
216	G	剥	片	玉	織	1.7	2.0	0.8	1.8	105°	7D58-59	
217	G	剥	片	玉	織	3.5	3.4	1.0	9.8		7D58-60	
218	G	剥	片	流	紋	(2.3)	(1.7)	(0.9)	2.2		7D58-61	
219	G	剥	片	安	山	(2.4)	(0.6)	(0.5)	0.7		7D58-62	
220	G	剥	片	安	山	(2.5)	1.7	0.6	2.8	95°	7D58-63	
221	G	剥	片	玉	織	2.1	1.5	0.4	1.2	115°	7D58-64	
222	G	剥	片	流	紋	4.3	3.4	1.7	19.3	105°	7D58-65	
223	G	剥	片	安	山	6.0	4.2	1.8	44.6	115°	7D58-66	
224	G	剥	片	安	山	1.5	1.2	0.5	0.7	120°	7D58-68	
225	G	剥	片	流	紋	4.0	2.1	0.8	5.9		7D58-69	
226	G	碎	片	安	山	1.5	1.7	0.3	0.7		7D58-70	
227	G	石	核	ホルンフェルス		2.0	3.7	4.0	20.4		7D58-71	
228	G	剥	片	安	山	岩					7D58-72	
229	G	剥	片	ホルンフェルス		2.6	1.6	0.5	1.1	120°	7D58-73	
230	G	剥	片	ホルンフェルス		2.0	2.9	1.2	5.1	60°	7D58-74	
231	G	剥	片	安	山	岩	(2.5)	(2.4)	(0.8)	5.4	85°	7D58-75
232	G	石	核	ホルンフェルス		1.9	4.5	3.8	31.1		7D58-76	
233	G	剥	片	安	山	岩	1.7	1.2	0.6	0.9	105°	7D58-77
234	G	剥	片	流	紋	2.0	2.5	0.9	3.0		7D58-78	
235	G	剥	片	流	紋	2.3	2.0	0.7	2.4	115°	7D58-79	
236	G	剥	片	流	紋	2.0	1.3	0.7	1.4		7D58-80	
237	G	剥	片	流	紋	2.5	1.9	0.6	2.9	115°	7D58-81	
238	G	碎	片	玉	織	(1.0)	(1.3)	(0.7)	0.7		7D58-82	
239	G	ナイフ形石器	一	流	紋	3.4	1.8	0.7	3.0		7D58-83	
240	G	剥	片	チヤ	一ト	3.3	2.0	0.5	2.6	105°	7D58-84	
241	G	剥	片	安	山	岩	(2.4)	2.8	0.4	2.9		7D58-85

イ フ 形 石 器

番号	プロック	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (削面角)	登録番号
242	G	碎	片	チヤート	1.5	1.4	0.6	0.9	7D58-86
243	G	使用痕ある剥片	チヤート	4.7	2.8	1.3	13.0	95°	7D58-87
244	G	剥片	チヤート	(0.8)	(1.7)	(0.3)	0.4	100°	7D58-88
245	G	剥片	チヤート	1.9	0.7	1.4	1.6	7D58-89	
246	G	剥片	泥岩	1.9	1.7	0.4	0.7	120°	7D58-90
247	G	剥片	安山岩	2.2	3.2	2.3	16.0	115°	7D58-91
248	G	剥片	ホルンフェルス	1.5	2.0	0.4	1.4	7D58-92	
249	G	剥片	安山岩	1.9	1.9	0.7	2.1	115°	7D58-93
250	G	石核	泥岩	4.0	4.9	1.1	22.3	50°	7D58-94
251	G	剥片	泥岩	(2.4)	(1.9)	(0.5)	1.4	7D58-95	
252	G	剥片	泥岩	2.4	2.4	0.8	4.2	7D58-96	
253	G	剥片	安山岩	2.4	2.5	0.5	1.6	110°	7D58-97
254	G	剥片	安山岩	3.0	2.4	0.8	5.9	110°	7D58-98
255	G	剥片	玉髓	1.9	1.7	0.6	1.6	110°	7D58-99
256	G	剥片	泥岩	2.3	1.7	0.4	1.1	100°	7D58-100
257	G	剥片	玉髓	1.4	2.2	0.7	0.6	105°	7D58-102
258	G	石核	泥岩	5.0	2.9	3.5	52.8	7D58-103	
259	G	剥片	泥岩	(1.6)	(1.3)	(0.4)	0.6	7D58-104	
260	G	剥片	流紋岩	(1.2)	(2.1)	(0.6)	1.0	7D58-105	
261	G	剥片	チヤート	2.8	1.2	0.4	1.0	80°	7D58-106
262	G	剥片	安山岩	2.0	2.6	0.6	2.3	115°	7D58-107
263	G	二次加工ある剥片	安山岩	4.3	2.3	0.9	6.8	110°	7D58-108
264	G	碎	片	玉髓	1.8	1.5	0.5	0.6	7D58-109
265	G	剥片	安山岩	(1.8)	(1.8)	(0.7)	2.2	115°	7D58-110
266	G	剥片	玉髓	1.4	2.2	0.6	1.0	110°	7D58-111
267	G	剥片	安山岩	4.7	3.0	2.1	23.5	115°	7D58-112
268	G	剥片	流紋岩	1.4	1.5	0.6	0.6	120°	7D58-113
269	G	剥片	流紋岩	3.1	2.4	0.5	2.7	115°	7D58-114
270	G	剥片	シルト岩	1.7	3.3	0.6	3.0	120°	7D58-115
271	G	剥片	玉髓	(1.0)	(1.9)	(0.6)	0.9	7D58-116	
272	G	彫器	チヤート	2.1	2.3	1.0	4.2	7D59-4	
273	G	二次加工ある剥片	安山岩	0.8	2.6	0.7	1.1	7D59-5	
274	G	剥片	安山岩	4.6	2.0	1.0	7.8	7D59-3	
275	Ha	剥片	流紋岩	(1.4)	(1.9)	(0.4)	(0.4)	130°	7D56-4
276	Ha	剥片	流紋岩	2.5	2.0	1.0	2.9	125°	7D56-5
277	Ha	剥片	流紋岩	2.1	2.0	0.6	2.8	7D56-6	
278	Ha	二次加工ある剥片	流紋岩	2.8	2.3	1.0	7.1	115°	7D56-7
279	Ha	剥片	流紋岩	1.8	1.7	0.5	1.3	120°	7D56-8
280	Ha	碎	流紋岩	1.0	0.7	0.3	0.2	120°	7D56-9
281	Ha	剥片	安山岩	3.6	2.1	0.5	3.7	120°	7D56-10
282	Ha	剥片	安山岩	5.4	2.9	1.5	14.7	120°	7D56-11
283	Ha	石核	安山岩	6.1	3.7	2.8	68.5	7D56-13	
284	Ha	ナイフ形石器	安山岩	(4.5)	(1.2)	(0.8)	(4.6)	7D56-14	
285	Ha	石核	安山岩	4.0	2.3	3.3	38.9	7D56-23	
286	Hb	剥片	安山岩	3.3	3.4	0.5	5.3	105°	7D56-15
287	Hb	石核	泥岩	2.9	4.0	4.5	47.7	7D56-16	

番号	プロック	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	打角(削角)	登録番号
288	Hb	ナイフ形石器	安山岩	(5.3)	(1.8)	(1.3)	(10.6)		7D56-17
289	Hb	ナイフ形石器	安山岩	3.4	1.9	1.0	6.3	125°	7D56-18
290	Hb	剥片	泥岩	3.4	2.2	0.9	4.2	115°	7D56-19
291	Hb	剥片	泥岩	2.5	1.8	0.4	1.5		7D56-20
292	Hb	剥片	安山岩	2.7	5.3	1.0	11.3	145°	7D56-21
293	Hb	二次加工及び使用痕ある 剥片	流紋岩	4.3	3.3	0.9	10.1	110°	7D56-22
294	Hb	ナイフ形石器	泥岩	(2.8)	2.6	(0.9)	7.4	115°	7D56-9
295	Hb	剥片	安山岩	1.7	2.6	0.6	2.7	60°	7D66-4
296	Hb	ナイフ形石器	泥岩	(3.9)	2.6	1.0	11.8	105°	7D66-10
297	I	碎片	安山岩	0.7	0.8	0.2	0.1		7D65-10
298	I	剥片	流紋岩	(2.8)	(1.3)	(1.2)	3.2	95°	7D66-5
299	I	ナイフ形石器	泥岩	2.9	1.3	0.9	2.3		7D66-7
300	I	ナイフ形石器	泥岩	(1.2)	(1.0)	(0.7)	0.8		7D66-8
301	I	碎片	安山岩	1.3	1.7	0.3	0.7		7D66-9
302	I	剥片	安山岩	2.8	2.1	0.5	2.4	80°	7D66-10
303	I	二次加工ある剥片	安山岩	2.4	2.5	1.1	6.0	120°	7D66-11
304	I	剥片	泥岩	1.4	2.3	0.2	0.8	125°	7D66-12
305	I	剥片	泥岩	2.7	1.8	0.5	1.3		7D66-13
306	I	剥片	安山岩	1.2	1.8	0.6	1.1	115°	7D66-14
307	I	剥片	泥岩	(2.3)	(1.1)	(0.7)	1.4		7D66-15
308	I	剥片	安山岩	(2.8)	(1.4)	(0.6)	3.1	105°	7D66-16
309	I	剥片	安山岩	(1.3)	(1.3)	(0.4)	0.8	120°	7D66-17
310	I	碎片	安山岩	0.6	1.0	0.4	0.2		7D66-18
311	I	剥片	泥岩	3.6	0.9	0.7	2.2		7D66-19
312	I	ナイフ形石器	安山岩	3.2	1.7	1.1	4.2		7D66-20
313	I	石核	安山岩	3.9	3.7	2.3	44.9		7D66-21
314	I	剥片	安山岩	(3.1)	(2.3)	0.6	3.6	105°	7D66-23
315	I	ナイフ形石器	安山岩	3.5	1.8	1.1	7.3		7D66-24
316	I	剥片	安山岩	2.5	2.7	0.6	3.6	110°	7D66-25
317	I	剥片	泥岩	1.3	1.7	0.3	0.6	110°	7D66-26
318	I	碎片	安山岩	1.3	1.4	0.4	0.6		7D66-27
319	I	剥片	安山岩	(1.9)	(1.4)	(0.4)	0.9	100°	7D66-28
320	I	剥片	安山岩	1.7	2.2	0.3	1.1	115°	7D66-29
321	I	剥片	泥岩	3.9	1.1	0.8	2.8		7D66-30
322	J	二次加工ある剥片	玉髓	3.3	3.1	1.1	8.4	130°	7D64-4
323	J	剥片	安山岩	(1.0)	(1.3)	(0.7)	0.8		7D65-7
324	J	剥片	安山岩	5.9	3.5	1.2	23.7	120°	7D74-4
325	J	剥片	泥岩	(5.6)	2.7	1.2	14.9	100°	7D74-6
326	J	剥片	安山岩	3.4	3.8	1.0	13.2	120°	7D74-7
327	J	剥片	砂岩	(1.7)	(2.4)	(0.6)	2.5	95°	7D74-8
328	J	剥片	泥岩	(2.9)	(1.8)	(0.4)	(2.3)	115°	7D74-10
329	J	打面再生剥片	安山岩	3.5	3.4	1.6	16.5	110°	7D74-11
330	J	剥片	流紋岩	3.1	2.6	0.7	3.7	120°	7D75-4
331	Ka	石核	流紋岩	5.8	3.9	2.3	47.6		7D73-4
332	Ka	碎片	安山岩	0.9	1.1	0.3	0.4	90°	7D73-6
333	Ka	剥片	チヤート	4.9	2.3	0.8	9.3	115°	7D73-7

番号	プロック	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	打角(倒壊角)	登録番号
334	Ka	剝片	安山岩	(2.4)	(1.7)	(0.5)	1.9	110°	7D73-8
335	Ka	剝片	安山岩	(2.3)	(2.7)	(1.0)	5.3	120°	7D73-9
336	Ka	剝片	安山岩	2.5	3.2	0.6	2.8	110°	7D73-10
337	Ka	剝片	安山岩	(1.1)	(2.6)	(1.0)	3.8		7D73-11
338	Ka	剝片	玉髓	4.5	2.7	2.5	17.4	130°	7D73-12
339	Ka	剝片	安山岩	3.3	2.5	0.5	4.2	120°	7D73-13
340	Ka	剝片	流紋岩	5.3	3.2	1.2	14.7	110°	7D73-14
341	Ka	剝片	安山岩	3.2	2.8	0.7	5.4	115°	7D73-15
342	Ka	剝片	珪質頁岩	2.2	2.0	0.3	1.1	115°	7D73-16
343	Ka	剝片	安山岩	4.3	2.1	1.5	11.9	125°	7D73-17
344	Ka	剝片	流紋岩	5.0	2.0	0.6	5.5	80°	7D73-18
345	Ka	剝片	デイサイト岩	2.8	1.9	0.5	1.7	115°	7D73-19
346	Ka	剝片	流紋岩	(4.4)	(1.9)	0.8	6.7		7D73-20
347	Ka	剝片	安山岩	(2.1)	(3.1)	(0.9)	4.7		7D73-21
348	Ka	石核	流紋岩	5.8	3.2	2.0	33.0		7D73-22
349	Ka	石核	安山岩	5.0	5.3	1.4	35.3		7D73-23
350	Ka	剝片	泥安山岩	4.7	2.0	0.9	4.5	145°	7D73-33
351	Ka	剝片	安山岩	(2.3)	(2.7)	(1.3)	8.1		7D73-34
352	Kb	剝片	安山岩	(2.7)	2.2	0.7	3.3		7D73-24
353	Kb	剝片	安山岩	3.3	2.3	1.8	7.9		7D73-25
354	Kb	剝片	安山岩	2.9	1.5	0.4	1.4	115°	7D73-26
355	Kb	碎片	安山岩	(0.7)	(0.8)	(0.2)	0.1		7D73-27
356	Kb	剝片	安山岩	1.6	1.5	0.2	0.4	110°	7D73-28
357	Kb	石核	流紋岩	3.2	3.6	2.3	27.3		7D73-29
358	Kb	石核	安山岩	4.2	2.8	1.7	21.2		7D73-30
359	Ka	石核	安山岩	2.9	2.1	2.6	18.7		7D73-31
360	Ka	剝片	安山岩	3.1	1.5	1.0	5.8	115°	7D73-32
361	Kb	剝片	安山岩	(2.3)	(2.7)	(1.3)	8.1		7D73-35
362	Kb	石核	流紋岩	3.5	4.1	2.9	40.7		7D73-36
363	Kb	ナイフ形石器	安山岩	(2.3)	(1.4)	(0.7)	1.9		7D73-37
364	Kb	剝片	流紋岩	(1.2)	(2.0)	(0.4)	0.8	105°	7D73-38
365	Kb	剝片	安山岩	2.5	2.6	0.8	6.0	115°	7D73-39
366	L	碎片	安山岩	0.9	0.8	0.4	0.2	100°	7D75-5
367	L	剝片	安山岩	4.2	4.0	0.7	7.6	110°	7D76-4
368	L	打面再生剝片	凝灰岩	(3.5)	(3.9)	1.0	9.1	105°	7D76-5
369	L	碎片	安山岩	0.6	0.9	0.2	0.1		7D76-6
370	L	剝片	砂安山岩	3.4	2.0	0.4	1.6	125°	7D76-7
371	L	剝片	砂安山岩	4.5	1.8	0.8	6.8	120°	7D76-8
372	L	剝片	砂安山岩	3.3	3.2	0.9	7.0	110°	7D76-9
373	L	剝片	砂凝灰岩	2.7	3.9	0.5	5.9	125°	7D76-10
374	L	ナイフ形石器	凝灰岩	(3.3)	(2.1)	(1.4)	10.9		7D76-11
375	L	剝片	凝灰岩	(1.2)	(1.8)	1.1	1.7		7D76-12
376	L	剝片	安山岩	(2.4)	(3.1)	(0.7)	5.6	110°	7D76-13
377	L	打面再生剝片	凝灰岩	(1.8)	3.8	(0.9)	5.6		7D76-14
378	L	剝片	砂安山岩	(2.3)	(2.5)	1.0	3.5	120°	7D76-15
379	L	剝片	砂岩	(3.5)	(5.3)	(1.1)	21.4		7D76-16

番号	ブロック	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	打削角度	登録番号
380	L	碎	片安山岩	(1.1)	(1.5)	(0.3)	0.5		7D76-17
381	L	剝	片凝灰岩	(3.0)	(2.7)	(1.0)	8.6		7D76-18
382	L	剝	片凝灰岩	4.1	1.9	0.6	5.0	110°	7D76-19
383	L	剝	片安山岩	(4.2)	3.2	1.5	17.9	120°	7D76-20
384	L	剝	片凝灰岩	(3.1)	(4.8)	1.1	9.9		7D76-21
385	L	スクレイバ	一安山岩	(3.2)	(2.8)	(0.8)	5.7		7D76-22
386	L	ナイフ形石器	一安山岩	3.4	1.7	0.8	3.6		7D76-23
387	L	スクレイバ	一安山岩	(3.2)	(2.1)	(0.9)	5.2		7D76-24
388	L	剝	片砂凝灰岩	(2.9)	(3.4)	(0.6)	4.4	120°	7D76-25
389	L	剝	片砂凝灰岩	(4.1)	2.3	1.0	8.9	100°	7D76-26
390	L	剝	片安山岩	(1.3)	(1.0)	(0.4)	0.4		7D76-27
391	L	剝	片安山岩	(2.7)	(2.0)	(0.7)	4.2		7D76-28
392	L	剝	片安山岩	(2.1)	1.6	0.7	2.1	115°	7D76-29
393	L	剝	片泥岩	2.9	2.8	1.1	8.0	95°	7D76-30
394	L	剝	片泥岩	3.3	2.6	1.3	6.3	110°	7D76-31
395	L	角錐状石器	流紋岩	(1.9)	(1.4)	(0.8)	1.7		7D76-33
396	L	剝	片砂岩	2.0	3.5	0.4	2.2		7D76-34
397	L	打面再生剝	片安山岩	3.9	2.3	1.2	7.5	115°	7D76-35
398	L	剝	片泥岩	5.2	4.7	1.4	24.7	130°	7D76-36
399	L	角錐状石器	流紋岩	(1.5)	(1.4)	(0.7)	(1.3)		7D76-37
400	L	碎	片凝灰岩	1.2	0.9	0.2	0.2		7D76-38
401	L	剝	片凝灰岩	(2.6)	3.4	(0.6)	4.6		7D76-39
402	L	剝	片安山岩	2.3	3.8	0.8	4.7	145°	7D76-40
403	L	剝	片凝灰岩	(5.2)	(2.2)	0.9	7.3		7D76-41
404	L	剝	片泥岩	(2.7)	(2.6)	(0.9)	4.7	100°	7D76-42
405	L	角錐状石器	流紋岩	(1.0)	(0.8)	(0.6)	(0.2)		7D76-43
406	L	剝	片砂凝灰岩	3.6	2.2	0.6	3.4	85°	7D76-44
407	L	剝	片安山岩	1.2	2.4	0.4	1.3	140°	7D85-5
408	L	剝	片安山岩	(2.9)	(2.5)	(1.0)	6.9		7D85-6
409	L	剝	片安山岩	2.8	4.0	0.7	7.4	120°	7D85-7
410	L	剝	片安山岩	3.4	3.0	0.9	9.2	105°	7D85-8
411	L	ナイフ形石器	凝灰岩	(3.0)	(1.7)	(1.3)	4.6		7D85-9
412	L	剝	片凝灰岩	(1.5)	(1.5)	(0.4)	0.7		7D85-10
413	L	打面再生剝	片凝灰岩	4.7	5.7	1.1	23.1	115°	7D86-4
414	L	剝	片凝灰岩	3.9	2.8	1.5	15.4	105°	7D86-8
415	L	剝	片安山岩	4.9	4.0	1.5	24.6	110°	7D86-9
416	L	角錐状石器	珪質岩	5.3	1.5	1.1	8.4		7D86-10
417	L	石核	安山岩	3.5	4.3	1.7	22.8		7D86-11
418	L	剝	片安山岩	5.0	2.5	1.4	11.2	130°	7D86-12
419	L	剝	片泥岩	4.2	5.0	1.1	17.2	115°	7D86-13
420	M	剝	片安山岩	(2.9)	(2.8)	(1.3)	10.0	110°	7D90-4
421	M	剝	片安山岩	1.4	1.6	0.4	0.6	130°	7D90-5
422	M	剝	片安山岩	(1.4)	(3.0)	0.6	3.1		7D90-6
423	M	石核	安山岩	(3.6)	(2.2)	1.2	0.8		7D90-7
424	M	剝	片安山岩	2.2	2.3	0.7	2.2	120°	7D90-8
425	M	剝	片安山岩	(4.1)	(3.3)	(1.1)	13.3		7D90-9

番号	プロック	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	打角(制限角)	登録番号
426	M	剝	片安山岩	(2.6)	2.2	0.9	5.4		7D90-10
427	M	剝	片安山岩	(0.9)	(1.6)	0.3	0.3		7D90-11
428	M	ナイフ形石器	安山岩	3.4	1.6	0.9	3.2		7D90-12
429	M	剝	片安山岩	(2.7)	2.0	0.9	6.8		7D90-13
430	M	剝	片安山岩	(2.9)	(1.6)	0.8	3.2		7D90-14
431	M	剝	片安山岩	(2.0)	(1.7)	(0.5)	1.8	115°	7D90-15
432	M	剝	片安山岩	(3.0)	(2.9)	(0.8)	4.6		7D90-16
433	M	剝	片安山岩	2.9	2.4	0.8	3.5	115°	7D90-17
434	M	剝	片安山岩	2.5	4.9	0.9	8.6	130°	7D90-18
435	M	剝	片安山岩	(2.7)	2.9	0.8	7.5	125°	7D90-19
436	M	ナイフ形石器	安山岩	4.1	2.1	1.2	7.3		7D90-20
437	M	二次加工ある剝片	安山岩	2.7	2.9	0.7	3.2	120°	7D90-22
438	M	剝	片安山岩	(3.2)	(2.1)	(1.6)	8.4		7D90-23
439	M	剝	片安山岩	2.4	2.5	0.7	2.9	120°	7D90-24
440	M	剝	片安山岩	(2.7)	(1.9)	1.1	4.5		7D90-25
441	M	剝	片安山岩	1.6	2.5	0.7	2.1	95°	7D90-26
442	M	剝	片安山岩	(2.5)	4.0	0.8	9.5		7D90-27
443	M	剝	片安山岩	(1.0)	(1.7)	(0.3)	0.4		7D90-28
444	M	剝	片安山岩	1.4	1.5	0.4	0.5	105°	7D91-4
445	M	ナイフ形石器	安山岩	2.8	1.8	1.1	5.8		7D91-5
446	M	剝	片安山岩	(2.5)	(2.5)	0.6	2.7		7D91-6
447	M	剝	片安山岩	2.1	3.1	1.0	2.4	70°	7D91-8
448	M	剝	片安山岩	4.3	3.5	1.4	23.7	120°	7D91-9
449	M	剝	片安山岩	(1.8)	(2.2)	(0.9)	1.8		7D91-10
450	M	ナイフ形石器	安山岩	3.3	2.2	0.8	5.9		7D91-11
451	M	剝	片安山岩	(4.4)	(2.7)	(1.2)	9.8		7D91-12
452	M	剝	片安山岩	2.2	2.6	0.6	4.6	100°	8D00-4
453	M	石核	安山岩	(2.6)	4.7	1.5	16.0		8D00-5
454	M	剝	片安山岩	2.6	(1.3)	1.3	2.6	115°	8D00-6
455	M	剝	片安山岩	(2.2)	(3.4)	(0.9)	(2.4)		8D00-7
456	M	剝	片安山岩	(4.5)	(3.3)	1.3	18.5		8D01-4
457	M	剝	片安山岩	(2.5)	(2.5)	(1.6)	5.0		8D01-5
458	Na	細刃	黒曜石	2.8	0.6	0.2	0.4	115°	7C64-6
459	Na	二次加工ある剝片	黒曜石	1.6	1.6	0.5	1.2		7C65-7
460	Na	二次加工ある剝片	安山岩	(1.1)	(2.0)	(0.8)	2.0		7C65-9
461	Na	剝	片玉髓	1.3	1.9	0.4	1.0	120°	7C75-5
462	Na	剝	片ホルンフェルス	(2.6)	(4.2)	(0.4)	5.3		7C75-6
463	Na	剝	片ホルンフェルス	2.7	3.8	0.8	9.3		7C75-8
464	Na	剝	片ホルンフェルス	(1.7)	(2.3)	(0.7)	2.0	115°	7C75-9
465	Na	剝	黒曜石	(1.2)	(2.2)	(0.2)	0.5		7C75-11
466	Na	剝	チャート	(2.0)	(1.8)	(0.9)	3.5		7C75-12
467	Nb	石核	流紋岩	(2.5)	(3.0)	(2.4)	17.2		7C65-10
468	Nb	剝	片ホルンフェルス	(2.2)	(2.3)	(1.0)	3.7		7C65-11
469	Nb	剝	片黒曜石	1.7	2.5	1.1	2.8	100°	7C65-12
470	Nb	剝	片泥岩	2.3	2.9	0.8	3.9		7C65-13
471	Nb	剝	片チャート	(3.7)	(4.4)	(1.3)	19.9		7C65-14

番号	プロ ック	器 種	石 材	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	打 角 (剥離角)	登録番号
472	Nb	剝 片	黒 曜 石	1.7	1.6	0.4	0.8	110°	7C65-15
473	Nb	剝 片	チ ヤ ー ト	2.8	3.6	0.6	6.0		7C65-16
474	O	剝 片	流 紋 岩	2.0	3.2	0.8	5.1	120°	7C74-4
475	O	二次加工ある剝片	黒 曜 石	(1.9)	(1.2)	(1.3)	1.7		7C74-7
476	O	二次加工ある剝片	黒 曜 石	(2.2)	(1.0)	(0.5)	1.6		7C74-8
477	O	細石刃核	黒 曜 石	2.2	1.3	1.1	4.2		7C74-9
478	O	剝 片	黒 曜 石	1.8	2.5	0.7	1.6	85°	7C74-10
479	O	剝 片	泥 岩	2.1	2.3	0.4	2.0		7C74-11
480	O	剝 片	黒 曜 石	3.1	2.0	1.1	4.3	130°	7C74-12
481	O	剝 片	安 山 岩	3.8	4.5	1.2	20.7		7C74-13
482	O	ピエスエスキュー	黒 曜 石	1.6	2.3	0.5	2.0		7C74-14
483	O	剝 片	黒 曜 石	3.3	2.0	1.2	9.3		7C75-15
484	P	ナイフ形石器	流 紋 岩	1.8	2.9	1.0	3.7		8C04-4
485	P	剝 片	流 紋 岩	(1.3)	(1.3)	(0.4)	0.6		8C04-5
486	P	ナイフ形石器	流 紋 岩	2.1	1.7	0.8	1.9		8C04-6
487	P	ナイフ形石器	流 紋 岩	2.0	1.3	0.4	1.3		8C04-7
488	P	剝 片	流 紋 岩	1.6	1.5	0.3	0.5	110°	8C04-8
489	P	剝 片	流 紋 岩	1.2	1.5	0.3	0.4	110°	8C04-9
490	P	剝 片	流 紋 岩	1.3	1.5	0.2	0.3	115°	8C04-10
491	P	ナイフ形石器	流 紋 岩	(2.2)	(1.3)	(0.5)	2.0		8C04-11
492	P	碎 片	流 紋 岩	1.1	0.9	0.2	0.1		8C04-12
493	P	ナイフ形石器	流 紋 岩	(1.0)	(1.5)	(0.4)	0.5		8C04-13
494	P	ナイフ形石器	流 紋 岩	2.5	1.6	0.6	2.2		8C04-14
495	P	剝 片	流 紋 岩	1.3	1.7	0.4	0.7	90°	8C04-15
496	P	ナイフ形石器	流 紋 岩	2.7	1.4	0.8	1.9		8C04-16
497	P	石 核	流 紋 岩	(2.6)	(2.5)	(1.1)	6.6		8C04-17
498	P	石 核	流 紋 岩	2.8	3.5	1.5	11.6		8C04-18
499	P	碎 片	流 紋 岩	0.4	0.7	0.1	0.03		8C04-19
500	P	二次加工ある剝片	流 紋 岩	1.1	1.1	0.3	0.2	90°	8C04-20
501	P	ナイフ形石器	流 紋 岩	2.3	1.2	0.4	1.0		8C04-21
502	P	剝 片	流 紋 岩	1.6	1.1	0.4	0.7	115°	8C04-22
503	P	ナイフ形石器	流 紋 岩	1.5	1.3	0.5	1.3		8C04-23
504	Q	ナイフ形石器	流 紋 岩	3.4	1.2	0.8	2.2		8C26-6
505	Q	二次加工ある剝片	流 紋 岩	1.5	1.8	0.5	1.1	120°	8C26-7
506	Q	剝 片	泥 岩	2.0	2.0	0.5	1.9	110°	8C26-8
507	Q	ナイフ形石器?	チ ヤ ー ト	1.3	1.0	0.4	0.5		8C36-4
508	Q	剝 片	流 紋 岩	0.8	1.2	0.2	0.2	125°	8C36-5
509	Q	碎 片	黒 曜 石	1.3	0.6	0.4	0.1		8C36-6
510	Q	剝 片	黒 曜 石	1.3	1.3	0.4	0.5		8C36-7
511	Q	剝 片	流 紋 岩	0.8	1.0	0.2	0.1	120°	8C37-4
512	Q	二次加工ある剝片	流 紋 岩	2.8	2.1	0.8	4.1	115°	8C37-5
513	Q	ナイフ形石器	黒 曜 石	2.0	1.0	0.6	0.8		8C37-6
514	Q	剝 片	流 紋 岩	(1.5)	(1.6)	(0.3)	(0.7)	100°	8C37-7
515	Q	剝 片	流 紋 岩	2.7	1.9	0.5	1.9		8C37-8
516	Q	碎 片	流 紋 岩	1.3	1.2	0.4	0.3		8C37-9
517	Q	碎 片	黒 曜 石	0.8	0.8	0.2	0.1	105°	8C37-10

番号	プロ ック	器 種	石 材	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	打 角 (斜面)	登録番号
518	Q	碎	片 黒曜石	(0.7)	(0.7)	(0.2)	(0.1)		8C37-11
519	T	剥	片 ホルンフェルス	1.7	1.2	0.4	0.8	130°	6E09-4
520	T	剥	片 砂岩	2.8	3.0	0.9	8.9	120°	6E09-5
521	T	剥	片 流紋岩	1.5	1.6	0.4	0.5	120°	6E19-4
522	T	剥	片 砂岩	4.0	3.1	0.9	11.9	115°	6E19-6
523	T	石	核 ホルンフェルス	3.6	5.2	1.6	29.4		6E19-8
524	T	石	核 ホルンフェルス	3.1	5.0	1.6	22.3		6E19-9
525	T	剥	片 安山岩	3.3	1.7	0.5	2.0	85°	6E19-10
526	プロツク タ外	剥	片 流紋岩	(1.7)	(3.6)	(0.7)	3.4	110°	0D79-4
527	プロツク タ外	剥	片 流紋岩	(2.0)	(1.5)	(0.2)	0.6	110°	0D79-5
528	プロツク タ外	二次加工ある剥片	片 流紋岩	4.8	2.8	1.0	10.3		0D79-6
529	プロツク タ外	剥	片 安山岩	(1.8)	(2.0)	0.4	1.1		0D89-4
530	プロツク タ外	二次加工ある剥片	片 黒曜石	1.5	1.4	0.4	0.7	90°	0E70-4
531	プロツク タ外	剥	片 黒曜石	2.9	1.6	0.3	0.9	120°	0E70-5
532	プロツク タ外	二次加工ある剥片	片 黒曜石	2.5	2.1	0.3	1.9	130°	0E70-6
533	プロツク タ外	二次加工ある剥片	片 黒曜石	0.9	1.8	0.3	0.5	130°	0E70-7
534	プロツク タ外	スクレイバー	片 黒曜石	1.8	2.5	0.4	1.9		0E80-4
535	プロツク タ外	剥	片 流紋岩	1.8	2.2	0.5	1.5	120°	0E81-6
536	プロツク タ外	剥	片 流紋岩	4.3	4.3	1.1	17.8	120°	0E91-4
537	プロツク タ外	ナイフ形石器	片 黑曜石	2.9	1.5	0.6	2.2		0E92-4
538	プロツク タ外	スクレイバー	片 流紋岩	3.0	3.4	1.6	12.5		1E02-2
539	プロツク タ外	剥	片 泥岩	3.7	2.2	0.4	3.0		1E02-4
540	プロツク タ外	石核	片 流紋岩	3.1	2.7	1.3	8.0		1E02-5
541	プロツク タ外	剥片	片 流紋岩	6.0	3.4	1.0	18.4	110°	1E04-2
542	プロツク タ外	石核調整剝片	片 流紋岩	5.3	4.0	2.3	26.8	125°	1E10-2-②
543	プロツク タ外	石核調整剝片	片 流紋岩	4.8	1.7	1.3	7.0	120°	1E10-2-③
544	プロツク タ外	剥	片 流紋岩	3.1	2.6	1.3	8.2	110°	1E10-2-④
545	プロツク タ外	剥	片 流紋岩	(2.6)	(2.3)	(0.5)	2.4	110°	1E10-2-⑤
546	プロツク タ外	剥	片 流紋岩	3.8	1.4	0.8	2.8	110°	1E10-4
547	プロツク タ外	石核	片 流紋岩	3.2	3.5	2.7	18.1		1E10-5
548	プロツク タ外	剥	片 流紋岩	2.9	2.8	2.1	12.9	120°	1E10-6
549	プロツク タ外	剥	片 流砂岩	4.3	2.8	1.3	10.6	80°	1E10-8
550	プロツク タ外	ナイフ形石器	片 流紋岩	4.0	2.2	0.8	6.4		1E23-4
551	プロツク タ外	石刃状剥片	片 流紋岩	6.8	3.1	1.1	15.8	120°	1E23-5
552	プロツク タ外	二次加工ある剥片	片 流紋岩	(3.1)	2.0	0.5	2.9		1E74-2
553	プロツク タ外	剥	片 泥岩	3.7	2.5	1.6	10.1	130°	2B28-3
554	プロツク タ外	剥	片 チヤー一頁岩	1.9	2.1	0.7	2.3	110°	4E22-4
555	プロツク タ外	剥	片 琉質一頁岩	4.7	3.4	0.9	10.8		5E37-4
556	プロツク タ外	槍先形尖頭器	片 琉質一頁岩	3.7	1.7	0.5	3.1		5E37-5
557	プロツク タ外	剥	片 流紋岩	3.0	3.1	0.6	4.6	110°	5E44-4
558	プロツク タ外	剥	片 流砂岩	(2.6)	(3.8)	(0.9)	7.9		5E92-4
559	プロツク タ外	剥	片 砂岩	3.3	6.1	1.7	31.1	115°	5E93-4
560	プロツク タ外	剥	片 砂岩	2.0	1.9	0.8	2.3	90°	6D86-4
561	プロツク タ外	礫	片 ホルンフェルス	(5.4)	(4.3)	(1.6)	43.0		6D95-4
562	プロツク タ外	剥	片 流紋岩	1.8	1.5	0.3	0.7		6E21-4
563	プロツク タ外	剥	片 黑曜石	2.0	1.8	0.3	0.7		6E85-4

番号	プロック	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	打角(倒角)	登録番号
564	プロック	剝片	黒曜石	(1.5)	(1.9)	(0.2)	0.5		6E85-5
565	プロック	剝片	黒曜石	(0.8)	(1.7)	(0.2)	0.2		6E86-4
566	プロック	二次加工ある剝片	黒曜石	1.2	1.4	0.4	0.4	120°	7C64-4
567	プロック	剝片	泥岩	1.5	1.5	0.2	0.6		7C64-5
568	プロック	スクレイバー	黒曜石	2.3	1.5	0.7	2.8		7C73-4
569	プロック	剝片	黒曜石	1.4	2.9	0.9	3.1		7C73-5
570	プロック	槍先形尖頭器	流紋岩	2.0	3.2	0.8	5.1	120°	7C74-17
571	プロック	二次加工ある剝片	黒曜石	1.8	2.9	0.6	2.7	120°	7C75-16
572	プロック	剝片	泥岩	2.2	1.0	0.5	0.9	110°	7C85-4
573	プロック	剝片	ホルンフェルス	(3.5)	(6.1)	(1.6)	39.2		7D60-4
574	プロック	剝片	流紋岩	(2.7)	(2.8)	(0.8)	4.5	110°	7D60-5
575	プロック	石核	泥岩	2.0	3.0	3.1	14.9		7D61-4
576	プロック	剝片	安山岩	2.6	1.8	0.5	2.4	120°	7D68-3
577	プロック	ナイフ形石器	安山岩	(3.0)	(1.2)	(0.9)	3.3		7D68-4
578	プロック	ナイフ形石器	泥岩	(2.7)	(2.1)	(0.8)	4.2		7D68-5
579	プロック	ナイフ形石器	泥岩	(3.4)	(2.3)	(1.2)	8.7		7D68-6
580	プロック	彫器	珪質頁岩	5.0	2.2	0.9	6.2		7D70-4
581	プロック	剝片	黒曜石	1.9	1.8	0.7	1.6		7E04-6
582	プロック	彫器	泥岩	2.5	1.6	0.7	2.4		7E12-7
583	プロック	二次加工ある剝片	ホルンフェルス	(4.7)	(5.0)	(0.9)	24.7		7E12-11
584	プロック	剝片	ホルンフェルス	1.7	2.2	0.3	0.9	120°	7E13-5
585	プロック	ビエスエスキュー	チャート	2.3	1.6	0.4	2.1		7E21-9
586	プロック	槍先形尖頭器	流紋岩	5.1	1.7	0.8	5.9		7E31-4
587	プロック	剝片	安山岩	(1.3)	(3.5)	(0.4)	1.6		8C05-4
588	プロック	剝片	流紋岩	1.5	2.4	0.5	1.5	125°	8C16-4
589	プロック	碎片	流紋岩	1.0	1.1	0.6	0.4		8C26-4
590	プロック	ナイフ形石器	黒曜石	1.7	1.3	0.4	0.6		8C26-5
591	プロック	碎片	泥岩	1.0	0.9	0.4	0.2		III-1
592	プロック	碎片	流紋岩	0.6	1.1	0.2	0.1		III-2
593	プロック	剝片	流紋岩	0.8	1.1	0.2	0.1	120°	III-3
594	プロック	剝片	チャート	1.6	1.3	0.3	0.5	110°	0003-8

(II) III層直上石器群 (第107図、図版37、第6表)

先土器時代終末から縄文時代初頭に位置付けられる石器が10点出土した。660、661、662の3点を除き遺跡各所からの出土である。

653は両面加工の槍先形尖頭器である。これも表面と裏面の調整剝離に対応関係がみられ、素材となった剝片を左右に回転させて同方向から調整剝離を施していると思われる。

654は先端が左傾した半両面加工の槍先形尖頭器である。横長の部厚い剝片を素材として用いており、裏面の約半分には主要剝離面が残る。調整剝離は、表面には器体整形用として両側縁全体から施され、裏面には器体を薄くするために打面部及び先端部に施している。

655も先端が左傾した半両面加工の槍先形尖頭器である。表面先端部には広く調整部分が残る。調整剝離はやはり左右に回転させて同一方向から施していると考えられる。

657は周辺加工の槍先形尖頭器である。厚みのある縦長の剝片を素材に用いて、調整剝離は背面左側縁上半部と右側縁には主要剝離面から、末端部は背面から施している。礫面を打面としている。

656は丸みのある断面をした有舌尖頭器である。舌部は浅い抉りで長い。

658～662はピエスエスキューである。

658は表面の右端に礫面が残る。

659は下部縁辺は細かな鋸歯状を呈する。

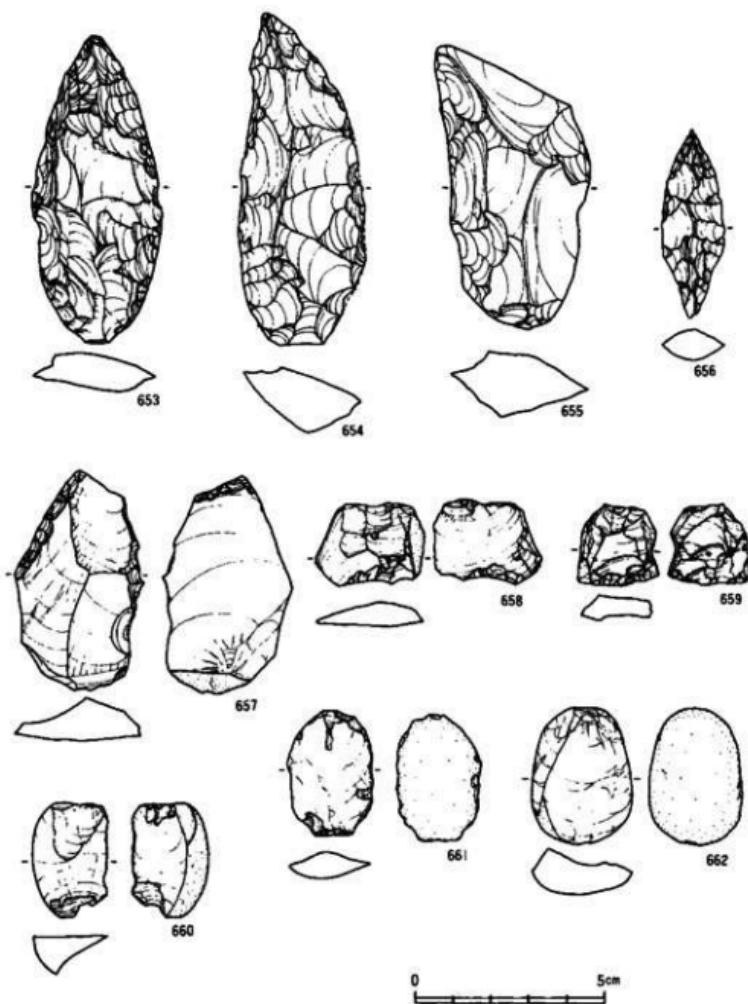
660は裏面右側に広く礫面が残る。

661は裏面は礫面のままで周縁には細かな剝離痕があり、使用痕であろうか。

662も裏面に礫面がそのまま残る。

第6表 III層直上石器群一覧表

番号	器 種	石 材	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	打 角 (剝離角)	登録番号
653	槍先形尖頭器	スレート	8.0	3.4	1.0	26.0		1E24-2
654	槍先形尖頭器	安山岩	8.7	3.3	1.4	42.8		6C17-1
655	槍先形尖頭器	安山岩	7.5	3.7	1.8	46.0		1E14-2-2
656	有舌尖頭器	安山岩	(4.7)	1.7	0.8	5.8		5D59-2
657	槍先形尖頭器	流紋岩	5.8	3.4	1.4	21.6		1E84-2-2
658	ピエスエスキュー	流紋岩	2.1	2.9	0.7	4.0		0D96-2-5
659	ピエスエスキュー	黒曜石	2.1	2.2	0.7	2.6		2E03-2-3
660	ピエスエスキュー	チャート	3.0	2.0	1.1	5.9		7E11-4
661	ピエスエスキュー	チャート	3.3	2.4	0.7	5.2		7E11-5
662	ピエスエスキュー	チャート	3.5	2.8	1.8	19.2		7E12-5



第107図 III層直上石器群実測図 (2/3)

(2) I、II層出土先土器時代石器群 (第108図、図版38、第7表)

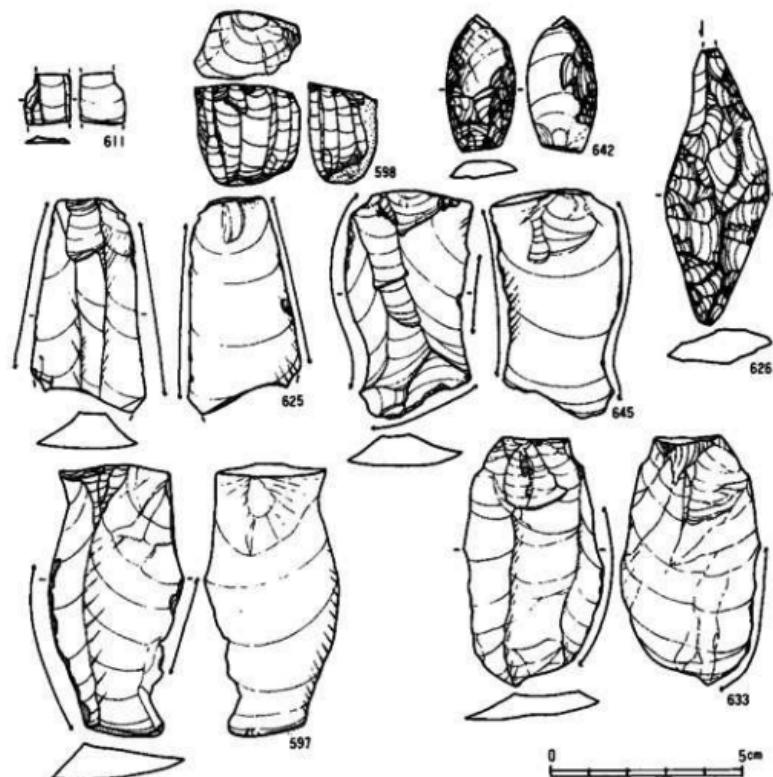
I層(表土擾乱層)、遺構覆土、表採、それにII層出土でIII層主体石器群各ブロックへの帰属が不明のもの等々を「I・II層出土先土器時代石器群」として一括した。

器種別にみると、槍先形尖頭器3点、細石刃2点、細石刃核1点、ナイフ形石器7点、スクレイパー3点、揉錐器1点、二次加工ある剝片9点、使用痕ある剝片4点、打面再生剝片1点、その他剝片・碎片27点、計58点である。

611はやや幅広であるが細石刃と思われる。上下とも切断されている。

598は背後から下面にかけて縦面を残した細石刃核である。1回の剝離で平坦な打面がつくれ、打面調整は施されない。

642はやや幅広の縦長剝片を素材とした周辺加工の槍先形尖頭器である。基部には打面が残る。調整剝離はIII層ブロック外出土の556と同様剝片を左右に回転して同一方向から施している



第108図 I・II層出土先土器時代石器群実測図 (2/3)

が、表面左側縁にもかなり調整が施され556よりも加工量が多い。先端を少し欠損している。

626は先端部に1条の楕状剝離が入る両面加工の槍先形尖頭器である。先端は欠損している。側面形態は楕状剝離が抜けたところあたりから先が少し上方に屈曲し、やや厚くなっている。調整剝離もそのあたりまでは裏面に仕上げ痕があるが、それから先は表面の方に移行している。

597、625、633、645はいずれも使用痕がある剝片である。

597は背面左側縁の使用痕が顕著な石刃状剝片である。打面は平坦で広く残り、末端には疊面がみえる。

625は両側縁と2本の稜が直線状にのびた石刃であるが、下半を欠損している。打面調整は粗く施されていると思われる。両側縁には微細な使用痕がみられる。

633は両側縁下半に使用痕がみられる縦長剝片で打面調整はあまり顕著でない。

645は剝離面の交点を打点として剥取された縦長剝片であるが、周縁全体特に末端の使用痕が顕著である。

第7表 I・II層出土先土器時代石器群一覧表

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剝離角)	登録番号
595	スクレイバー	黒曜石	2.3	2.6	0.9	4.6		OD69-2-1
596	様雑器	流紋岩	4.4	2.2	0.4	3.7		OD85-2
597	使用痕ある剝片	安山岩	6.8	3.4	1.2	23.8	115°	OD87-2
598	細石刃核	流紋岩	2.6	2.8	1.8	16.6		OD95-2-1
599	二次加工ある剝片	流紋岩	(2.9)	(4.7)	(1.7)	11.4		OD95-2-2
600	打面再生剝片	流紋岩	2.3	2.9	1.6	8.8	120°	OD95-2-4
601	剝片	流紋岩	(2.4)	(2.2)	(0.7)	3.2		OD95-2-5
602	剝片	安山岩	(3.2)	(4.5)	(1.2)	16.0		OD95-2-6
603	剝片	安山岩	(3.2)	3.1	0.7	5.3		OD95-2-7
604	二次加工ある剝片	流紋岩	2.1	2.4	1.0	3.9	130°	OD96-2-3
605	細石刃	流紋岩	2.7	1.0	0.4	0.8		OD96-2-4
606	剝片	流紋岩	2.8	1.5	0.8	2.6	120°	OD96-2-6
607	剝片	流紋岩	3.3	3.2	0.8	6.4	115°	OD96-2-7
608	剝片	流紋岩	2.3	2.1	0.8	2.3	130°	OD98-2-2
609	剝片	流紋岩	(3.0)	(2.0)	(0.5)	3.2	115°	OD98-2-3
610	剝片	安山岩	4.9	(3.8)	0.6	9.9		OD98-2-4
611	細石刃	珪質岩	(1.4)	(1.2)	(0.2)	0.3		OD98-2-5
612	剝片	流紋岩	2.5	2.6	0.5	2.7	105°	OE71-2-2
613	二次加工ある剝片	流紋岩	6.7	2.9	1.1	21.9	115°	OE80-2-1
614	槍先形尖頭器	流紋岩	(3.6)	(2.6)	(0.7)	5.6		OE80-2-3
615	二次加工ある剝片	流紋岩	2.0	2.6	0.6	1.8		OE81-2
616	剝片	泥凝灰岩	2.0	1.5	0.9	2.4		OE90-2
617	剝片	凝灰岩						OD99-2
618	剝片	流紋岩	(2.4)	(4.2)	(0.9)	3.7		1D05-2-2
619	剝片	流紋岩	1.4	1.3	0.6	1.0	130°	1D05-2-3

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	打角(剝離角)	登録番号
620	剥片	流紋岩	2.1	2.3	0.5	1.7	110°	1D05-2-4
621	剥片	泥岩	2.5	2.5	0.9	5.3		1D05-2-5
622	剥片	安山岩	2.4	4.0	1.1	8.8		1D06-2-2
623	剥片	チヤート	2.0	0.6	0.5	0.4		1D06-2-3
624	剥片	流紋岩	2.0	0.7	0.3	0.4	115°	1D10-2-2
625	使用痕ある剥片	流紋岩	(5.4)	(3.0)	(1.2)	16.7	100°	1D49-2
626	槍先形尖頭器	流紋岩	(7.0)	2.7	0.9	12.7		1D51-2
627	剥片	泥岩	5.0	4.2	1.4	17.6	125°	1E00-2-2
628	スクレイバー	流紋岩	3.0	3.4	1.6	12.5		1E02-2
629	二次加工ある剥片	頁岩	10.4	5.2	2.1	105.4	120°	1E10-2-1
630	剥片	泥岩	(2.6)	(3.4)	(0.6)	5.5		1E13-2-1
631	剥片	珪質頁岩	3.4	2.0	1.0	5.5	115°	1E13-2-2
632	ナイフ形石器	流紋岩	(3.6)	(3.7)	(1.4)	17.1		1E14-2-1
633	使用痕ある剥片	流紋岩	6.3	3.7	0.7	16.4	120°	1E46-2
634	ナイフ形石器	泥岩	(5.4)	2.0	1.1	10.5		1E84-2-3
635	ナイフ形石器	泥岩	(6.3)	(3.4)	(1.6)	30.7		1E94-2
636	剥片	泥岩	7.2	4.1	2.1	60.5	125°	1E95-2
637	ナイフ形石器	玉髓	(2.2)	(2.1)	(0.4)	1.5		2E25-2
638	剥片	安山岩	(5.2)	(4.7)	(1.0)	20.9		2E33-2-2
639	剥片	流紋岩	(1.9)	(3.2)	(0.5)	2.9		2E36-2
640	ナイフ形石器	流紋岩	2.9	1.4	0.7	2.2		2E56-2-1
641	二次加工ある剥片	安山岩	3.4	3.2	0.8	6.5	140°	4D54-2
642	槍先形尖頭器	流紋岩	(3.4)	1.8	0.6	3.4		5E56-2
643	ナイフ形石器	黒曜石	3.7	1.8	0.8	5.2		7C07-2
644	二次加工ある剥片	安山岩	(2.7)	3.5	0.7	8.8		7C66-2
645	使用痕ある剥片	流紋岩	5.8	3.3	0.8	15.5	110°	5E-0
646	ナイフ形石器	黒曜石	(3.7)	2.7	0.7	6.4		北側表採-1
647	剥片	黒曜石	(1.0)	(2.3)	(0.4)	0.8		北側表採-2
648	剥片	安山岩	3.9	4.8	1.5	26.3	110°	北側表採-3
649	スクレイバー	珪質頁岩	4.0	3.8	0.9	12.2		北側表採-4
650	二次加工ある剥片	流紋岩	3.8	3.5	1.4	15.3		南側表採
651	剥片	玉髓	2.0	1.8	0.4	1.3	110°	表採-2
652	二次加工ある剥片	チヤート	(1.4)	(1.4)	(0.5)	0.8		表採-3

(四) III層主体石器群のまとめ

これまでIII層主体石器群として一括して扱ってきたが、ここでは接合関係・組成・剥片剝離技術などによって、時期的に異なると思われるいくつかのグループに分けて検討したい。

III.期

G～Mの7ブロックにより構成されるグループで、Mブロックを除くG～LはGブロックを中心として接合関係をもつ。出土層位はIII層下部である。

組成としてはナイフ形石器と角錐状石器を主体とするが、スクレイバーの少なさが注意され

る。また、ナイフ形石器には1側縁加工のものが目立つ。

剥片剥離技術は、縦長剥片と横長剥片の各々を生産する技法があり、縦長剥片は大形で細みのナイフ形石器や角錐状石器と、横長剥片はスクレイパーや小形のすんぐりとしたナイフ形石器と各々結び付いていると思われる。石核もこれらに対応するように前者に係わるものと後者に係わるものとが出土している。あまり打面調整を施さない単設打面の石核は前者に、既設の剥離面を打面として交互に剥離を繰り返すチョッピングトゥール状の石核などは後者に係わるものであろう。

調整加工は鋸齒状で急斜なものが多く、石材は安山岩が圧倒的に多く使用されている。

本資料に類似したものは、高井戸東遺跡IV下層（小田他1977）、東内野遺跡IV層（戸田他1977）、唐沢遺跡（田中1979）、多聞寺前遺跡IV層中部（戸沢・鶴丸1983）などにみられ、編年的には武藏野第IIa期及び相模野第III期中頃に位置付けられるものと思う。

III₂期

A～Fの6ブロックにより構成されるグループで、各ブロックは砾群を共伴し、A・B・Eの各ブロック及びC・Dブロック、それにE・Fブロック間で接合する。出土層位はIII層中部～下部である。

組成的にはナイフ形石器とスクレイパーが主体であるが、それらの素材となる剥片は、ほとんど打面調整を施されず砾面などを打面とした不定形の小剥片と思われる。石材は砂岩の多用に特徴がある。

本資料はやや不明瞭な内容の石器群であるが、鈴木遺跡IV層（松村他1978）、東内野遺跡上層（戸田他1977）、権現後遺跡第2文化層（橋本他1984）などに類例がみられ、編年的には武藏野第IIa期及び相模野第III期の終わり頃と考える。

III₃期

明確なブロックを形成しないが主に遺跡北端の1Eグリッド付近から出土したもので、出土層位はIII層中部～下部である。

組成としてはナイフ形石器・スクレイパー・揉錐器がある他、ブロック外出土の526・528・551やI・II層出土の597・625・633などの石刃あるいは石刃状剥片が目立ち、剥片剥離技術はいわゆる石刃技法に近いものが主体となっていると推定される。

編年的には武藏野第IIb期前半及び相模野第IV期に位置付けられるであろう。

III₄期

PとQの両ブロックから構成されるもので、出土層位はIII層中部である。

組成的にはナイフ形石器の占める割合が高くかつそのナイフ形石器が全て小形である点に特徴がある。ナイフ形石器11点の最大のもので長さ3.4cm、最小のものは1.3cmを測り、平均は2.2cmである。石材は圧倒的に流紋岩が多い。

本資料に近いものとして寺尾遺跡第III文化層（B1上面あるいは上部相当層）（白石・鈴木1980）や月見野IVA遺跡L1下底（あるいはB1上面）（明大月見野遺跡群調査団1969）の石器群が考えられるが、高井戸東遺跡IV上層（小田他1977）や東内野遺跡上層（戸田他1977）なども近いものと思われる。

編年的には武藏野第IIb期後半及び相模野第IV期終末頃と考える。

III₅期

ブロック外出土の556・570・586やI・II層出土の626・642などの槍先形尖頭器をもってこの時期とする。

出土層位はIII層上部から上面で、層位的には細石刃はもちろんナイフ形石器とも一部重なるが、本遺跡ではこれらの伴出関係については確認出来なかった。

編年的には武藏野第IIb期終末及び相模野第V期前半に位置付けられる。

III₆期

NとOの両ブロック及びI・II層出土の598の細石刃核と611の細石刃が該当する。

トゥールとしては細石刃とビエスエスキューしかなく、石器群としては欠落する部分が多いという不明瞭なものであるが、一応細石刃を主体とする石器群と考えて、編年的には武藏野第III期及び相模野第V期中頃に位置付けたい。

III₇期

III層主体石器群ではないが、III層直上から出土したやや大形の尖頭器をもってこの時期とする。

なお、ビエスエスキューの一部は撲文時代早期にまで下るかもしれない。

編年的には武藏野第IV期及び相模野第V期後半に位置するものと考える。

4. 磚群（第109～114図、図版39、第8表）

III層出土の磚は、約64個体総数245点を数え、そのうち約38個体171点が6つのまとまりをもって出土し、各々第1～第6磚群と呼称する。これらの磚群は1つを除き他は全て石器群を共伴している（第85～90図）。

(1) 第1磚群（第85・110図）

出土状況 約7個体15点が3～4mの範囲をもってやや散漫に出土した。

出土層位 III層中～下部である。

構成磚の大きさ 平均2～3cm約12gで、特に大きいものもなく、遺存状態も全て%以下の中磚片である。

石材 石英斑岩と砂岩がほとんどを占める。

接合関係 第2磚群及び第5磚群と有り。

(2) 第2磚群（第86・110図）

出土状況 唯一磚のみで構成されるブロックで、6D48グリッドから約5個体8点が2.5m程の範囲から出土。

出土層位 III層下部である。

構成磚の大きさ 平均約3～4cm約35gで、第1磚群よりやや大きいが遺存状態はやはり全て%以下の小磚片である。

石材 砂岩とホルンフェルスが圧倒的である。

接合関係 第1磚群及び第5磚群と有り。

(3) 第3磚群（第87・110図）

出土状況 6D85グリッド付近から約9個体33点が3～4m程の広がりをもって出土、ややまとまりがみられる。

出土層位 III層中～下部である。

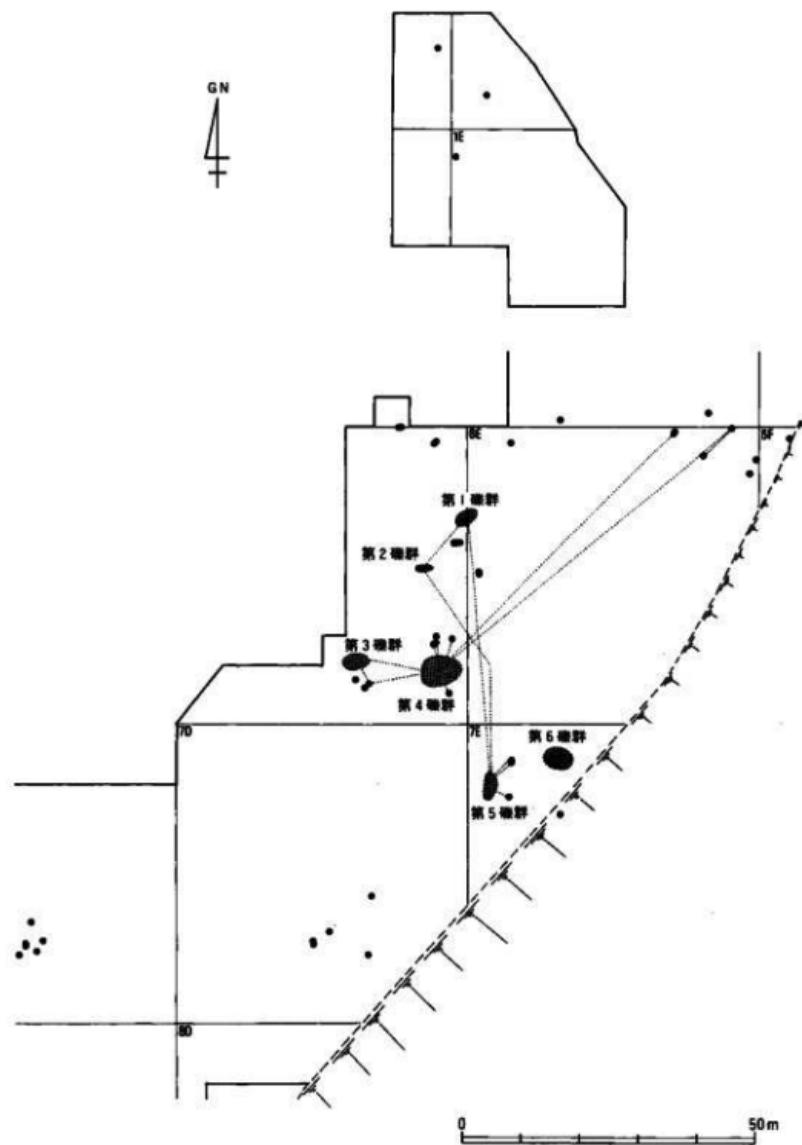
構成磚の大きさ 平均約2cm約5gで、遺存状態も全て%以下でかなりの小磚片である。

石材 石英斑岩が主体の他ホルンフェルスと砂岩である。

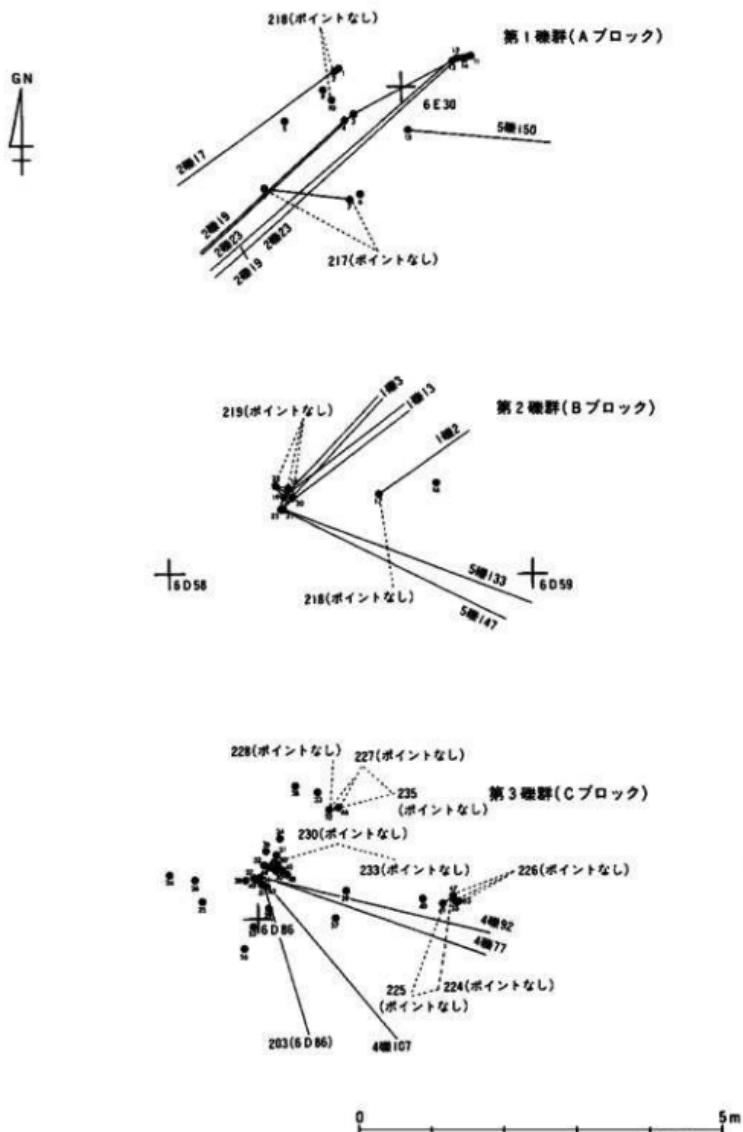
接合関係 第4磚群と有り。

(4) 第4磚群（第88・111図）

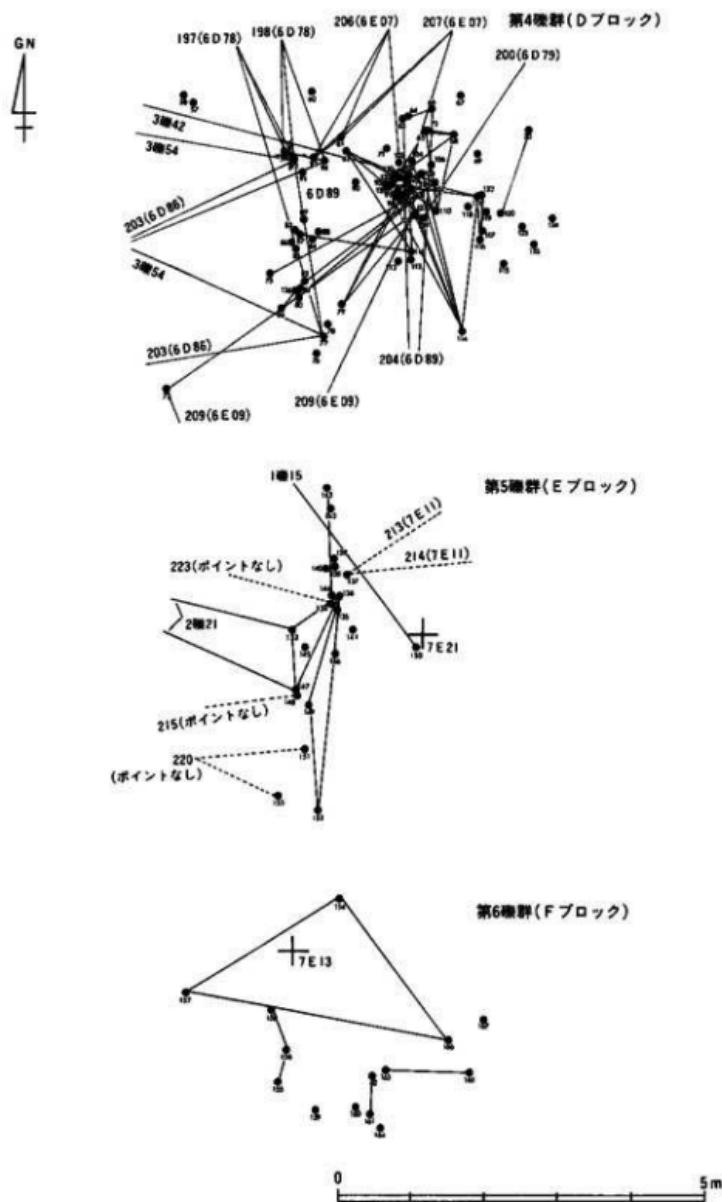
出土状況 6D89グリッド付近から約15個体76点が約4～5mの広がりをもって出土した。



第109図 Ⅲ層出土縄分布図 (1/1000)



第110図 第1～3礫群分布図 (1/80)



第111図 第4～6種群分布図 (1/80)

良好なまとまりである。

出土層位 III層下部である。

構成礫の大きさ 平均約2cm弱約1gで、遺存状態も全て%の細かい礫片である。

石材 砂岩を主体に、ついで石英斑岩が多い。

接合関係 第3礫群と有り。

(5) 第5礫群 (第89・111図)

出土状況 7E10~20グリッド付近にかけて約6個体21点が2×4m程の南北に細長く広がって出土。ややまとまりがみられる。

出土層位 III層中部である。

構成礫の大きさ 平均約2cm約2.5gで、遺存状態も全て%以下の小礫片である。

石材 デイサイトが主体である。

接合関係 第1礫群及び第2礫群と有り。

(6) 第6礫群 (第90・111図)

出土状況 7E13グリッド付近から約8個体18点が径3~4m程の広がりをもって散漫に出土した。

出土層位 III層下部である。

構成礫の大きさ 平均2~3cm約15gで、遺存状態は全て%以下の小礫片である。

石材 石英斑岩を主体とする。

接合関係 他の礫群とはなし。

(7) 紋群のまとめ

ここでは6つの礫群をまとめて若干の検討をしてみたい。

出土状況 第4礫群を除きあまりまとまりがなく、規模も小さい。

出土層位 全て田層中~下部である。

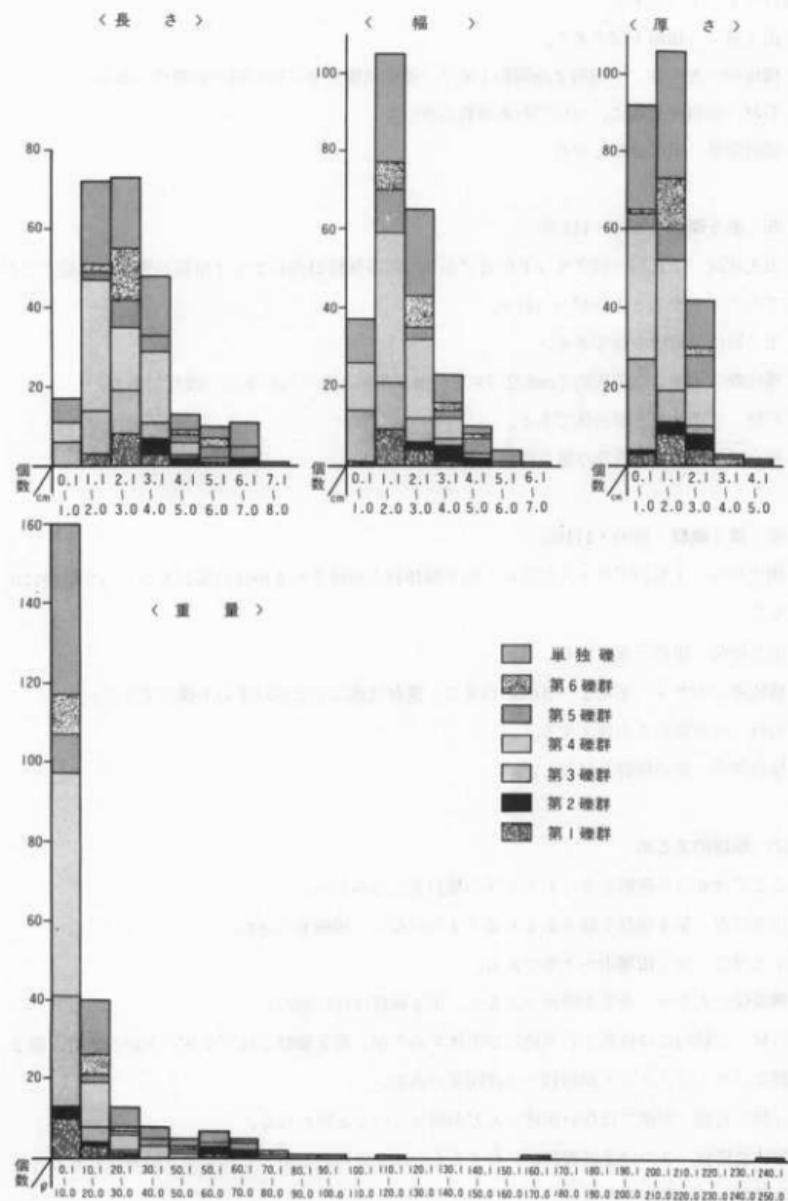
構成礫の大きさ 全て小礫片であるが、第4礫群は特に細かい。

石材 全般的には砂岩と石英斑岩が主体であるが、第5礫群ではデイサイトが主体で、第2礫群ではホルンフェルスが砂岩とほぼ同量である。

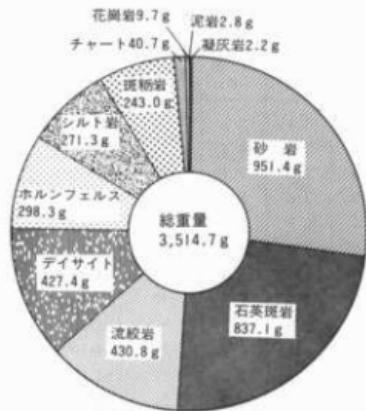
火熱の有無 明確ではないがほとんどが焼けていると思われる。

個別資料 2つ以上の礫群が共有するものは9資料あるが、これを全て組み合わせると6つの礫群全てが繋がりをもつ。

接合関係 第1礫群・第2礫群・第5礫群のグループと第3礫群・第4礫群のグループに分



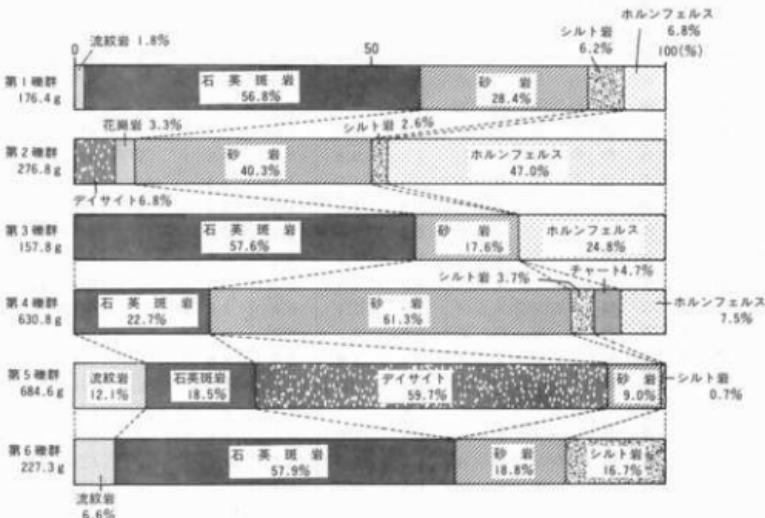
第112図 III層出土蹟の規模



第113図 III層出土礫石材別重量比

が必要となり、使用可能ならば何度も使用されたことが考えられる。

礫群の具体的な形態・構成・使用方法などはいまだ不明なことが多いが、ここでの検討を含めもっと多様な分析が積み重ねられることによって少しづつ解明されることを期待したい（川島他1983、鈴木他1984）。



第114図 III層主体礫群石材別重量比

かれる。

ここで礫群間に接合関係をもつ資料のうち、3点以上の接合資料を検討してみると、その全てに分布の片寄りがみられ、次のような礫群間における礫の移動が考えられる。

第2砾群から第1砾群及び第5砾群へ、第3砾群から第4砾群へといふもので、このことは第2砾群よりも第1砾群や第5砾群、あるいは第3砾群より第4砾群の方が構成礫が小さくかつまとまりのよいことなどの現象とよく符合する。

このような礫群間における礫の移動は、それが再度使用されることと理解され、礫群構成礫

第8表 III層出土礫一覧表

番号	礫群	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	登録番号
1	第1	礫群	ホルンフェルス	2.0	1.6	1.1	3.9	✓
2	第1	礫群	シルト岩	3.6	2.1	1.2	10.1	✓
3	第1	礫群	砂岩	2.5	1.5	1.5	7.1	✓
4	第1	礫群	砂岩	2.3	1.9	1.6	6.0	✓
5	第1	礫群	ホルンフェルス	1.2	1.1	0.7	0.8	✓
6	第1	礫群	石英斑岩	3.0	2.0	1.3	10.0	✓
7	第1	礫群	石英斑岩	2.9	1.8	1.5	8.3	✓
8	第1	礫群	ホルンフェルス	2.9	1.5	1.5	7.3	✓
9	第1	礫群	流紋岩	2.2	1.7	0.9	3.1	✓
10	第1	礫群	シルト岩	1.3	0.9	0.8	0.9	✓
11	第1	礫群	石英斑岩	3.4	3.0	2.7	27.2	✓
12	第1	礫群	石英斑岩	5.1	3.3	2.8	50.8	✓
13	第1	礫群	砂岩	3.6	2.5	2.3	17.8	✓
14	第1	礫群	石英斑岩	2.2	1.3	1.3	3.9	✓
15	第1	礫群	砂岩	2.9	2.4	2.2	19.2	✓
16	第2	礫群	花崗岩	3.3	2.1	1.3	9.2	✓
17	第2	礫群	シルト岩	3.5	2.5	1.0	7.2	✓
18	第2	礫群	ホルンフェルス	6.3	3.8	2.5	64.6	✓
19	第2	礫群	砂岩	4.6	4.2	2.7	50.4	✓
20	第2	礫群	ホルンフェルス	3.2	3.2	1.4	10.0	✓
21	第2	礫群	デイサイト	3.4	3.3	1.7	18.7	✓
22	第2	礫群	ホルンフェルス	5.0	4.8	2.3	55.4	✓
23	第2	礫群	砂岩	6.4	3.8	2.9	61.3	✓
24	第3	礫群	石英斑岩	2.0	1.3	1.0	2.0	✓
25	第3	礫群	砂岩	1.4	0.7	0.6	0.6	✓
26	第3	礫群	石英斑岩	3.6	3.2	2.6	27.5	✓
27	第3	礫群	石英斑岩	0.6	0.5	0.3	0.1	✓
28	第3	礫群	石英斑岩	0.9	0.7	0.6	0.3	✓
29	第3	礫群	砂岩	1.2	0.8	0.6	0.6	✓
30	第3	礫群	石英斑岩	2.1	1.7	1.4	3.4	✓
31	第3	礫群	石英斑岩	1.9	1.5	1.4	3.3	✓
32	第3	礫群	砂岩	2.7	2.6	1.7	12.3	✓
33	第3	礫群	ホルンフェルス	1.2	0.9	0.4	0.5	✓
34	第3	礫群	ホルンフェルス	3.8	2.8	0.5	5.4	✓
35	第3	礫群	ホルンフェルス	3.5	2.1	0.8	4.8	✓
36	第3	礫群	石英斑岩	0.8	0.6	0.3	0.1	✓
37	第3	礫群	ホルンフェルス	2.6	1.6	0.7	2.6	✓
38	第3	礫群	砂岩	1.7	1.0	1.0	1.6	✓
39	第3	礫群	ホルンフェルス	2.6	1.5	0.9	3.3	✓
40	第3	礫群	ホルンフェルス	2.3	1.6	0.7	2.6	✓
41	第3	礫群	ホルンフェルス	1.2	1.0	0.4	0.6	✓
42	第3	礫群	石英斑岩	1.5	1.0	0.8	1.2	✓
43	第3	礫群	石英斑岩	3.0	3.2	2.0	16.4	✓
44	第3	礫群	石英斑岩	2.5	2.0	1.5	6.5	✓

番号	種	群	石	材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	登録番号	
45	第	3	礫	群	石英斑岩	3.0	2.6	2.2	16.2	%	6D76-38
46	第	3	礫	群	砂岩	2.1	2.1	2.0	8.2	%	6D76-39
47	第	3	礫	群	ホルンフェルス	4.8	3.0	1.1	18.1	%	6D76-40
48	第	3	礫	群	石英斑岩	3.1	1.9	1.7	7.7	%	6D76-41
49	第	3	礫	群	石英斑岩	1.0	1.0	0.9	0.8	%	6D76-43
50	第	3	礫	群	石英斑岩	2.2	2.0	1.0	4.2	%	6D76-44
51	第	3	礫	群	石英斑岩	1.3	0.9	0.7	0.7	%	6D76-45
52	第	3	礫	群	石英斑岩	1.0	0.8	0.8	0.4	%	6D76-46
53	第	3	礫	群	ホルンフェルス	1.9	1.5	0.5	1.2	%	6D76-47
54	第	3	礫	群	岩	2.2	1.4	1.0	3.3	%	6D76-48
55	第	3	礫	群	砂岩	1.4	1.1	0.8	1.2	%	6D85-11
56	第	3	礫	群	石英斑岩	0.7	0.5	0.3	0.1	%	6D85-13
57	第	4	礫	群	チャヤーント	1.7	1.3	1.2	3.6	%	6D78-4
58	第	4	礫	群	チャヤーント	1.2	1.1	1.1	1.2	%	6D78-5
59	第	4	礫	群	砂岩	2.4	2.3	1.6	6.1	%	6D78-11
60	第	4	礫	群	ホルンフェルス	1.0	0.7	0.5	0.3	%	6D79-4
61	第	4	礫	群	ホルンフェルス	3.3	2.8	1.0	10.1	%	6D79-5
62	第	4	礫	群	砂岩	1.7	1.5	0.9	2.2	%	6D79-6
63	第	4	礫	群	砂岩	4.4	3.3	1.6	30.2	%	6D79-10
64	第	4	礫	群	砂岩	3.3	2.5	2.1	23.9	%	6D79-11
65	第	4	礫	群	チャヤーント	1.2	1.1	0.7	0.8	%	6D79-12
66	第	4	礫	群	砂岩	2.7	2.4	1.4	8.7	%	6D79-13
67	第	4	礫	群	チャヤーント	2.1	1.1	1.0	2.1	%	6D79-14
68	第	4	礫	群	チャヤーント	1.8	1.6	1.5	5.8	%	6D79-15
69	第	4	礫	群	ホルンフェルス	1.3	1.0	0.8	0.7	%	6D79-17
70	第	4	礫	群	砂岩	2.0	1.7	1.0	3.0	%	6D79-18
71	第	4	礫	群	ホルンフェルス	1.3	1.0	0.7	0.8	%	6D79-20
72	第	4	礫	群	チシャヤーント	1.4	1.3	0.9	1.5	%	6D79-21
73	第	4	礫	群	チシャヤーント	3.3	2.4	2.3	15.3	%	6D88-7
74	第	4	礫	群	石英斑岩	1.6	1.4	1.0	2.0	%	6D88-8
75	第	4	礫	群	石英斑岩	1.4	0.8	0.4	0.4	%	6D88-9
76	第	4	礫	群	砂岩	2.1	2.1	0.5	2.4	%	6D89-7
77	第	4	礫	群	砂岩	3.5	2.2	1.9	12.5	%	6D89-5
78	第	4	礫	群	石英斑岩	1.1	0.7	0.5	0.5	%	6D89-7
79	第	4	礫	群	砂岩	3.3	2.5	1.0	8.6	%	6D89-8
80	第	4	礫	群	石英斑岩	3.3	2.7	2.2	14.2	%	6D89-9
81	第	4	礫	群	石英斑岩	2.3	1.8	1.1	3.9	%	6D89-10
82	第	4	礫	群	石英斑岩	2.3	2.0	1.6	7.1	%	6D89-11
83	第	4	礫	群	砂岩	1.2	1.1	0.8	1.2	%	6D89-13
84	第	4	礫	群	砂岩	1.0	0.8	0.8	0.7	%	6D89-14
85	第	4	礫	群	砂岩	1.3	1.2	1.0	1.7	%	6D89-15
86	第	4	礫	群	砂岩	1.4	1.1	1.0	2.0	%	6D89-16
87	第	4	礫	群	砂岩	2.0	2.0	2.0	8.6	%	6D89-17
88	第	4	礫	群	砂岩	0.9	0.8	0.7	0.5	%	6D89-18
89	第	4	礫	群	砂岩	0.7	0.6	0.5	0.2	%	6D89-19
90	第	4	礫	群	砂岩	1.7	1.7	1.3	4.2	%	6D89-23

番号	礫群	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	登録番号
91	第4	礫群 花崗岩	1.0	0.7	0.6	0.5	×	6D89-24
92	第4	礫群 砂岩	3.7	2.8	2.5	20.0	×	6D89-25
93	第4	礫群 ホルンフェルス	4.3	3.7	1.9	32.5	×	6D89-26
94	第4	礫群 砂岩	2.0	1.6	1.2	3.9	×	6D89-27
95	第4	礫群 砂岩	3.2	3.0	1.6	16.0	×	6D89-30
96	第4	礫群 砂岩	1.6	1.1	0.4	0.8	×	6D89-32
97	第4	礫群 砂岩	3.2	2.5	1.1	5.9	×	6D89-33
98	第4	礫群 ホルンフェルス	2.5	1.3	0.9	3.0	×	6D89-34
99	第4	礫群 砂岩	2.0	2.0	1.7	5.6	×	6D89-35
100	第4	礫群 砂岩	2.5	2.1	0.5	2.6	×	6D89-36
101	第4	礫群 チヤー	1.2	1.1	0.6	0.6	×	6D89-37
102	第4	礫群 チヤー	1.8	1.5	1.4	3.0	×	6D89-38
103	第4	礫群 砂岩	3.7	1.9	1.7	15.9	×	6D89-39
104	第4	礫群 砂岩	1.4	1.4	0.5	1.1	×	6D89-40
105	第4	礫群 砂岩	3.6	2.1	1.9	13.4	×	6D89-41
106	第4	礫群 砂岩	1.3	1.3	0.8	1.6	×	6D89-42
107	第4	礫群 英斑	3.6	3.2	2.7	28.3	×	6D89-43
108	第4	礫群 シエルト	2.7	2.0	1.6	8.0	×	6D89-47
109	第4	礫群 チヤー	4.0	2.5	1.8	16.2	×	6D89-48
110	第4	礫群 チヤー	1.6	1.4	0.8	2.0	×	6D89-49
111	第4	礫群 チヤー	3.0	2.0	1.9	8.4	×	6D89-53
112	第4	礫群 チヤー	1.3	1.0	0.8	1.0	×	6D89-54
113	第4	礫群 チヤー	1.9	1.2	1.2	2.0	×	6D89-55
114	第4	礫群 チヤー	3.9	3.1	2.2	30.9	×	6D89-57
115	第4	礫群 チヤー	1.6	1.3	1.2	2.3	×	6D89-59
116	第4	礫群 チヤー	1.9	1.5	1.4	5.1	×	6D89-60
117	第4	礫群 チヤー	2.3	2.1	1.7	7.4	×	6D89-61
118	第4	礫群 チヤー	2.3	1.5	1.3	4.0	×	6D89-62
119	第4	礫群 チヤー	1.5	1.1	0.6	0.9	×	6D89-63
120	第4	礫群 チヤー	3.3	1.5	1.3	6.0	×	6D89-64
121	第4	礫群 チヤー	3.5	3.1	2.6	41.0	×	6D89-65
122	第4	礫群 チヤー	3.2	2.5	1.8	13.5	×	6D89-66
123	第4	礫群 チヤー	1.2	0.6	0.4	0.2	×	6D89-70
124	第4	礫群 チヤー	1.4	1.0	1.0	1.1	×	6D89-71
125	第4	礫群 チヤー	6.0	4.7	2.1	57.8	×	6D89-72
126	第4	礫群 チヤー	4.5	3.0	2.7	27.0	×	6D89-76
127	第4	礫群 チヤー	1.6	1.1	1.1	1.7	×	6D89-79
128	第4	礫群 チヤー	2.3	1.7	0.9	4.0	×	6D89-80
129	第4	礫群 チヤー	2.8	1.7	1.6	7.6	×	6D89-81
130	第4	礫群 チヤー	3.5	2.4	2.2	23.8	×	6D89-84
131	第4	礫群 チヤー	3.0	2.2	1.9	10.2	×	6D89-85
132	第4	礫群 チヤー	2.8	1.9	1.5	7.0	×	6D89-86
133	第5	礫群 デイサイト	5.0	3.3	2.8	33.5	×	7E10-8
134	第5	礫群 砂岩	2.8	1.9	1.8	6.2	×	7E10-11
135	第5	礫群 砂岩	1.5	1.2	0.7	1.3	×	7E10-12
136	第5	礫群 デイサイト	6.7	5.4	4.7	164.1	×	7E10-13

番号	種群	石	材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	登録番号
137	第5	礫群	砂紋岩	3.3	1.8	1.5	7.5	%	7E10-16
138	第5	礫群	流紋岩	5.9	4.1	2.1	72.0	%	7E10-17
139	第5	礫群	流紋岩	3.2	2.0	1.4	10.6	%	7E10-18
140	第5	礫群	石英斑	3.1	2.2	1.8	10.9	%	7E10-19
141	第5	礫群	砂英斑	2.1	2.0	1.3	4.2	%	7E10-20
142	第5	礫群	砂英斑	2.5	1.8	0.9	3.2	%	7E10-23
143	第5	礫群	石英斑	5.3	4.4	2.9	46.8	%	7E10-24
144	第5	礫群	石英斑	5.7	4.3	2.4	69.0	%	7E10-26
145	第5	礫群	砂英斑	1.8	1.5	1.1	1.9	%	7E20-7
146	第5	礫群	砂英斑	2.1	1.3	1.0	2.0	%	7E20-10
147	第5	礫群	デイサイト	6.2	4.0	2.8	64.6	%	7E20-13
148	第5	礫群	デイサイト	2.9	1.8	1.3	5.0	%	7E20-14
149	第5	礫群	デイサイト	6.2	4.4	3.0	113.6	%	7E20-15
150	第5	礫群	砂英斑	2.4	1.9	1.5	4.1	%	7E20-18
151	第5	礫群	砂英斑	4.8	3.0	2.5	28.5	%	7E20-21
152	第5	礫群	デイサイト	3.4	3.0	2.6	32.9	%	7E20-22
153	第5	礫群	砂	2.1	2.0	0.9	2.5	%	7E20-23
154	第6	礫群	シルト	2.4	1.9	1.0	3.5	%	7E03-7
155	第6	礫群	砂岩	2.2	2.1	2.0	7.0	%	7E12-13
156	第6	礫群	砂岩	1.6	1.3	1.1	3.3	%	7E12-16
157	第6	礫群	シルト	2.4	1.9	1.1	4.2	%	7E12-21
158	第6	礫群	砂岩	3.0	2.8	1.4	12.8	%	7E12-22
159	第6	礫群	石英斑	2.5	2.0	1.7	9.1	%	7E13-8
160	第6	礫群	砂岩	2.7	1.7	1.5	8.9	%	7E13-9
161	第6	礫群	シルト	2.3	1.8	1.4	5.1	%	7E13-10
162	第6	礫群	シルト	2.7	2.1	1.9	4.2	%	7E13-11
163	第6	礫群	石英斑	5.1	3.6	3.4	80.0	%	7E13-12
164	第6	礫群	砂岩	2.6	2.1	1.2	6.1	%	7E13-13
165	第6	礫群	石英斑	1.3	1.4	1.1	2.0	%	7E13-17
166	第6	礫群	シルト	5.4	3.2	1.9	29.5	%	7E13-18
167	第6	礫群	シルト	2.9	2.7	2.3	18.4	%	7E13-19
168	第6	礫群	石英斑	4.3	4.3	3.3	45.9	%	7E13-20
169	第6	礫群	石英斑	3.0	2.2	1.8	10.3	%	7E13-21
170	第6	礫群	石英斑	2.9	2.2	2.1	12.8	%	7E13-22
171	第6	礫群	砂岩	2.7	2.3	2.0	14.2	%	7E13-23
172	礫群外(Hブロック)	流紋岩	岩	6.5	3.0	2.4	59.4	完形	7D56-12
173	礫群外(Jブロック)	流紋岩	岩	6.7	5.2	2.0	94.4	%	7D65-8
174	礫群外(Jブロック)	流紋岩	岩	7.3	4.1	1.7	45.1	%	7D74-9
175	礫群外(Jブロック)	流紋岩	岩	6.2	4.0	1.8	33.6	%	7D74-12
176	礫群外(Lブロック)	流紋岩	岩	6.2	3.9	1.8	49.5	完形	7D76-32
177	礫群外(Nブロック)	凝灰岩	岩	2.2	1.6	0.6	2.2	%	7C65-5
178	礫群外(Nブロック)	泥岩	岩	2.6	1.5	0.8	2.8	%	7C75-7
179	礫群外(Oブロック)	流紋岩	岩	1.8	1.7	1.0	2.5	%	7C74-5
180	礫群外(Oブロック)	シルト岩	岩	2.1	2.0	1.4	5.8	%	7C74-6
181	礫群外(Oブロック)	流紋岩	岩	3.3	2.0	1.2	9.3	%	7C74-15
182	礫群外(Oブロック)	英斑岩	岩	6.5	5.6	4.8	243.0	%	7C75-14

番号	礫	群	石	材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	登録番号
183	礫	群	外	シルト	岩	2.6	2.2	0.5	2.9	6E19-5
184	礫	群	外	シルト	岩	5.3	1.6	1.4	15.0	6E19-7
185	礫	群	外	シルト	一	4.7	3.3	0.9	11.0	0D79-7
186	礫	群	外	砂	岩	2.6	2.5	0.9	5.9	0E81-4
187	礫	群	外	砂	岩	1.7	1.0	0.8	1.5	1E00-5
188	礫	群	外	石	英斑	7.3	6.5	1.5	61.5	5E93-5
189	礫	群	外	砂	岩	2.5	2.1	1.4	9.1	完形 5E98-10
190	礫	群	外	石	英斑	3.5	2.6	2.0	19.1	6D07-4
191	礫	群	外	石	英斑	2.9	2.7	2.7	23.9	6D07-5
192	礫	群	外	砂	岩	3.0	2.8	2.5	17.1	6D08-4
193	礫	群	外	砂	岩	6.5	3.5	2.7	57.3	6D08-5
194	礫	群	外	ホルンフェルス		1.4	0.8	0.7	0.6	6D39-11
195	礫	群	外	ホルンフェルス		1.9	1.5	1.1	4.1	6D39-12
196	礫	群	外	ホルンフェルス		1.4	1.1	0.6	1.1	6D39-13
197	礫	群	外	砂	岩	3.4	2.9	2.7	31.9	6D78-8
198	礫	群	外	砂	岩	1.6	1.2	0.9	1.8	6D78-9
199	礫	群	外	砂	岩	3.6	2.2	1.4	12.0	6D78-10
200	礫	群	外	砂	岩	3.7	2.4	2.1	17.3	6D79-19
201	礫	群	外	石	英斑	2.3	2.2	1.2	5.7	6D86-5
202	礫	群	外	砂	岩	3.0	2.6	2.0	14.3	6D86-6
203	礫	群	外	砂	岩	2.7	2.1	1.5	8.5	6D86-7
204	礫	群	外	砂	岩	5.2	3.5	2.3	26.6	6D89-56
205	礫	群	外	砂	岩	2.4	1.8	0.9	3.0	6E01-4
206	礫	群	外	ホルンフェルス		4.5	3.4	2.3	24.5	6E07-4
207	礫	群	外	ホルンフェルス		3.2	3.0	1.5	18.7	6E07-5
208	礫	群	外	シルト	岩	1.9	1.8	1.8	6.7	6E08-4
209	礫	群	外	シルト	岩	3.4	2.9	2.5	25.1	6E09-6
210	礫	群	外	石	英斑	2.9	1.9	1.3	7.7	6E40-4
211	礫	群	外	石	英斑	4.4	2.5	1.3	13.0	6E40-5
212	礫	群	外	流紋		3.2	3.0	2.1	20.2	6F01-4
213	礫	群	外	砂		2.8	2.0	2.0	7.8	7E11-7
214	礫	群	外	砂		3.5	2.9	2.1	15.2	7E11-8
215	礫	群	外	シルト	岩	5.3	5.3	2.8	87.4	7E21-10
216	礫	群	外	流紋	岩	3.7	2.4	1.4	12.7	完形 7E23-4
217	礫	群	外	石	英斑	3.9	3.8	3.1	56.0	6E4001
218	礫	群	外	シルト	岩	5.0	4.3	2.0	35.4	60.1-1
219	礫	群	外	ホルンフェルス		3.8	2.1	1.6	13.5	60.1-2
220	礫	群	外	砂	岩	3.5	1.9	1.4	7.0	0003-1
221	礫	群	外	砂	岩	3.2	2.8	1.5	10.4	0003-2
222	礫	群	外	砂	岩	2.4	1.7	1.1	4.0	0003-3
223	礫	群	外	砂	岩	1.8	1.4	1.2	2.0	0003-4
224	礫	群	外	ホルンフェルス		2.9	1.8	0.6	3.4	0003-5
225	礫	群	外	ホルンフェルス		2.2	1.4	0.5	1.9	0003-6
226	礫	群	外	ホルンフェルス		2.0	1.4	0.8	1.8	0003-7
227	礫	群	外	砂	岩	1.6	1.3	1.3	3.1	0003-9
228	礫	群	外	砂	岩	1.5	1.4	1.4	2.7	0003-10

番号	礫群	石	材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	登録番号
229	礫群	外	ホルンフェルス	1.0	0.8	0.3	0.2	×	0003-11
230	礫群	外	石英斑岩	3.1	2.5	2.0	14.3	×	0003-12
231	礫群	外	石英斑岩	1.7	1.3	1.2	2.0	×	0003-13
232	礫群	外	石英斑岩	1.8	1.3	1.0	2.2	×	0003-14
233	礫群	外	石英斑岩	1.8	1.7	1.2	3.4	×	0003-15
234	礫群	外	石英斑岩	0.9	0.9	0.7	0.4	×	0003-16
235	礫群	外	砂岩	1.6	1.3	0.9	1.6	×	0003-17
236	礫群	外	石英斑岩	1.2	0.8	0.8	0.5	×	0003-18
237	礫群	外	石英斑岩	1.1	0.7	0.5	0.2	×	0003-19
238	礫群	外	石英斑岩	1.7	1.2	0.9	1.6	×	0003-20
239	礫群	外	石英斑岩	1.6	1.2	1.1	2.1	×	0003-21
240	礫群	外	石英斑岩	1.3	1.0	0.7	0.7	×	0003-22
241	礫群	外	石英斑岩	1.5	1.2	1.0	1.3	×	0003-23
242	礫群	外	石英斑岩	0.9	0.7	0.5	0.2	×	0003-24
243	礫群	外	砂岩	1.0	0.8	0.6	0.5	×	0003-25
244	礫群	外	砂岩	0.9	0.9	0.6	0.6	×	0003-26
245	礫群	外	石英斑岩	0.7	0.6	0.5	0.2	×	0003-28

5 炭化物片集中個所

先土器時代に属する炭化物片集中個所が遺跡南東部において5個所検出された。(第115図)

(1) 第1炭化物片集中個所(第116図)

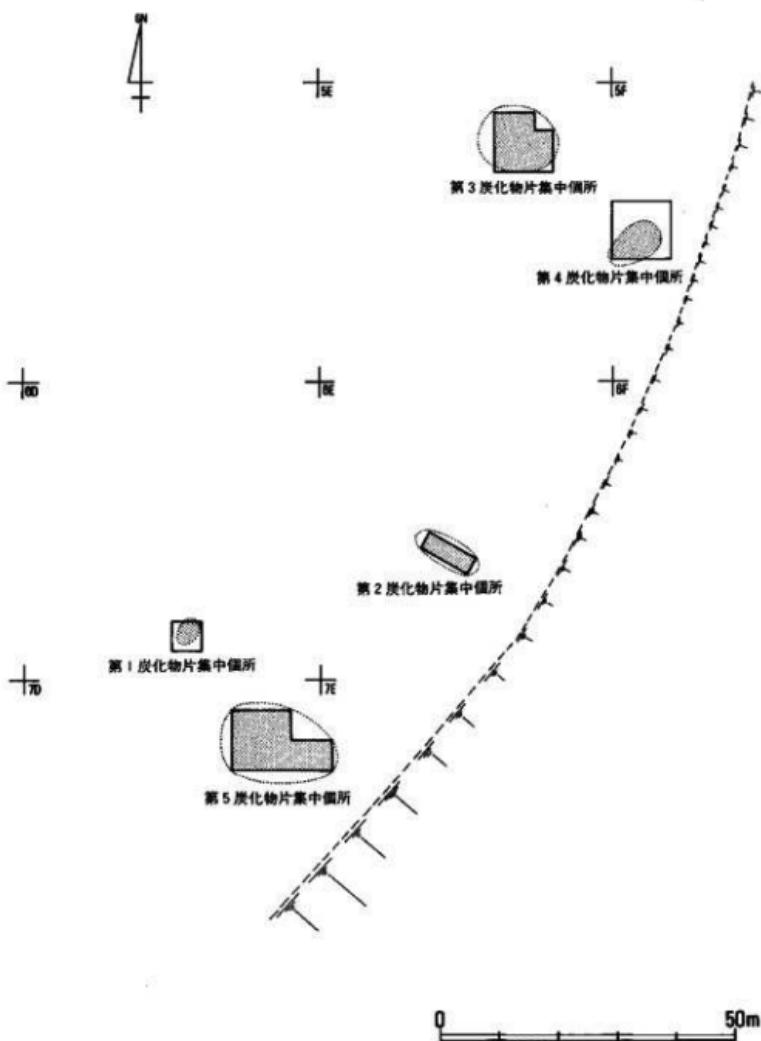
6P85グリッドのほぼ中央からの検出で密度は高い。出土層位はIV～VI層の中程が主体で炭化物片の大きさは2mm前後と小粒である。層位的にはRブロックがかなり近いものと思われる。

(2) 第2炭化物片集中個所(第117図)

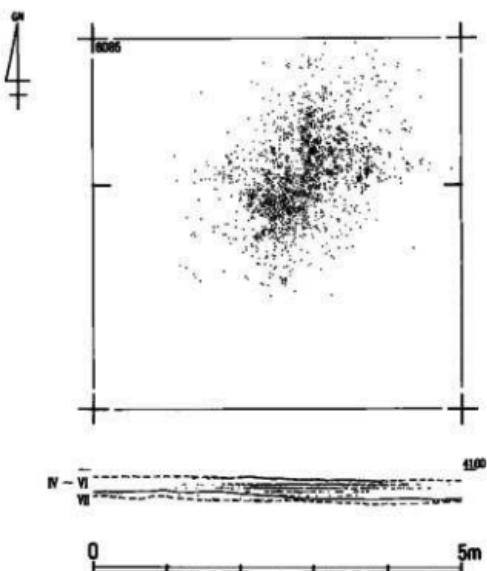
6E54グリッドを中心に検出され、密度は高い。かなり広範囲に広がっているもようである。出土層位はIV～VII層上部でVII層が主体をなす。炭化物片の大きさは細かい。層位的にはSブロックが近いものと思われる。

(3) 第3炭化物片集中個所(第118図)

5E27杭付近において検出された。分布範囲は約10mと広く、数ヶ所の密集部分が認められる。出土層位はVII層前後であり、炭化物片の大きさは細かい。層位的にはSブロックが近いものと思われる。



第115図 炭化物片集中箇所分布図 (1/1000)



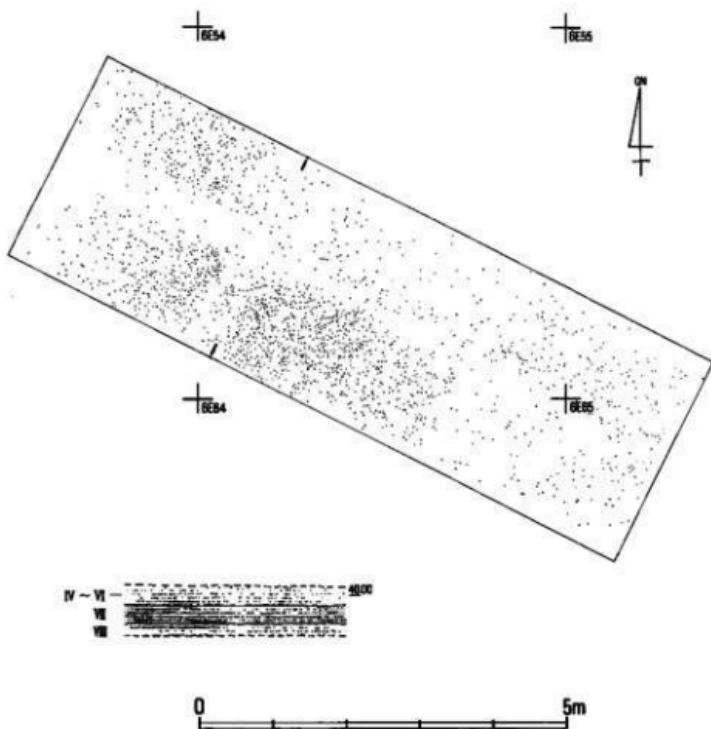
第116図 第1炭化物片集中個所実測図 (1/80)

(4) 第4炭化物片集中個所 (第119図)

5 E61グリッド付近からやや散漫に検出された。分布範囲は中心とおぼしきものがはっきりせず、やや細長く 4×8 m 程である。出土層位はVII層下部からVII層上部を主体とする。炭化物片の大きさは細かい。

(5) 第5炭化物片集中個所 (第120図)

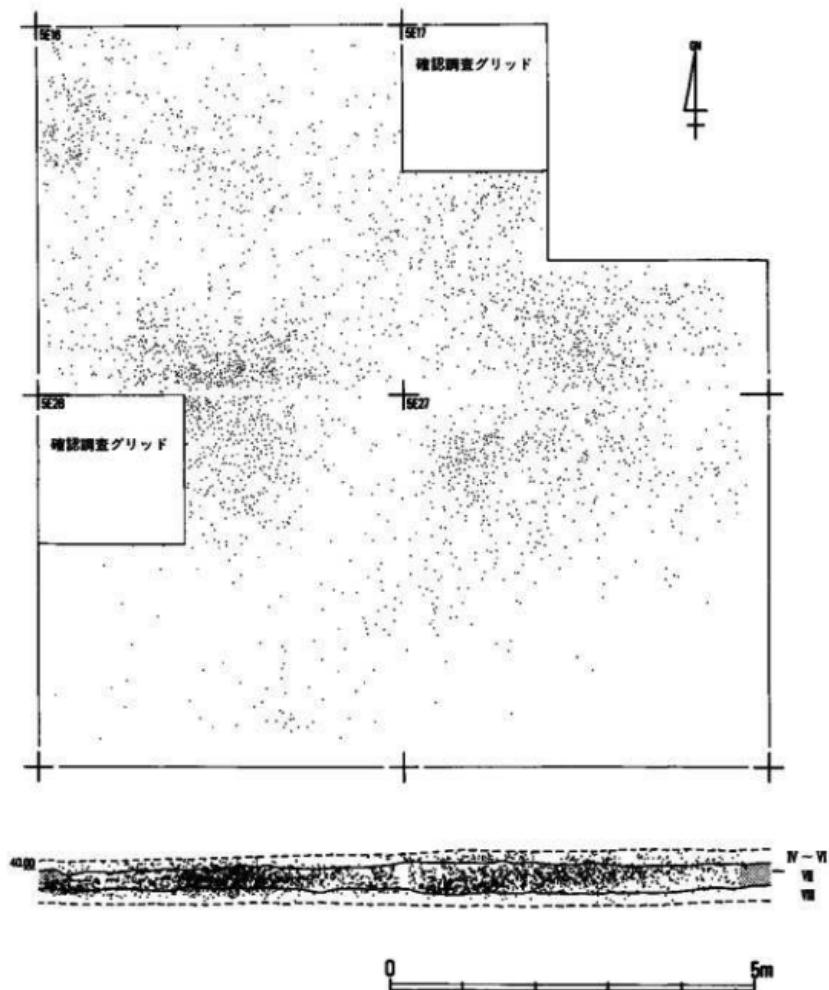
7 D28グリッド付近を中心として 10×20 m 程の広がりをもって出土した。7 D17グリッド南側辺にやや集中している部分があるが全体としては散漫な分布をしている。



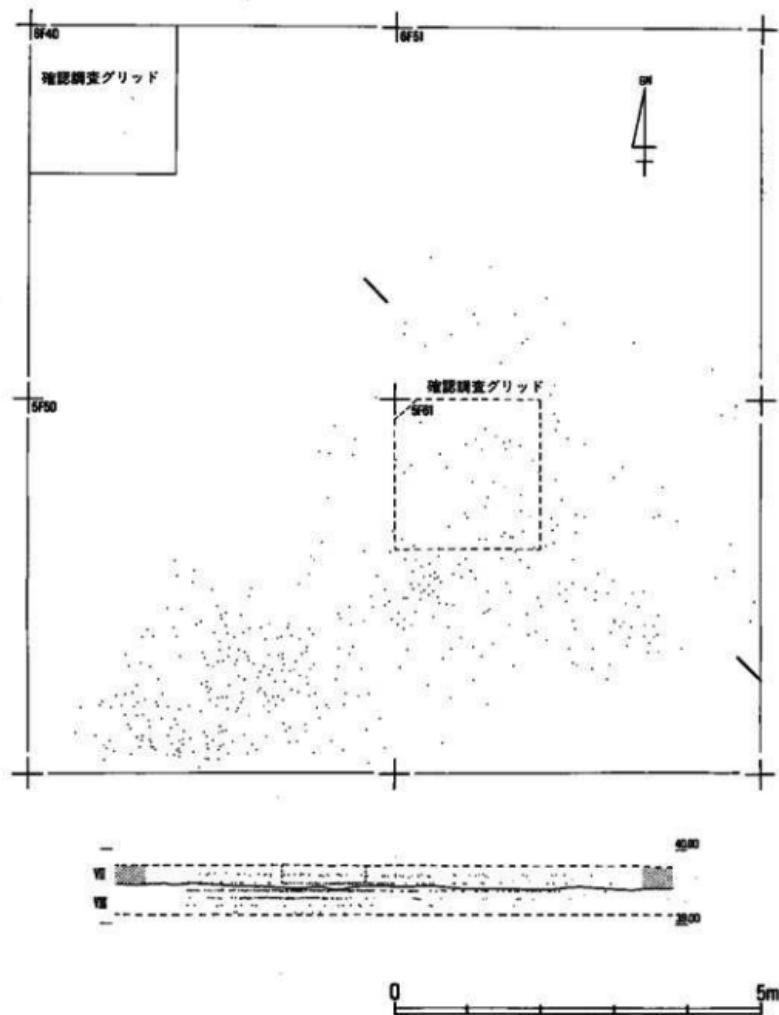
第117図 第2炭化物片集中個所実測図 (1/80)

(6) 炭化物片集中個所のまとめ

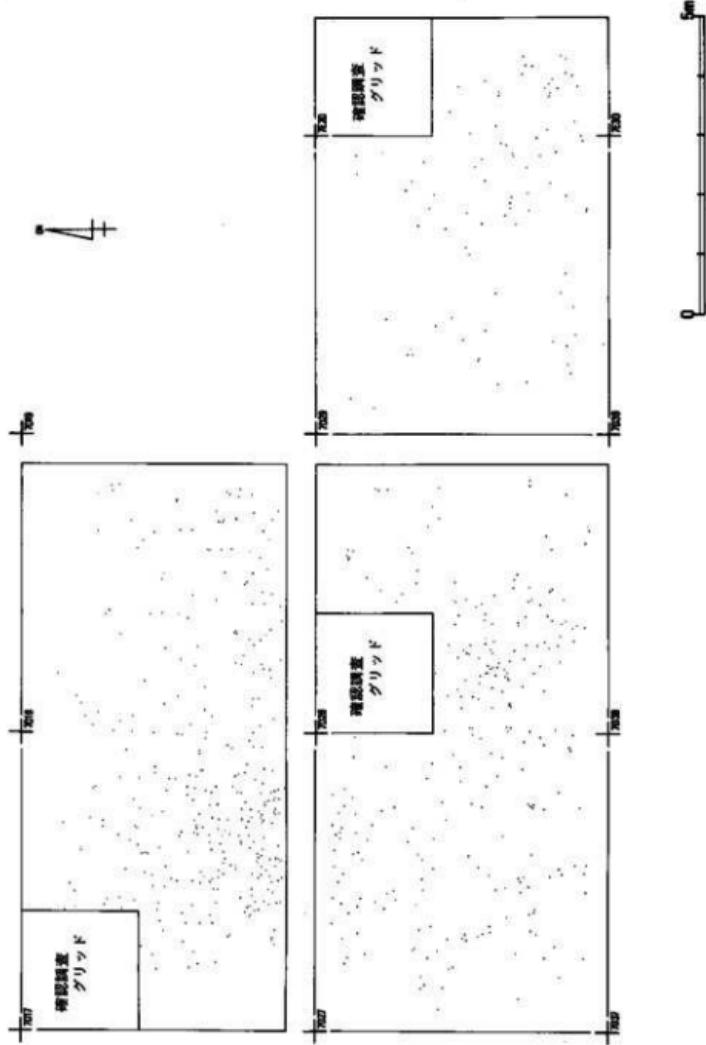
5個所で検出された炭化物片集中個所は、いずれも石器群を伴ってはいないため、両者の時間的な比較は困難であるが、層位的に近いものとして第2・3炭化物片集中個所とSブロック、第1炭化物片集中個所とRブロックをあげることが出来る。また炭化物片の大きさのうえでは共通して皆細かいものであるが、密度の面からは高低差がかなり存在し、層位的な上下のバラツキにもかなりの違いがみられる。これらの炭化物片集中個所にみられる相違が何に起因しているかを知ることは難しいが、たとえば土中での包含状態に石器や礫とは異なったあり方が考えられ、石器群におけるビーナス曲線のようなパターンを検討することも意味のあることと考える。



第118図 第3炭化物片集中個所実測図 (1/80)



第119図 第4炭化物片集中個所実測図 (1/80)



第120図 第5炭化物片集中研究所実測図 (1/80)

第2節 繩文時代

1 陥し穴状土壙（第121～145図、図版40～46、第9表）

陥し穴状土壙は総数66基検出され、規模・形態等に違いがみられる。

個々の陥し穴状土壙については第122～145図及び第9表を見て頂くことにして、ここでは項目別に検討することにしたい。

(1) 形態分類

A類 口部が長楕円で細長い形態のもの。口部長軸と短軸の長幅比は平均2.9である。

A 1類 24基ある。底部の幅が狭く棒状で短軸断面が漏斗状を呈するもの。底部の幅はほとんどが20cm以下で、深さは約1.6m。3号・5号・9号・12～15号・19号・20号・22号・23号・25号・26～28号・37号・38号・40号・43号・45号・49号が相当する。

A 2類 7基ある。口部と底部の幅にあまり差がなく短軸断面が寸胴で浅いもの。深さは約1m。17号・24号・33号・34号・47号・53号・66号が相当する。

A 3類 2基ある。底部の幅がやや広く浅いもの。底部の幅は約40～50cm、深さは約1m。16号と18号が相当する。

B類 口部が楕円形のもの。口部長軸と短軸の長幅比は平均1.5である。

B 1類 底部の幅が狭く棒状のもの。

B 1 a類 5基ある。大形で縦断面がほとんどオーバーハングしないもの。口部長軸約3.0m。8号・29号・35号・44号・58号が相当する。

B 1 b類 3基ある。大形で縦断面の下半が大きくオーバーハングするもの。口部長軸約2.8m。30号・32号・54号が相当する。

B 1 c類 5基ある。中～小形で縦断面は上部が少しく述べて、底部へ行く程々にオーバーハングするもの。口部長軸約2.0m。41号・51号・57号・62号・63号が相当する。

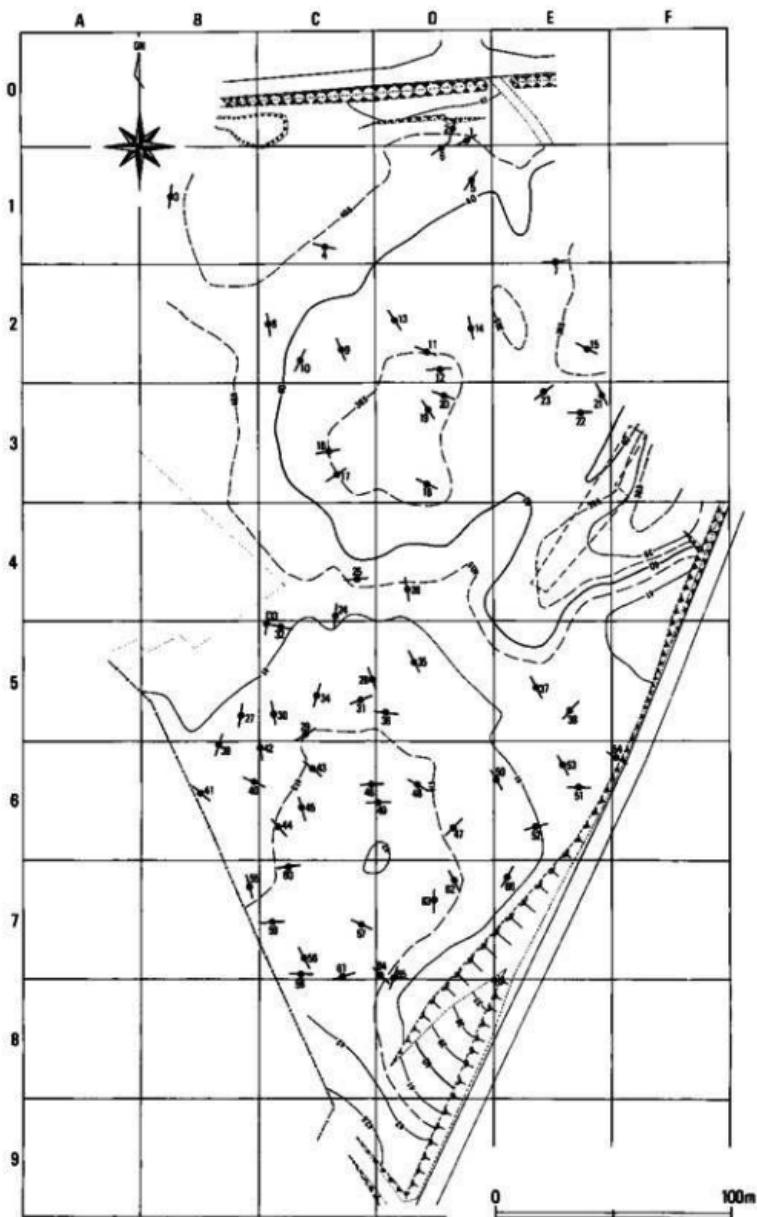
B 2類 底部の幅がやや広いもの。

B 2 a類 7基ある。縦断面が寸胴のもの。深さ約2.6m。36号・39号・42号・52号・56号・60号・65号が相当する。

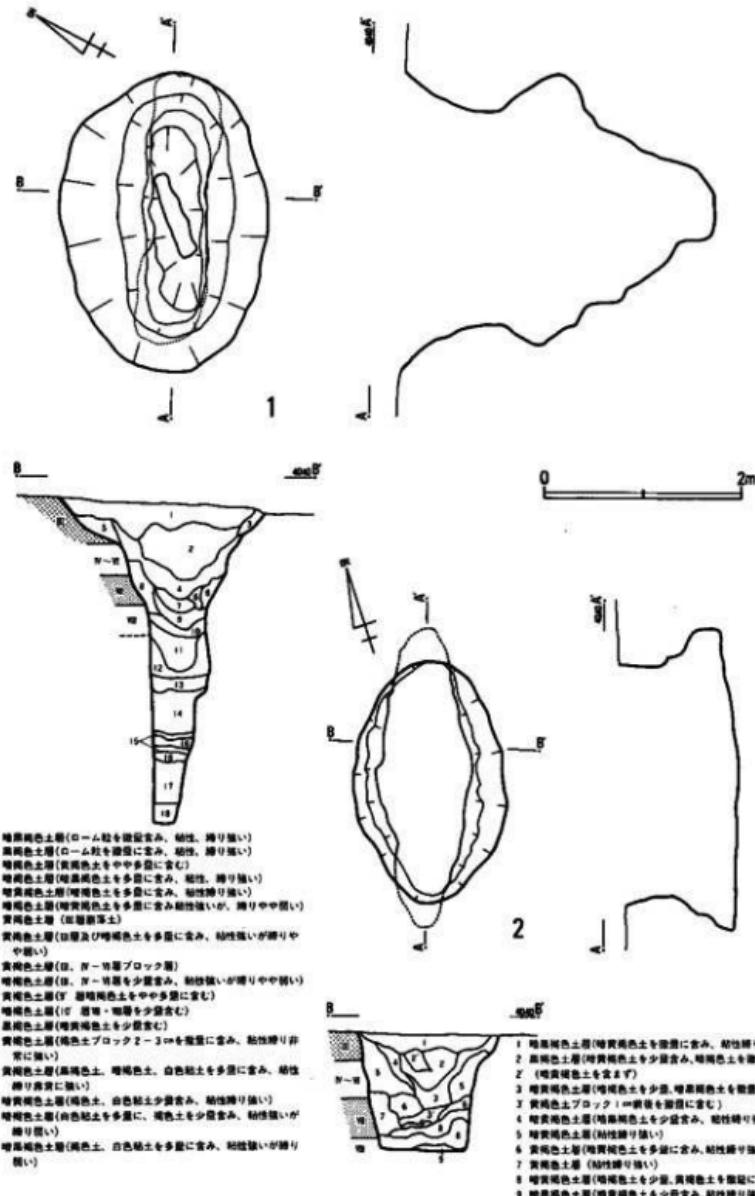
B 2 b類 5基ある。縦断面の中程がオーバーハングして深いもの。深さ約2.8m。1号・6号・46号・48号・61号が相当する。

B 2 c類 31号の1基のみである。縦断面の底部がオーバーハングして深いもの。深さ約2.7m。

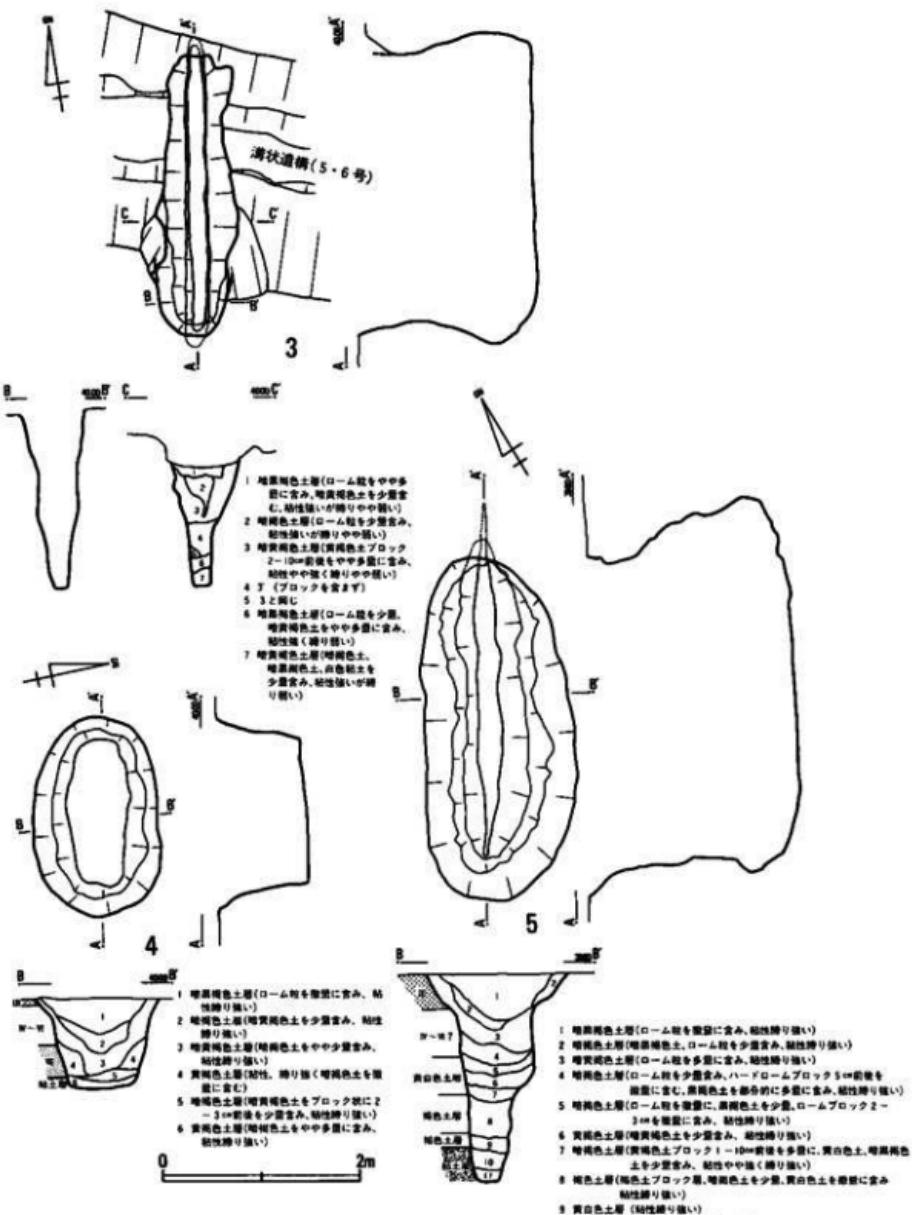
B 2 d類 6基ある。縦断面がオーバーハングしないで浅いもの。深さ約1.5m。4号・7号・10号・11号・21号・59号が相当する。



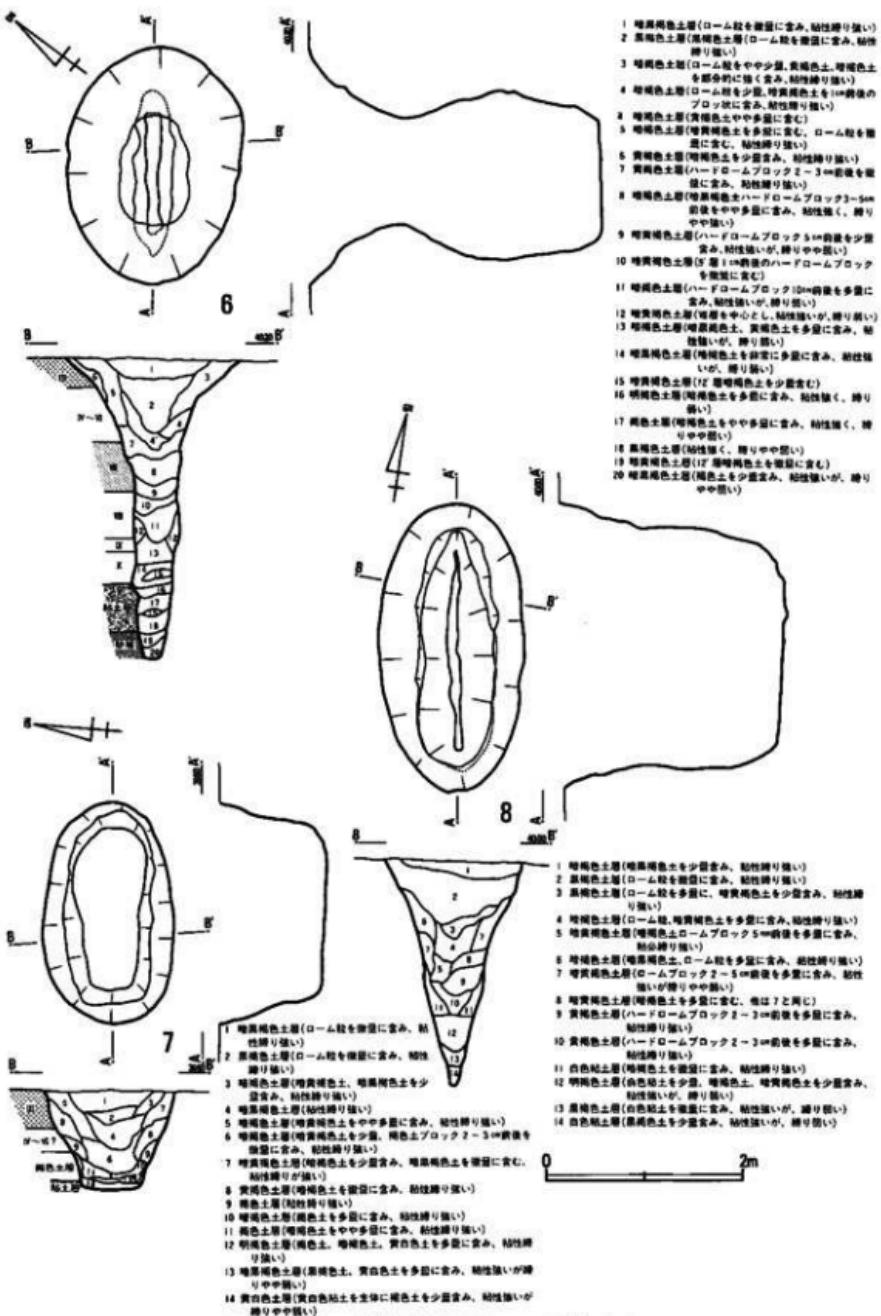
第121図 詰し穴状土壤分布図 (1/2500)



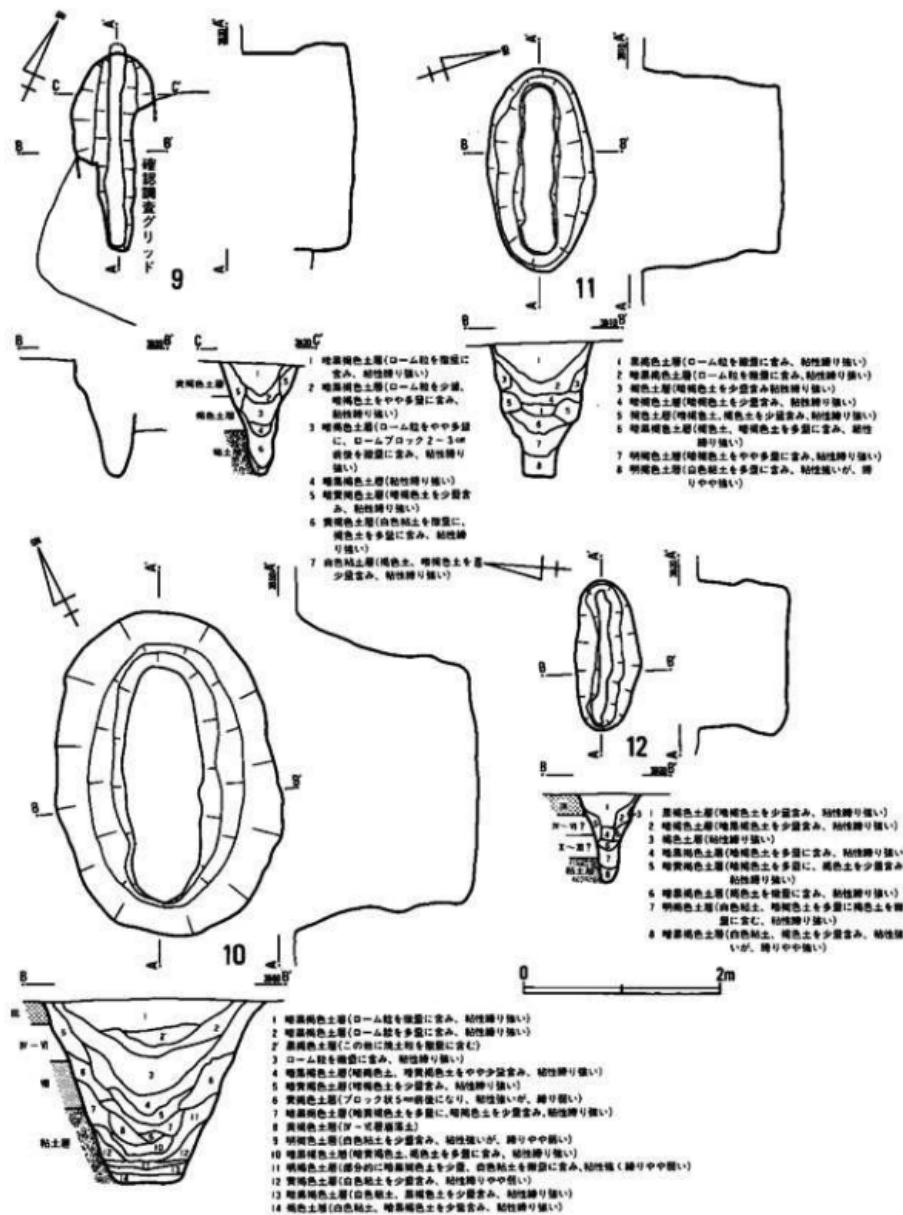
第122図 陥し穴状土壤実測図(1・2号)(1/60)



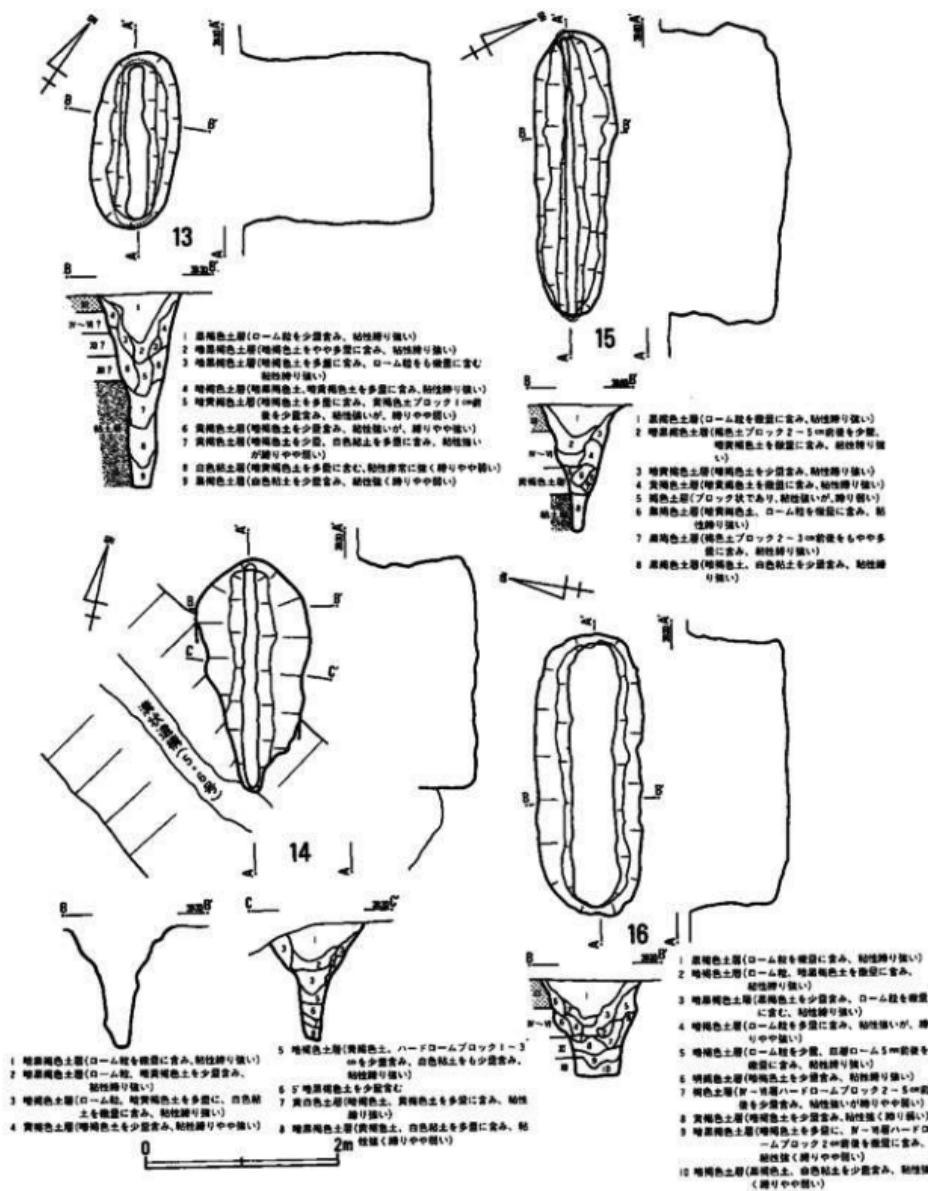
第123図 陥し穴状土壤実測図(3~5号)(1/60)



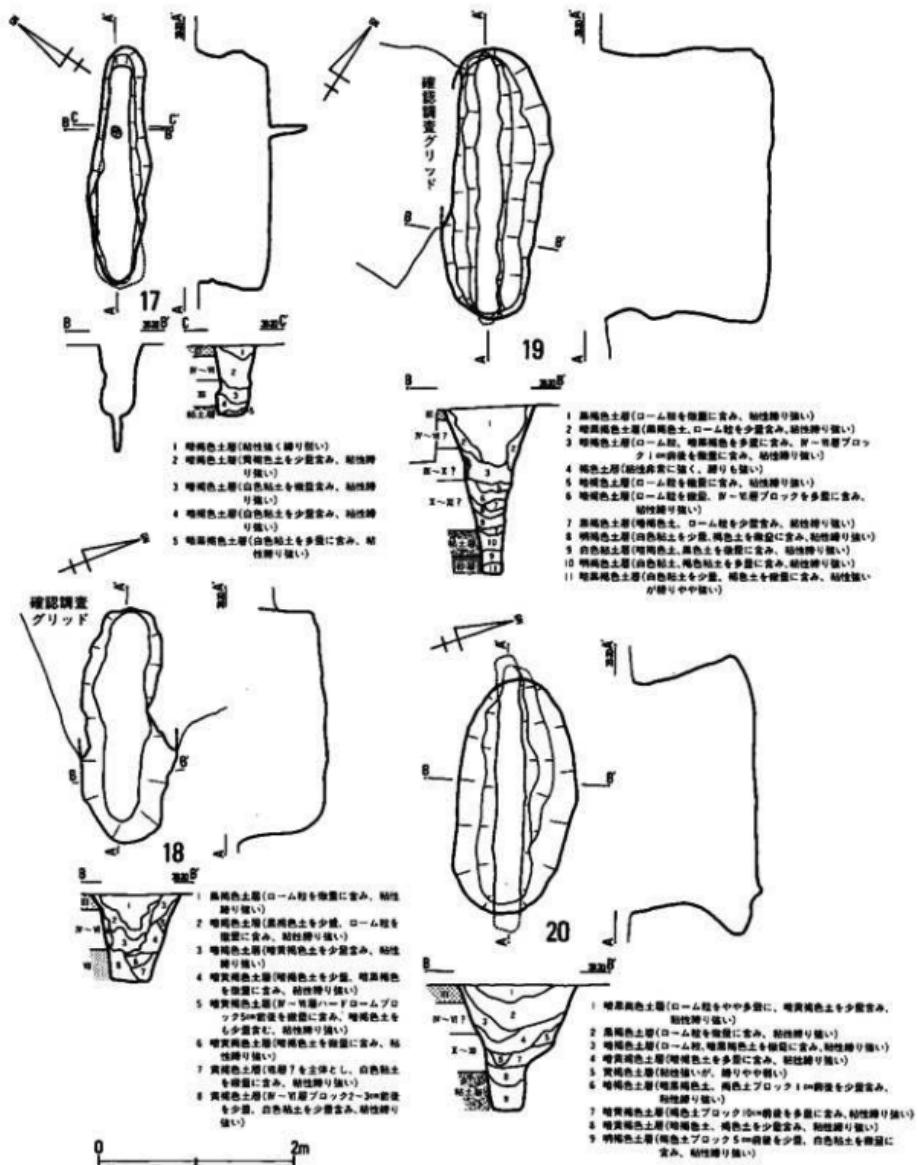
第124図 陥し穴状土壤実測図(6 ~ 8号)(1/60)



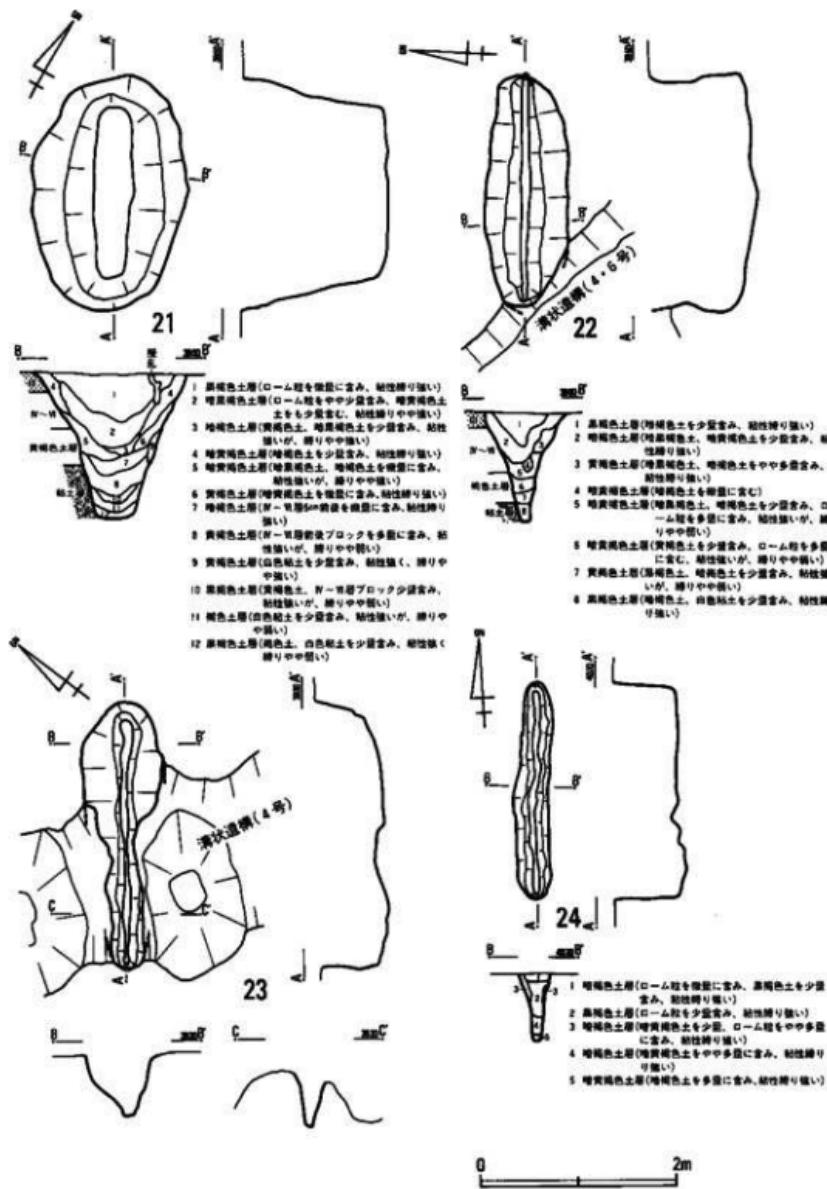
第125図 誤し穴状土壤実測図(9~12号)(1/60)



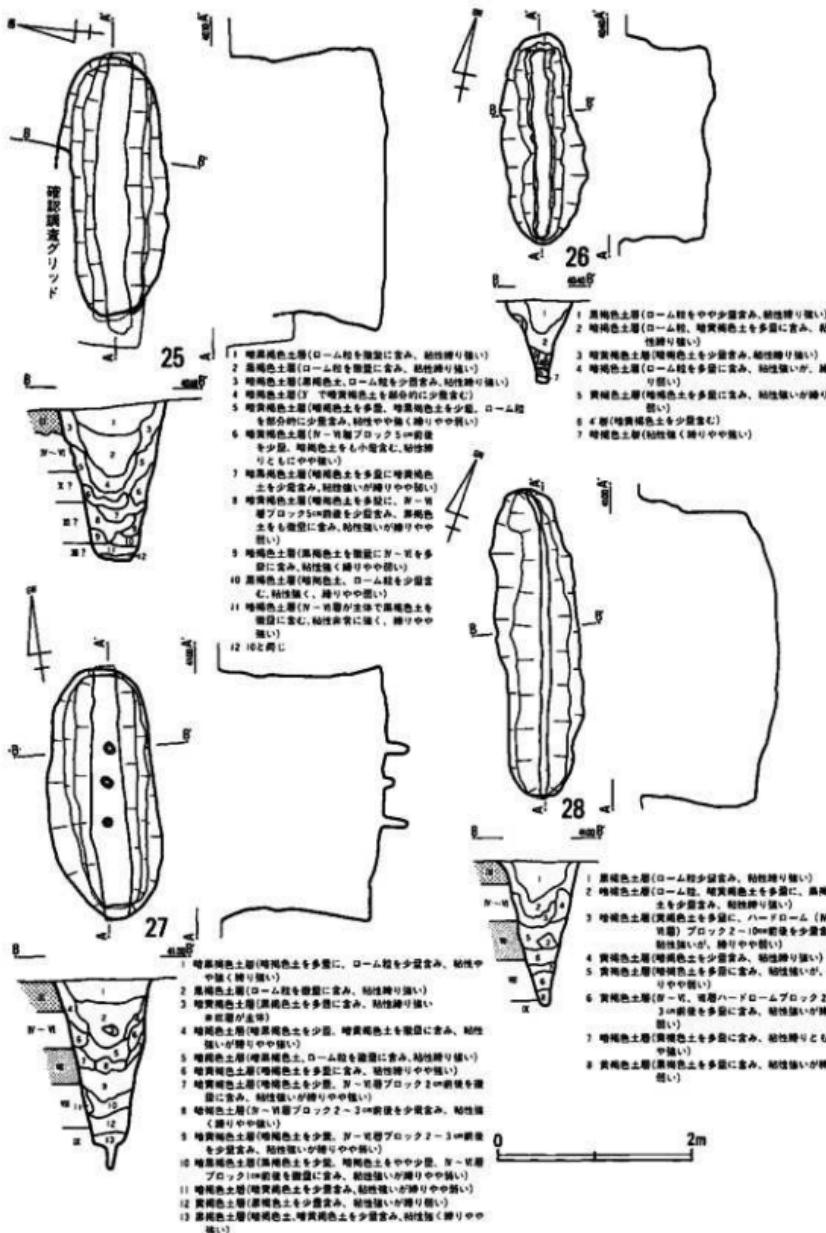
第126図 陥し穴状土壤実測図(13~16号)(1/60)



第127図 陥し穴状土壤実測図(17~20号)(1/60)

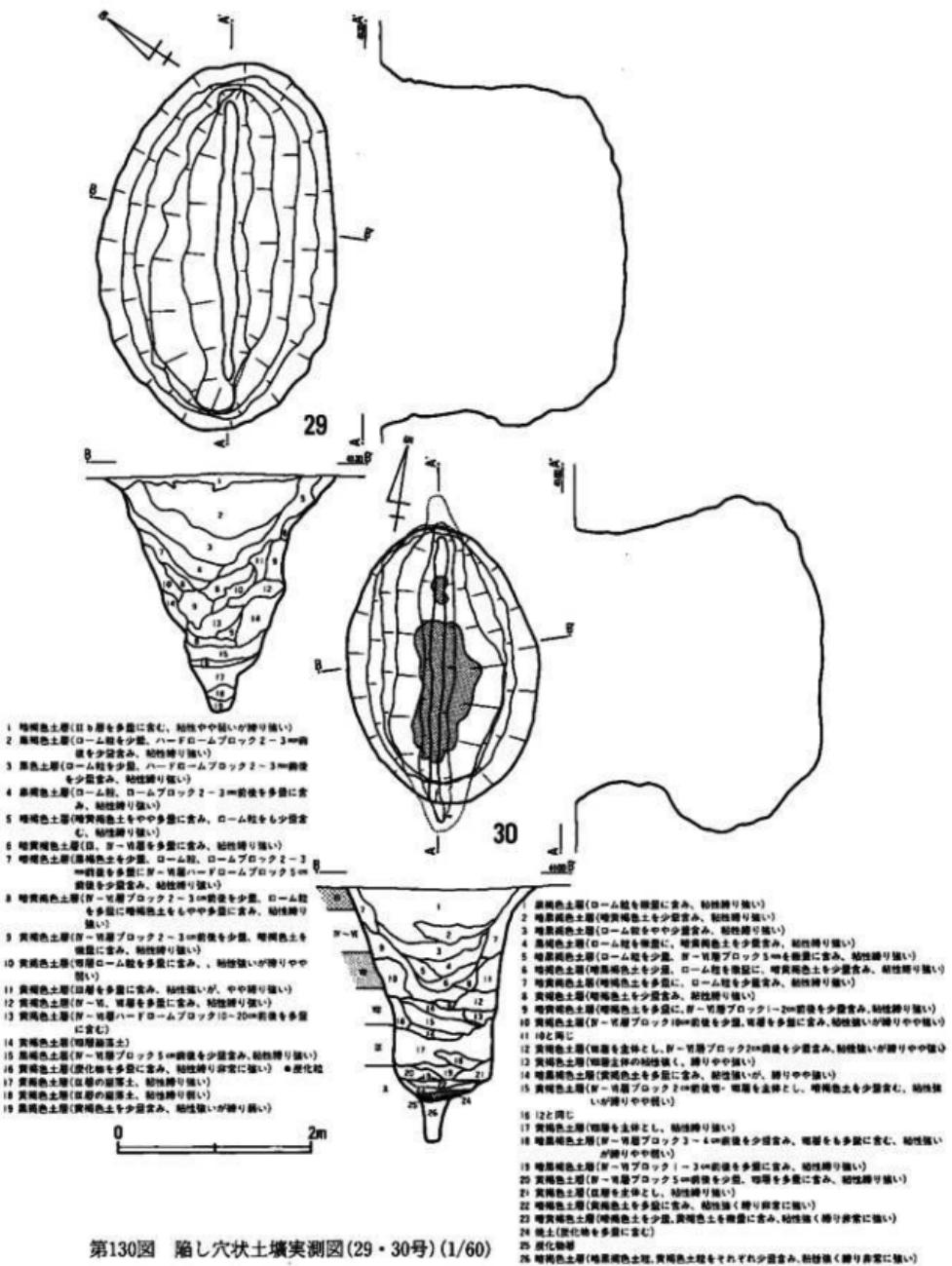


第128図 脱し穴状土壤実測図(21~24号)(1/60)

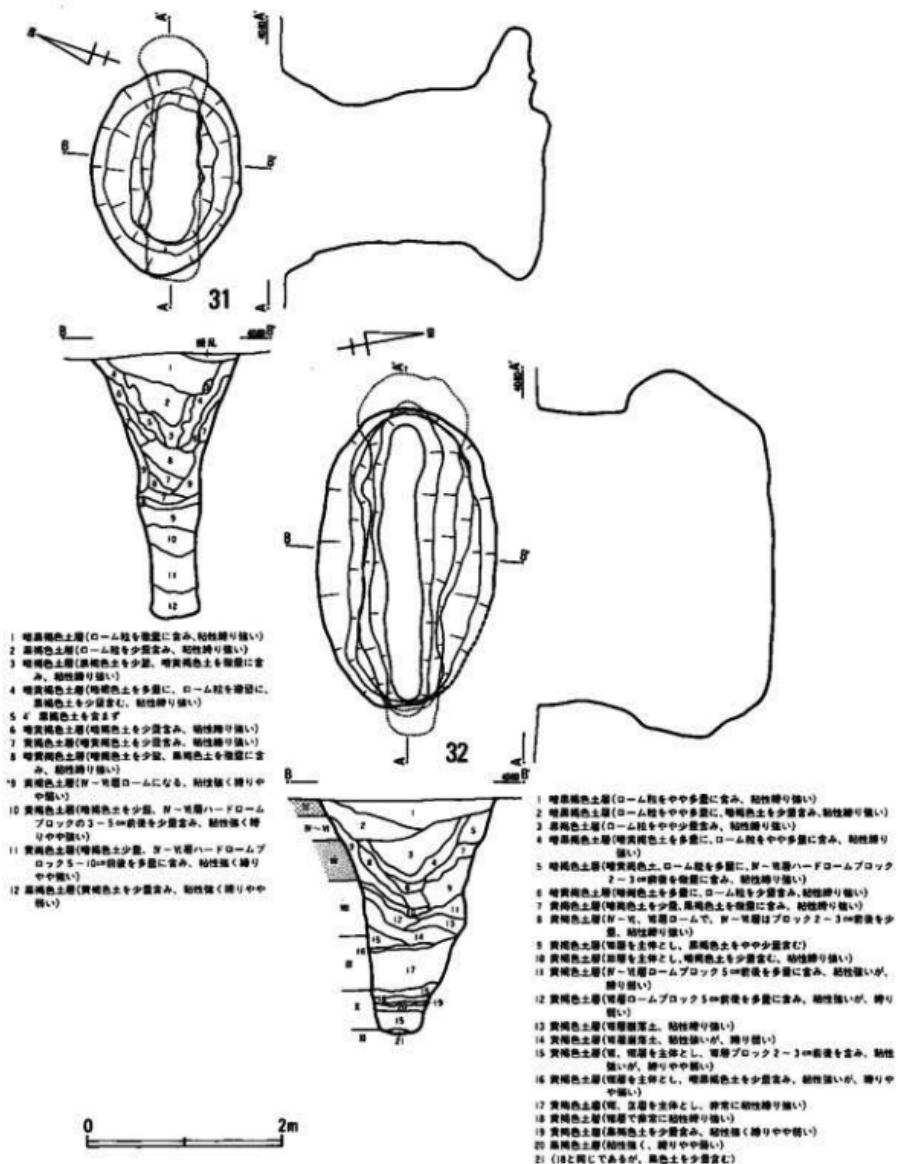


第129図 滞し穴状土壤実測図(25~28号)(1/60)

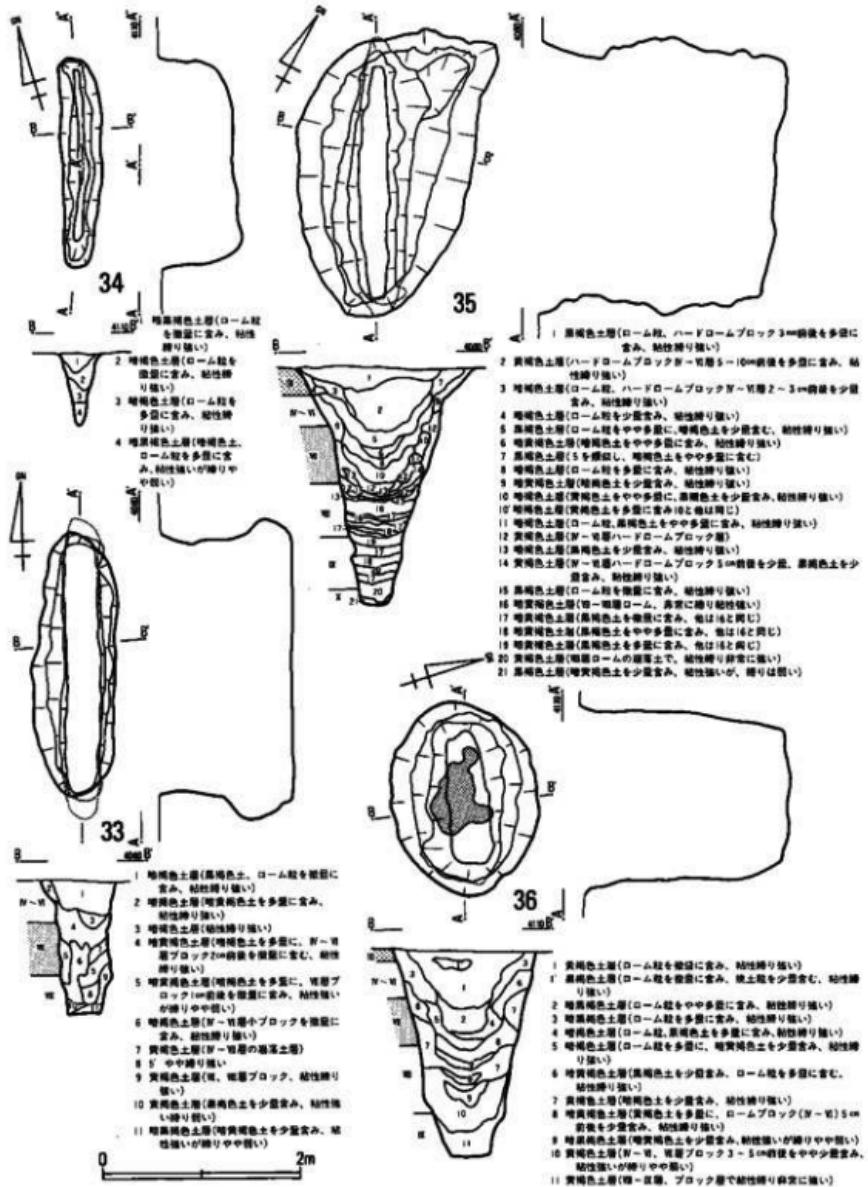
No.10 透跡



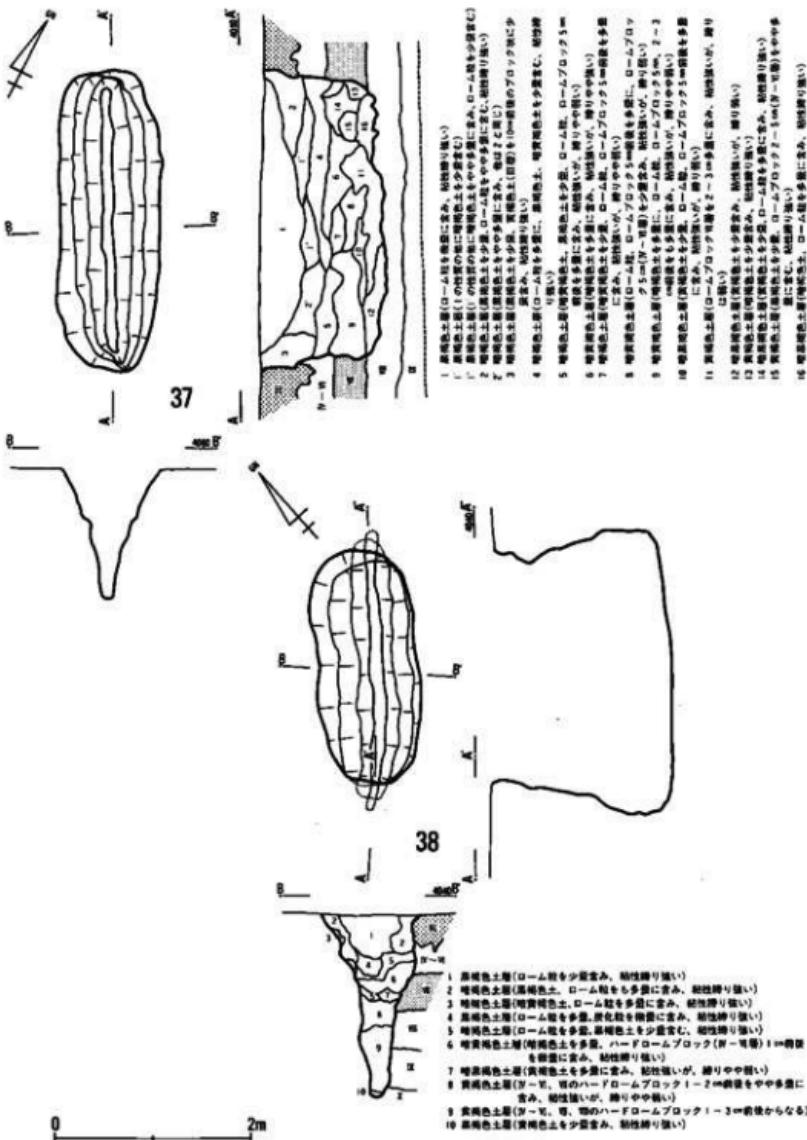
第130図 陥し穴状土壤実測図(29・30号)(1/60)



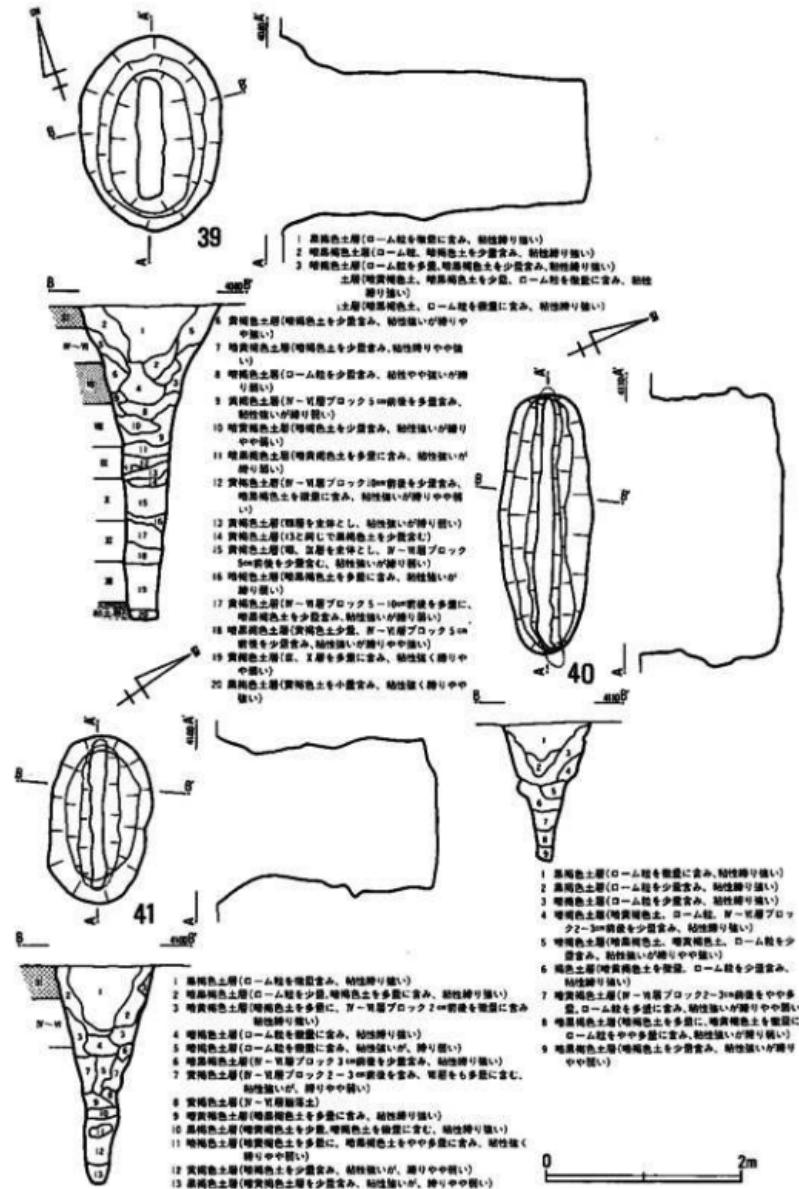
第131図 陥し穴状土壤実測図(31・32号)(1/60)



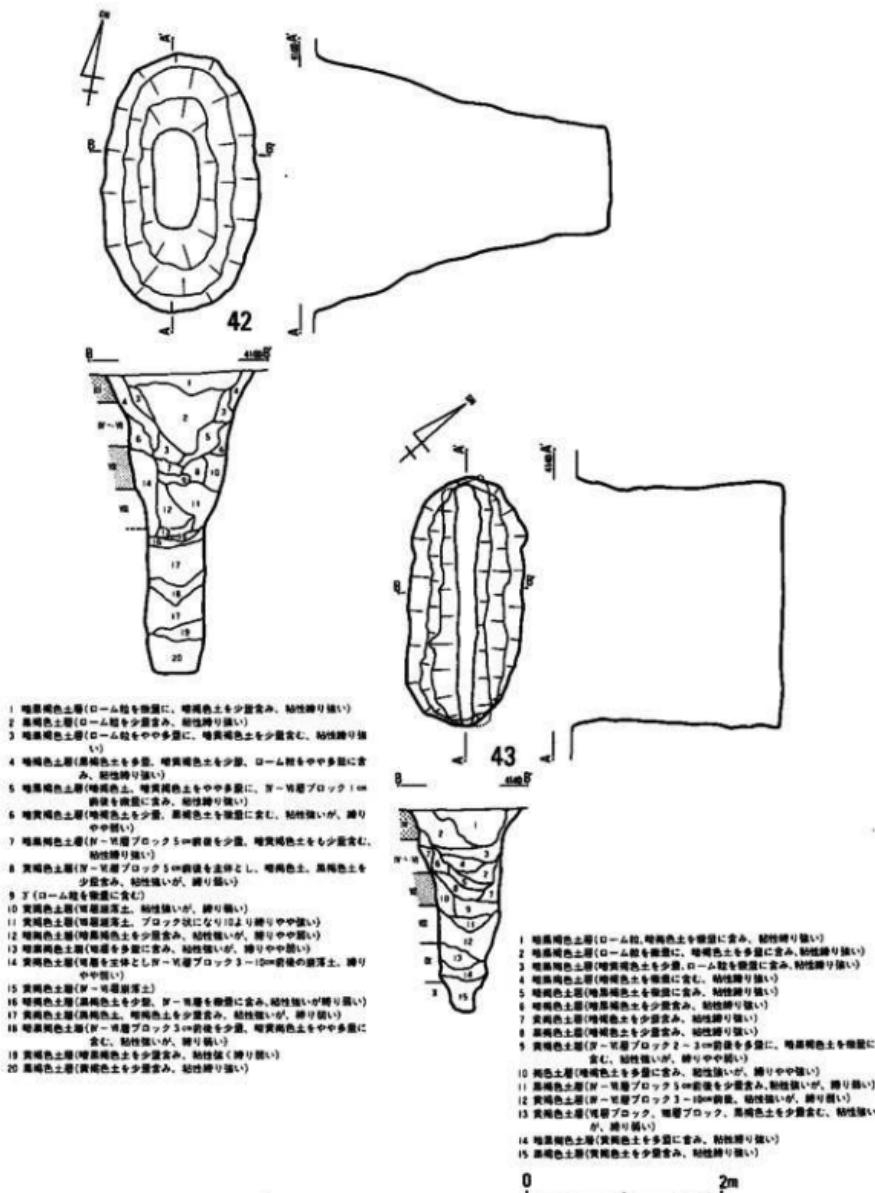
第132図 誤し穴状土壤実測図(33~36号)(1/60)



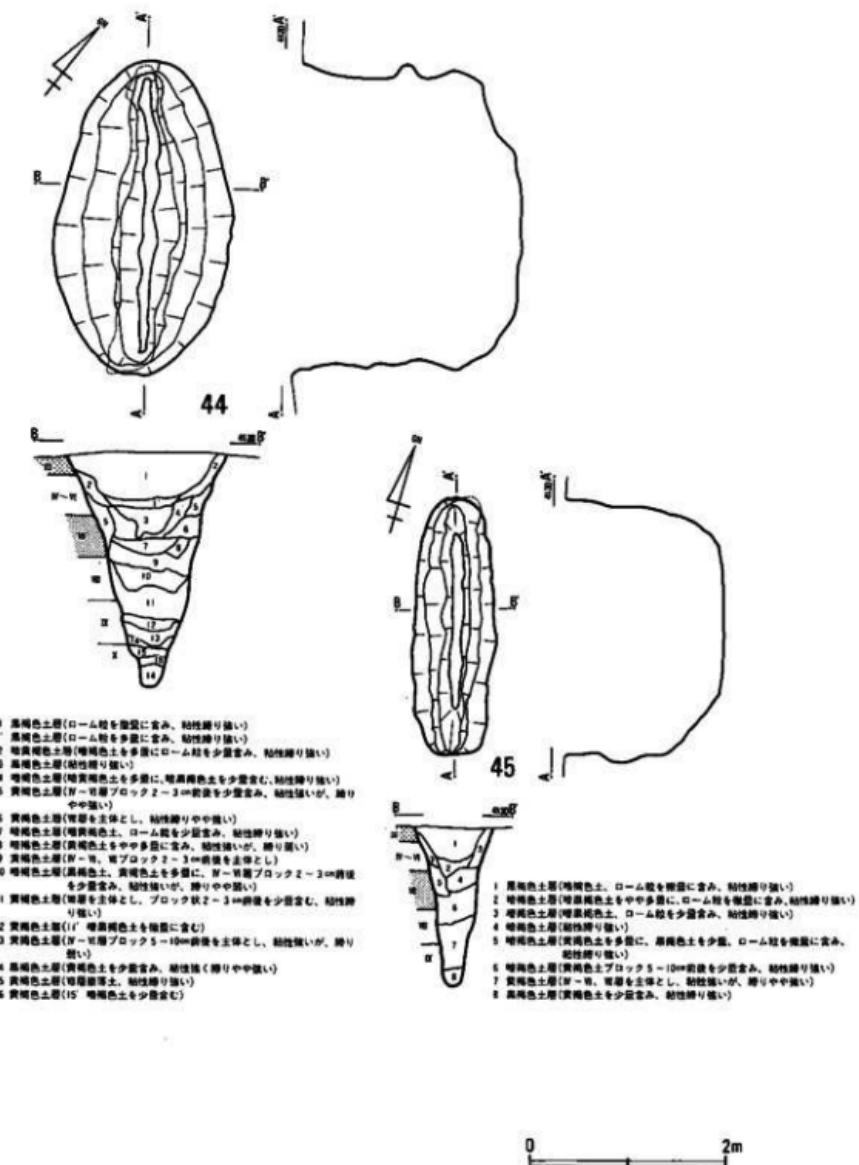
第133図 脱し穴状土壤実測図(37・38号)(1/60)



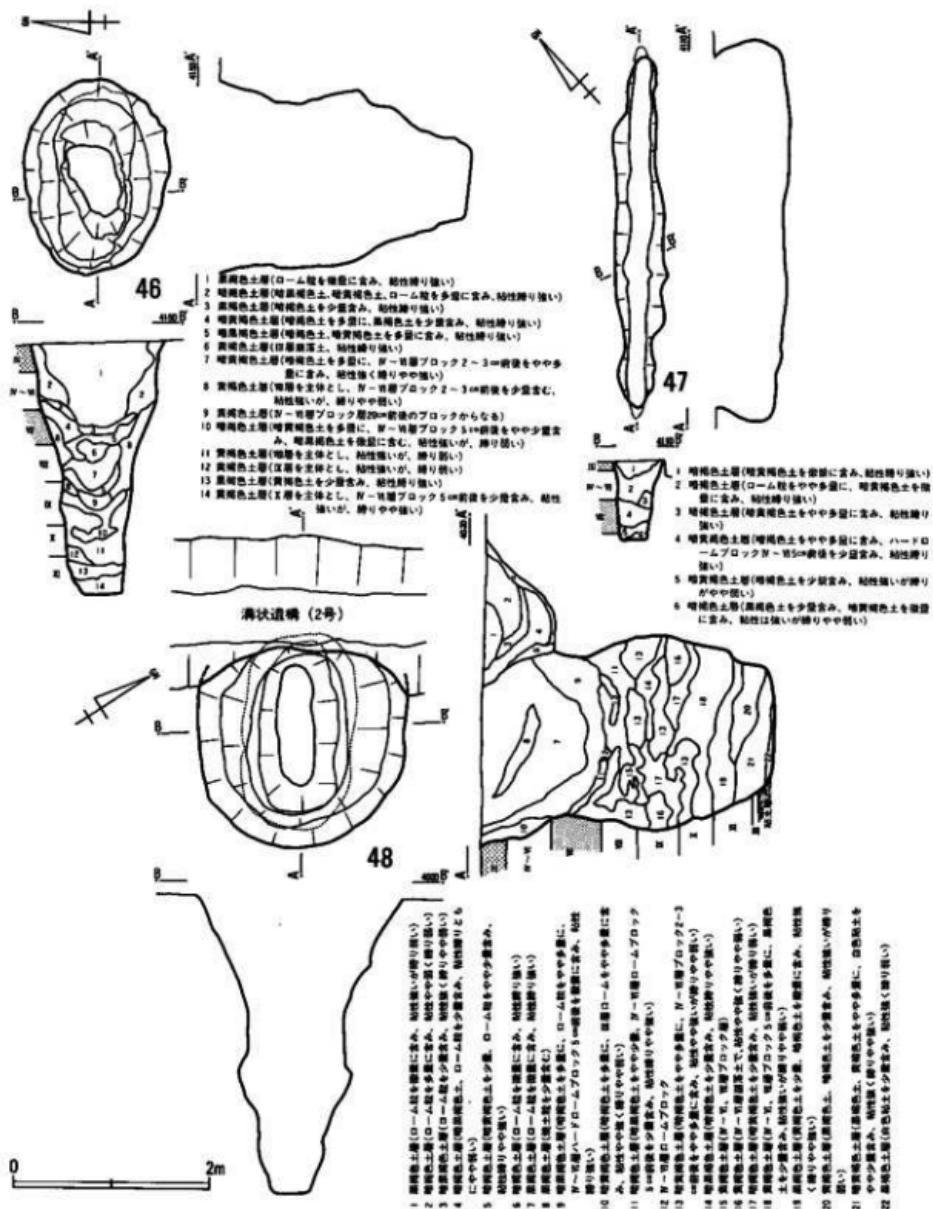
第134図 陥し穴状土壤実測図(39~41号)(1/60)



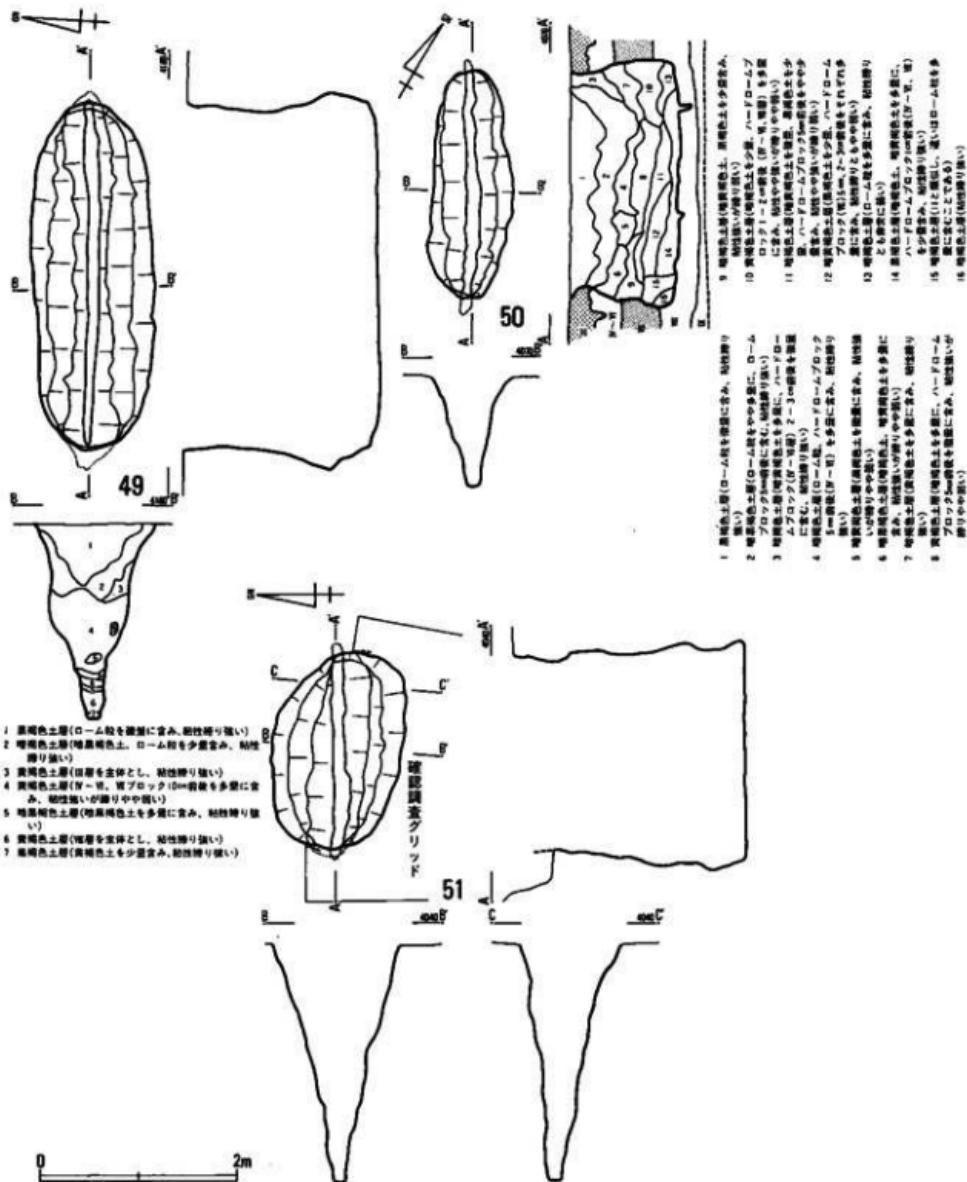
第135図 陥し穴状土壌害測図(42・43号)(1/60)



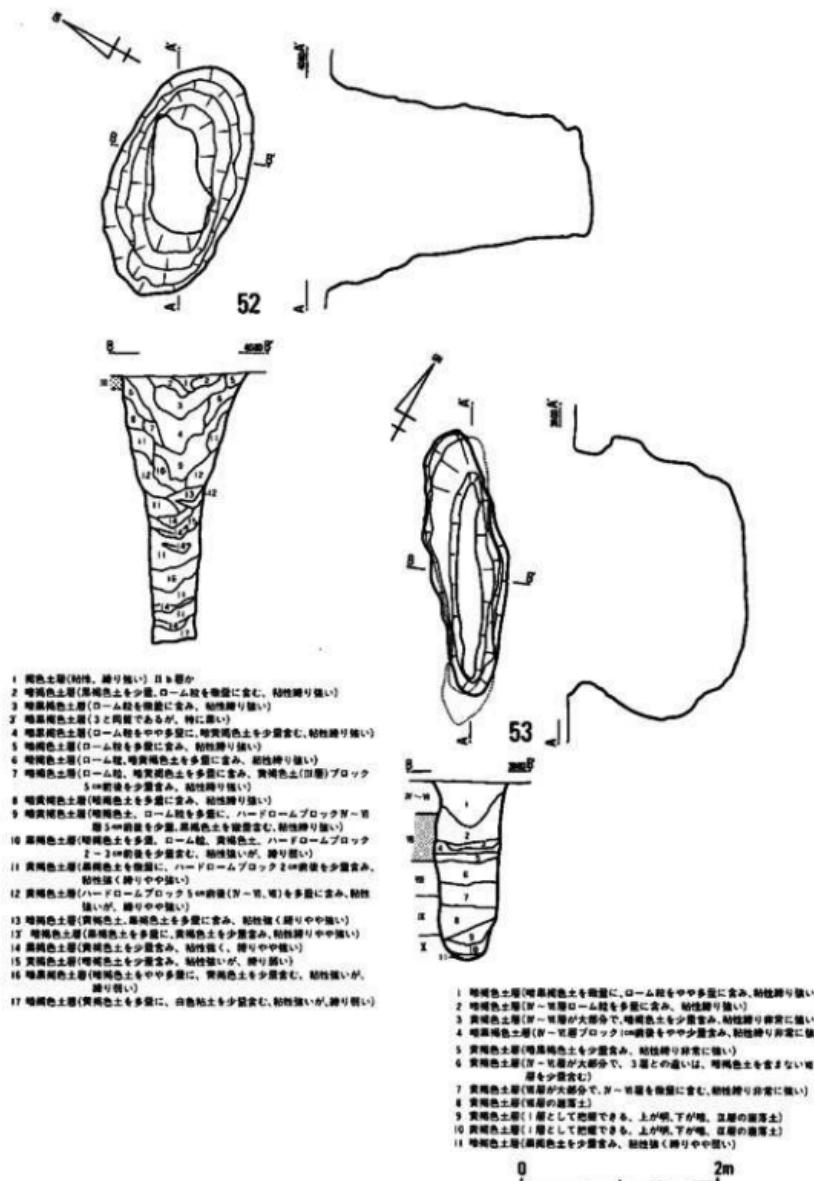
第136図 陥し穴状土壤実測図(44・45号)(1/60)



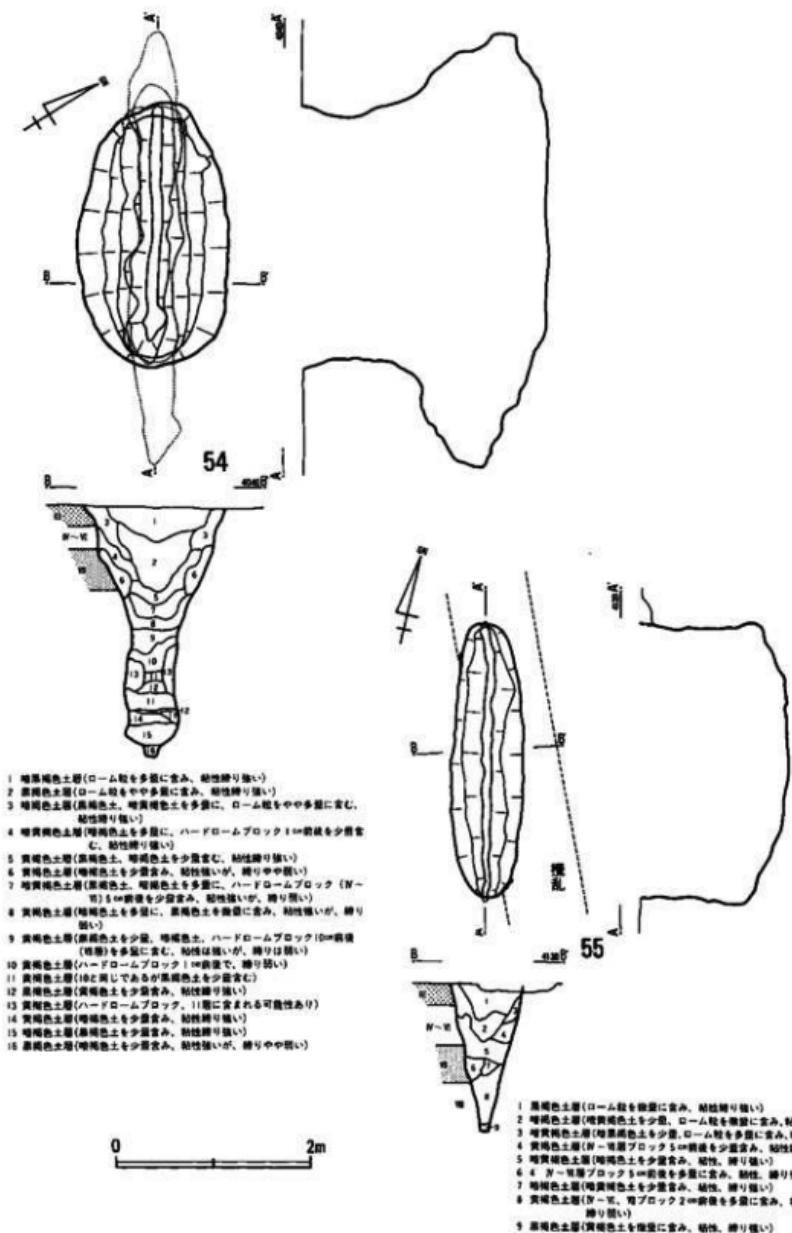
第137図 誤し穴状土壤実測図(46~48号)(1/60)



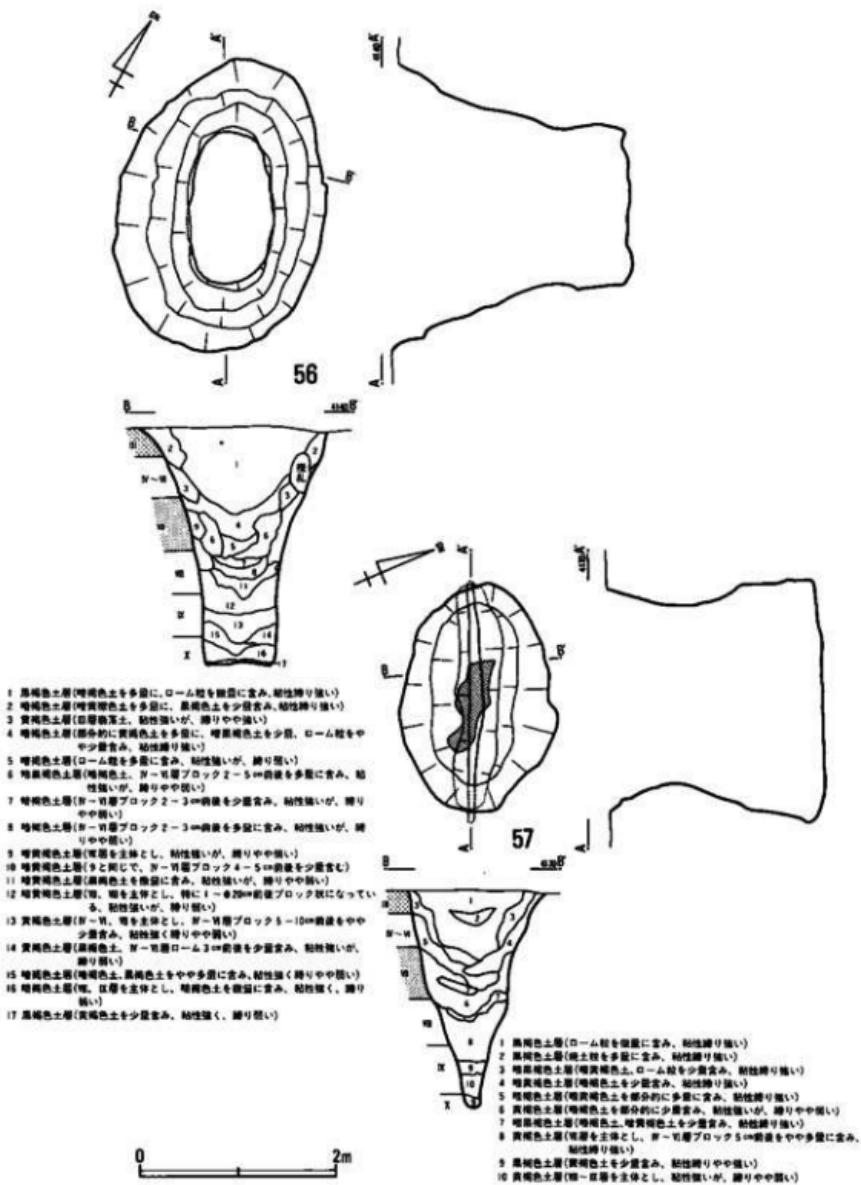
第138図 誤し穴状土壤実測図(49~51号)(1/60)



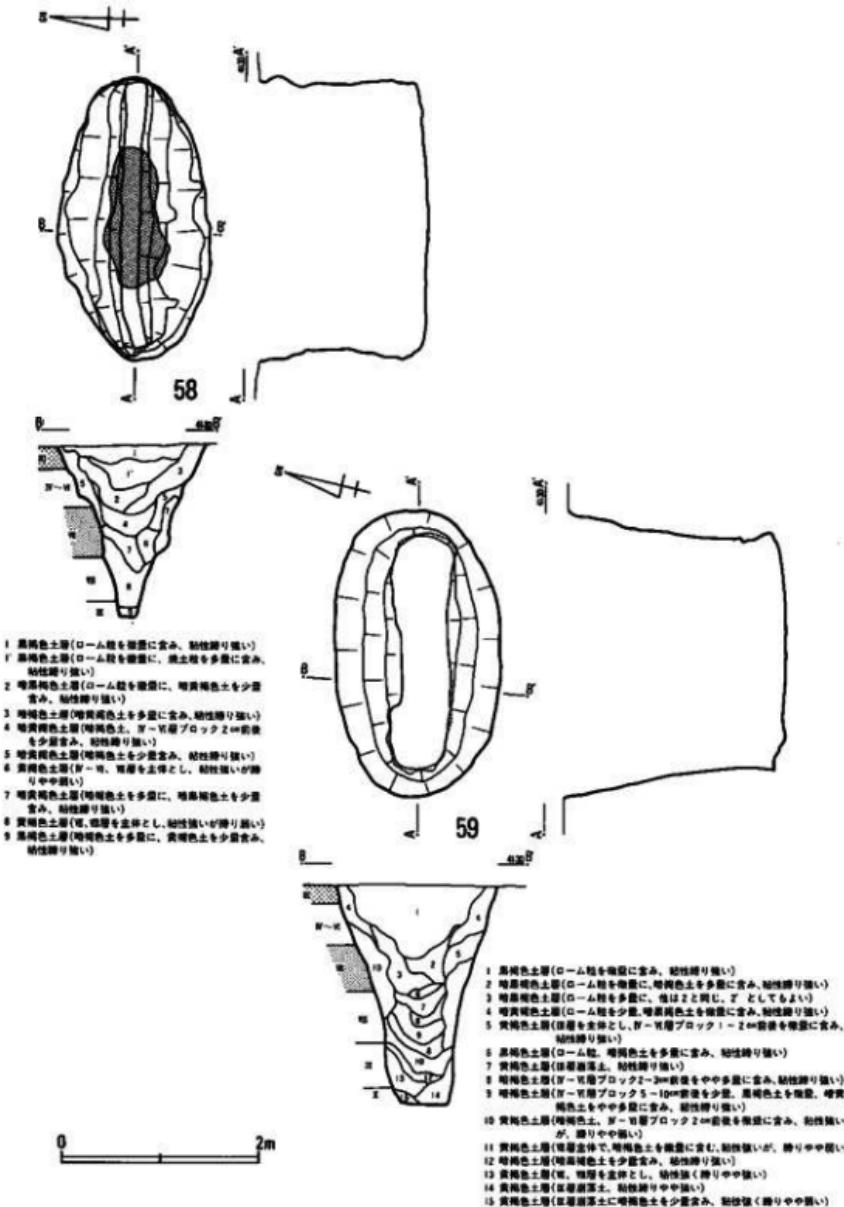
第139図 詰し穴状土壤実測図(52・53号)(1/60)



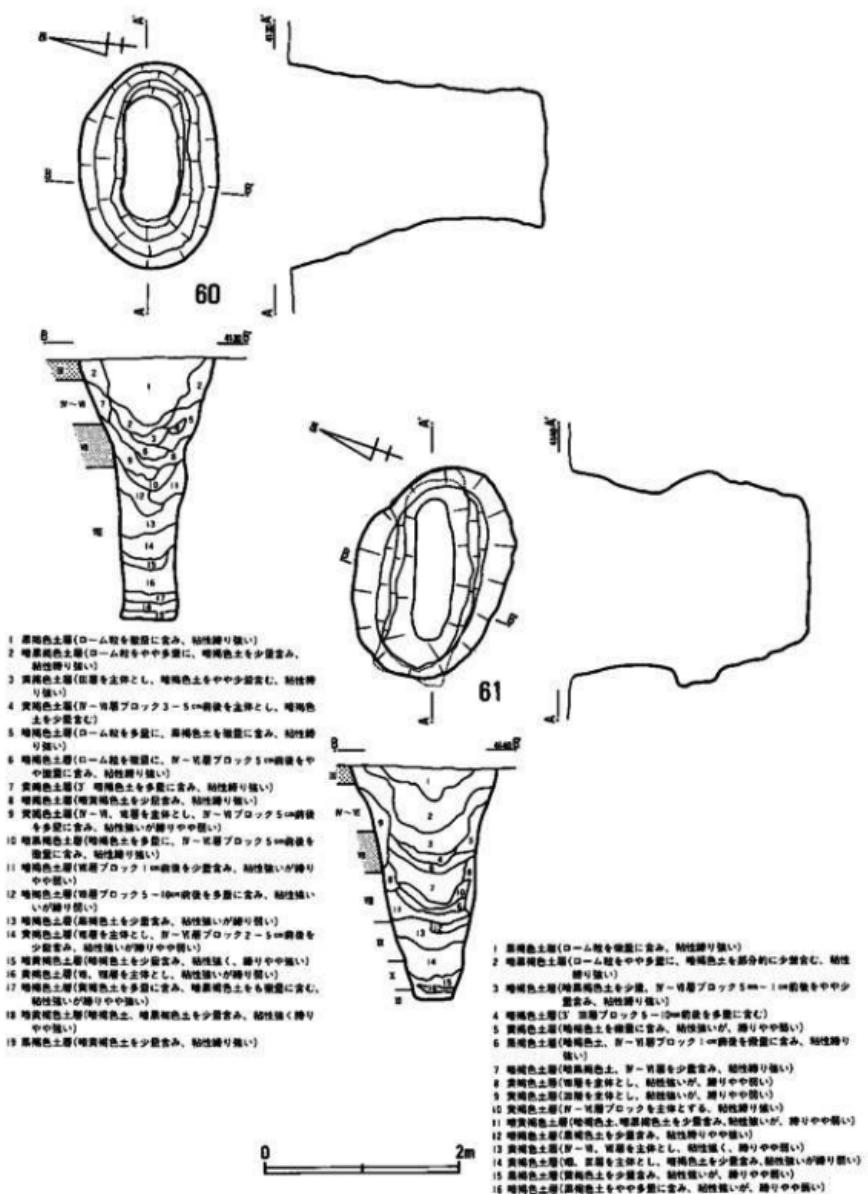
第140図 陥し穴状土壤実測図(54・55号)(1/60)



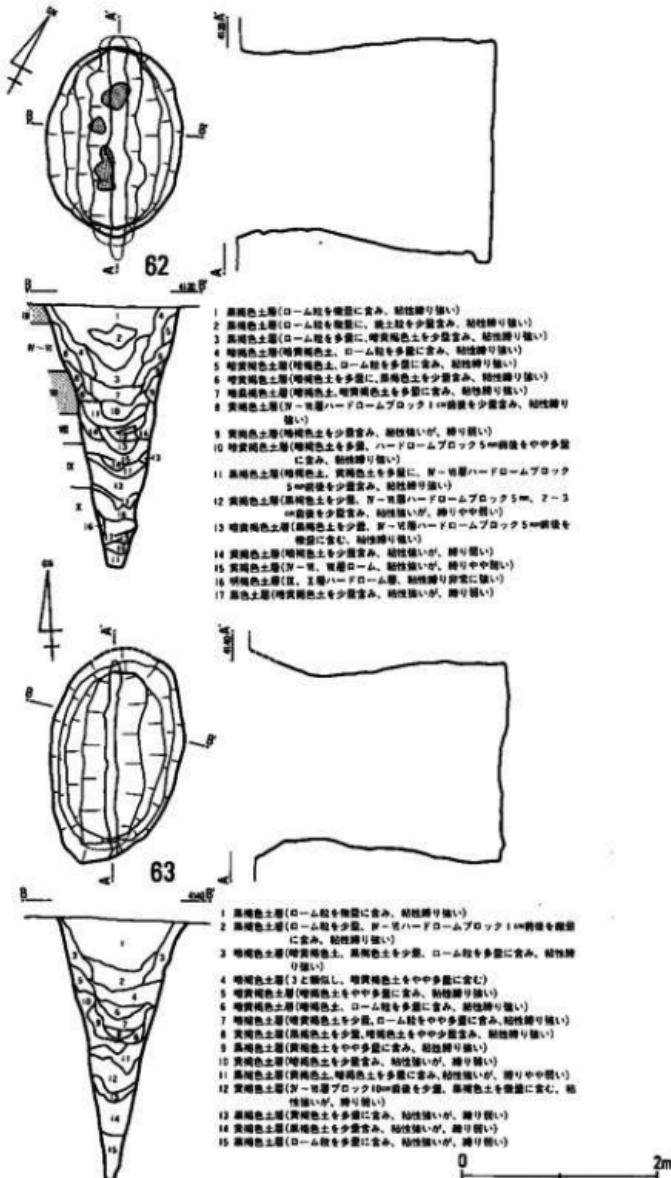
第141図 脱し穴状土壤実測図(56・57号)(1/60)



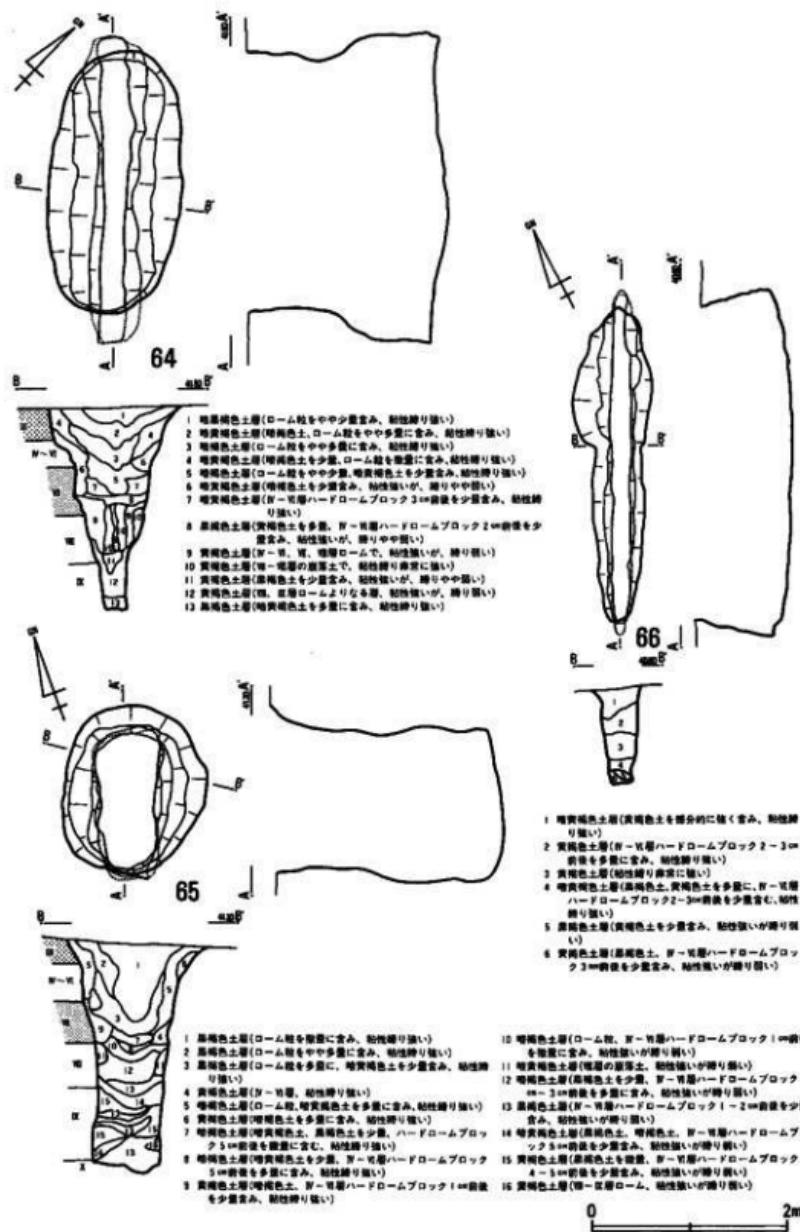
第142図 陥し穴状土壤実測図(58・59号)(1/60)



第143図 跪し穴状土壤実測図(60・61号)(1/60)



第144図 陥し穴状土壤実測図(62・63号)(1/60)



第145図 陥し穴状土壤実測図(64~66号)(1/60)

B 2 e 類 2号の1基のみである。縦断面の底部がオーバーハングして浅いもの。深さ約1.2m。

(2)規模

口部の平均は2.5m×1.3mで長幅比は1.9である。最大はB 1 a 類の29号で3.8m×2.5m、最小はA 1 類12号の1.5m×0.7mとA 2 類34号の2.1m×0.4mである。

底部の平均は2.2m×0.3mで長幅比は7.3である。最大はA 2 類47号の3.7m×0.2mとB 2 e 類2号の3.0m×1.0mであり、最小はB 2 b 類46号の0.8m×0.5mと同じくB 2 b 類6号の1.2m×0.1mである。

深さの平均は1.8m、最大はB 2 b 類1号の3.2m、最小はA 1 類23号の0.6mである。

(3)覆土

上半部は黒褐色～暗褐色土がレンズ状に落ち込んでいるものが多く、下半部はロームブロックをかなり含み壁面の崩落が考えられる。また、黒色～黒褐色土が底面直上に帯状に認められることが多い。

(4)出土遺物

覆土出土の遺物はほとんどないと言ってよく、土器としてはB 2 a 類52号の1基から出土した条痕文系土器(第152図5～8)があるのみである。その他B 1 b 類30号からは底部より炭化物と焼土が出土しており、B 1 a 類58号・B 1 c 類57号・62号の3基からは覆土上部において焼土が検出された。以上の出土遺物は全てB類からであるが、土器を除く焼土・炭化物の存在と形態とがどこかで結び付くのであろうか。

(5)底部ピット

A 2 類17号から径8cm深さ40cm程のピットが1個、またA 1 類27号から径9cm深さ10～25cm程のピットが3個検出された。これらは2例ともA類に属し興味深い。

(6)等高線との交差方向

直交するもの21基、斜交するもの30基、平行するもの15基の割合であるが、遺跡南部の高所の周りの標高41.5m付近や北部のやや窪地の標高39.5m付近のはほとんどが直交しているようにも見える。

(7)分布

等高線との交差方向のところでもふれたが、遺跡南部の標高42mの高所を囲むようにやや環状に分布しているように見える。また、北部の窪地の辺もやや環状に近い分布をしているように見える。

形態別にみると、A 1 類は北部の窪地よりやや北側と南部の高所より北側のゆるやかな緩斜面に集中している。A 2 類は中央部やや西側と南東部に集中している。A 3 類は中央やや北側の窪地に2基もある。B 1 a 類は南部の高所の西側を北から南にかけて分布している。B 1

b類は高所の北側の東西に分布している。B 1 c類は高所の南側を西から東にかけて分布している。B 2 a類は高所を取り囲むように分布している。B 2 b類は高所の北側と南側及び遺跡の北端に分布しているが、そのうち2ヶ所は隣接して2基があり、セットでつくられたとも考えられる。B 2 d類は南端の1基を除き全て北側につくられている。B 2 c類及びB 2 e類は1基のみである。

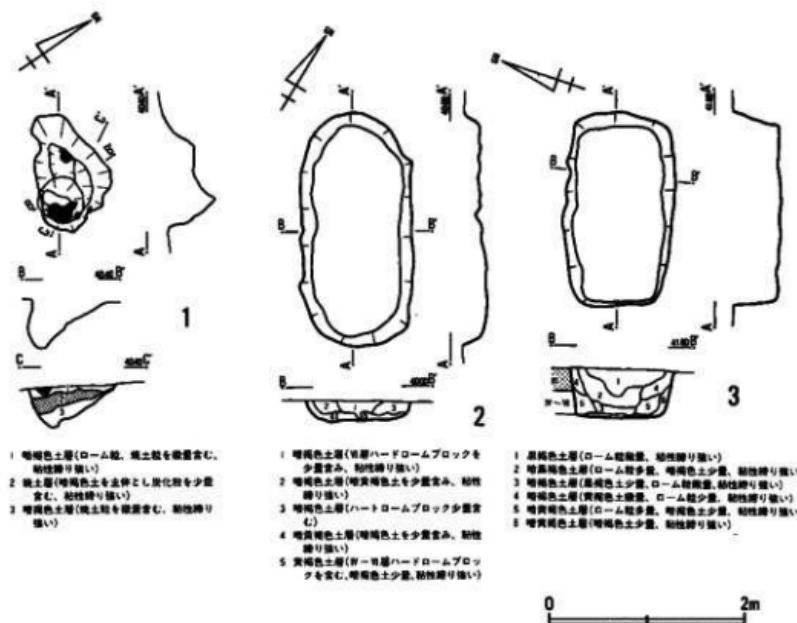
(8)まとめ

陥し穴状土壙は、Tピットあるいは溝状遺構などと呼ばれ、いまだ機能・用途は不明であるが、いまのところ一番有力と考えられるのでこの名称を使用した。本遺跡においては切り合ひ関係も溝状遺構との間にしかないため、その時期を推定することは困難であるが、近隣の遺跡においても本遺跡のようなタイプのものからは縄文時代早期の土器が出土することが多く、また、ハードローム面まで下げないと確認出来ないことも多々あるので、霧ヶ丘（今村他1973）等に盲従する訳ではないがやはり縄文時代早期後半ぐらいのものと考えたい。なお本分類によると今村の行なった霧ヶ丘のE型2基は各々A1類、A2類といえる。また、宮澤・今井の分類（宮澤・今井1976）のI形態はA類、A形態とH形態はB類に相当するものとなろう。

第9表 陥し穴状土壙一覧表

番号	登録番号	口部規模(m) (長軸×短軸)	底部規模(m) (長軸×短軸)	深さ (m)	底ビット	等高線との 交差	覆土遺物
1	0D-I-001	3.0 × 2.1	0.9 × 0.2	3.2		直	交
2	0D-I-002	2.4 × 1.5	3.0 × 1.0	1.2		直	交
3	1B-I-001	(3.0) × (0.8)	2.9 × 0.1	1.8		平	行
4	1C-I-001	2.0 × 1.3	1.5 × 0.6	0.9		直	交
5	1D-I-001	3.5 × 1.5	3.6 × 0.2	2.1		斜	交
6	1D-I-002	2.4 × 1.7	1.2 × 0.1	3.0		斜	交
7	1E-I-001	2.2 × 1.3	1.6 × 0.7	1.0		直	交
8	2C-I-002	2.9 × 1.5	2.0 × 0.1	2.2		斜	交
9	2C-I-004	(2.0) × (0.8)	2.1 × 0.2	1.1		直	交
10	2C-I-005	3.3 × 2.3	2.4 × 0.8	1.8		平	行
11	2D-I-001	2.1 × 1.1	1.7 × 0.3	1.4		平	行
12	2D-I-002	1.5 × 0.7	1.3 × 0.1	0.9		斜	交
13	2D-I-003	1.8 × 0.9	1.6 × 0.2	2.0		直	交
14	2D-I-004	(2.4) × (1.2)	2.3 × 0.1	1.2		斜	交
15	2E-I-001	2.9 × 0.8	2.9 × 0.1	1.3		平	行
16	3C-I-001	2.9 × 1.1	2.7 × 0.4	1.0		直	交
17	3C-I-002	2.4 × 0.6	2.3 × 0.4	0.7	1	直	交
18	3D-I-001	(2.5) × (1.0)	2.1 × 0.5	0.9		直	交
19	3D-I-002	2.7 × (1.1)	2.7 × 0.2	0.7		斜	交
20	3D-I-003	2.4 × 1.2	2.8 × 0.3	1.3		直	交
21	3E-I-001	2.4 × 1.6	1.7 × 0.4	1.5		斜	交

番号	登録番号	口部規模(m) (長軸×短軸)	底部規模(m) (長軸×短軸)	深さ (m)	底部 ピット	等高線と の 交 差 方 向	覆土 遺物
22	3E-1002	(2.4) × 0.8	2.3 × 0.1	1.1		斜	交
23	3E-1003	2.6 × (0.8)	2.4 × 0.1	0.6		直	交
24	4C-1001	2.2 × 0.4	2.0 × 0.1	0.7		直	交
25	4C-1002	2.6 × (1.1)	2.9 × 0.3	1.6		斜	交
26	4D-1001	2.2 × 0.8	1.9 × 0.2	0.9		直	交
27	5B-1001	2.5 × 1.1	2.6 × 0.4	1.7	3	斜	交
28	5C-1001	3.1 × 0.8	3.1 × 0.1	1.4		斜	交
29	5C-1002	3.8 × 2.5	2.9 × 0.2	2.5		平	行
30	5C-1003	2.8 × 2.0	2.9 × 0.1	2.6		斜	交
31	5C-1004	2.1 × 1.5	2.5 × 0.5	2.7		斜	交
32	5C-1005	3.0 × 1.8	2.8 × 0.4	2.4		斜	交
33	5C-1006	2.6 × 0.8	2.7 × 0.3	1.3		斜	交
34	5C-1007	2.1 × 0.4	1.7 × 0.1	0.8		斜	交
35	5D-1001	2.8 × 1.8	2.3 × 0.3	2.4		斜	交
36	5D-1002	1.9 × 1.5	1.3 × 0.4	2.1		平	行
37	5E-1001	3.0 × 1.0	2.7 × 0.1	1.3		斜	交
38	5E-1003	2.3 × 1.0	2.8 × 0.1	1.8		直	交
39	6B-1001	2.0 × 1.4	1.2 × 0.3	3.1		斜	交
40	6B-1002	2.6 × 0.9	2.5 × 0.2	1.4		直	交
41	6B-1003	1.7 × 1.0	1.5 × 0.1	2.2		直	交
42	6C-1001	2.7 × 1.6	1.0 × 0.4	3.0		斜	交
43	6C-1002	2.5 × 1.2	2.4 × 0.2	2.1		直	交
44	6C-1003	3.2 × 1.8	2.8 × 0.1	2.3		斜	交
45	6C-1004	2.6 × 0.8	1.7 × 0.1	1.6		斜	交
46	6C-1005	2.0 × 1.5	0.8 × 0.5	2.5		平	行
47	6D-1001	3.5 × 0.5	3.7 × 0.2	0.8		斜	交
48	6D-1002	(2.4) × 2.1	1.2 × 0.4	3.0		斜	交
49	6D-1003	3.5 × 1.2	3.5 × 0.1	2.0		平	行
50	6E-1001	2.3 × 0.8	2.6 × 0.1	1.1		平	行
51	6E-1002	2.0 × 1.3	2.2 × 0.1	2.4		斜	交
52	6E-1003	2.5 × 1.3	1.2 × 0.6	2.7		直	交
53	6E-1004	2.6 × 0.8	2.1 × 0.2	1.8		直	交
54	6F-1001	2.7 × 1.5	2.4 × 0.1	2.5		直	交
55	7B-1001	2.8 × 0.7	2.8 × 0.1	1.5		斜	交
56	7C-1001	3.0 × 2.1	1.5 × 0.9	2.4		平	行
57	7C-1003	2.3 × 1.6	2.4 × 0.1	2.2		平	燒
58	7C-1004	2.8 × 1.5	2.7 × 0.2	1.7		斜	燒
59	7C-1005	2.8 × 1.7	2.4 × 0.6	2.2		平	行
60	7C-1006	2.1 × 1.4	1.3 × 0.5	2.6		直	交
61	7C-1007	2.2 × 1.5	1.4 × 0.4	2.3		斜	交
62	7D-1001	1.9 × 1.4	2.3 × 0.2	2.6		斜	燒
63	7D-1002	2.2 × 1.3	2.0 × 0.1	2.6		平	行
64	7D-1004	2.7 × 1.3	3.1 × 0.3	2.0		斜	交
65	7D-1005	1.7 × 1.4	1.5 × 0.6	2.3		平	行
66	7E-1001	3.2 × 0.8	3.5 × 0.2	1.0		平	行



第146図 その他の土壤実測図(1~3号)(1/60)

2 その他の土壤

3 基検出したが、出土遺物もなく、いずれも遺構の性格を推定するには至らなかった。

1号 (第146図1)

4D87グリッドにおいて検出した焼土遺構である。この辺は北東へなだらかに下る緩斜面をなす。覆土上部には炭化粒をブロック状に、中部には焼土を多量に含む。平面形態はやや歪んだ三角形を呈し、底部の一部が深くなっている。

2号 (第146図2)

5E98グリッドから検出された。発掘調査区の東端に近いところで、緩斜面に位置する。平面形態は長楕円形を呈し、掘り込みは浅い。底部は平らに近く、覆土にはロームブロックが目立つ。

3号（第146図3）

7C98グリッドから検出された。ここは発掘調査区の南端に近く、遺跡内では標高の高い地点である。平面形態は隅丸の長方形を呈し、掘り込みは約50cmで底部は平らである。覆土にはローム粒を含む。

3 土器

縄文土器の出土量は調査面積の割に少なく、遺跡北東部の1Eグリッドを中心に土器片が約1,000片出土した（第147図）

ここではこれらを以下のように時期区分に従い4群に分類した。

第1群土器	早期の土器
第2群土器	前期の土器
第3群土器	中期の土器
第4群土器	後期の土器

第1群土器 早期の土器を括した。

第1種 条痕文系土器（第148～152図、図版47～51）

第1種 細隆起線による区画文を構成するもの。（第148図～第150図3）

細隆起線による区画状文の交叉部に竹管による円形の刺突文を押捺している。口唇部と上下2段には刻みが施され、充填文は特に施されない。胎土には砂粒をかなり含み、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。鶴ヶ島台式である。

第2種 沈線による区画文を構成するもの。（第150図4～第151図2）

浅い条痕文の地文を沈線により区画し、その交叉部に棒状の工具により刺突を押捺している。そして区画内には押し引きによる充填文を施している。胎土は砂っぽく、色調は茶褐色、焼成はやや良好である。鶴ヶ島台式である。

第3種 垂下する押し引きにより文様が施されるもの。（第151図3～5）

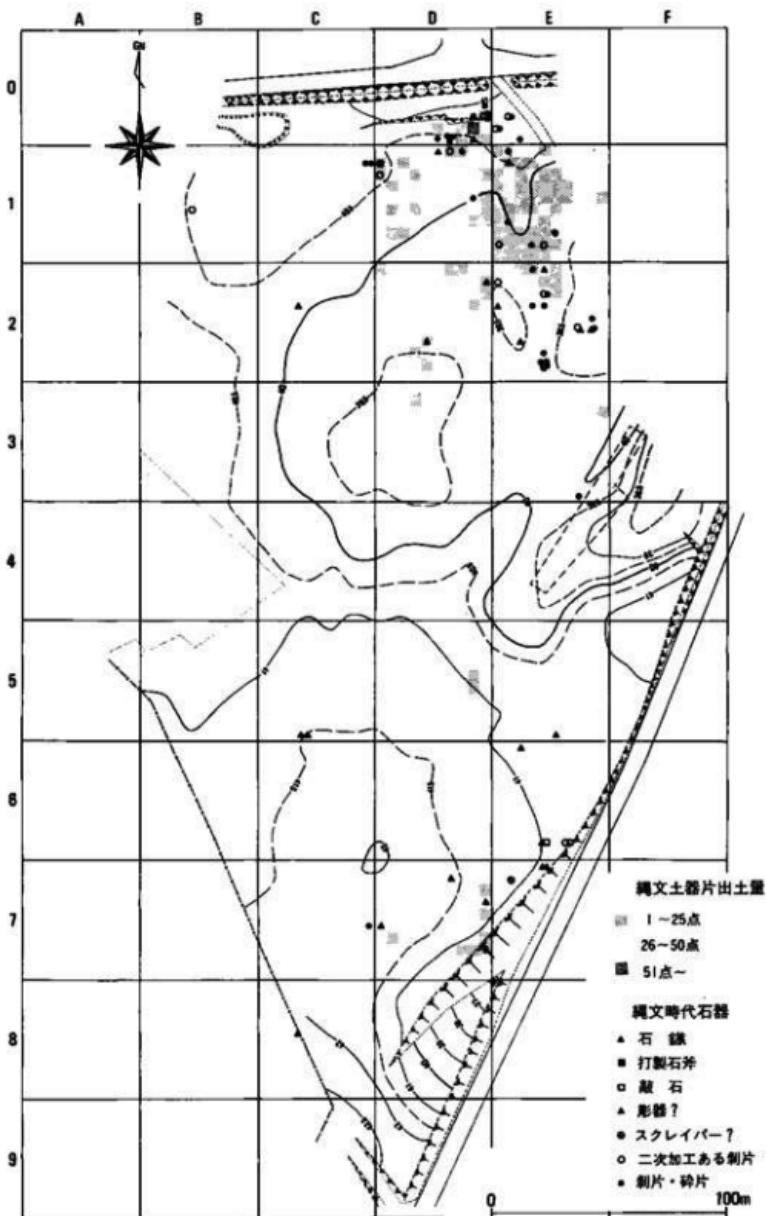
口唇部に刻みが施され、口唇直下には一条の押し引き文が廻り、口縁部には垂下する押し引き文が施される。色調は茶褐色、焼成は良好。鶴ヶ島台式である。

第4種 口唇に刻みを施されたもの。（第151図6）

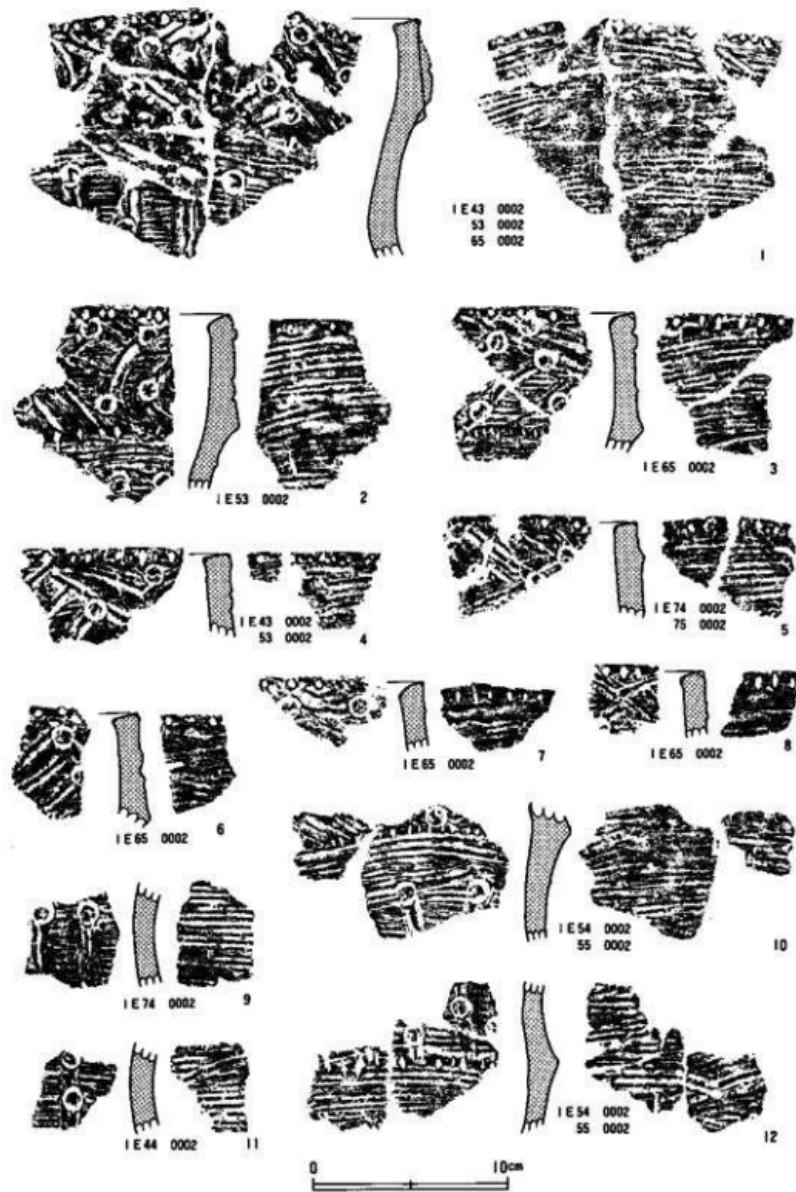
口唇の刻み以外は表裏の条痕のみのものである。色調は茶褐色、焼成は良好。鶴ヶ島台式と思われる。

第5種 表裏ともに条痕のみ施されたもの。（第151図7～第152図4）

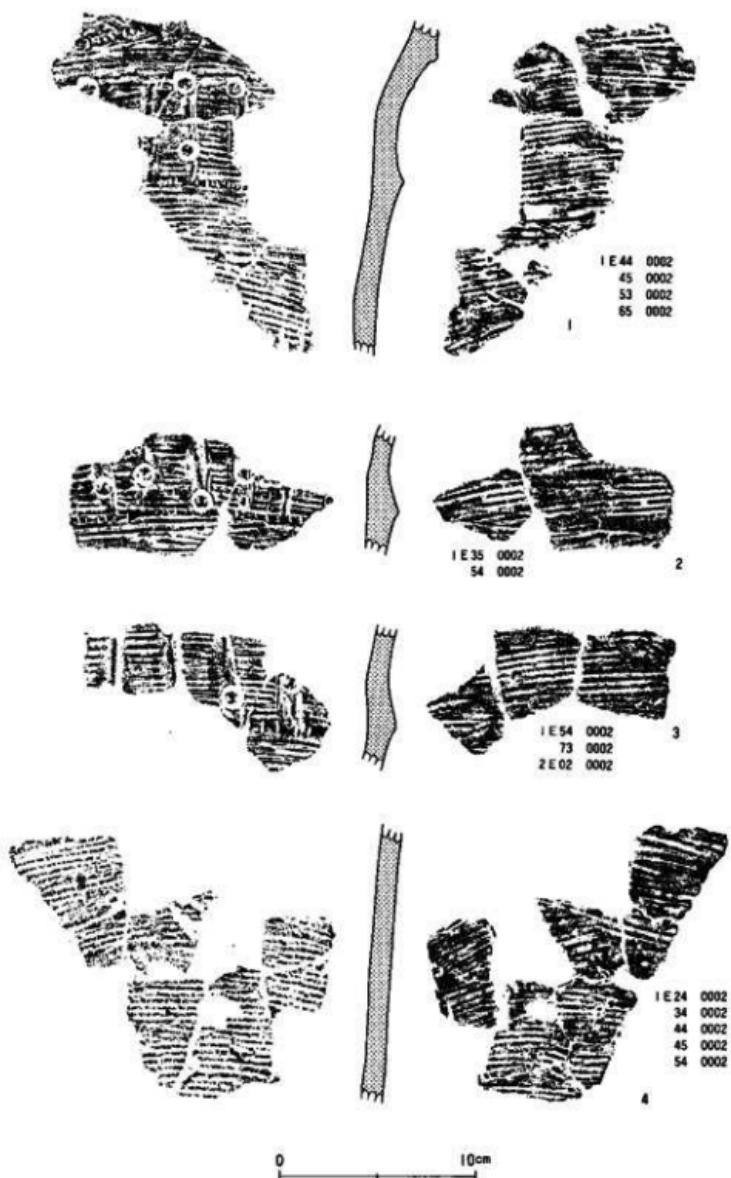
表裏とも斜行する条痕を施されたもので、第151図7は底部直上ぐらいいの破片であり、条痕が少し横走している。第151図8～11は口縁部であるが、口端は尖り気味である。胎土は砂っぽ



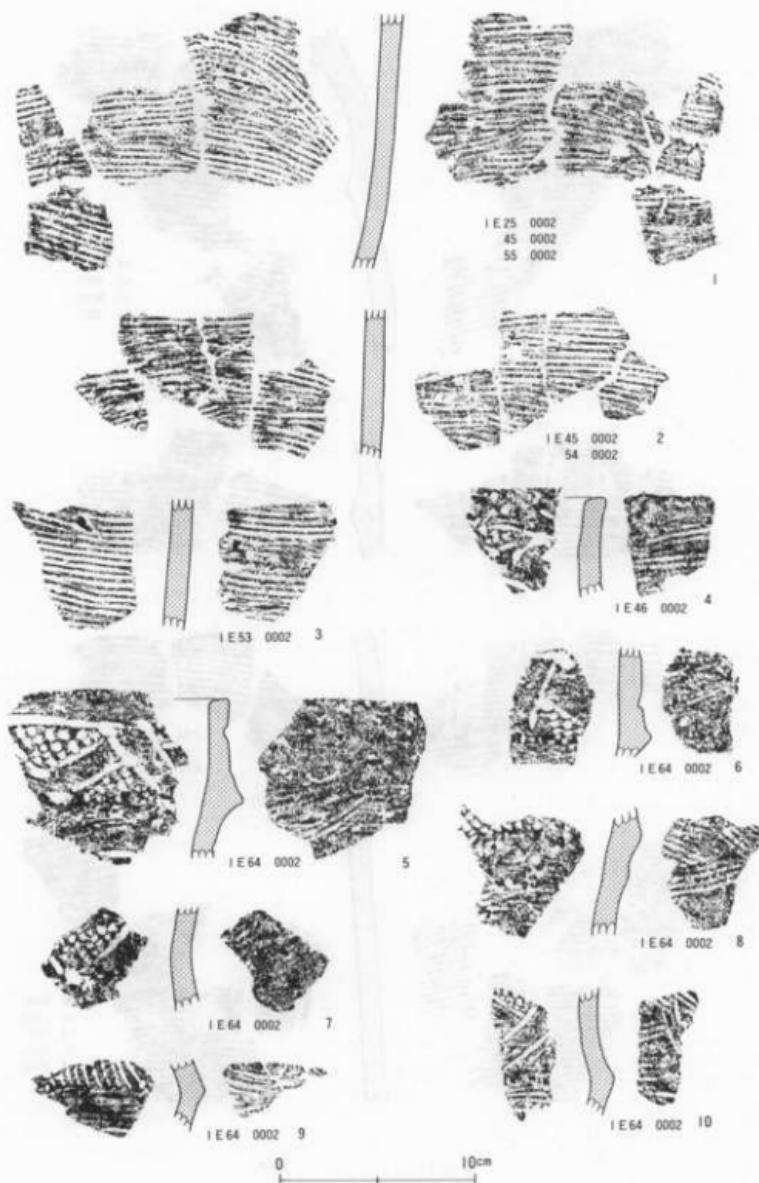
第147図 縄文時代グリッド別遺物分布図 (1/2500)



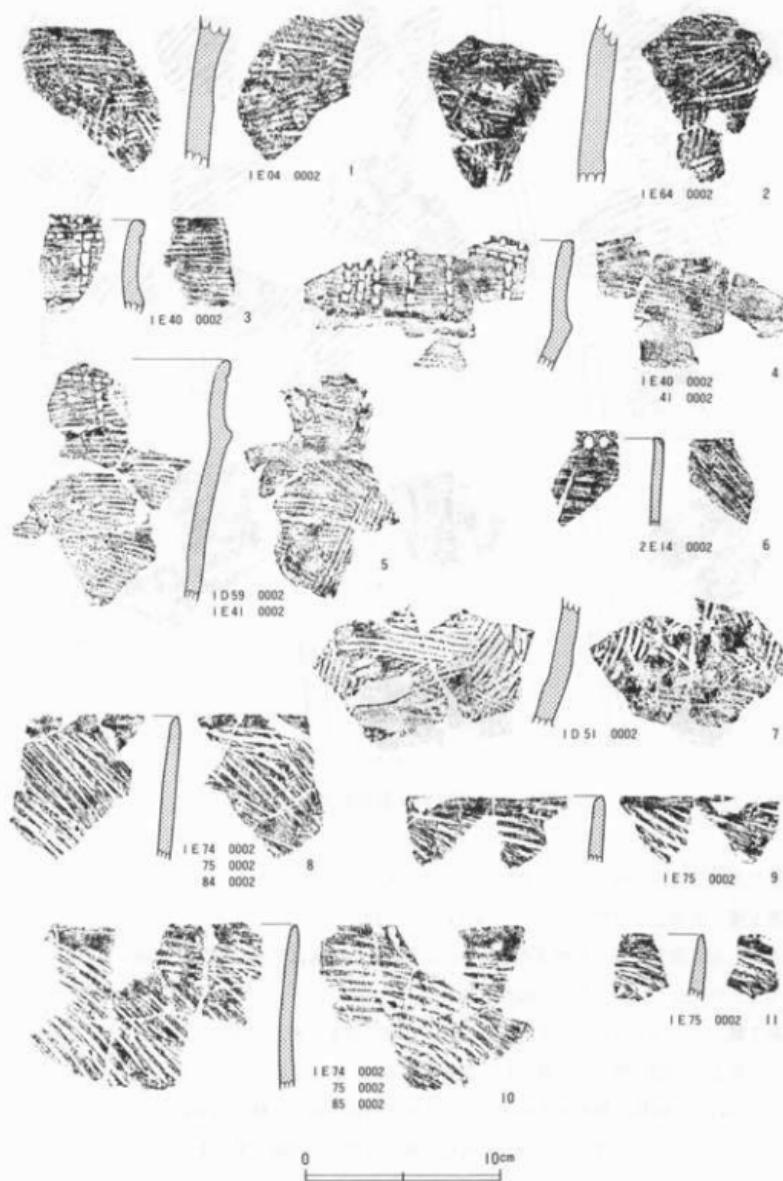
第148図 第1群土器拓影図(1) (1/3)



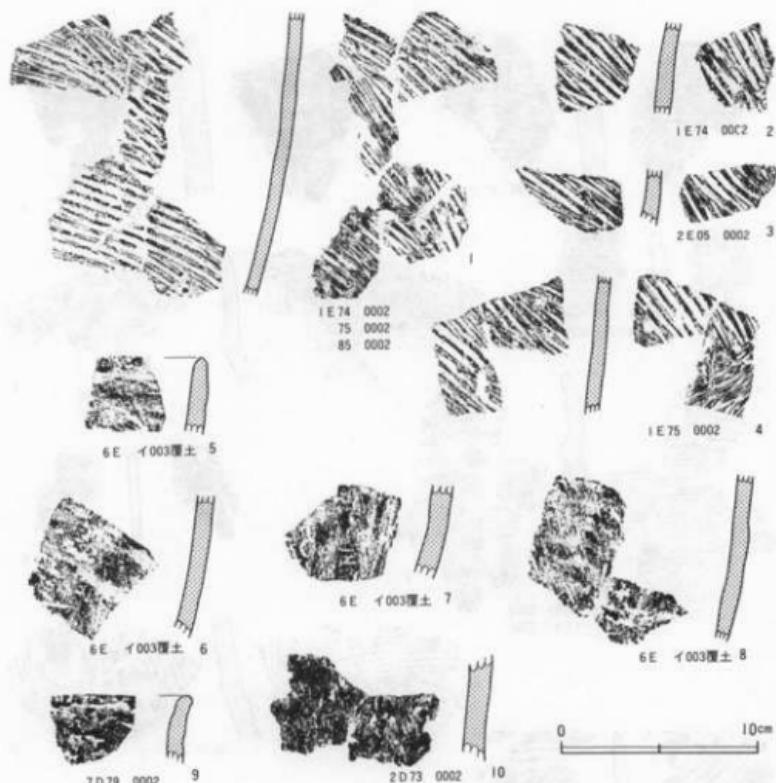
第149図 第1群土器拓影図(2) (1/3)



第150図 第1群土器拓影図(3) (1/3)



第151図 第1群土器拓影図(4) (1/3)



第152図 第1群土器拓影図(5) (1/3)

く、色調は茶褐色で焼成はやや良好。鶴ヶ島台式であろうか。

第6種 表裏ともに無文のもの。(第152図 5～10)

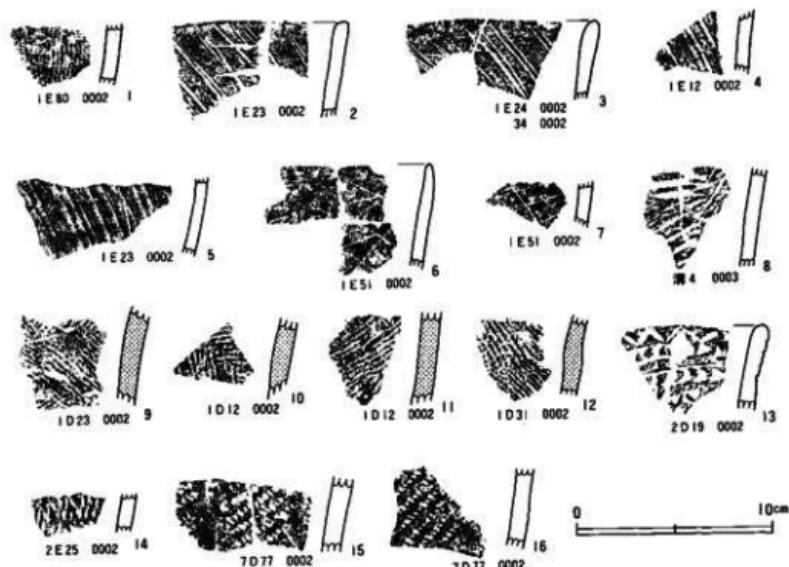
表裏ともに無文で若干の擦痕らしきものがある。5～8は52号陥し穴状土壤からの出土で同一個体と思われる。全て多量の繊維を含有する。

第2類 その他の早期の土器を一括した。(第153図 1～8、図版52)

1は縦走する細い撚糸文が施され、色調な茶褐色、焼成は良好、夏島式。

2～5は同一個体と思われるが、斜行する細い沈線のみの文様が施され、口端は丸みがある。胎土には長石をかなり含み、色調は暗褐色、焼成は良好、沈線文系であろうか。

6・7は同一個体と思われるが、細い沈線が格子目状に施されるもので、口縁はやや内湾する小形の土器である。色調は茶褐色、焼成は良好、沈線文系かと思われる。



第153図 第1・2群土器拓影図 (1/3)

8は斜行を主体とする沈線文が施され、胎土には砂粒（石英粒）を多く含み、底部は尖底になるようである。

第2群土器 前期の土器を一括した。(第153図 9～16、図版52)

9～12は同一個体と思われるもので、胎土に纖維を多量に含み、色調は茶褐色、焼成はあまり良くない。無節の繩文を施している。黒浜式である。

13は口唇部に棒状工具でハの字状の文様を施し、口縁部には連続瓜形文を数段施している。口縁は丸みをもってゆるく外反する。色調は暗褐色、焼成は良好、諸磯式と思われる。

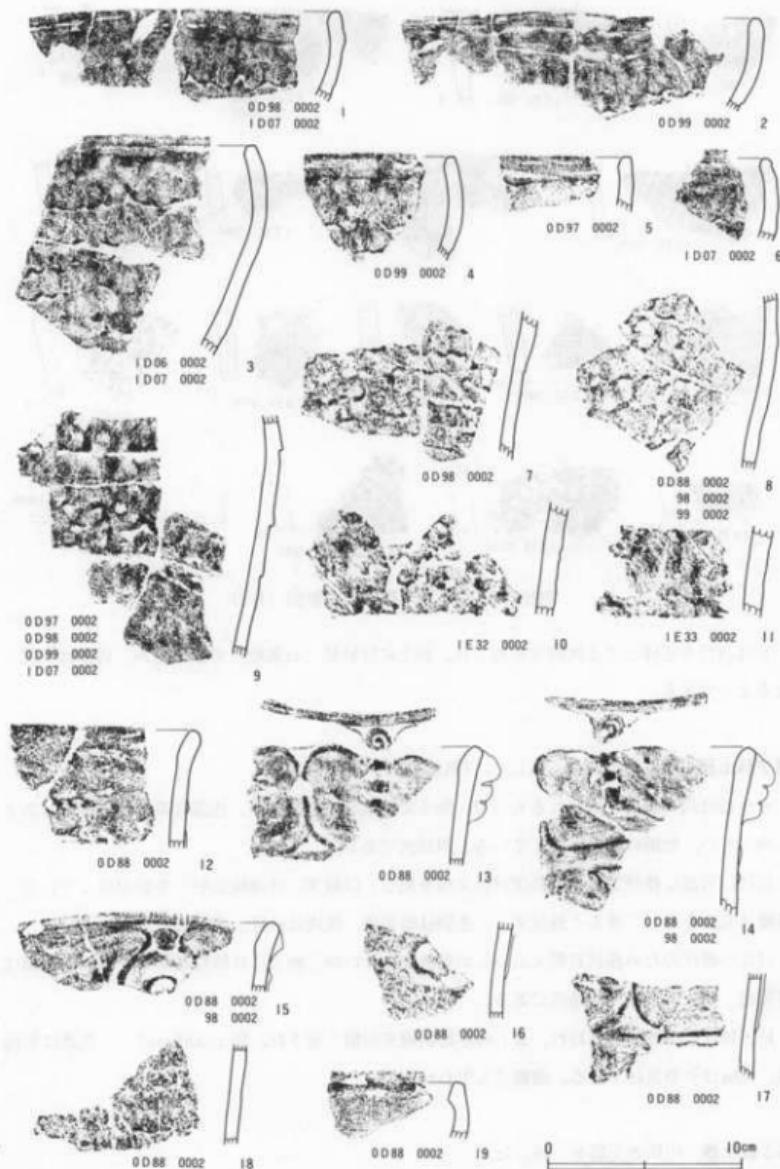
14は小破片のため波状貝殻文のみしか判読出来ないが、胎土には砂粒をかなり含み、色調は茶褐色、焼成は良好、浮島式である。

15・16は同一個体と思われ、R Lの単節斜繩文が粗く施され、胎土は砂っぽく、色調は茶褐色、焼成はやや良好である。諸磯式と思われる。

第3群土器 中期の土器を一括した。

第1類 中期初頭から前半の土器 (第154図～第158図、図版53～57)

第1種 輪横痕を明瞭に残したもの。(第154図 1～11、第155図)



第154図 第3群土器拓影図(1) (1/3)



第155図 第3群土器拓影図(2) (1/3)

1～9は同一個体と思われるもので、口縁は内湾し、口端は平らで、口唇部内側には一条の稜がみられ、それに対応するように口唇部外側は少し凹む。器体は全体に渡って成形時の輪積痕を明瞭に残している。色調は暗褐色から黒褐色で、焼成は良好。五領ヶ台式に近い阿玉台式と思われる。

10・11は同一個体で、器面に粗く輪積痕を残しているが、内側は平滑に磨いてある。色調は灰褐色、焼成は良好。五領ヶ台式に近い阿玉台式と思われる。

第155図は、本遺跡で唯一復原出来た土器である。口縁が内湾し、口唇部外面が少し凹む寸胴なキャリバー形の深鉢で、底部が少し張り出す。器面は全体に渡って成形時の輪積痕を明瞭に残している。色調は茶褐色、焼成は良好。口径27cm、器高37cm。五領ヶ台式に近い阿玉台式と

思われる。

第2種 口縁部に隆起帯により溝状あるいは橢円の区画状文を構成するもの。(第154図12~19)

これらはほぼ同一個体であろうと思われる。13・14のような3段の瘤と15のような円形の瘤を口唇下に2個所づつ対応する形に配したと考えられる。そして、その周りに隆帯を橢円の区画状に配しているようである。また、この隆帯は体部下半にも延びて行くかもしれない。口縁はゆるく外反し、器面には浅く輪積痕を残している。胎土は砂っぽく、色調は暗褐色、焼成はややもろい。五領ヶ台式に近い阿玉台式と思われる。

第3種 口縁内面に三叉状及び一条の沈線が廻るもの。(第156図)

1~6は同一個体である。山形の口縁頂部近くに第2種と同様3段の瘤と円形の瘤を2個所づつ対応する形に配しその3段の瘤を持つ山形の頂部片側には4つ程の刻を施している。口縁外面は2対の山形の頂部に合わせて口唇直下と口縁部に水平に各1条の押し引き文を施している。また、口縁内面にはその押し引きに対応するように口縁部を水平に1条の沈線が廻り、これに向って山形の頂部から2本の沈線が垂下している。そしてその交叉するところでは三叉状の形となっている。また、体部下半には隆帯が垂下しているが、これはちょうど山形の頂部のないところに配されているようである。色調は茶褐色、焼成は良好。五領ヶ台式に近い阿玉台式と思われる。

第4種 押し引き文に特徴付けられるもの。(第157図~第158図3~14)

第157図1~8は同一個体であるが、第2、3種に類似して口唇直下に2~3の瘤、口縁部には円形の瘤がみられ、これを取り巻いて押し引き文による橢円状区画状文が施されている。胎土は砂っぽく、色調は褐色、焼成はやや良好である。器面には成形時の輪積痕が少し残る。五領ヶ台式に近い阿玉台式である。

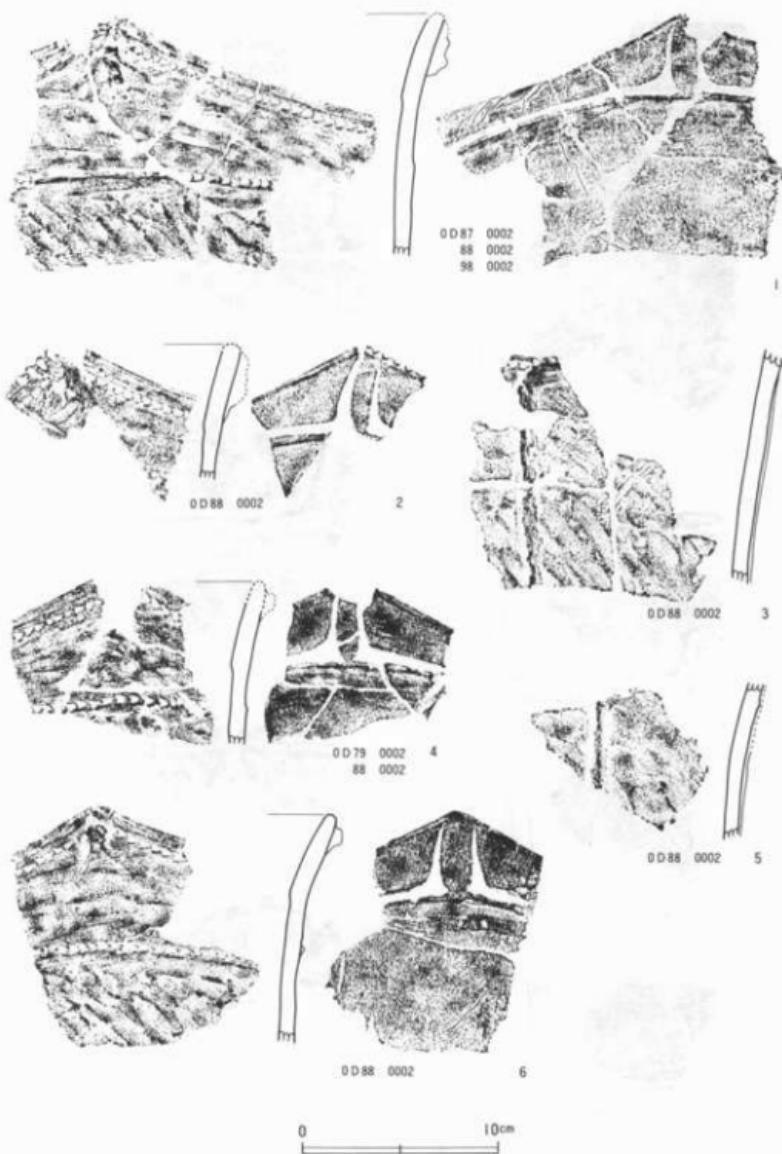
第158図3~6は同一個体であるが小破片のため全体を窺うことは出来ないが、隆起線を狭んで両側に押し引き文を配し、橢円状の区画状文を構成するようである。色調は暗褐色、焼成は良好。阿玉台式の古い方であろう。

7・8も同一個体である。これも3~6同様2条の押し引き文により橢円区画文を配している。色調は灰褐色、焼成は良好。阿玉式の古い方であろう。

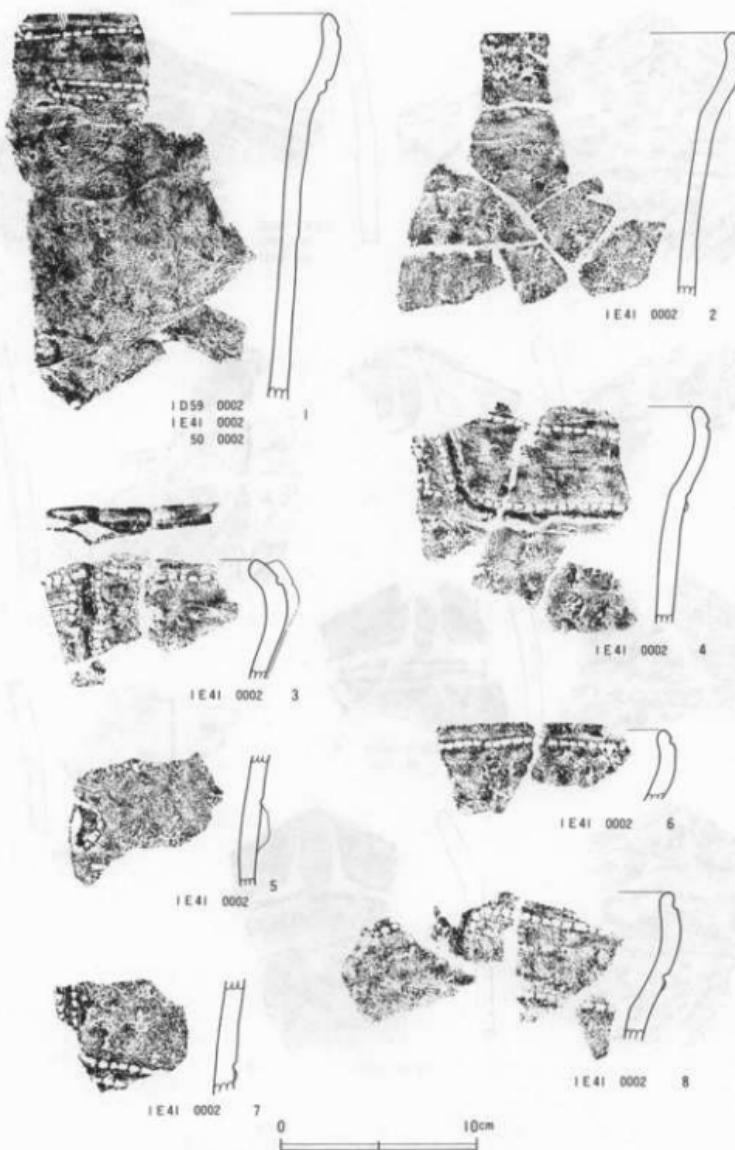
9~12にも同様の2条の押し引き文がみられ、9・11・12は口縁に沿って平行に、10は下部のものが垂下している。9・11は器面に成形時の輪積痕を少し残す。10・11は胎土に金雲母を多量に含む。阿玉台式である。

13は口縁に沿って沈線文と押し引き文が各1条配されている。胎土に砂粒が非常に多い。色調は灰褐色、焼成良好。

14は縦に1条押し引き文が垂下している。胎土に砂粒をかなり含み、色調は褐色、焼成は良



第156図 第3群土器拓影図(3) (1/3)



第157図 第3群土器拓影図(4) (1/3)

好。13・14とも阿玉台式と思われる。

第5種 口端あるいは口唇に刻みをもつ山形板状の把手をもつもの。(第158図1・2・15)

1は地文にR Lの単節斜縞文を施し、その上から2条の沈線を山形の形態に合わせた口唇直下と口縁部に、またそれを繋ぐ形で山形の頂部から3条の沈線を垂下している。さらに口唇部には刻みを施し、山裾には上下の沈線間に千鳥に三角文が入り、そこから体部へ隆帯が垂下している。色調茶褐色、焼成良好。

15は1の底部と思われ、平行する3条以上の沈線が底面に水平に廻っている。

2は山形頂部が平坦でそこに4つの刻みが施されている。そして、頂部両端から把手中程にかけて4つの瘤が配され、それを取り巻くとともに口唇に沿って押し引きが施されている。また把手中央にも環状に押し引きが施されている。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗褐色、焼成はやや良好。頂部の刻みや瘤のあり方など第3種に似ている。1・2・15とも阿玉台式直前あたりではなかろうか。

第2類 その他の中期の土器 (第159図1~12、図版58)

1は原体R Lを4段以上口唇に沿って水平に押捺したもので、少し外反する。色調は暗褐色、焼成はやや良好。

2は口唇に縦の刻みが入り、口縁部にはほぼ水平に走る6条の沈線とその間に千鳥に入る刺突及びこれらの文様の最下端に入る押し引き文が施されている。器形は全体に内湾するが口縁だけ外反する。湾曲度からみて片口か注口土器と思われる。胎土に砂粒を多く含み、色調は黒褐色、焼成は良好。1・2とも中期初頭に比定出来るであろう。

3は波状の口縁で三日月状の隆帯をもち、4は口縁の一部が突起し、あるいは右端から推測すると隆帯があったかもしれない。ともに色調は茶褐色、焼成は良好な小形の土器である。やはり中期初頭かと思われる。

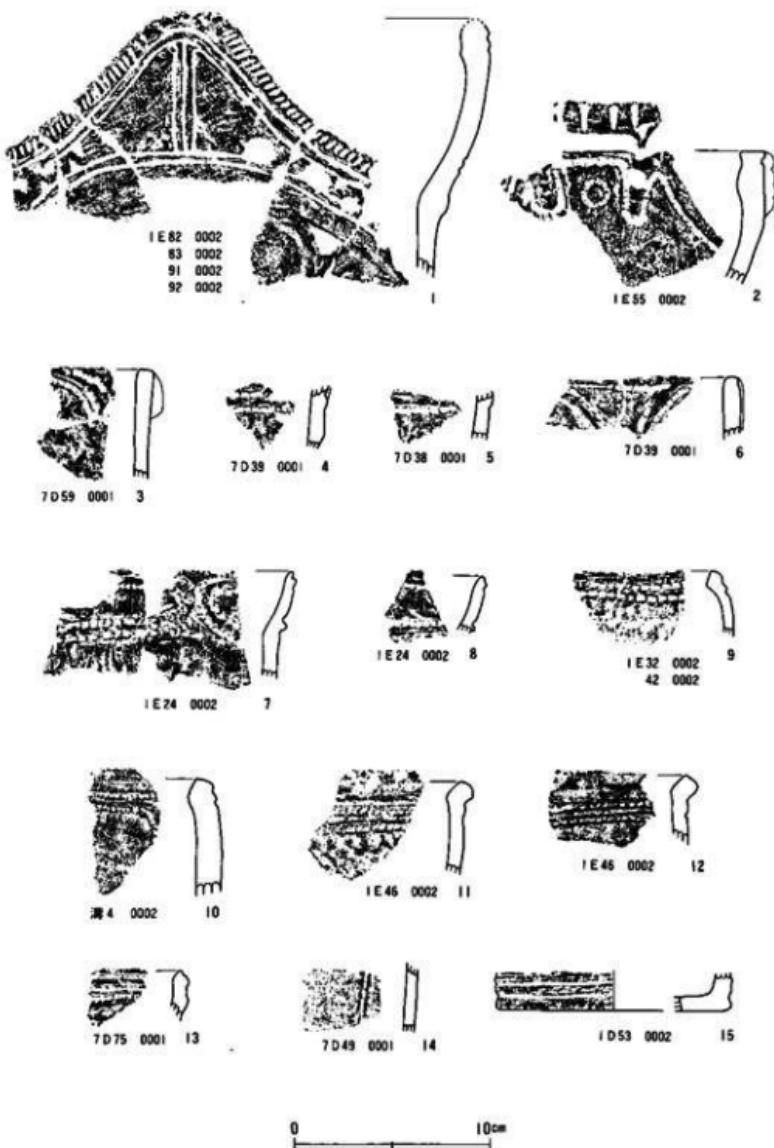
5・6・7は共通して押し引き文が施され、5はそれより少し上に幅広の沈線が1条入り、6は、把手の一様と考えた。7には瘤があり、全て中期初頭から前半のものと思われる。

8は瘤と左右にはR Lの単節斜縞文と沈線による区画がみられる。口縁はやや内湾し、色調は灰褐色、焼成は良好。中期初頭であろう。

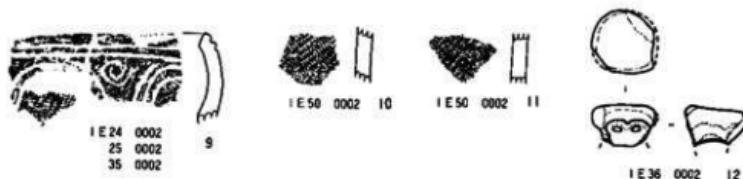
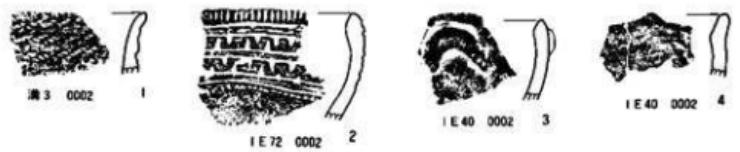
9は地文にR Lの単節斜縞文があり、その上に口唇には2条の平行沈線が廻り、その下には沈線により渦巻文が施されている。色調は暗褐色、焼成は良好。中期前半かと思われる。

10・11は同一個体で、R Lの単節斜縞文のみ施されている。胎土には砂粒をかなり含む。中期初頭から前半ぐらいいと考える。

12は正面観が猿に似た特異なものである。上面観は丸い。色調は灰褐色、焼成は良好。土偶に似ているが把手と考えておきたい。



第158図 第3群土器拓影図(5) (1/3)



0 10cm

第159図 第3・4群土器拓影図 (1/3)

第4群土器 後期の土器を一括した。(第159図13~21、図版58)

13・14は同一個体で、R Lの単節斜縄文の地文を磨り消した上に浅い曲線的な沈線で区画し、くびれ部には連続刺突文を施している。色調は暗褐色、焼成は良好。

15~17は同一個体で、R Lの単節斜縄文のみである。色調は暗褐色、焼成は良好。

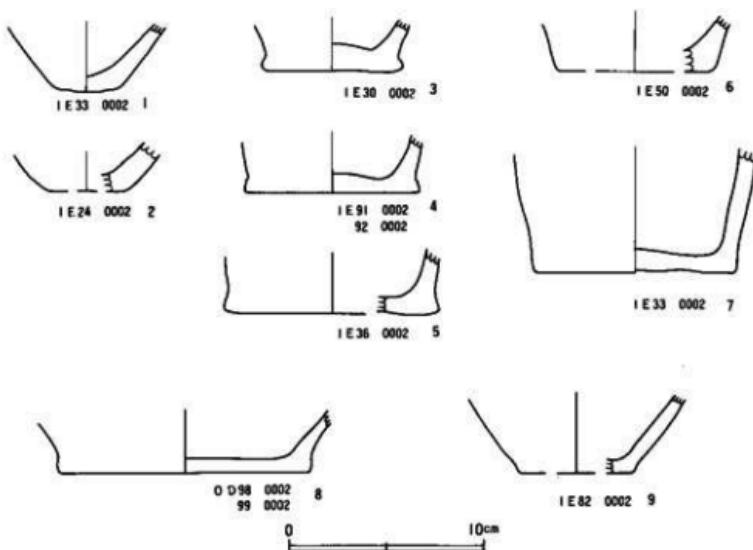
18~21も同一個体と思われる。地文の細いR Lの単節斜縄文を磨り消して、曲線的な浅い沈線で囲っている。

13~21の時期は全て曾谷式前後と思われる。

底部 (第160図)

1・2は底部が小さく丸底に近いもので、色調は茶褐色で焼成はあまりよくない。

3~5、8は外方にやや張り出るもので、3は少し上げ底となっている。4にはあまり明瞭ではないが網代底が認められる。8は第3群第1種の土器の底部と思われる。



第160図 縄文土器底部実測図 (1/3)

4 石器（第81・95・96図、図版43・44、第8表）

縄文時代の石器・剝片類は、土器と同様遺跡北端の1E付近から多く出土した。器種別にみると、石鏃34点、打製石斧1点、敲石1点、彫器？1点、スクレイパー？1点、二次加工ある剝片16点、その他剝片・碎片33点、計87点である。

1～34は石鏃である。

1～4は基部の抉りがほとんどないか浅いもので、器体の形状は二等辺三角形あるいは五角形を呈し、やや厚手である。

5～7は基部に抉りが入るもので、器体の形状は正三角形に近く、薄手に作られている。

8～9は基部の抉りが浅いもので、形状は二等辺三角形を呈する。9に較べ8は器体も薄く、側縁も顕著な鋸歯状を呈する。

10・11はよく似ており、基部の抉りは浅いV字状を呈し、器体は幅広の三角形状で薄手に作られ、両側縁はやや外方にふくらむ。

12～15は欠損のため14を除き器体の形状は明らかではないが、正三角形に近いもので、基部の抉りは浅いと思われる。

16～18は器体の形状が二等辺三角形を呈し、基部の抉りはやや深いと思われ、脚部の末端が尖らない。

19・20はいわゆる鉗形鏃で、脚部は太く長く先端は尖らない。身部は細めて両側縁は内湾する。

21・22は器体が幅広の二等辺三角形を呈し、基部の抉りが深く、脚部は太く先端は尖っている。

23・24もよく似ており、両側縁が外方にふくらみ、先端は突出するようである。基部の抉りは丸みがある。

25・26は器体・脚部ともに細めである。

27は両側縁の身部と脚部の境が外方に突出し、基部の抉りが器体の割に小さい。

28は基部の抉りが浅く脚部が短いのに対して身部が長大である。

29は有茎の石鏃で、身部と茎との境は側縁部が外方に張り出し、逆剥を作り出している。

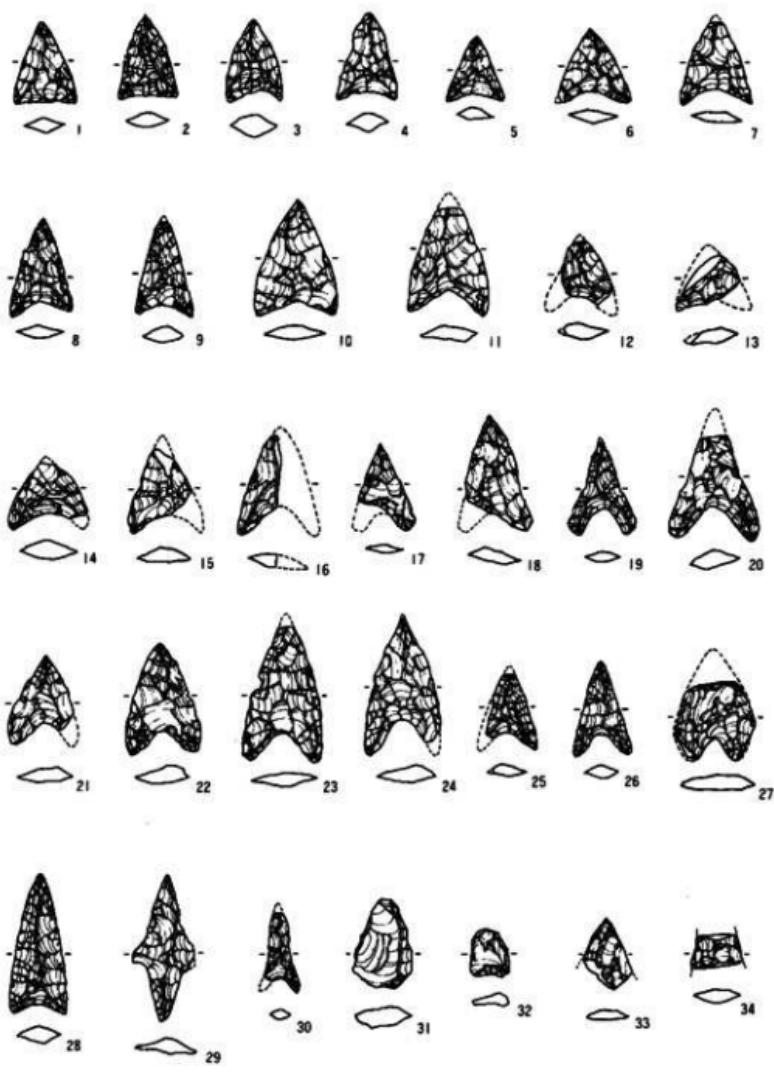
30は非常に細身小形のものである。

31は周辺加工の粗い作りである。

32は非常に小形でずんぐりとしたものであるが、若干の抉りが入っている。

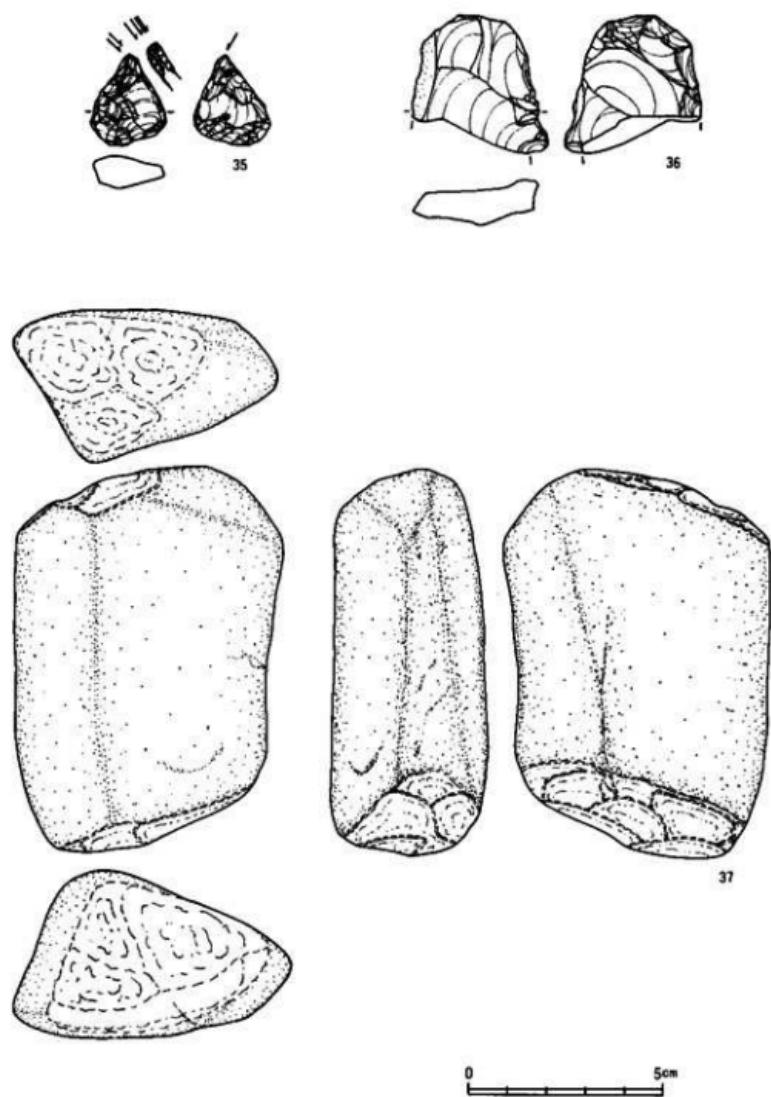
33は欠損部分が大きいため明らかではないが、未調整部分がかなり残っており、剝片の形状を生かしたつくりである。

34は欠損部分が大部分のため、判然としないが、石鏃の身部の一部分と判断した。



0 5cm

第161図 縄文時代石器実測図(1) (2/3)



第162図 縄文時代石器実測図(2) (2/3)

これらの石鎌には基部の抉りの浅いものが目立ち、また、側縁が直線的かやや外方にふくらむものが多い。さらにはほとんどのものが薄手に作られている。こういった特徴は縄文時代でも古いものに多いと思われ、出土土器などから早期条痕文系土器群前後のものが主体をなすと考える。石材は、チャートが16点と一番多く、ついで流紋岩の9点、その他安山岩・黒曜石各4点、玉髓1点である。

35は彫器状の石器である。厚手の剥片の周縁に調整剝離を施した後、先端から大小合わせて4条の櫛状剝離を施している。

36は打製石斧の頭部と思われ、表面左端には平滑な躰面が残る。

37は上下に広く打痕を残す敲石である。

第10表 縄文時代石器群一覧表

番号	器	種	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	打 角 (剝離角)	登録番号
1	石	鎌	チヤー ト	2.1	1.6	0.5	1.1		2E62-2
2	石	鎌	流 紋 岩	2.1	1.6	0.4	0.9		2D19-2
3	石	鎌	流 紋 岩	2.0	1.5	0.6	1.2		2C33-2
4	石	鎌	チヤー ト	2.2	1.6	0.5	1.3		6E62-4
5	石	鎌	チヤー ト	1.6	1.5	0.4	0.6		0D98-2-1
6	石	鎌	チヤー ト	1.9	1.8	0.4	0.8		1E61-2
7	石	鎌	玉 磨	(2.1)	1.9	0.3	0.9		7D16-2
8	石	鎌	チヤー ト	2.4	1.6	0.3	0.9		2E04-2
9	石	鎌	チヤー ト	(2.3)	1.5	0.4	1.0		2E76-2-1
10	石	鎌	流 紋 岩	2.9	2.2	0.4	1.5		5C4002-1
11	石	鎌	安 山 岩	(2.7)	2.1	0.4	2.1		5E4002-1
12	石	鎌	チヤー ト	(1.6)	(1.4)	0.4	0.8		7E04-5
13	石	鎌	流 紋 岩	(1.7)	(1.5)	(0.4)	0.6		1D20-2-2
14	石	鎌	チヤー ト	(1.7)	(2.1)	0.5	1.3		2D64-2
15	石	鎌	チヤー ト	(2.1)	(1.7)	0.4	1.0		表掲-1
16	石	鎌	安 山 岩	(2.6)	(0.9)	(0.4)	0.8		2E30-2
17	石	鎌	黒 曜 石	(2.2)	(1.5)	0.2	0.4		2E58-2-1
18	石	鎌	流 紋 岩	(2.9)	(1.7)	0.4	1.3		4F-00
19	石	鎌	チヤー ト	(2.3)	1.8	0.3	0.6		1D05-2-1
20	石	鎌	チヤー ト	(2.6)	2.3	0.5	2.1		7D39-4
21	石	鎌	流 紋 岩	(2.3)	(1.6)	0.4	1.1		5C4002-2
22	石	鎌	流 紋 岩	2.8	2.0	0.5	1.9		2C4003-0
23	石	鎌	流 紋 岩	(3.4)	2.1	0.4	2.3		7D79-4
24	石	鎌	安 山 岩	3.4	2.0	0.5	2.2		8C43-2
25	石	鎌	チヤー ト	(1.9)	(1.3)	0.4	0.6		1E52-1
26	石	鎌	チヤー ト	2.4	1.5	0.4	0.7		2E37-2
27	石	鎌	黒 曜 石	(2.0)	2.0	0.5	1.8		7D50-2
28	石	鎌	チヤー ト	3.5	1.5	0.5	2.0		1E11-2-1
29	石	鎌	流 紋 岩	3.7	(1.6)	0.4	1.5		5D57-1
30	石	鎌	チヤー ト	(2.0)	(0.9)	0.3	0.4		5E95-4
31	石	鎌	安 山 岩	2.2	1.6	0.5	1.7		7E04-4

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (倒産角)	登録番号		
32	石	鐵 チヤー	ト	1.2	1.0	0.4	0.5	2E57-2-1		
33	石	鐵 チヤー	ト	(1.7)	(1.2)	(0.4)	0.6	6E84-4		
34	石	鐵 チヤー	ト	(0.8)	(1.3)	0.4	0.4	満5-1		
35	彫器	?	石	2.3	2.0	0.8	3.4	2E66-2-3		
36	打製石	斧 シルト	岩	(3.5)	(3.5)	(1.0)	13.3	1D10-2-1		
37	敲剥	石 砂	岩	9.5	6.5	4.2	392.8	6E84-5		
38	剥片	黑流	曜	石	(1.3)	(1.7)	(0.6)	0.9	OD69-2-2	
39	剥片	黑流	曜	岩	1.7	3.8	0.8	5.1	OD78-2	
40	二次加工ある剥片	黑流	曜	石	(1.8)	(3.1)	(0.7)	3.2	OD79-2-1	
41	剥片	黑流	曜	石	(1.3)	(2.1)	(0.4)	0.7	OD79-2-2	
42	剥片	黑流	曜	岩	(2.3)	(1.7)	(0.4)	1.4	OD79-2-3	
43	剥片	流	紋	岩	2.4	1.4	0.7	1.8	OD95-2-3	
44	剥片	安	紋	山	岩	(3.0)	2.9	1.0	9.0	OD96-2-1
45	剥片	安	紋	山	岩	(2.5)	1.6	0.4	1.3	OD96-2-2
46	剥片	流	紋	岩	2.5	3.8	1.7	10.5	OD96-2-8	
47	剥片	流	紋	岩	3.0	1.5	0.6	2.3	115° 0E71-2-1	
48	二次加工ある剥片	流	紋	岩	(1.7)	(2.5)	(1.0)	3.8	0E71-2-3	
49	二次加工ある剥片	流	曜	石	(2.5)	(2.4)	(0.8)	3.9	0E80-2-2	
50	剥片	流	纹	岩	(1.9)	(2.4)	(1.2)	3.8	0E80-2-4	
51	剥片	泥	岩	1.9	4.1	1.3	6.8	0E92-2		
52	二次加工ある剥片	シルト	岩	1.5	2.1	0.6	1.1	130° 1B54-2		
53	碎片	黑珪質	曜	石	(1.0)	(0.6)	(0.2)	0.1	1C29-1	
54	剥片	珪質	質	岩	4.1	4.4	1.8	25.5	1C29-2	
55	二次加工ある剥片	流	紋	岩	2.2	1.9	0.6	2.4	115° 1D06-2-1	
56	剥片	砂	紋	岩	(2.6)	(2.6)	(0.7)	3.7	1D07-2	
57	二次加工ある剥片	流	紋	岩	(2.7)	(3.0)	(1.3)	7.7	1D20-2-1	
58	剥片	ホルン	スエルス	(3.2)	(4.0)	(0.7)	12.3	1D48-2		
59	剥片	黑	曜	石	1.7	1.5	0.4	0.9	115° 1E01-2	
60	碎片	石英	曜	岩	(1.0)	(1.3)	(0.8)		1E75-2	
61	二次加工ある剥片	黑玉	曜	石	(2.0)	(2.6)	(0.4)	1.5	1E80-2	
62	剥片	玉	鶴	鶴	1.5	2.4	1.3	3.8	1E83-2	
63	二次加工ある剥片	玉	鶴	鶴	(2.1)	(3.7)	(1.3)	11.0	1E84-2-1	
64	剥片	流	紋	岩	(1.0)	(1.5)	(0.2)	0.4	2E03-2-2	
65	二次加工ある剥片	黑玉	曜	石	(1.5)	(1.6)	(0.6)	1.5	2E10-2	
66	剥片	玉	鶴	鶴	3.7	3.4	1.2	12.5	115° 2E24-2-1	
67	二次加工ある剥片	玉	鶴	鶴	2.2	1.8	0.4	1.2	2E24-2-2	
68	剥片	流	紋	岩	1.6	1.9	0.6	1.9	90° 2E33-2-1	
69	碎片	黑玉	曜	石	(0.6)	(0.8)	(0.3)	0.1	2E34-2	
70	剥片	黑玉	曜	石	(3.2)	(1.2)	(0.7)	2.0	2E48-2	
71	二次加工ある剥片	チヤー	ト	(0.9)	(1.1)	(0.7)	1.1	2E57-2-2		
72	碎片	チヤー	ト	(0.7)	(1.0)	(0.3)	0.1	2E58-2-2		
73	剥片	チヤー	ト	(2.0)	(2.2)	(0.3)	0.7	2E67-2		
74	碎片	玉	鶴	鶴	0.7	1.1	0.2	0.1	2E74-2	
75	剥片	玉	鶴	鶴	(1.6)	(1.9)	(0.9)	2.8	2E84-2-1	
76	碎片	玉	鶴	鶴	(1.3)	(0.9)	(0.3)	0.2	2E84-2-2	
77	碎片	玉	鶴	鶴	0.5	0.8	0.2	0.05	2E84-2-3	
78	二次加工ある剥片	チヤー	ト	0.8	1.2	0.3	0.2	115° 2E84-2-4		

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	打角 (剝離角)	登録番号
79	碎片	玉髓	(1.0)	(1.2)	(0.5)	0.4		2E84-2-5
80	剝片	黒曜石	(1.0)	(1.5)	(0.6)	0.8		3E97-2
81	二次加工ある剝片	黒曜石	(1.8)	(1.9)	(0.4)	0.8		6E86-1-1
82	二次加工ある剝片	黒曜石	(1.6)	(1.7)	(0.4)	0.8		6E86-1-2
83	剝片	流紋岩	1.4	1.1	0.3	0.4	110°	7C59-1
84	スクレイバー?	チャート	1.7	2.2	0.8	3.2		7E11-6
85	二次加工ある剝片	黒曜石	(2.1)	(1.5)	(0.7)	2.3	130°	満2-1
86	剝片	流紋岩	(1.7)	(2.1)	(0.9)	4.2		満3-1(1C18)
87	二次加工ある剝片	黒曜石	1.3	1.6	0.3	0.5		満5-2(3E29)

第3節 その他の時代

1 遺構

溝状遺構が7条検出されている（第163図）。

(1) 1号溝状遺構（第164～166図、図版61）

遺跡南端の8Cグリッドから8Dグリッドにかけて検出されたもので、東側へ下る地形に沿って構築されており、等高線とは直交する。長さ70m、上端の幅約2.5～3.5m、下端の幅約30～100cm、深さ約40～70cmを測る。断面は底部が左右どちらかへ片寄った皿状を呈し、底面には複数の段がみられる。この段は数回にわたって作り変えられた結果生じたものと思われ、土層断面図F-F'の底面の形状並びに覆土における硬く締った土層のあり方などから、少なくとも3回は作り変えられていることが考えられる。

(2) 2号溝状遺構（第167～169図、図版62）

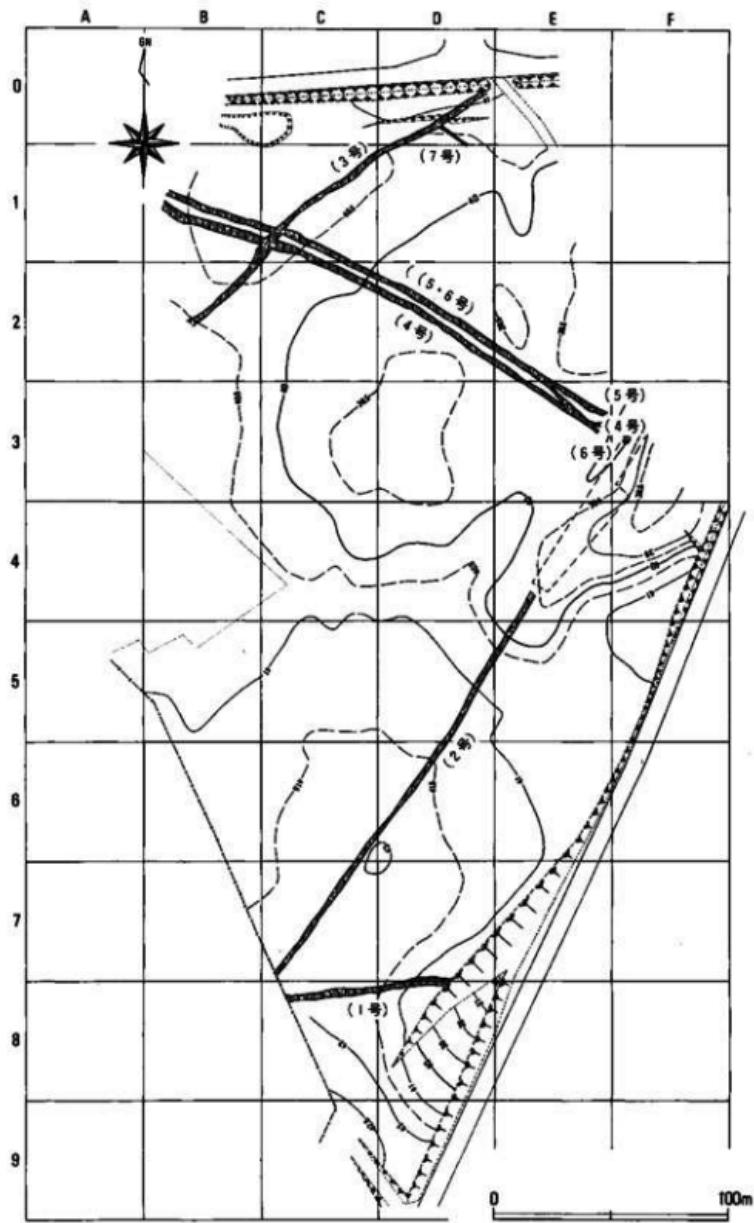
遺跡南端に近い7Cグリッドから遺跡で一番高い地点のそばを通り、東部の谷が入り込む4Eグリッドにかけて検出された。等高線とはほぼ直交する。長さ200m、上端の幅約1.5～2.5m、下端の幅約25～40cm、深さ約80cmを測る。断面は底面が狭い逆台形を呈する。底面には長さ約30～80cm深さ10～25cm程のやや方形に近い形態のピット列が検出された。ピットの間隔は必ずしも一定ではないが、1m前後のものが多い。

(3) 3号溝状遺構（第170～173図、図版63）

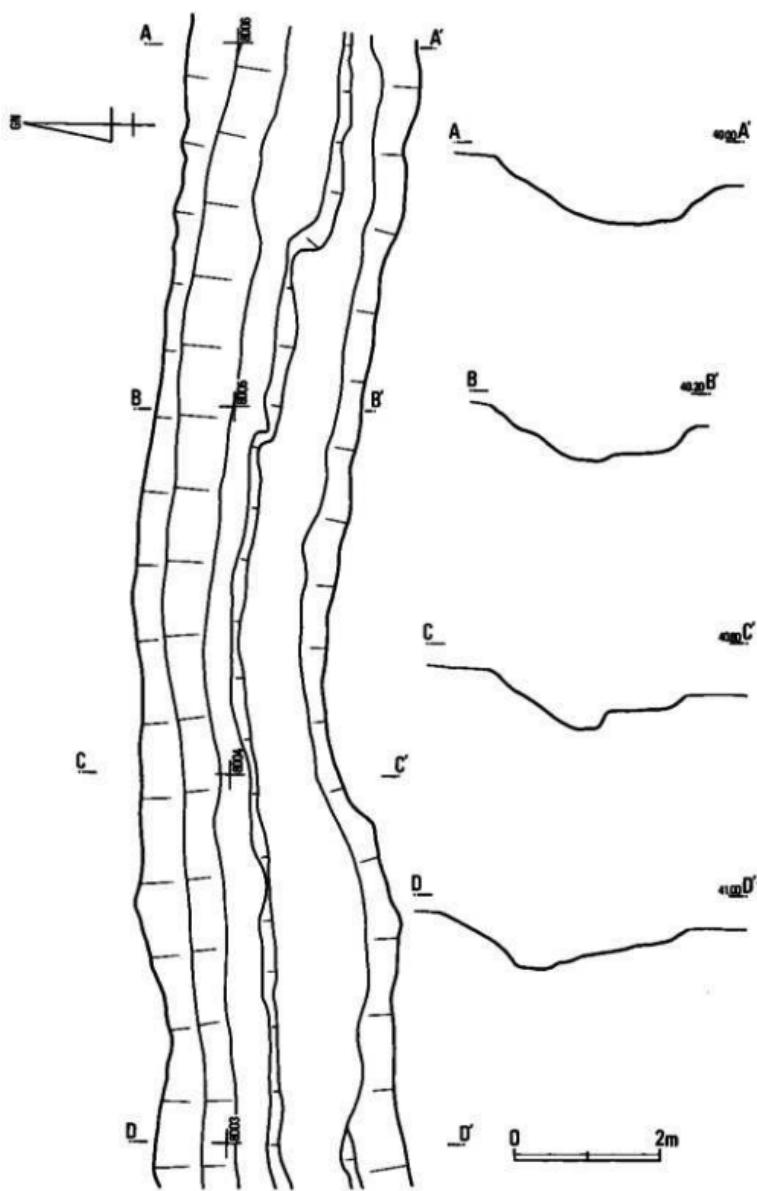
遺跡北部の2Bグリッドから2Dグリッドにかけて検出されたもので、等高線には概ね沿うものとなっている。長さ160m、上端の幅約2.5～4m、下端の幅約20～30cm、深さ約50～70cmを測る。断面は底部が左右どちらかに片寄った皿状を呈し、底面には複数の段がみられるなど、1号と似た形態をとる。土層断面図K-K'の底面の形状並びに覆土中の硬く締っている土層のあり方などから、少なくとも4回は作り変えが行なわれていると考えられる。この3号は4号・5号の2条の溝状遺構と交差しているが、覆土の切り合い関係から4号及び5号の方が新しい。

(4) 4号溝状遺構（第174～176・183図、図版63・64）

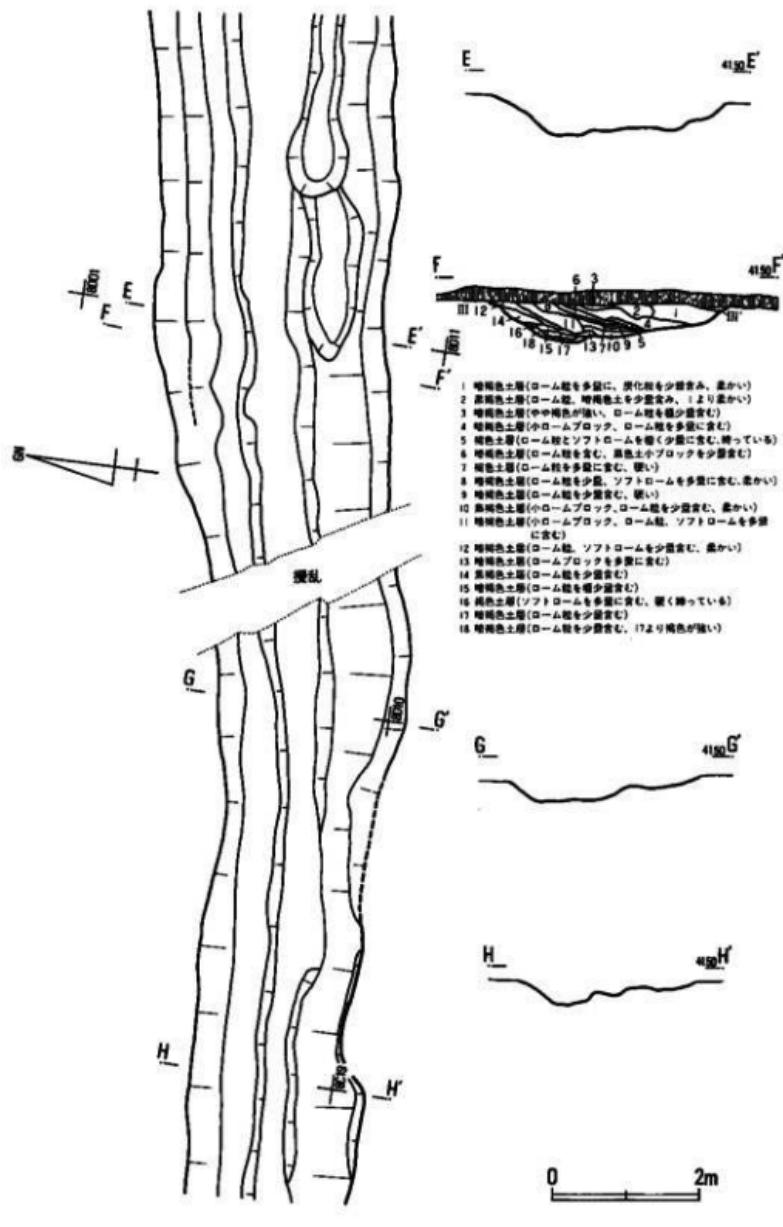
遺跡北西部の1Bグリッドから東部の谷に接する3Eグリッドにかけて検出され、概ね等高線とは直交する。すぐ北側には5・6号の溝状遺構が4号に並んで構築されている。長さ210



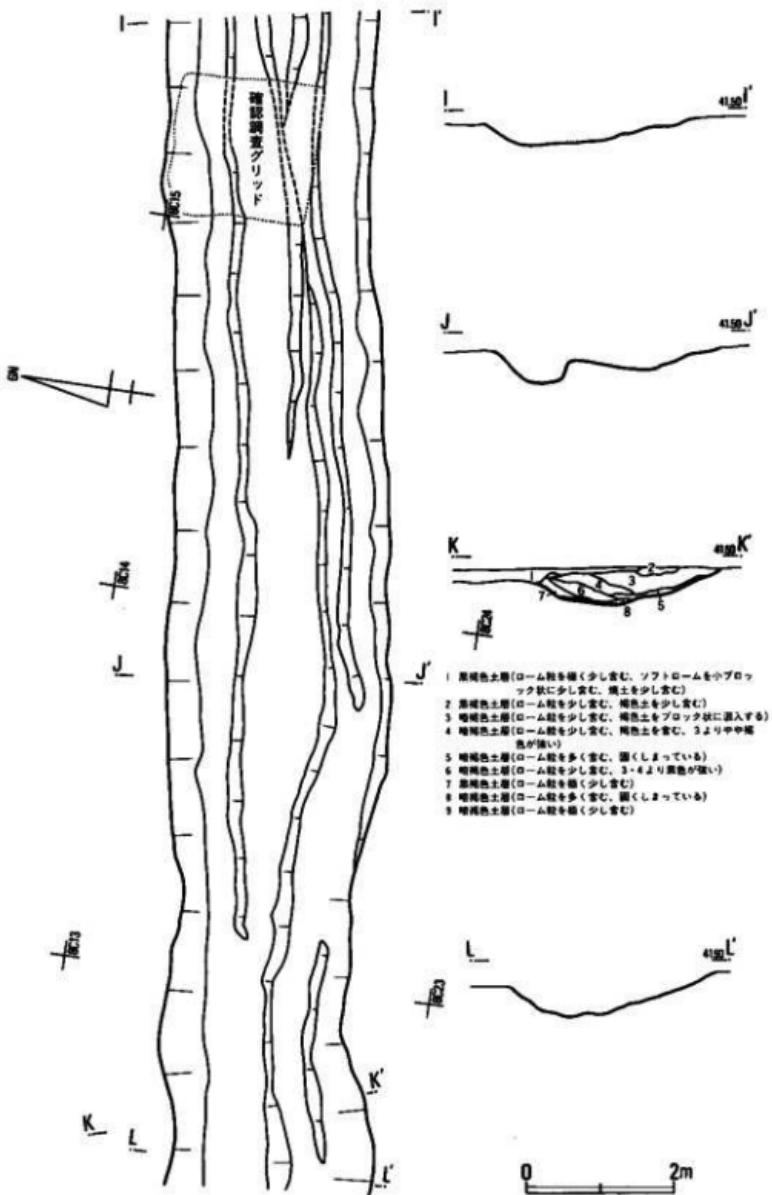
第163図 溝状遺構分布図 (1/2500)



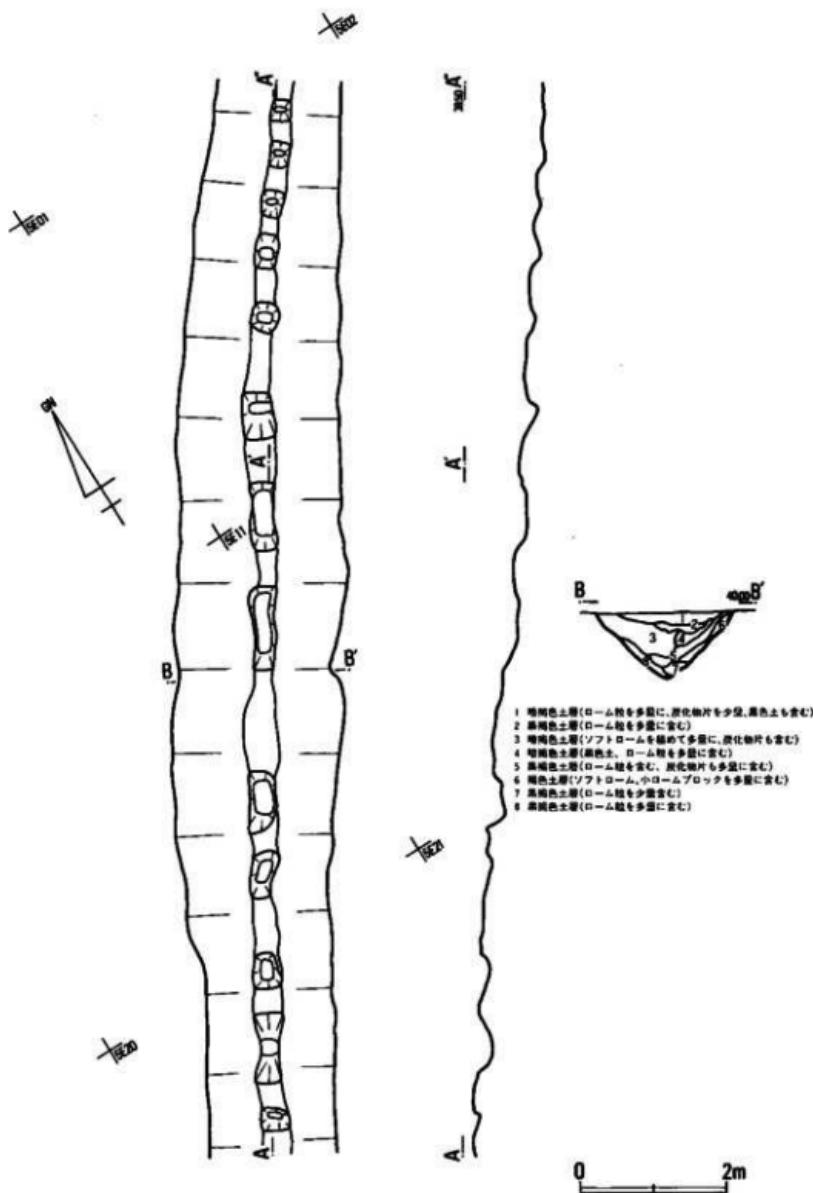
第164図 满状遺構実測図(1号)(1/80)



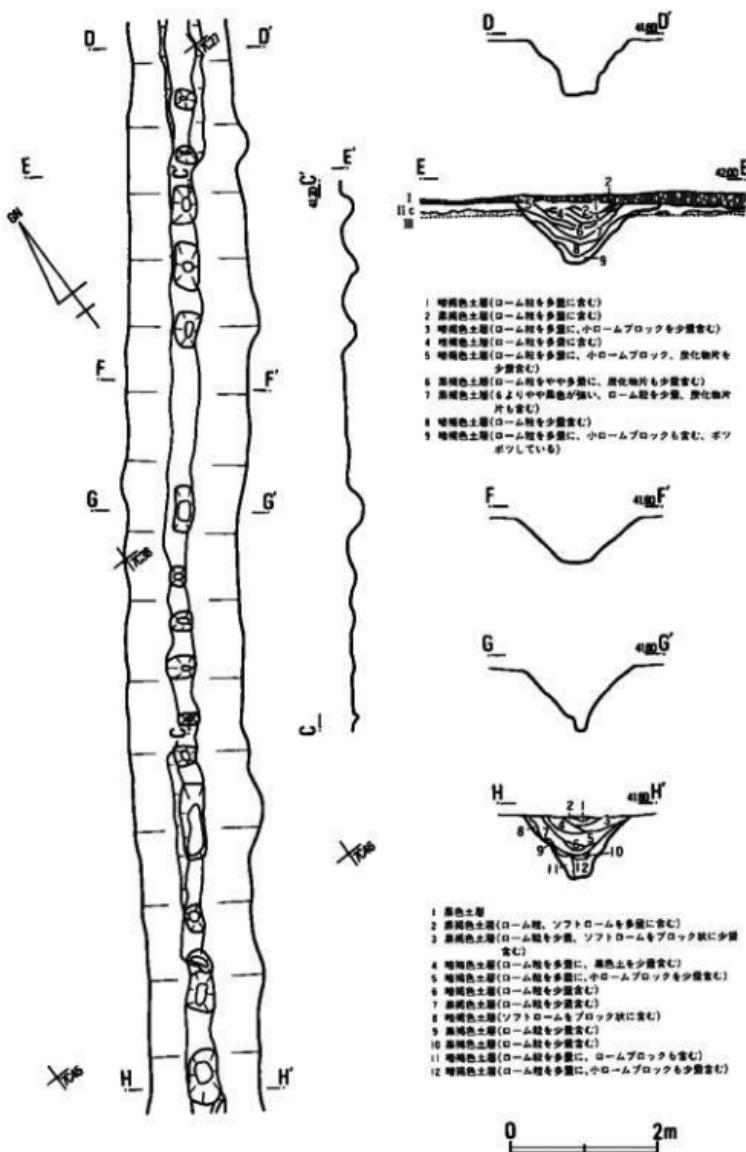
第165図 溝状造構実測図(1号)(1/80)



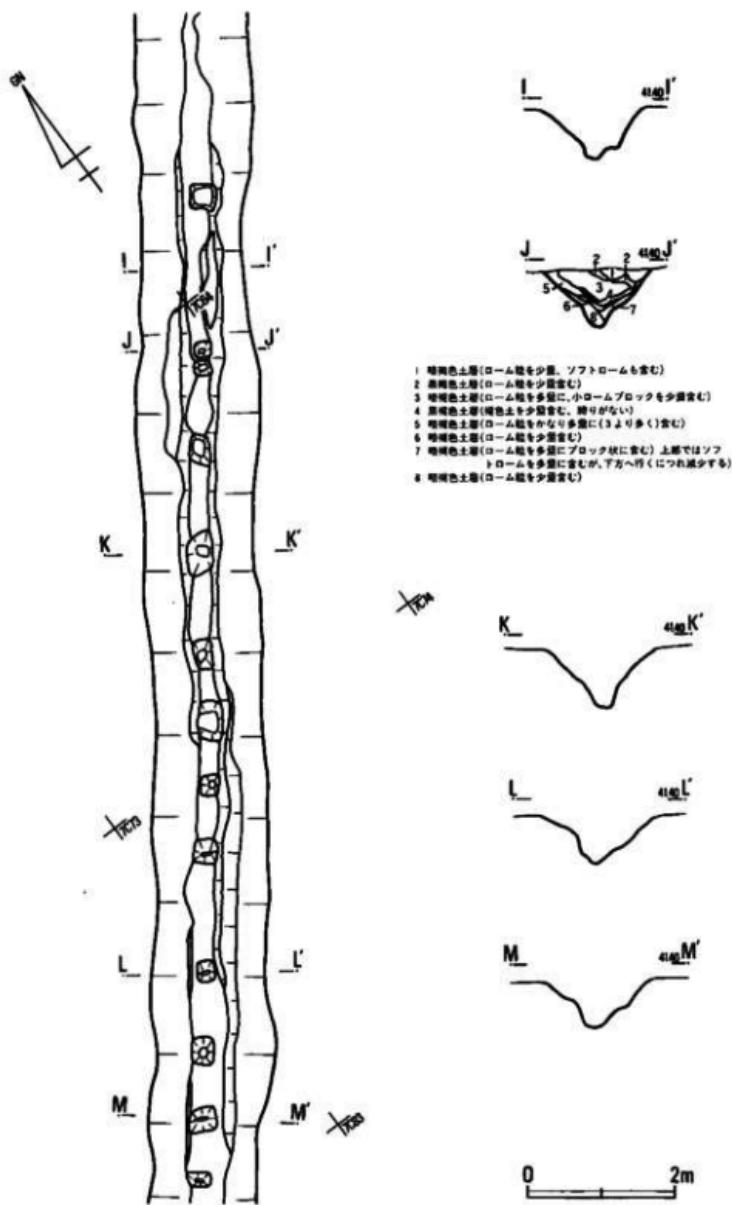
第166図 溝状遺構実測図(1号)(1/80)



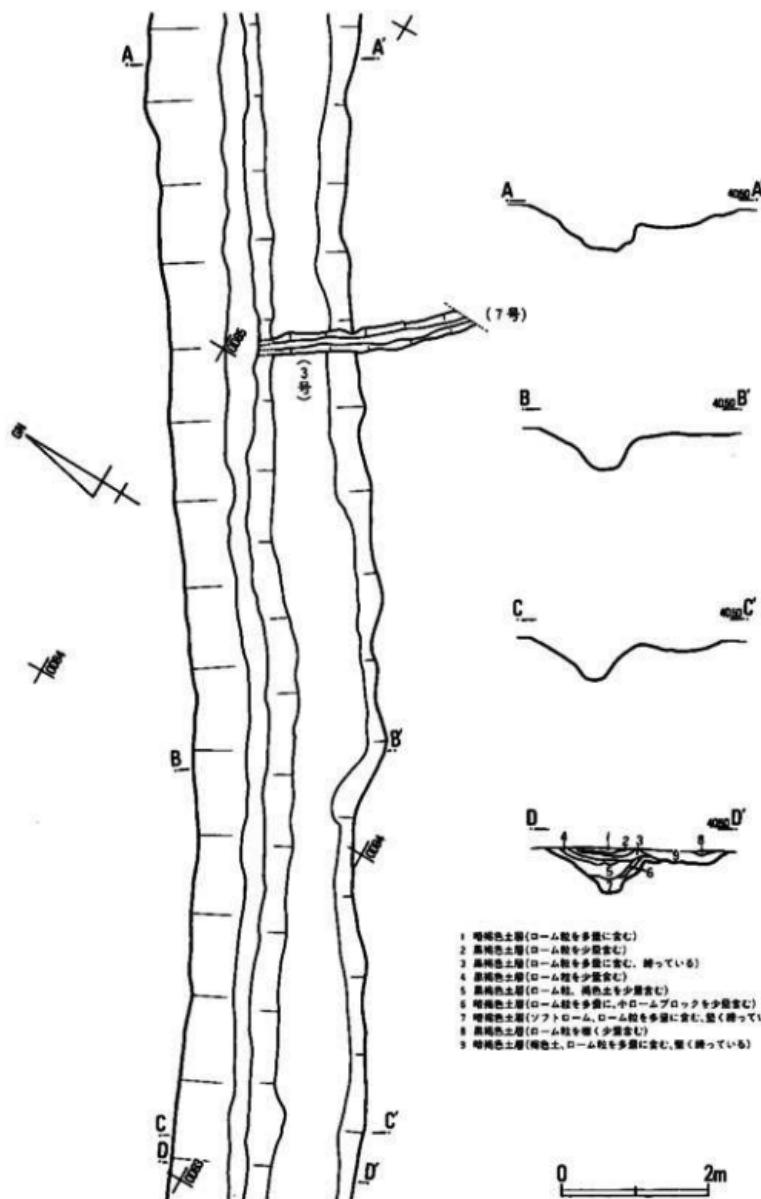
第167図 溝状遺構実測図(2号)(1/80)



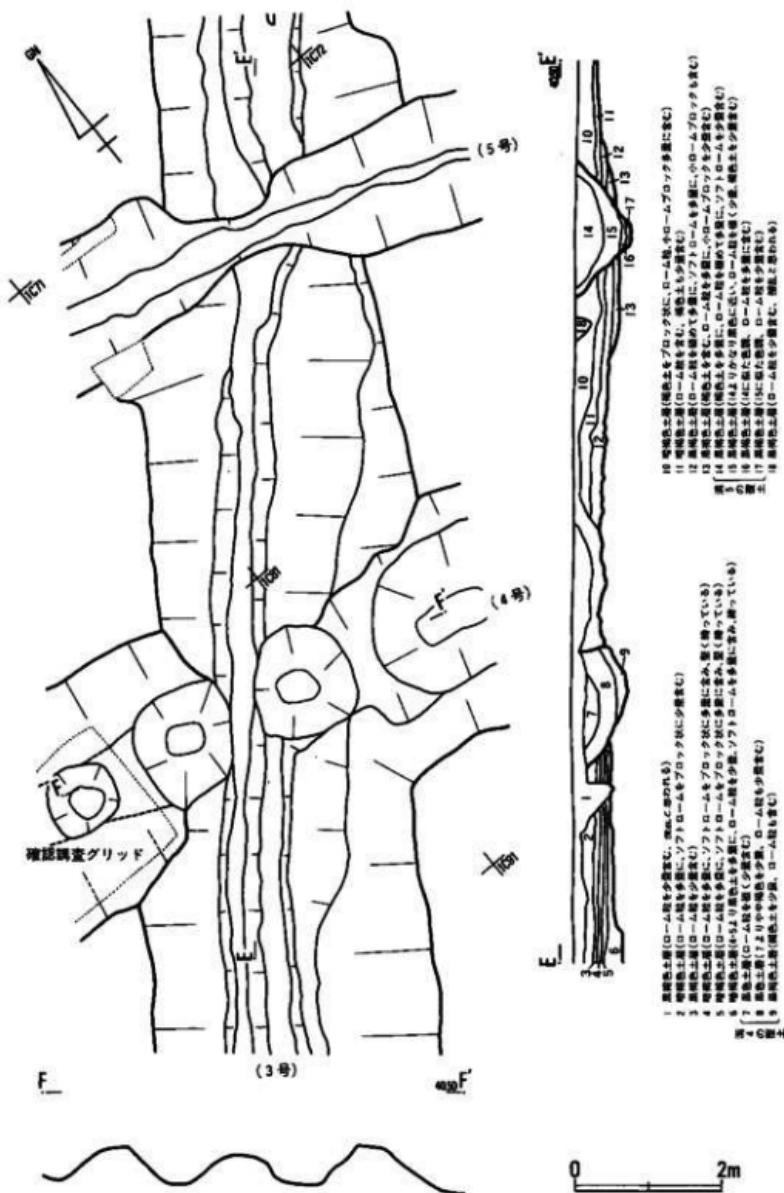
第168図 满状遺構実測図(2号)(1/80)



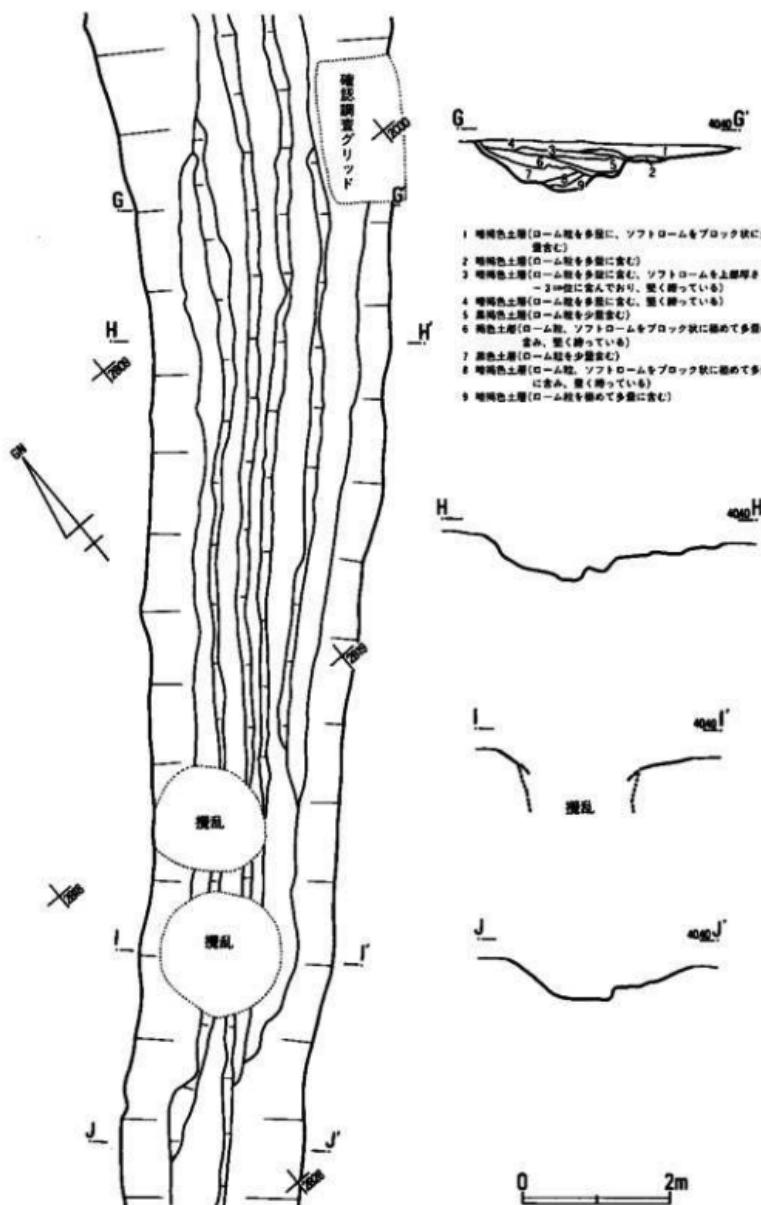
第169図 溝状遺構実測図(2号)(1/80)



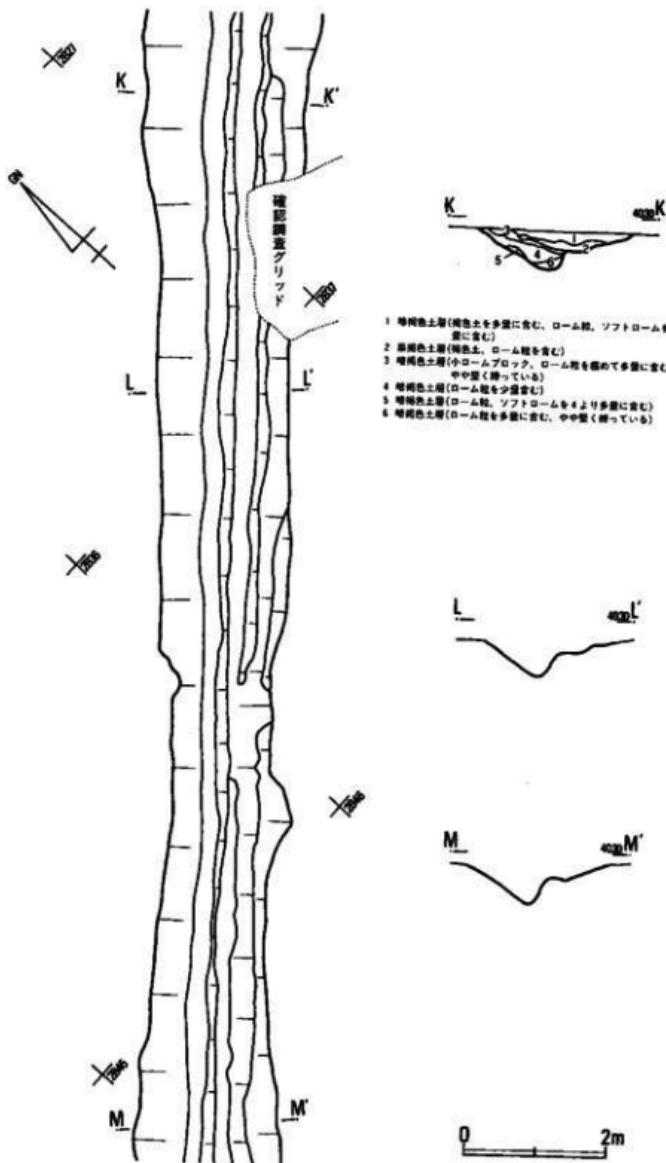
第170図 溝状遺構実測図 (3・7号) (1/80)



第171図 溝状遺構実測図(3・4・5号)(1/80)



第172図 溝状遺構実測図(3号)(1/80)



第173図 満状遺構実測図 (3号) (1/80)

m、上端の幅約1.5~3m、下端の幅約40~150cm、深さ約30cmを測る。断面は浅い摺鉢状を呈する。底面には長さ約1~3m、深さ約40~80cmのやや方形に近い形態のピット列が検出された。ピットの間隔は1.5~2.5mで必ずしも一定していないが、隣合うピットの上端の間隔はほぼ40~50cmとそろっている。また、東端において6号溝状遺構と重複しているが、土層断面図H-H'から4号が6号を切って構築されていることがわかる。

(5) 5・6号溝状遺構（第177~183図、図版64）

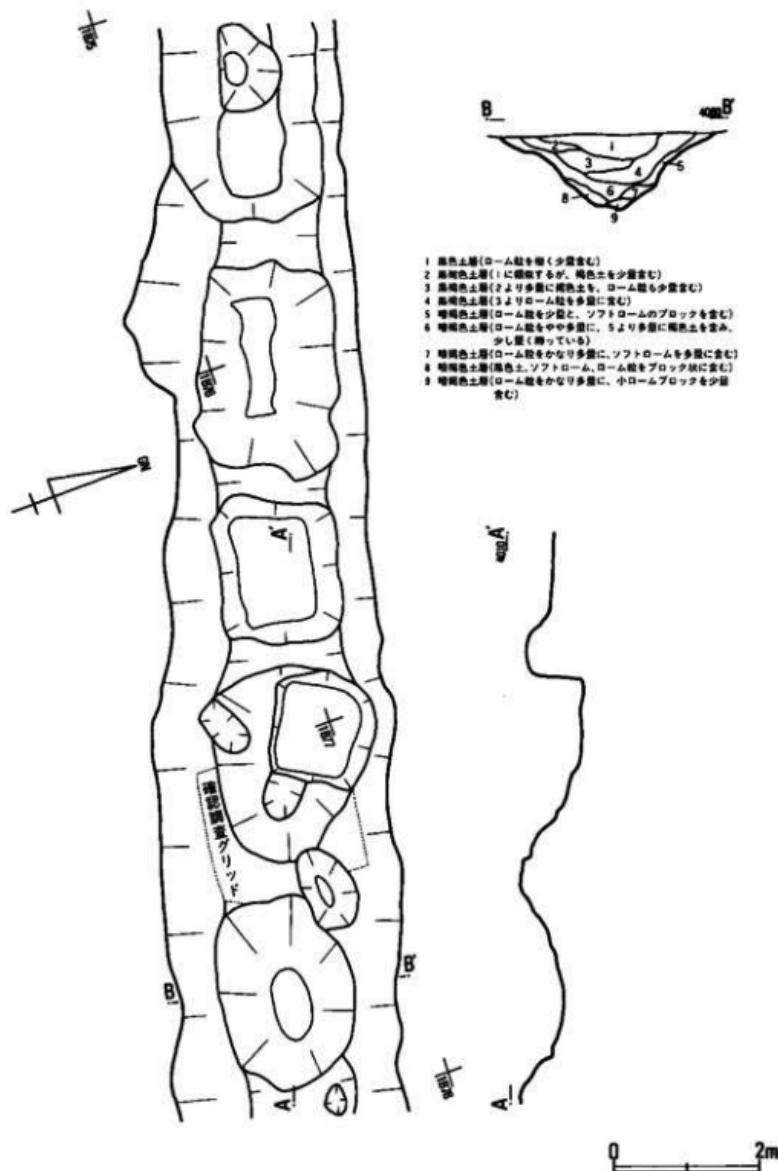
遺跡の北西部1Bグリッドから東部の谷に接する3Eグリッドにかけて、南側の4号に並んだ形で検出された。5号と6号は東端近くまで重複しており、長さ210m、上端の幅約2~2.8m、下端の幅約15~70cm、深さ約50~70cmを測る。断面は西端付近は逆台形状であるが、東端に近づくにつれて底面が凸凹のある浅い摺鉢状になる。底面には複数の段があり、3回程作り変えをしていると思われる。底面には幅約50~90cm、深さ約15~20cm程の円形に近いピットが不規則に並んでいる。また、東端の5・6号が独立したところでは、5号の規模が上端の幅約1.7m、下端の幅約30cm、深さ約60cmを測り、断面は摺鉢状を呈する。そして底面には先述のと同様のピットが検出されている。6号は上端の幅約1.3m、下端の幅約50cm、深さ約20~30cmを測り、断面は皿状を呈する。底面には段がみられる。5・6号の新旧は、土層断面から6号を5号が切っていることがわかる。

(6) 7号溝状遺構（第170図）

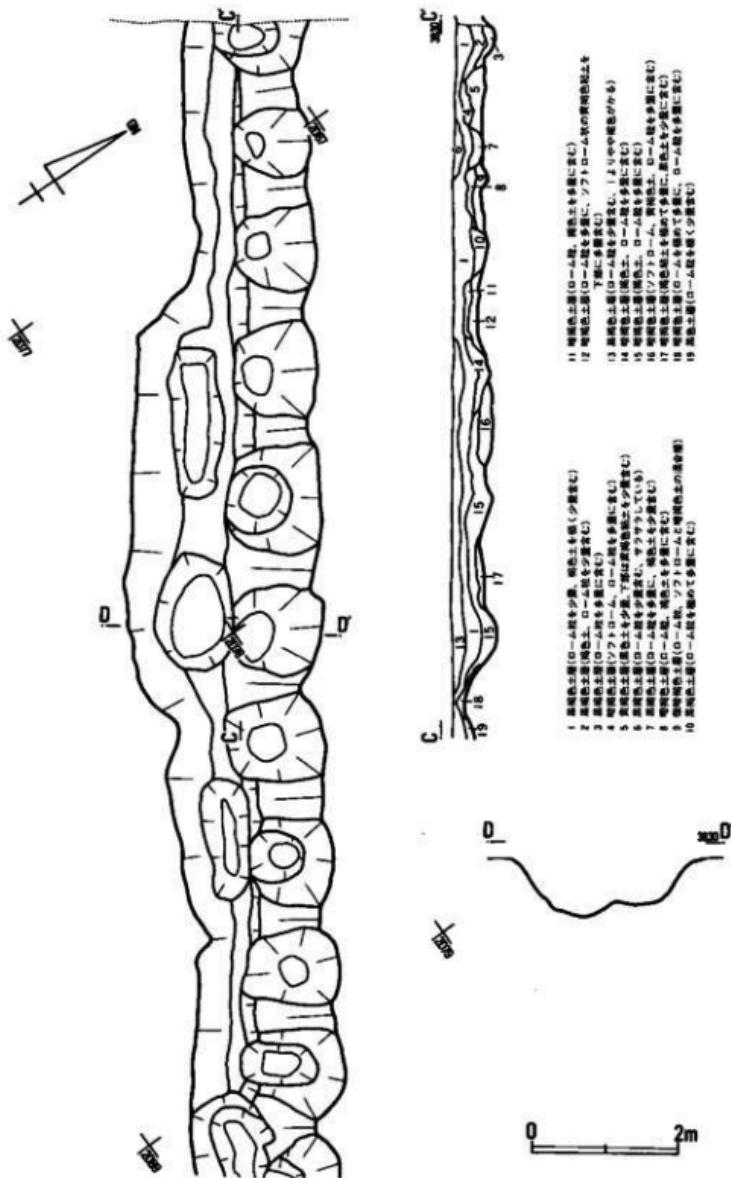
遺跡北端の0D85グリッドにおいて、3号溝状遺構に重複した状態で検出された。長さ約3m、上端の幅30cm、下端の幅約10cm、深さ10~15cmを測る。この他未掘であるが南東方向へさらに13m程延びていることを確認している。調査の結果3号の底部に繋ると思われ、3号のうちでも初期に構築されたものとほぼ同時期のものと考えられる。

(7) 溝状遺構のまとめ

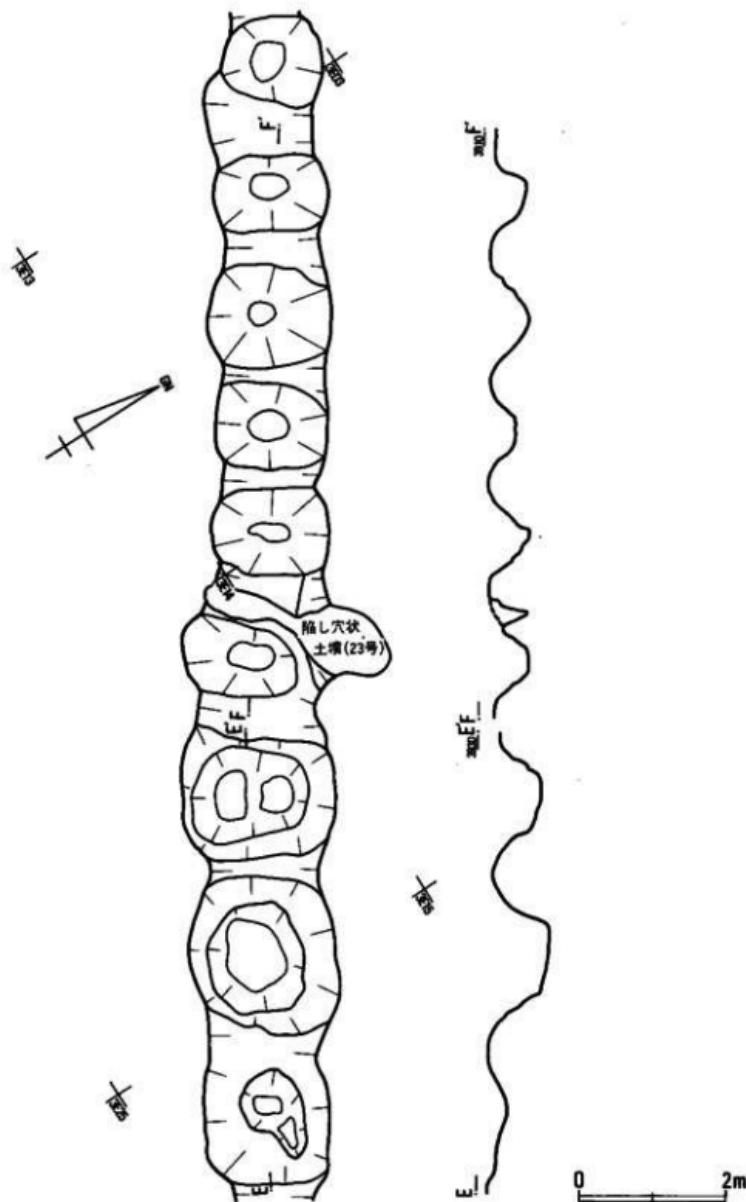
溝状遺構は7条検出されたが、いずれも時期を決定出来るような遺物は出土しなかった。7条相互の新旧は、その重複関係から3号より4~6号は新しく、6号より4・5号が新しいといえる。また、形態からは小規模な7号を除き2つのグループが考えられる。ひとつは底面にピットをもたず段を有し、作り替えが行なわれたと思われる1・3・6号で、もうひとつは底面にピットを有し明確な段をもたない2・4・5号である。このうち後者には柵列などの構築物の存在が推定されるのに対して、前者にはそういうものが見当らず、異った用いられ方をしたと考えられる。しかし、5号と6号がほとんど同じ場所に重複して作られているなど、構築場所については特に差は感じられない。



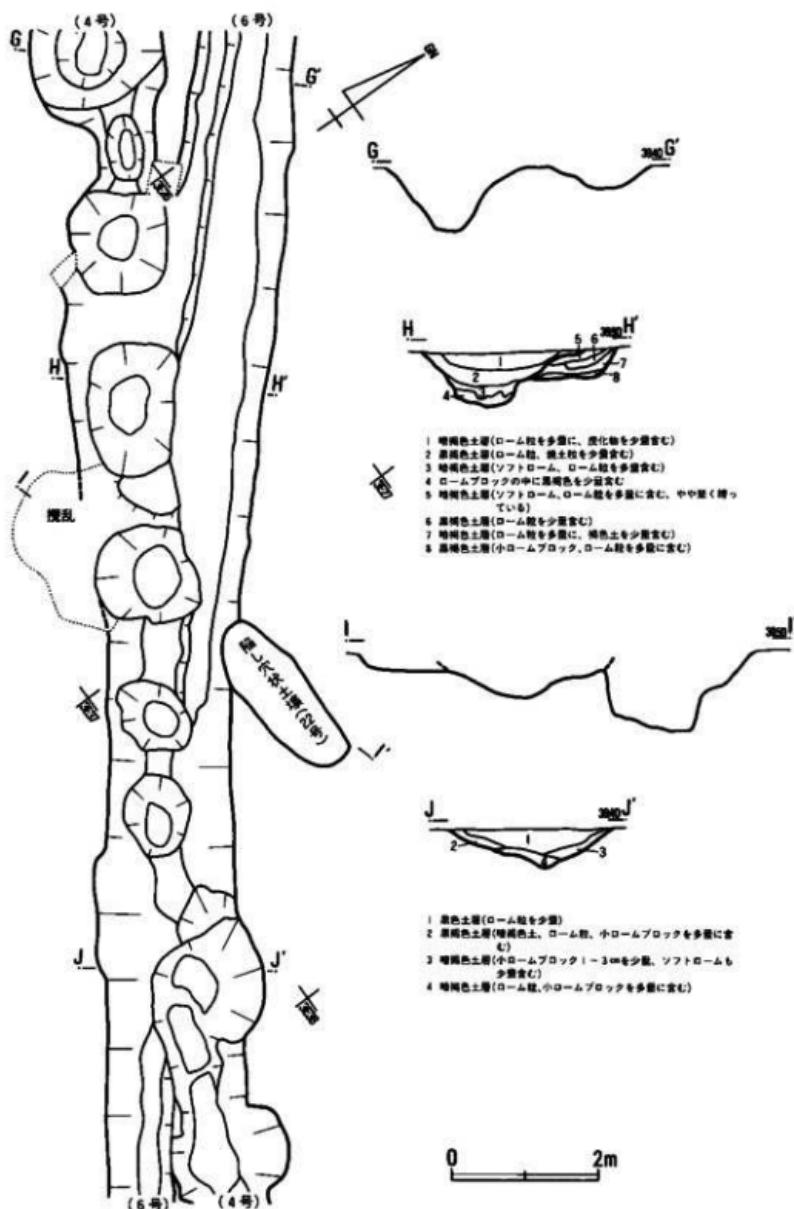
第174図 溝状遺構実測図(4号)(1/80)



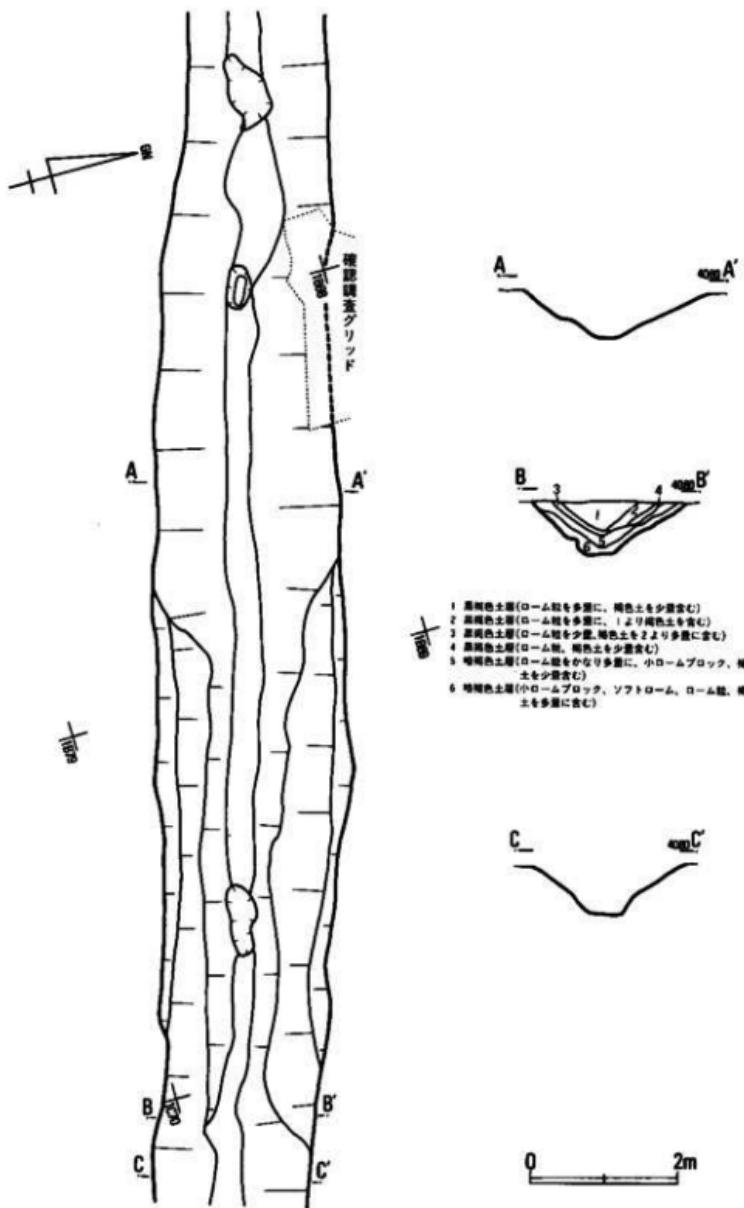
第175図 溝状遺構実測図(4号)(1/80)



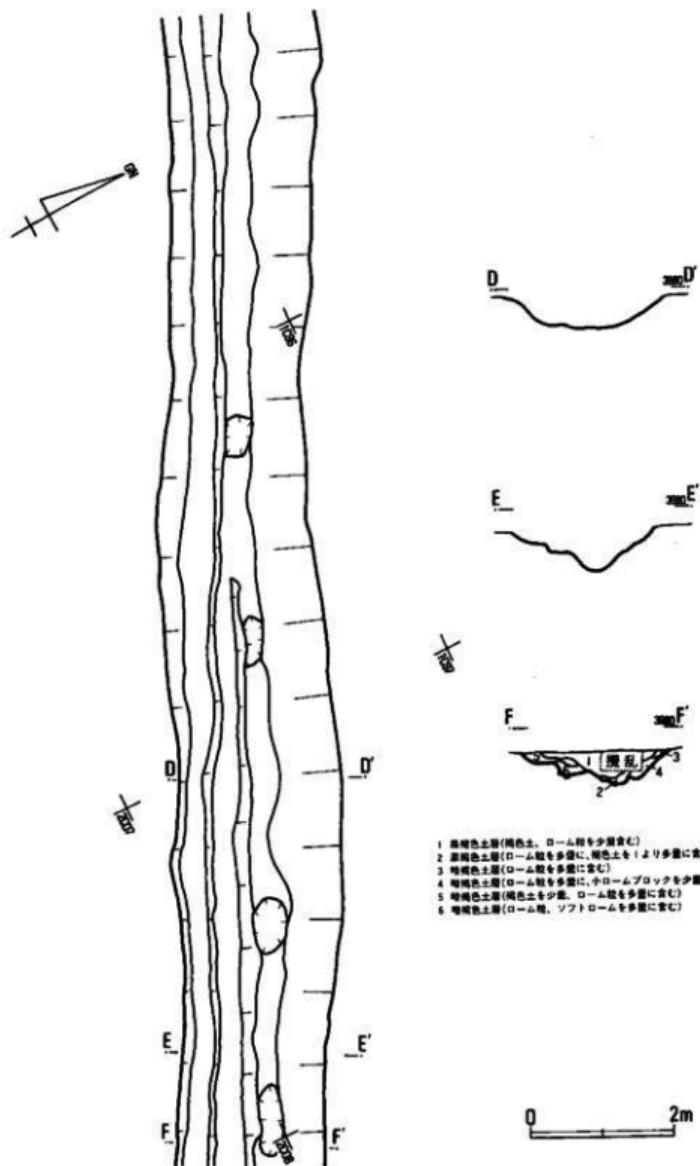
第176図 溝状遺構実測図(4号)(1/80)



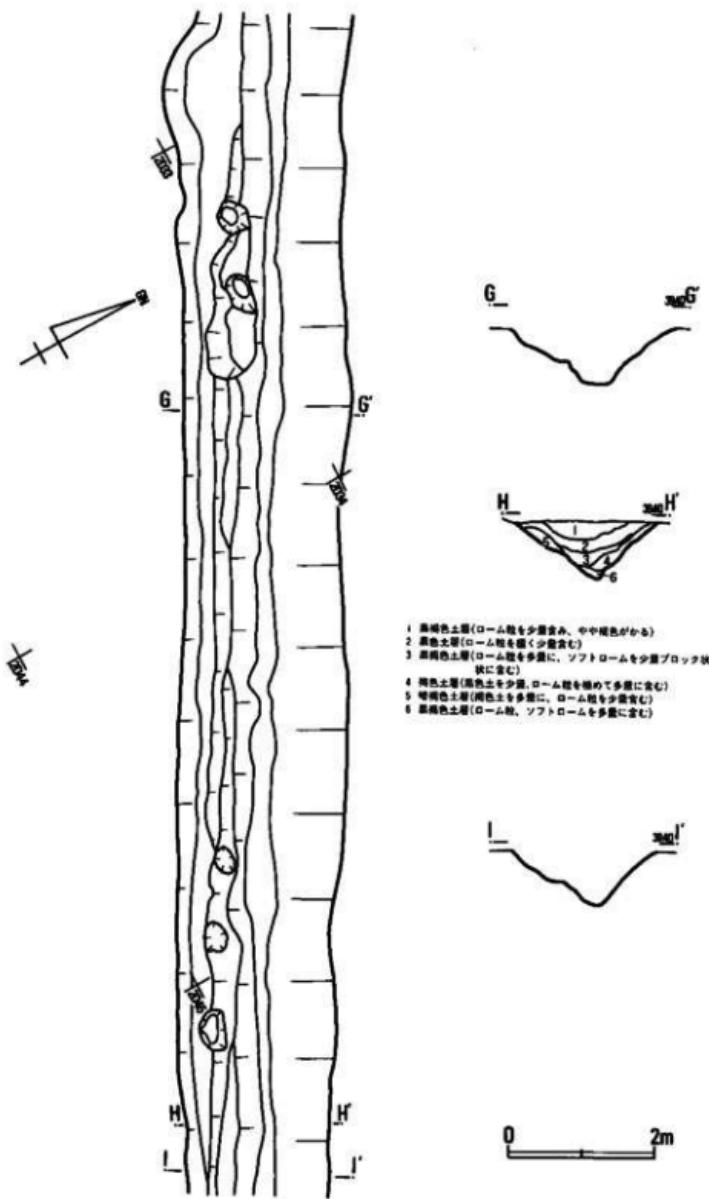
第177図 溝状遺構実測図(4 · 5号)(1/80)



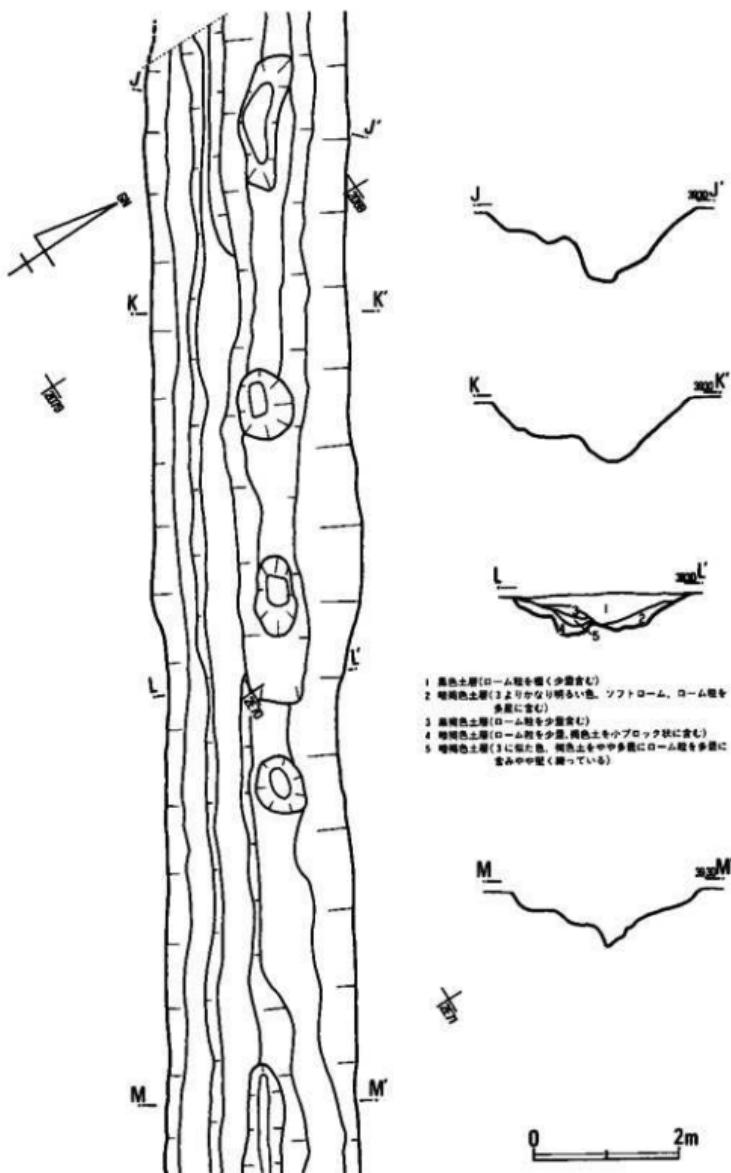
第178図 溝状遺構実測図(5・6号)(1/80)



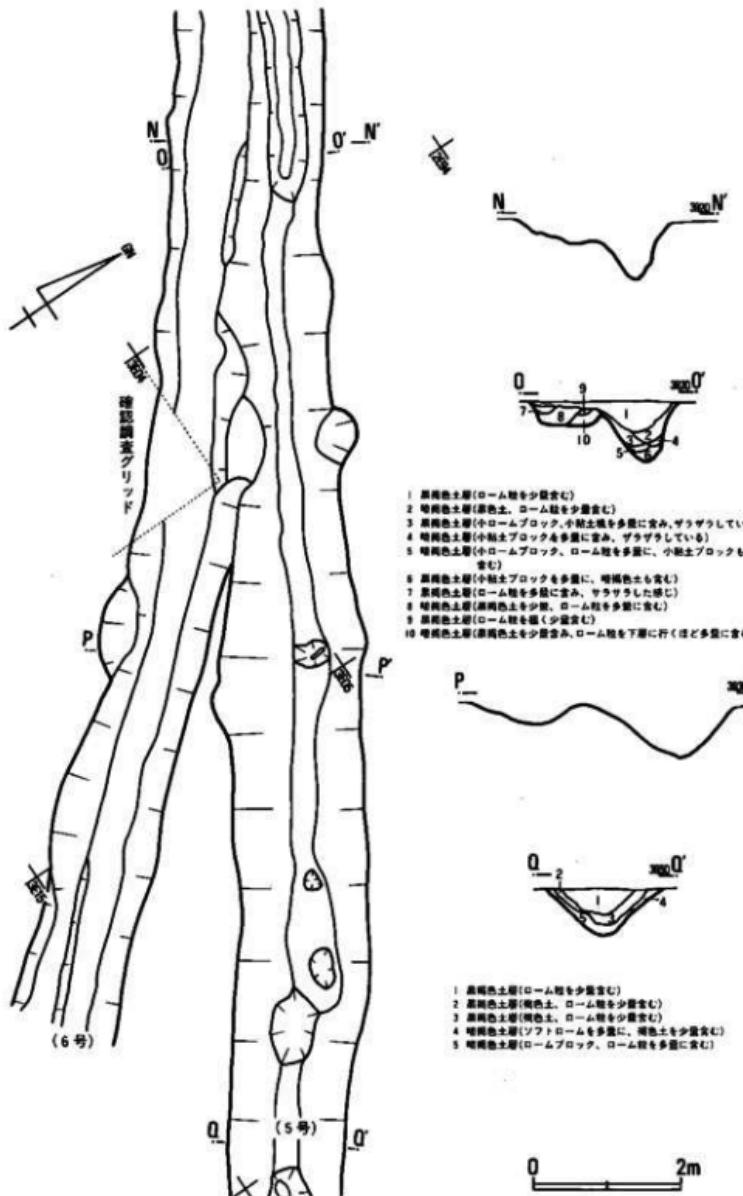
第179図 清状遺構実測図(5・6号)(1/80)



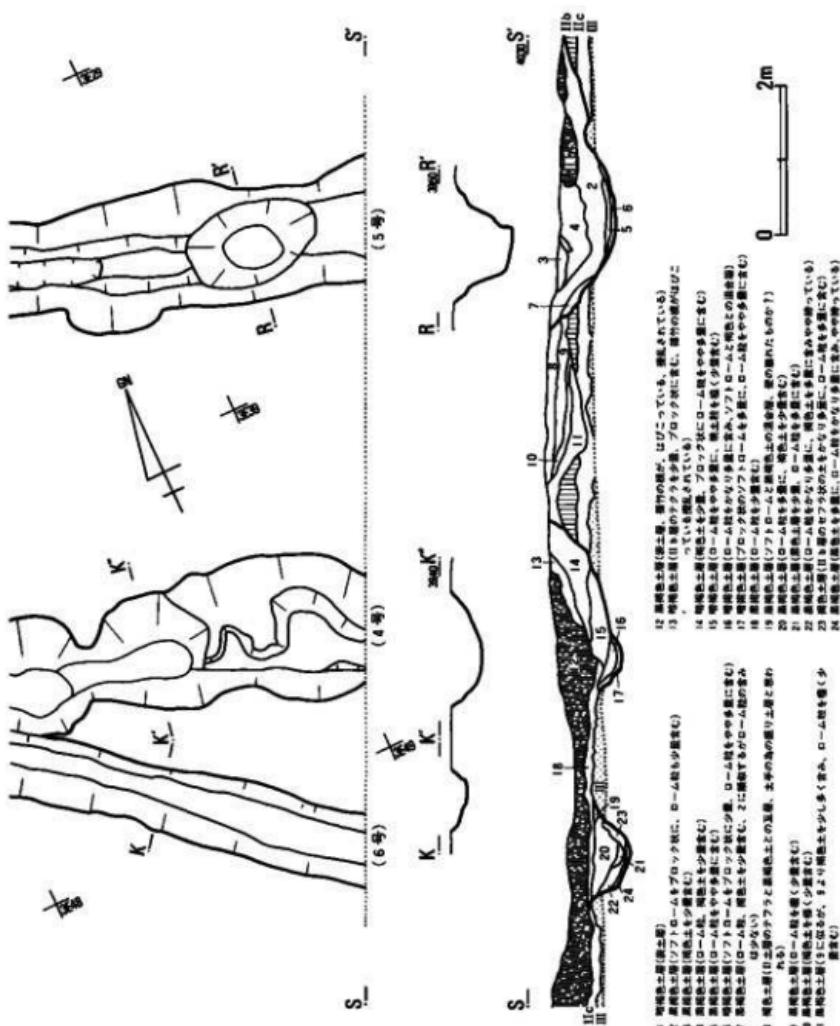
第180図 溝状造構実測図(5・6号)(1/80)



第181図 溝状遺構実測図(5・6号)(1/80)



第182図 溝状遺構実測図(5・6号)(1/80)



第183図 溝状遺構実測図(4・5・6号)(1/80)

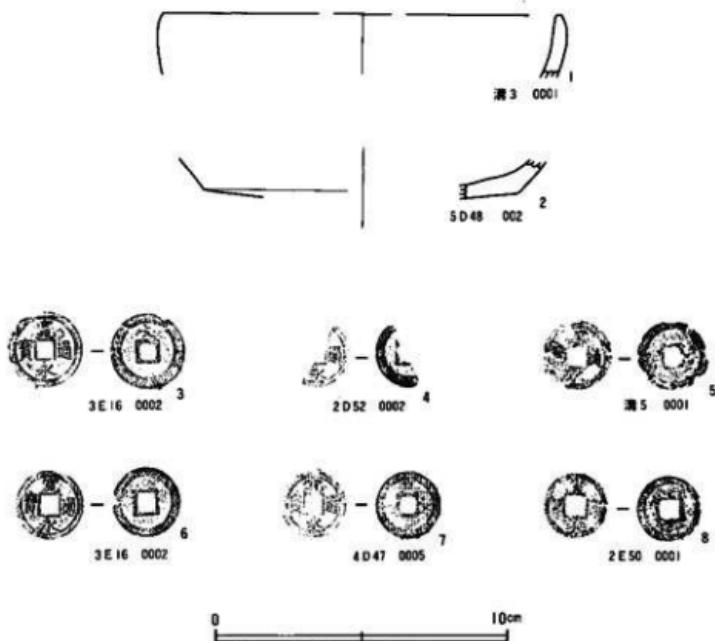
これら7条の溝状遺構の構築時期及び機能・用途を推定することは困難であるが、この地域には古くから牧が置かれていたことが知られており、取香牧などは御料牧場として最近まで存在していた。このことから牧に係わる野馬土手・野馬堀としての堀であった可能性が一番有力であろうと思われ、4号と5・6号などはその中央部に野馬土手が築かれていたとも考えられる。

なお、No.67遺跡では溝状遺構の覆土から土師器がかなり出土しており、古いものでは古墳～平安時代にまで遡るものがあると思われる。

2 遺物（第184図、図版65）

その他の時代の遺物としては古銭・土師器片などが微量に出土したのみで、溝状遺構との関連は不明である。

1は弥生土器の小形の椀か鉢の破片と思われる。2は土師器の小形高壙である。3～8は寛永通宝で一番大きいものは3で径2.5cmを測り、これのみ裏面上部に「文」の文字がある。



第184図 その他の時代の遺物実測図 (1/2)

第3章 小 結

ここではこれまで述べてきた調査結果に基づいてNo.10遺跡の時代的な変遷を簡単に振り返って結びとしたい。

先土器時代

1期 遺跡南東部にVII層上部を主体とする第4及び第5炭化物片集中個所が残される。

炭化物片の集中個所については、自然的要因によるとの考えも強く、必ずしも人為的なものとは限らないが、石器群とは重複しないまでも石器群の検出される層位とほぼ同層位から検出されることが多く、少なくともその全てではないにしても人為的に残されたものが多いと考える。

2期 遺跡南東部にSブロックを中心としたVII層主体石器群と第2及び第3炭化物片集中個所が残される。

3期 遺跡北端部にはRブロックを中心としたIV～VI層主体石器群、遺跡南部には第1炭化物片集中個所が残される。

4期 遺跡南部にIII層下部を主体とするG～Lの6ブロックからなるブロック群とMブロックが残される。

5期 遺跡南東部にIII層中部～下部を主体とするA～Fブロック及びTブロックが残される。なおA～Fブロックには小規模ながら砾群が伴う。

6期 遺跡北端部にIII層中部～下部を中心に石刃及び石刃状剝片を主体とする石器群が残される。

7期 遺跡南端部にIII層中部を主体とするP及びQブロックが残される。

8期 遺跡南東部を中心にIII層上部～上面を主体とする槍先形尖頭器が数点残される。

9期 遺跡北端部と南端部（N・Oブロック）にIII層上部～上面を主体とする細石刃石器群が残される。

10期 遺跡北端部と南部にIII層直上を主体とする槍先形尖頭器とビエスエスキューが残される。

縄文時代

早期前半～中葉 遺跡北端部を中心に撚糸文系及び沈線文系の土器片が少量残される。

早期後半 遺跡全体に多数の陥し穴状土壤群がつくられるとともに、遺跡北端部を中心に条痕文系土器群が残される。

前期 遺跡北端部を中心に黒浜式や浮島式の土器片が少量残される。

中期 遺跡北端部を中心に中期初頭～前半の土器群が残される。

後期 遺跡北端部を中心に曾谷式前後の土器片が少量残される。

弥生～奈良・平安時代

ごく微量の土器片が残される。

鎌倉～大正時代

野馬堀と思われる溝状遺構 7 条と寛永通宝 6 枚が残される。

昭和時代

開拓農家が烟をつくり桑室と思われる堅穴や芋穴さらにゴミ穴などを残す。

現代

成田空港二期工事区内となり、埋蔵文化財調査が行なわれた後雑草が生い茂り、キジやうきぎの格好の棲息地となっている。

引用・参考文献

石岡憲雄 (1980) 「所謂「Tピット」について」土壌考古第 2 号

今村啓爾他 (1973) 「霧ヶ丘」霧ヶ丘遺跡調査団

遠藤香港 (1982) 「Tピット」「美沢川流域の遺跡群発掘調査の概要」財団法人北海道埋蔵文化財センター

大場善雄他 (1952) 「千葉縣銚子市栗島臺石器時代遺跡調査報告」千葉縣銚子市公正市民館

小田静夫他 (1977) 「高井戸東遺跡」高井戸東遺跡調査会

川島利道他 (1983) 「岩坂大台遺跡」財団法人千葉県文化財センター

白石浩之・鈴木次郎 (1980) 「寺尾遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告 18

鈴木次郎他 (1984) 「栗原中丸遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター

田中英司 (1979) 「唐沢遺跡」富士見市遺跡調査会調査報告第 1 集

戸沢充則・鶴丸俊明編 (1983) 「多聞寺前遺跡Ⅱ」多聞寺前遺跡調査会

戸田哲也他 (1977) 「東内野遺跡発掘調査概報」富里村教育委員会

西川博季・西口徹他 (1984) 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 IV—No.7 遺跡一」財団法人千葉県文化財センター

西村正衛 (1954) 「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚(第 2・3 次調査)」学術研究 3

野口行雄 (1983) 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 I-No.14 遺跡一」財団法人千葉県文化財センター

福田友之 (1981) 「『溝状ピット』研究に関する覚書」弘前大学考古学研究第 1 号

町田洋 (1964) 「Tephrochronology による富士火山とその周辺地域の発達史—第四紀末期について—」地学雑誌 73-5 • 6

- 松村明子他（1978）『鈴木遺跡Ⅰ』鈴木遺跡刊行会
- 宮重行・池田大助他（1981）『木の根』財團法人千葉県文化財センター
- 宮澤寛・今井康博（1976）「縄文時代早期後半における土壤をめぐる諸問題—いわゆる落し穴について—」港北
ニュータウン埋蔵文化財調査団調査研究集録第1冊
- 明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団編（1969）『神奈川県大和市月見野遺跡群調査概報』

図 版



航空写真（北から）



航空写真（北から）



先土器時代石器群出土状況



A-1号跡



A - 2 号跡



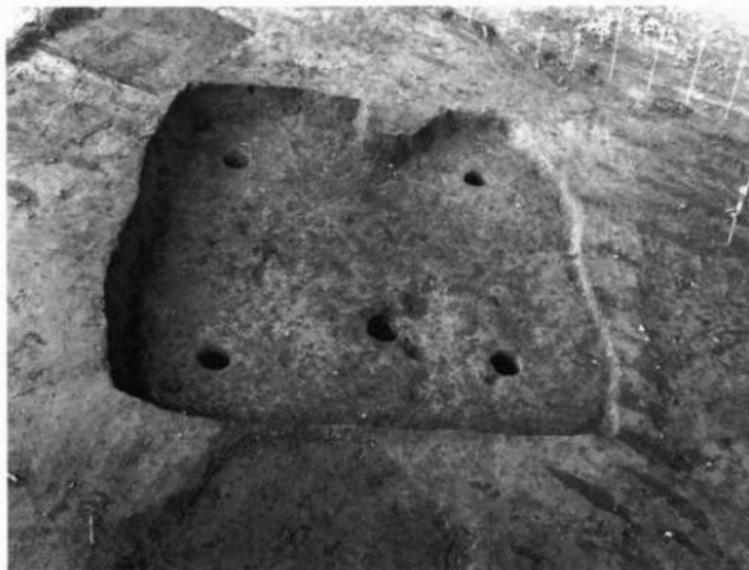
A - 3 号跡



A-4号跡



A-5号跡



A - 6 号跡



A - 7 号跡



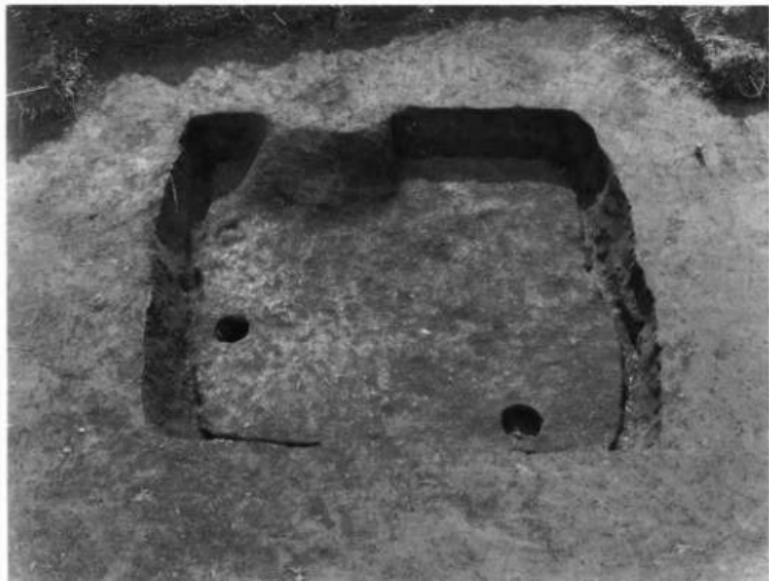
A - 8 号跡



A - 9 号跡



A-10号跡



A-11号跡



A-12号跡



A-13号跡



B-1号迹



B-1号迹土层断面



B-2号迹



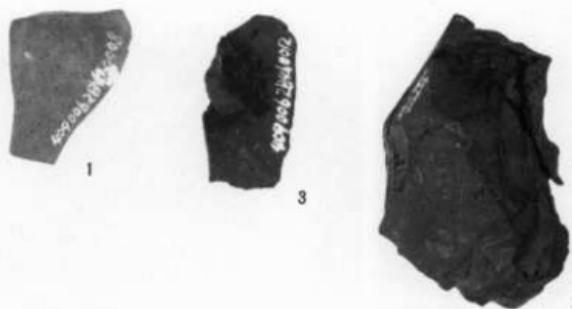
B-3号迹



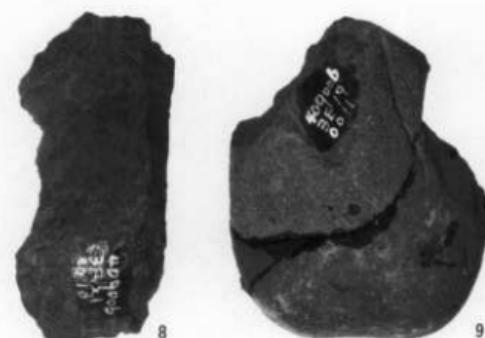
B-4号迹



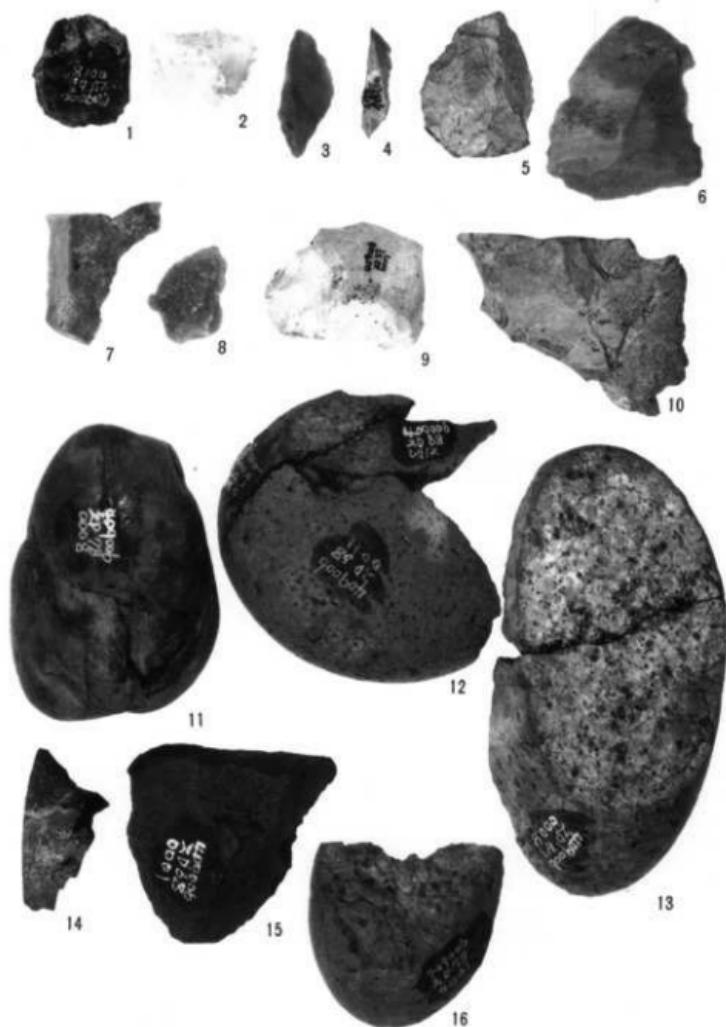
B-4号迹土层断面



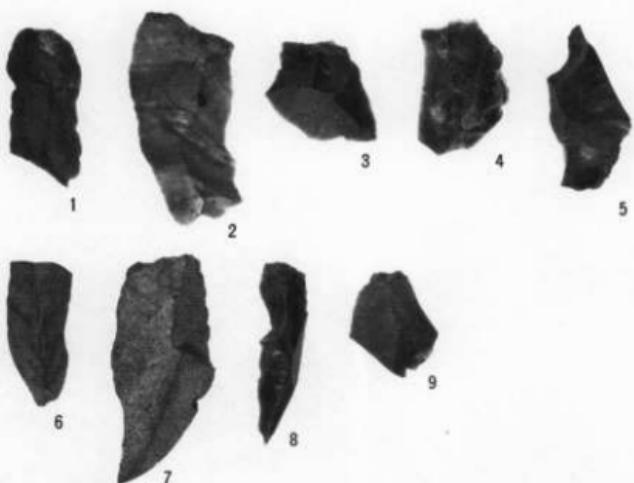
先土器時代遺物 (A-2群)



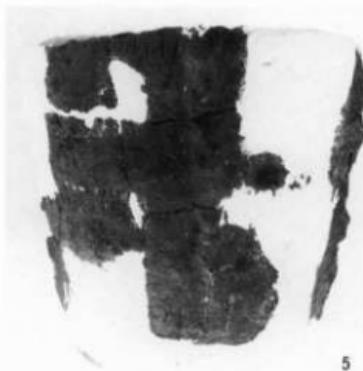
先土器時代遺物 (B-3群)



先土器時代遺物（B-1群）

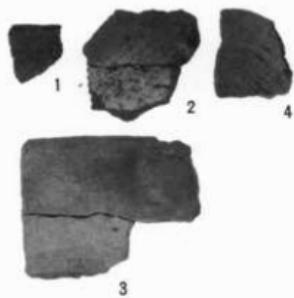


先土器時代遺物（B-2群）

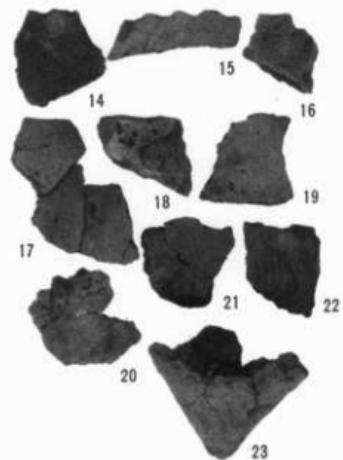
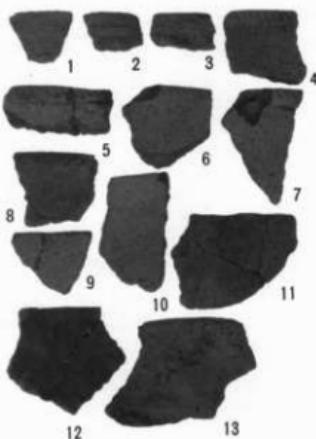


A区包含層出土遺物

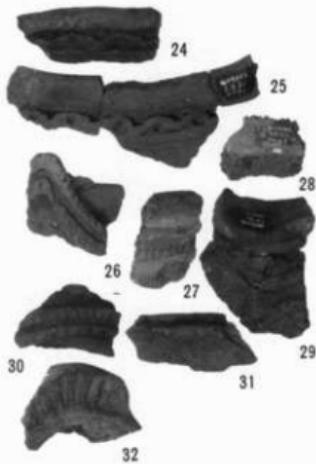
No. 2 遺跡

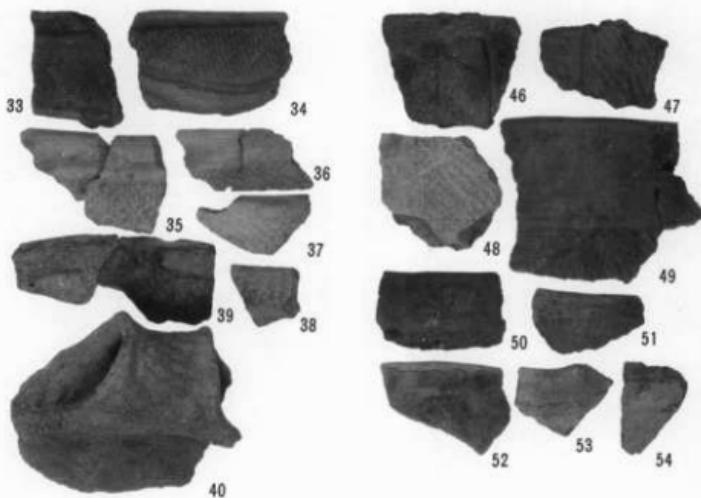


A区包含層出土遺物



B区包含層出土遺物





B 区包含層出土遺物



1

A-1号跡出土遺物



1

A-5号跡出土遺物



1

A-2号跡出土遺物



2

A-6号跡出土遺物



1



2

A-12号跡出土遺物



2

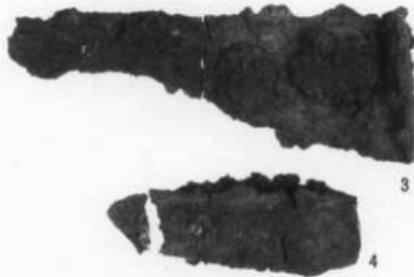
A-3号跡出土遺物



A - 7号跡出土遺物



A - 9号跡出土遺物



A - 10号跡出土遺物



航空写真（東から）



航空写真（北から）



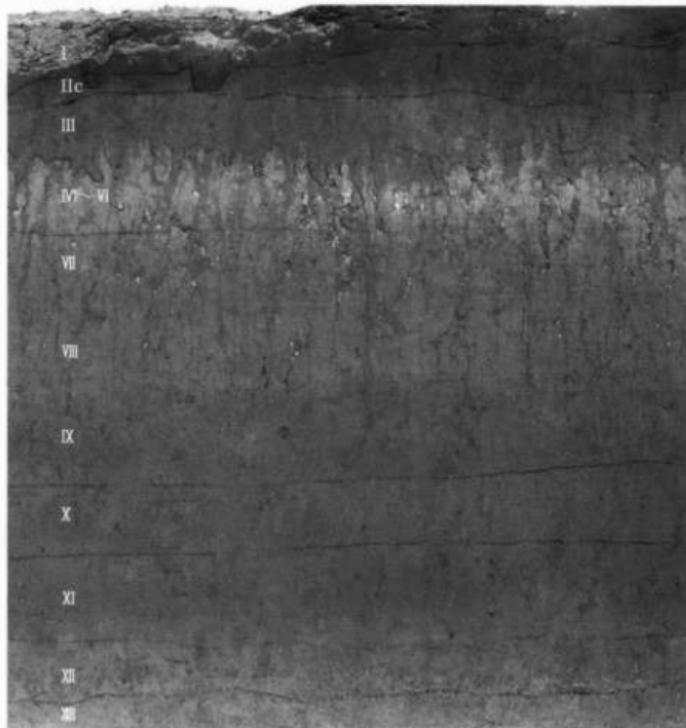
同上（西から）



調査風景



同上



6D07 土層断面



S ブロック遺物出土状況



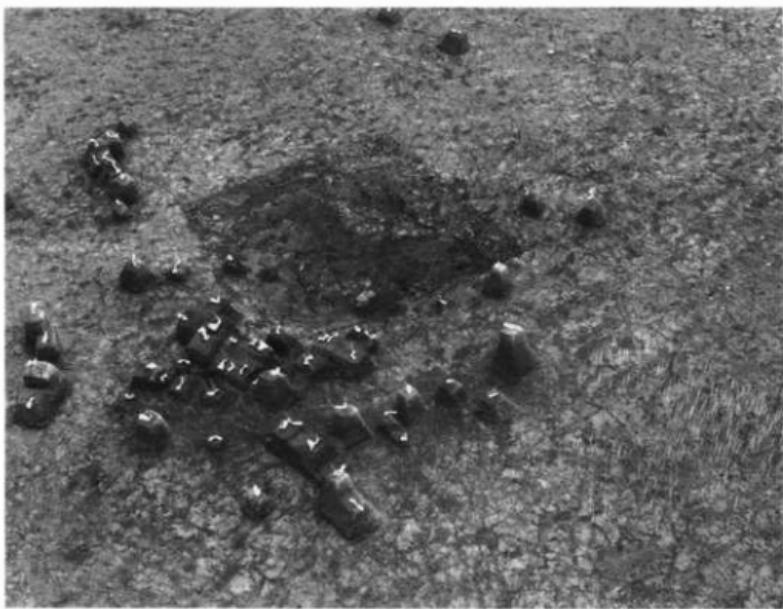
R ブロック遺物出土状況



III層主体石器群出土状況（北から）



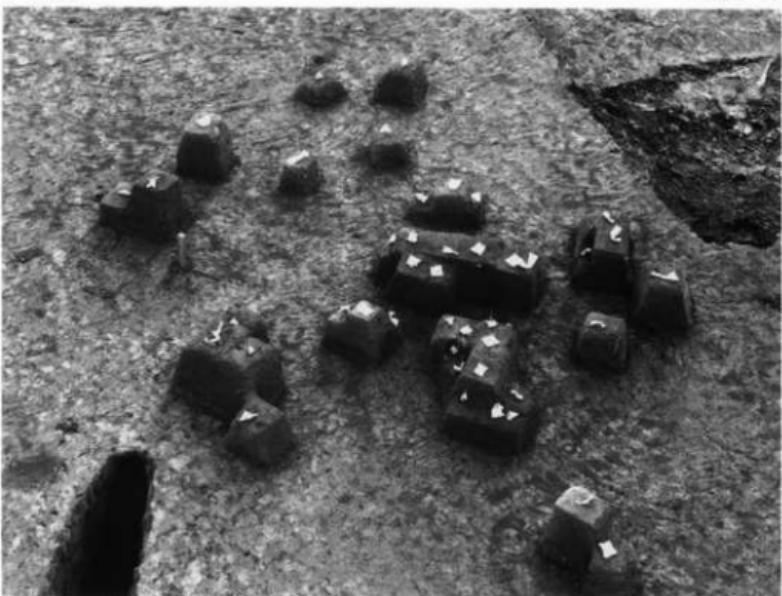
同上（南から）



C ブロック遺物出土状況



D ブロック遺物出土状況



E ブロック遺物出土状況



F ブロック遺物出土状況



Gブロック遺物出土状況



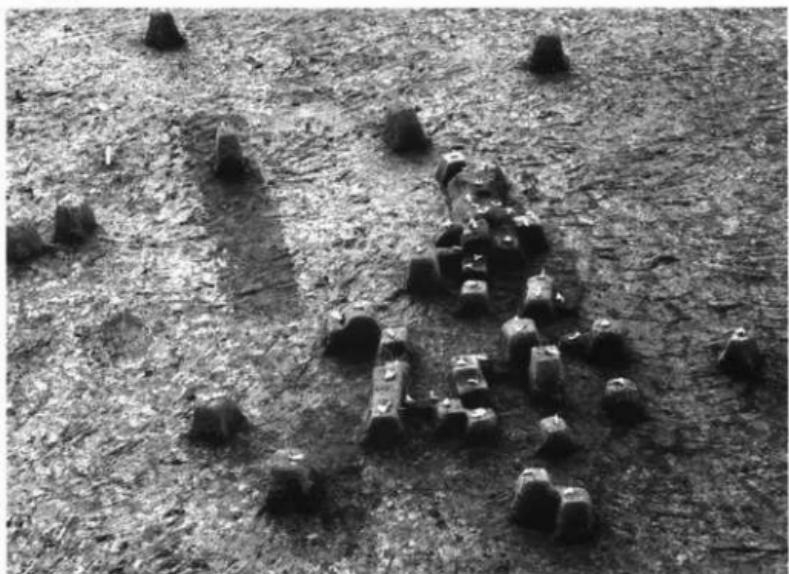
Hブロック遺物出土状況



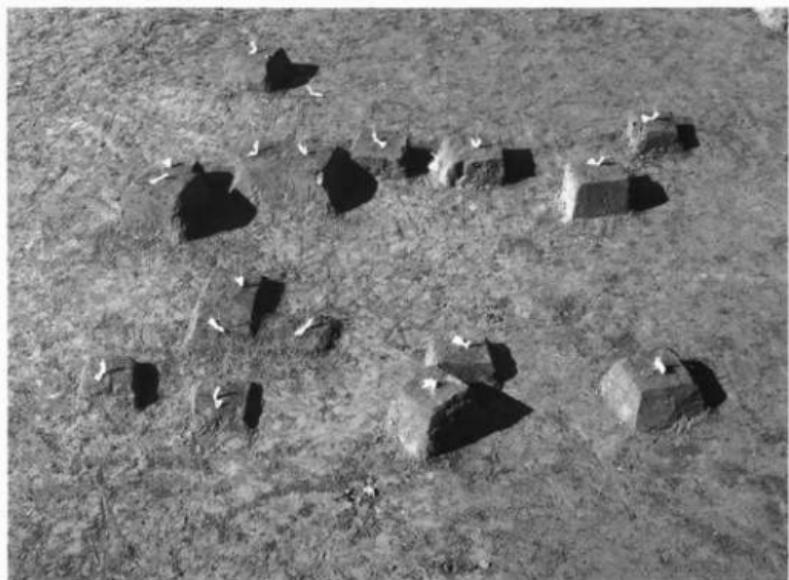
J ブロック遺物出土状況



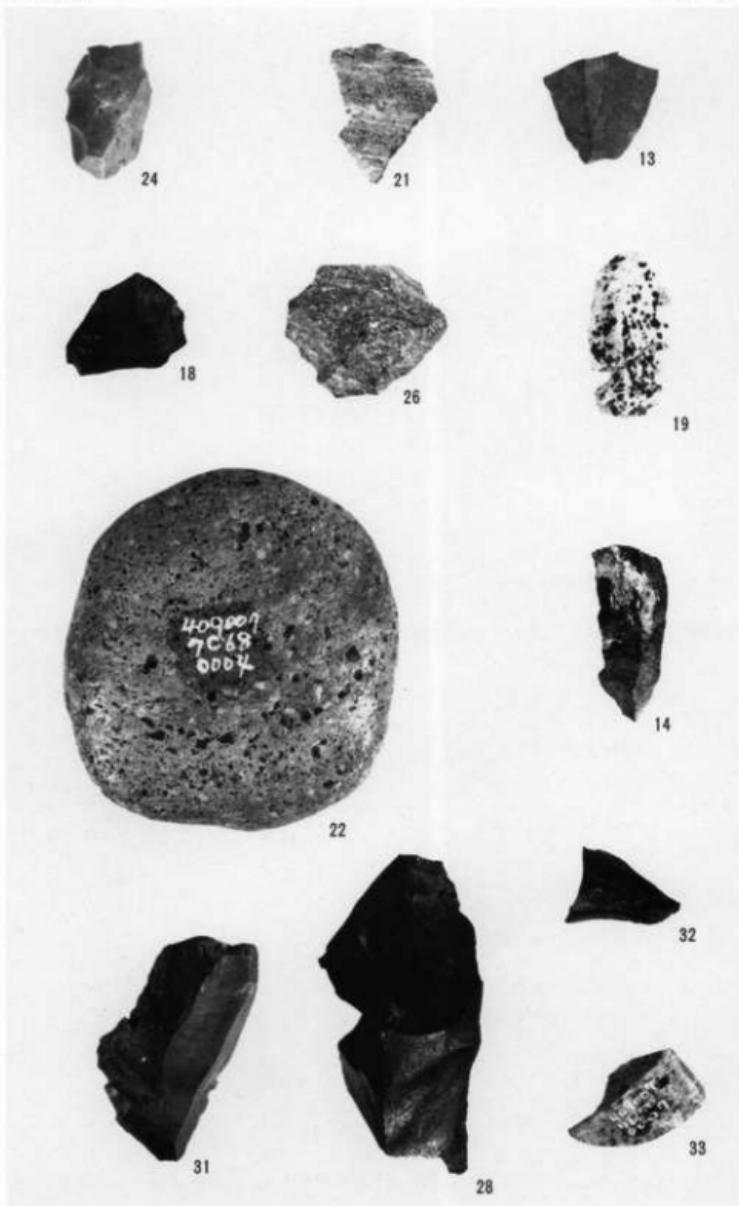
K ブロック遺物出土状況

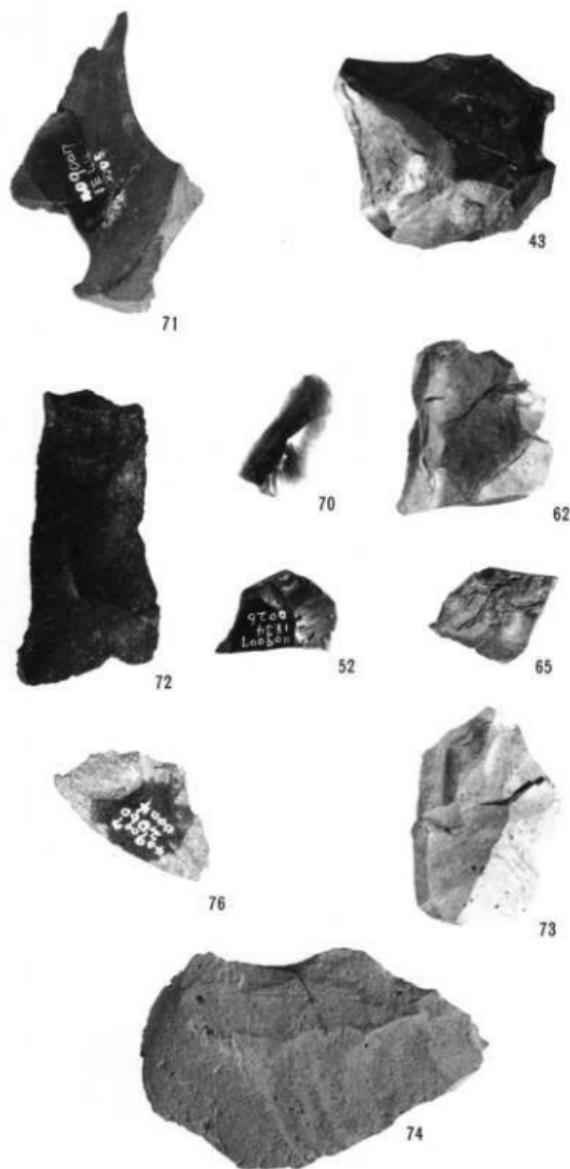


L ブロック遺物出土状況

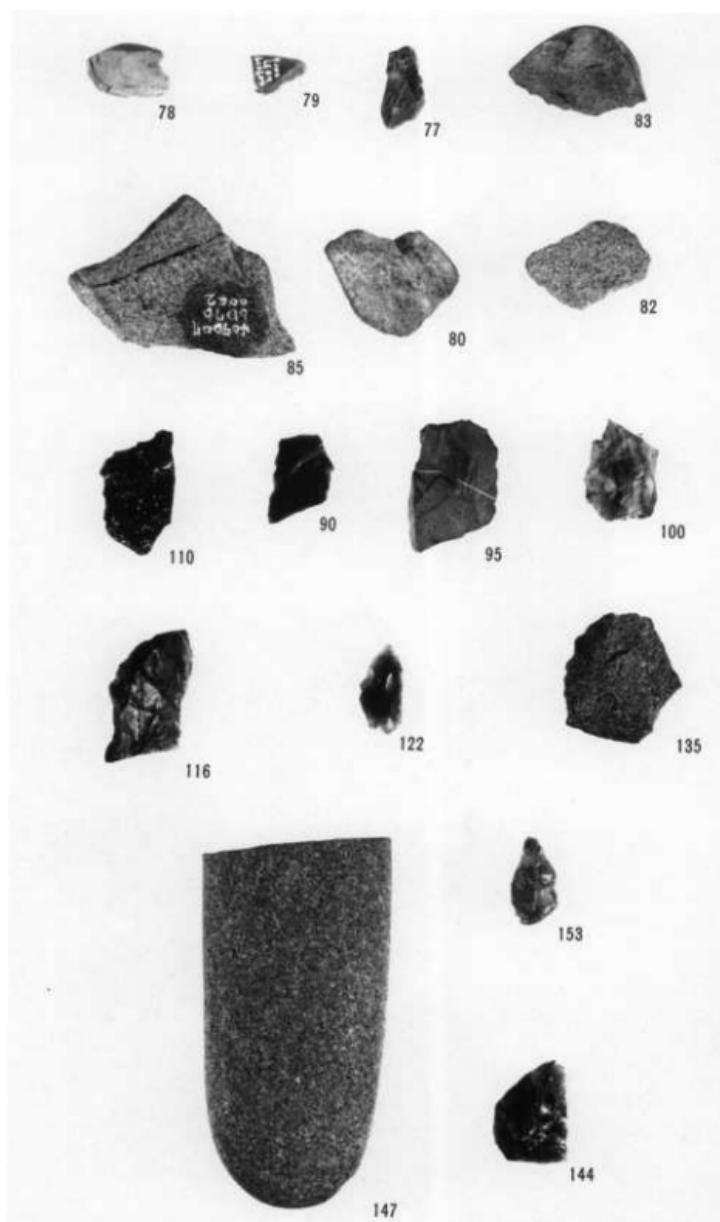


P ブロック遺物出土状況





IV～VI層主体石器群



A～Fブロック出土石器



176



172



243



274



263



178



192



269



284



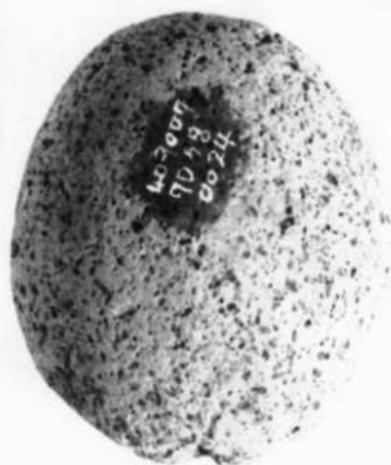
289



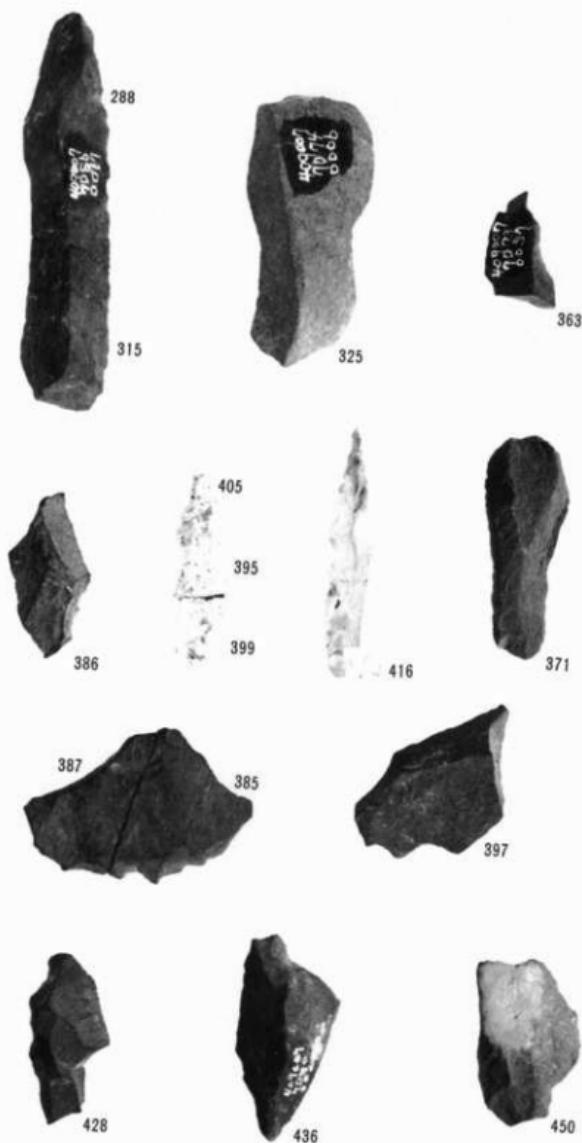
293



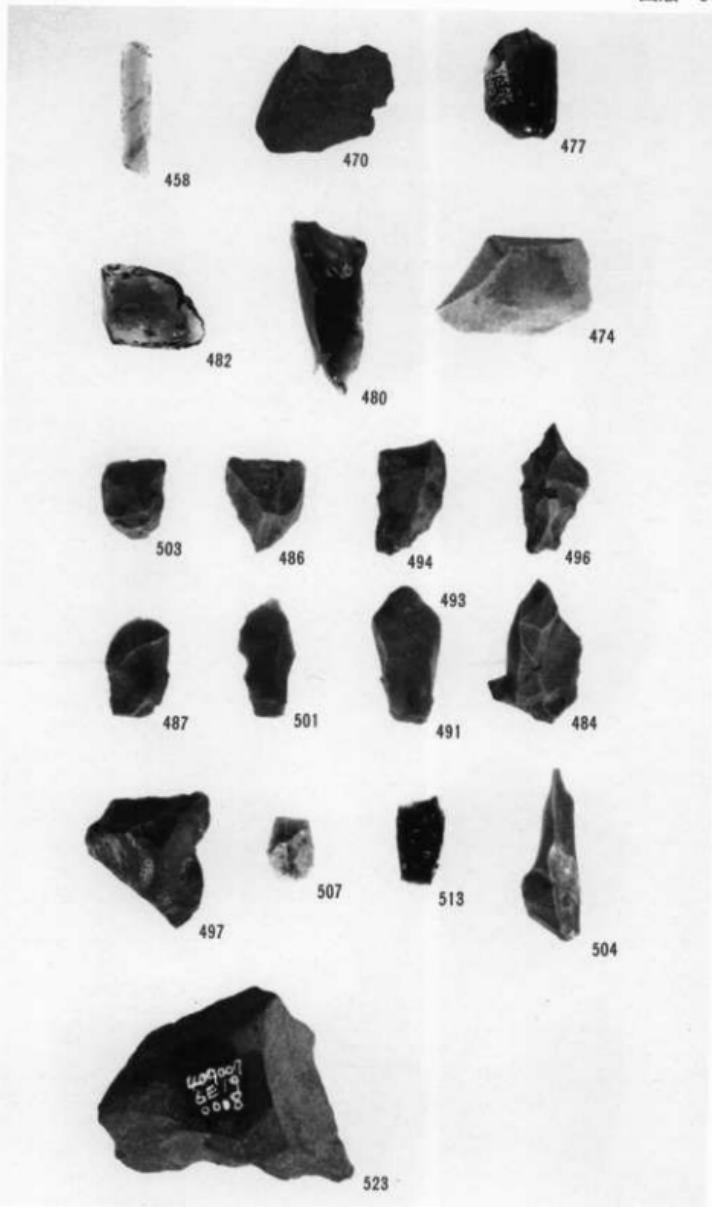
292



Gブロック出土石器

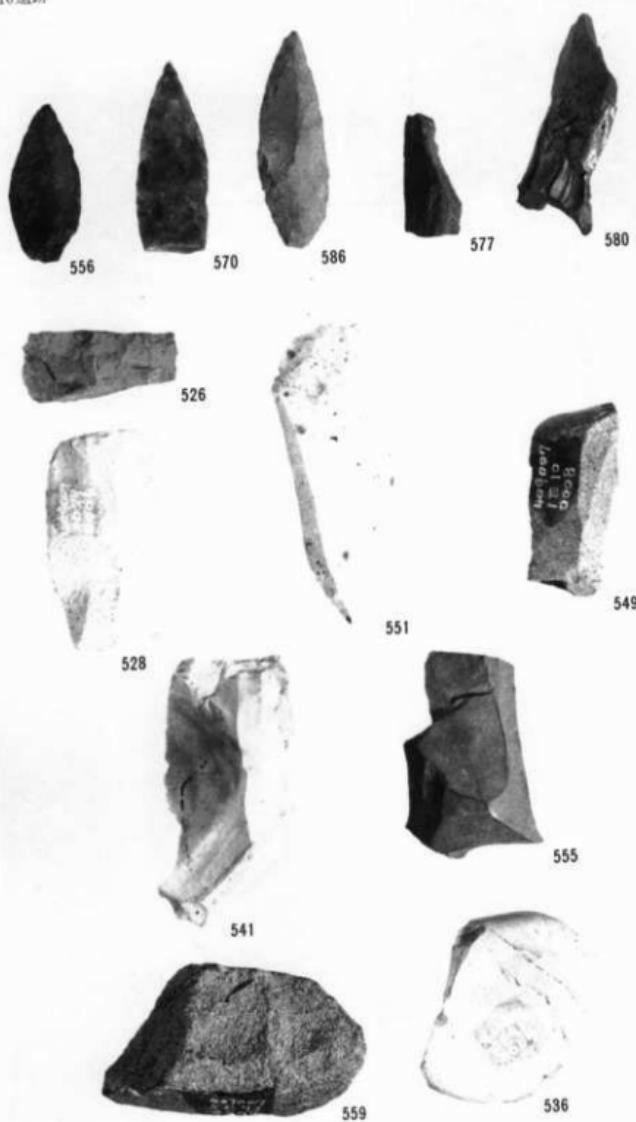


H~Mブロック出土石器



N~Q・T ブロック出土石器

No. 10 遺跡



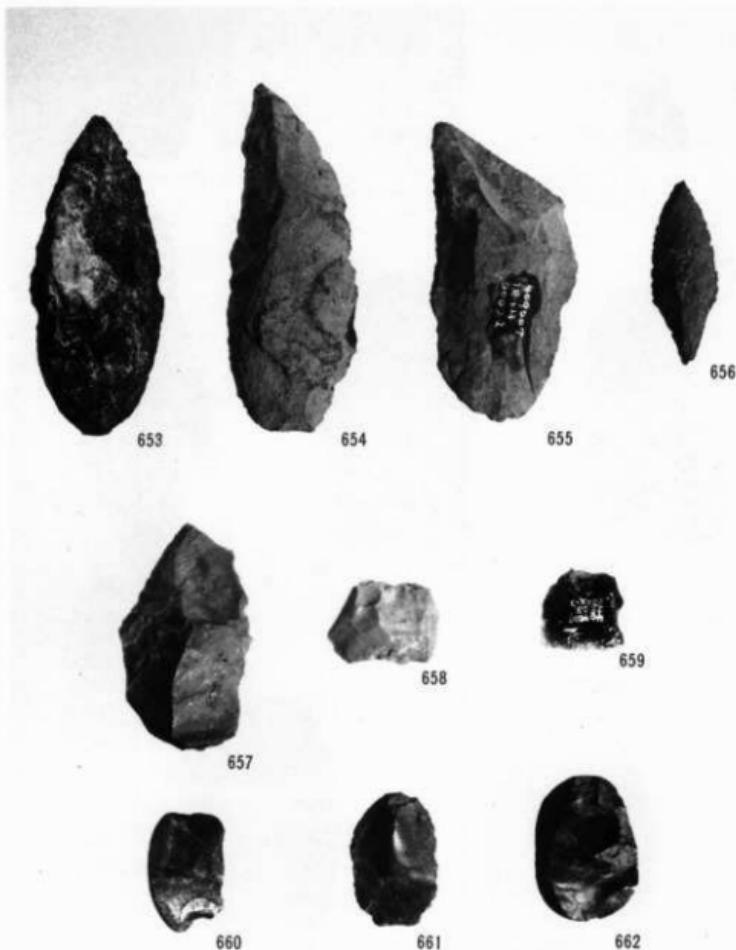
ブロック外出土石器



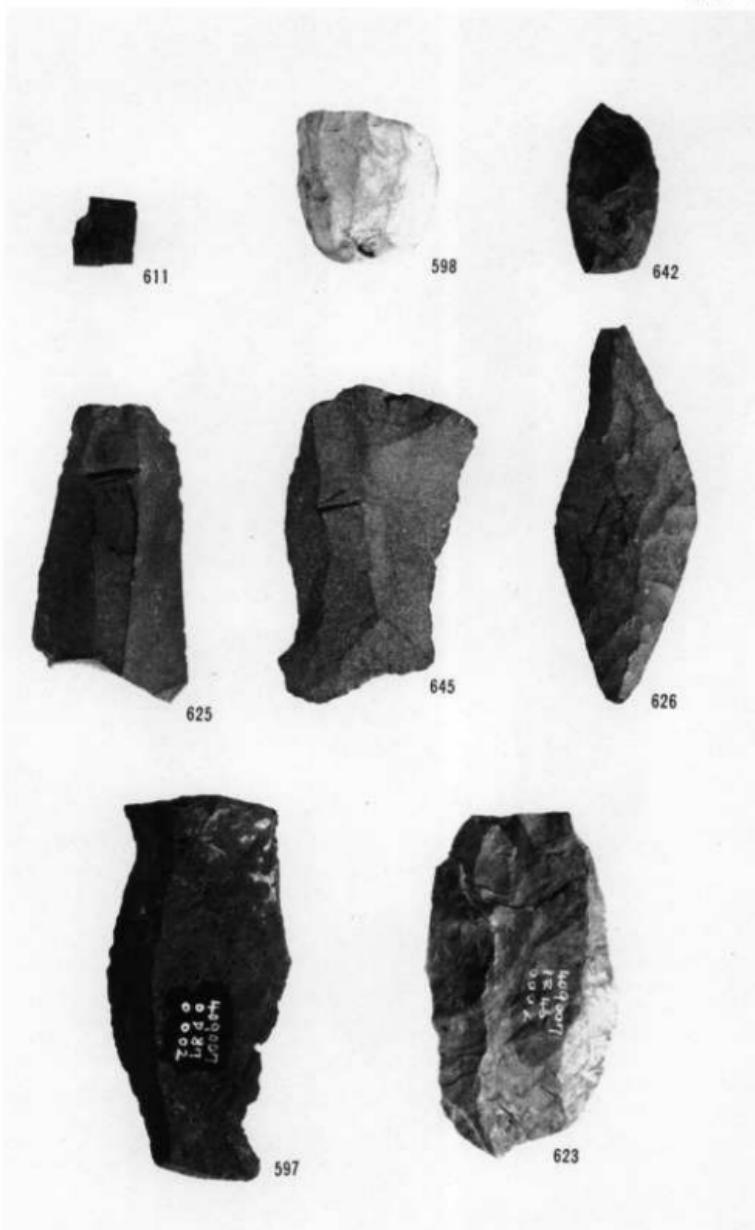
接合資料 B



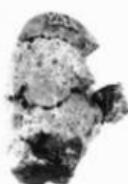
同 A



III層直上石器群



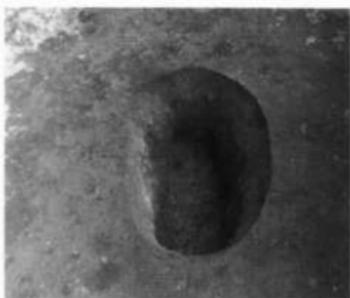
I・II層出土先土器時代石器群



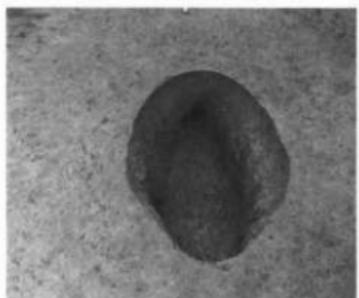
疊群構成疊接合例



1号



4号



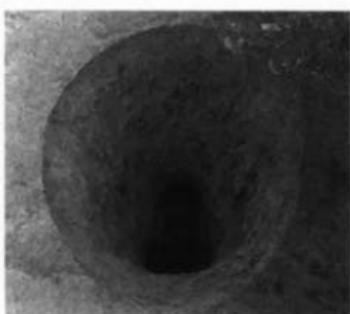
2号



5号



3号

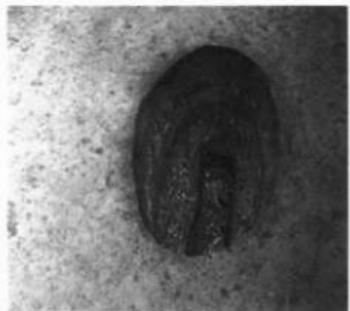


6号

陥し穴状土壤



8号



13号



10号



19号

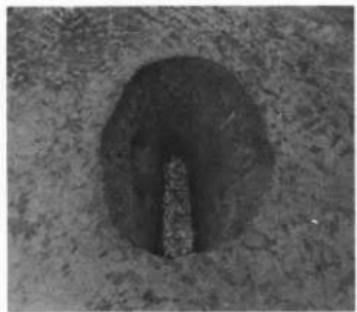


11号

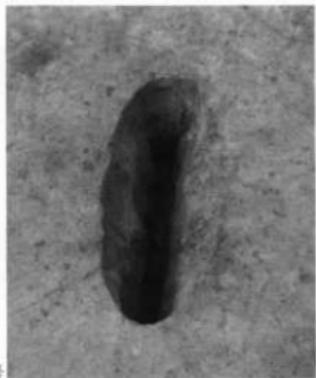


20号

陥し穴状土壤



21号



26号



23号



26号土層断面



24号



27号

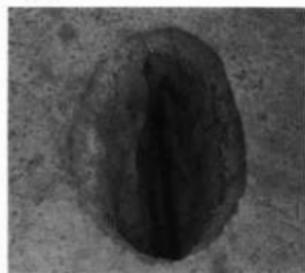
陥し穴状土塊



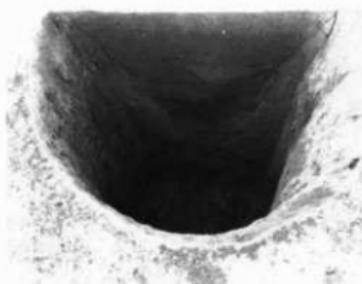
28号



30号



29号



30号土層断面

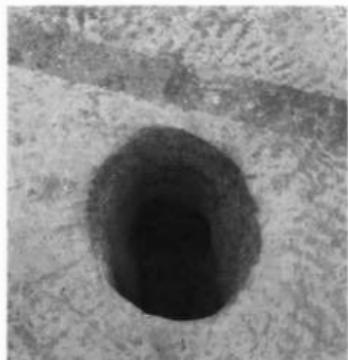


34号



35号

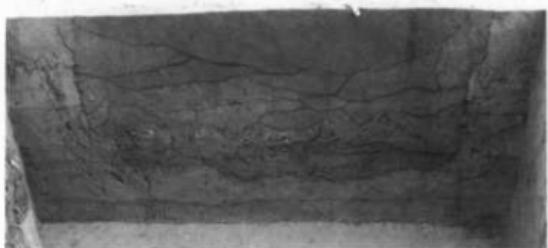
陥し穴状土壤



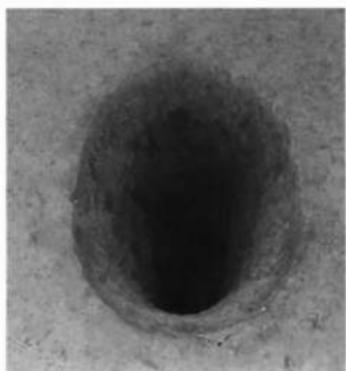
36号



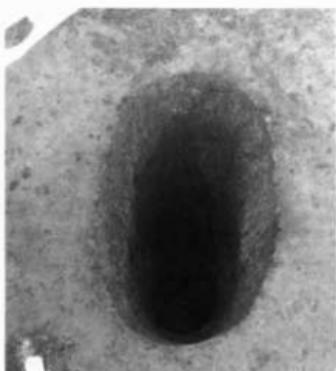
38号



37号



39号



42号

陥し穴状土壤



43号



49号



47号



50号土層断面

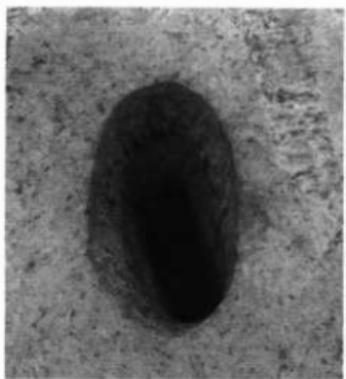


48号

陥し穴状土壤



50号



52号



57号



54号



64号

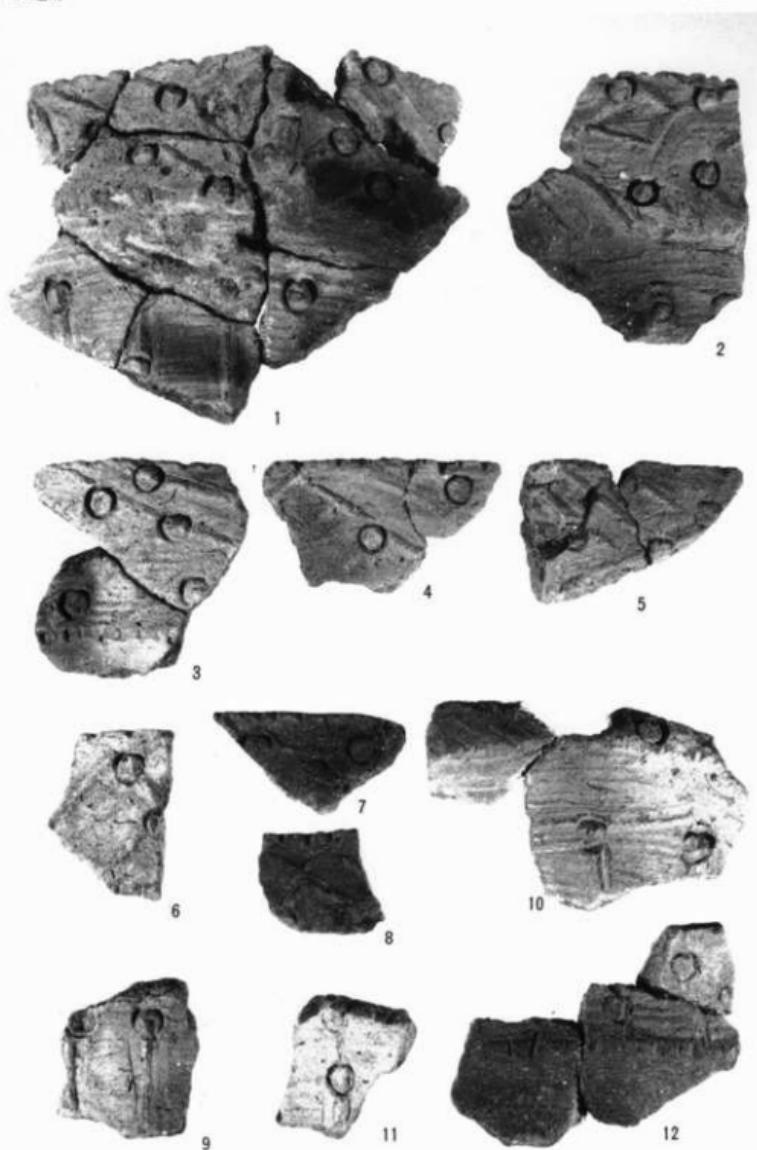


55号



66号

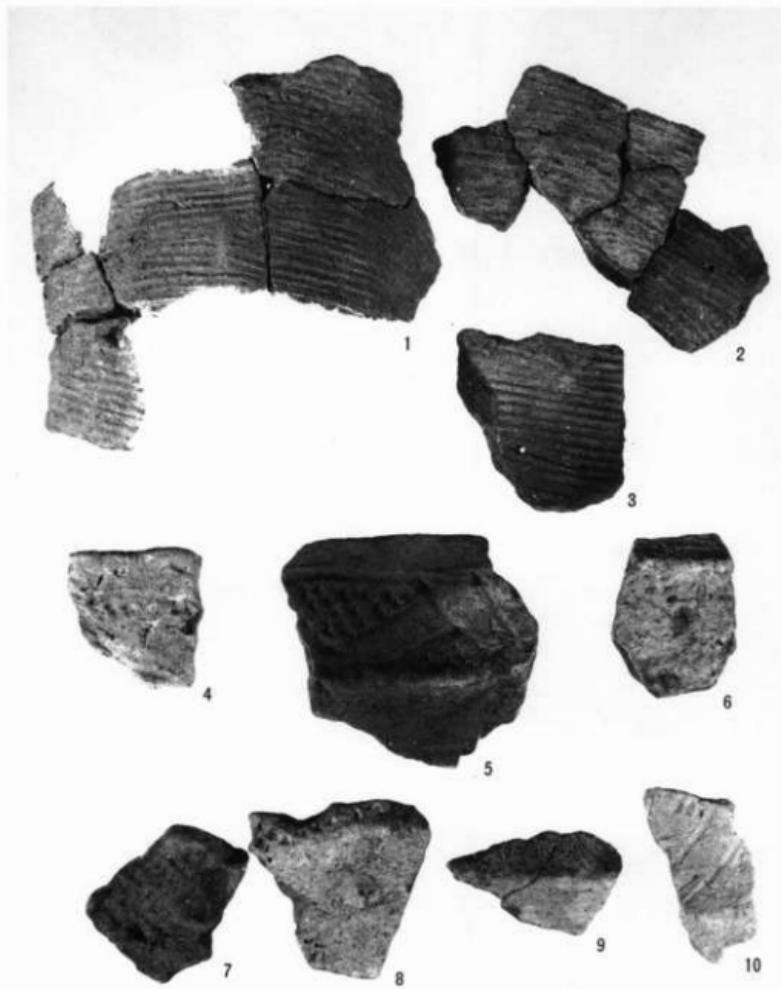
陥し穴状土壤



第1群土器 (1)



第1群土器 (2)



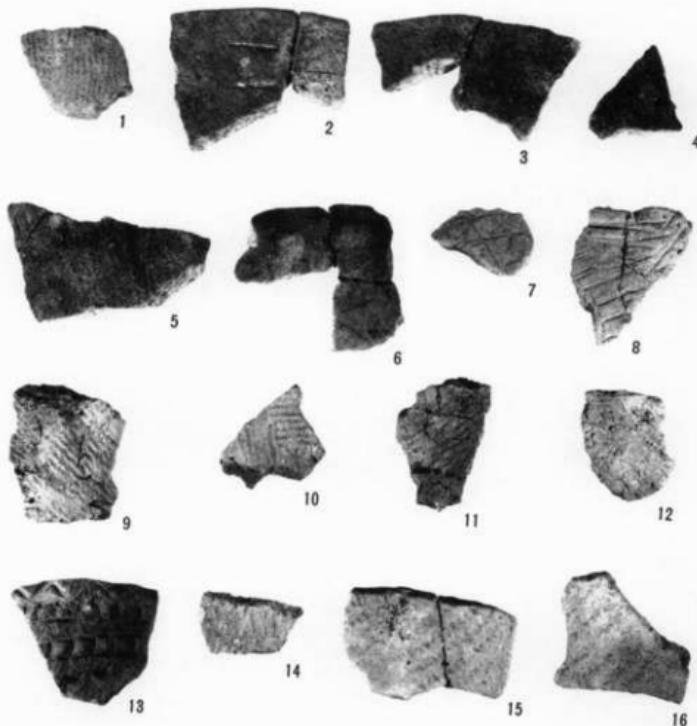
第1群土器 (3)



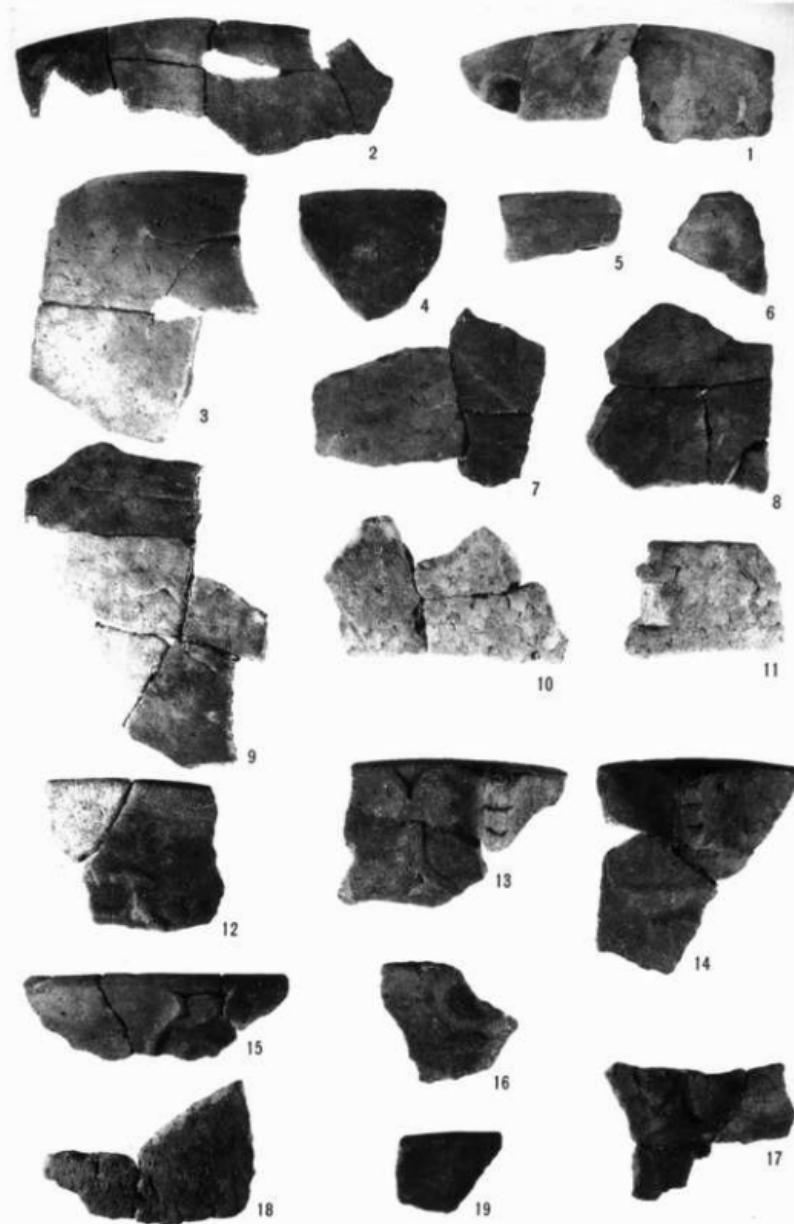
第1群土器 (4)



第1群土器(5)



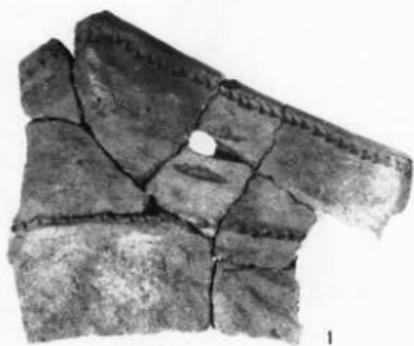
第1・2群土器



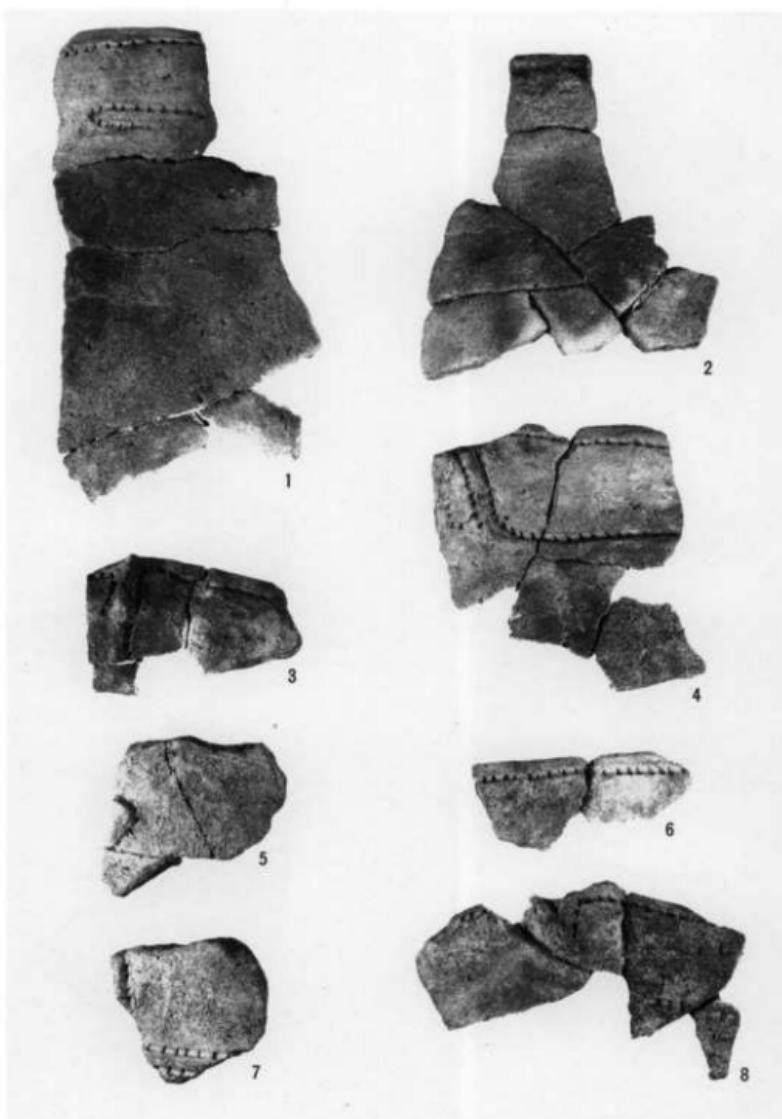
第3群土器(1)



第3群土器 (2)



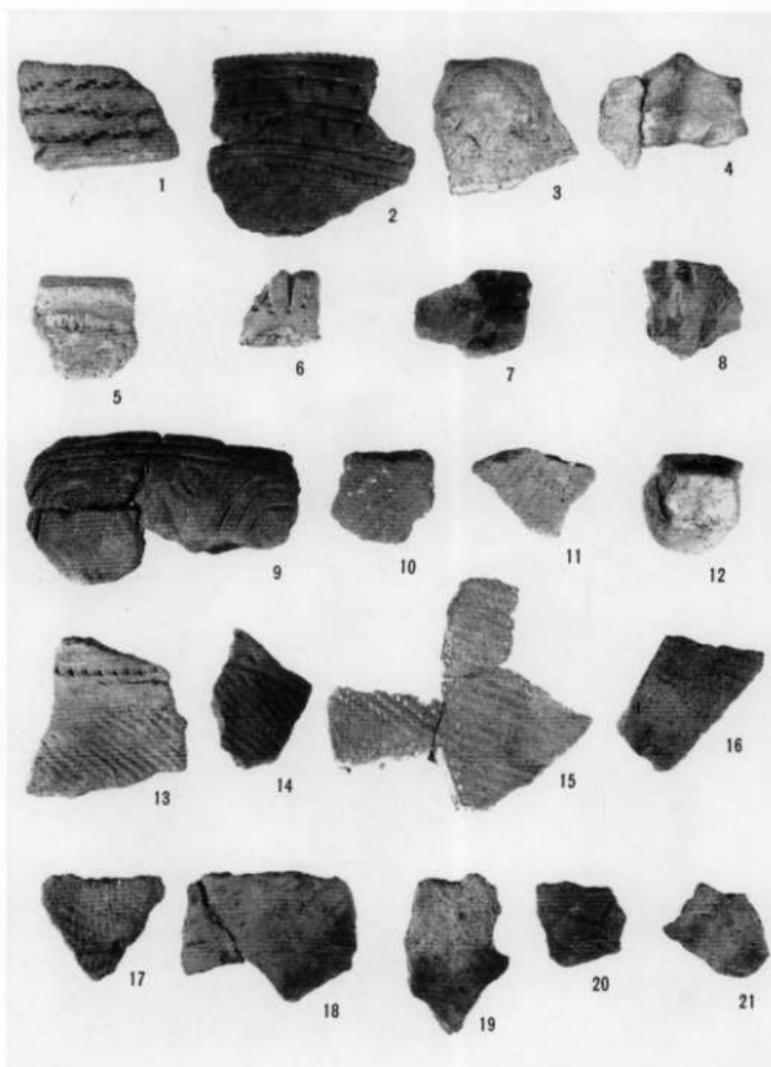
第3群土器(3)



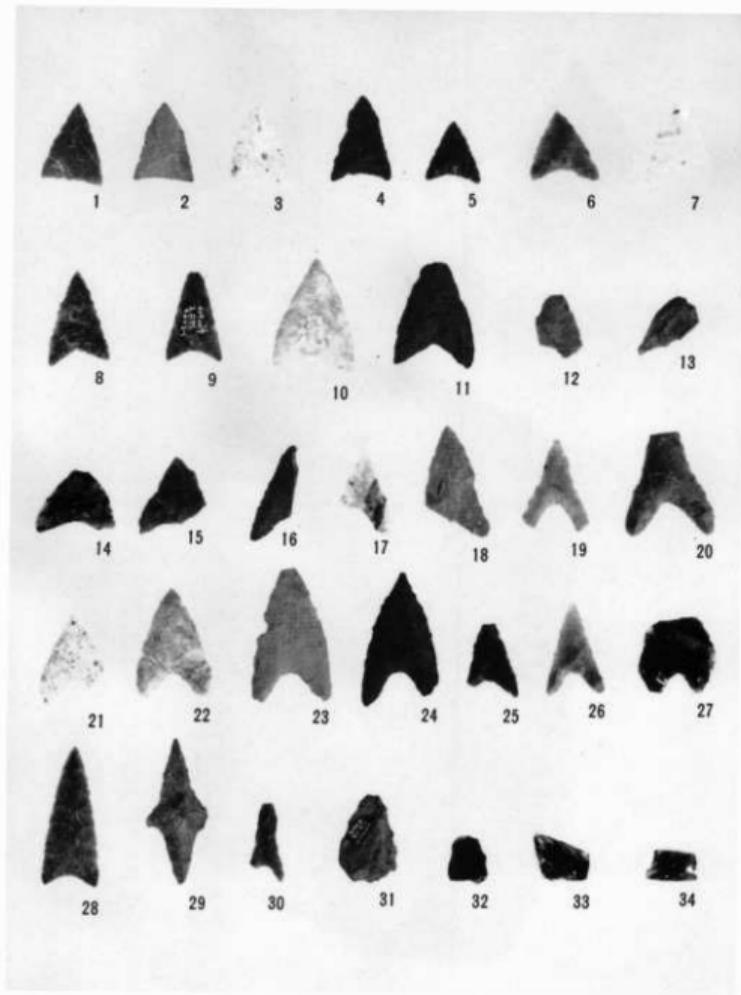
第3群土器 (4)



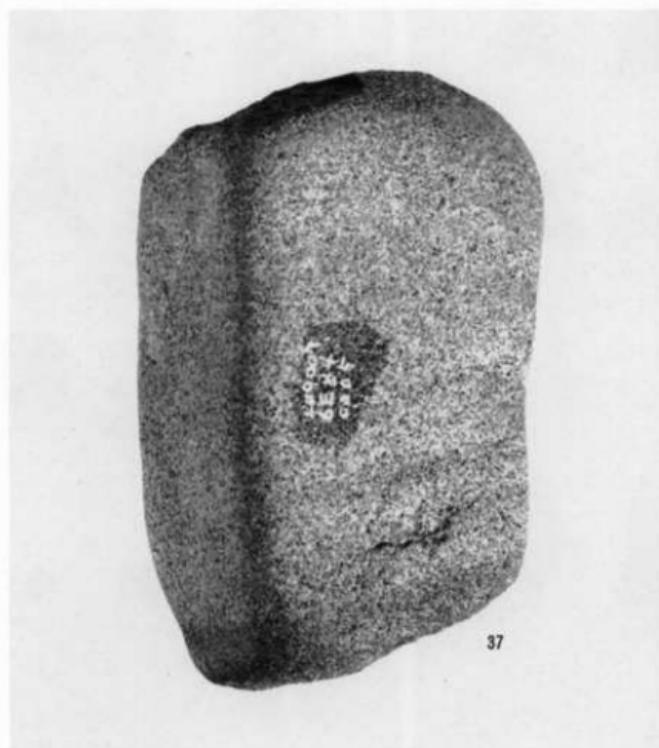
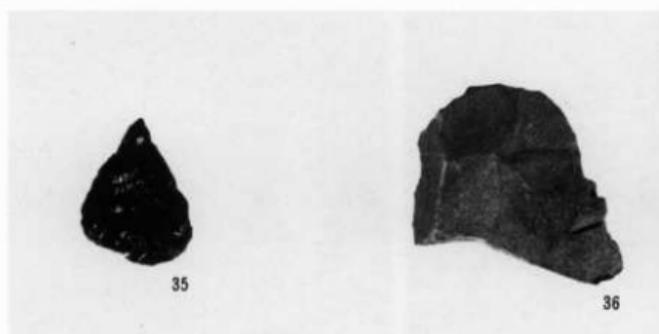
第3群土器 (5)



第3・4群土器



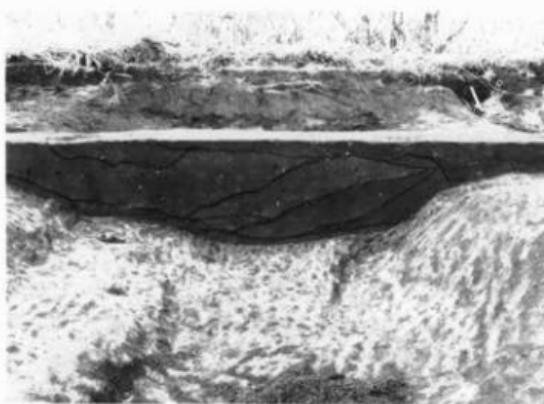
縄文時代石器 (1)



縄文時代石器 (2)



溝状遺構（1号）



同覆土断面



溝状遺構（2号）



同覆土断面



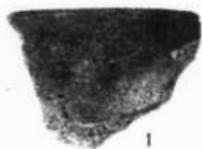
溝状遺構（3号）



溝状遺構（4号）



溝状遺構（4・5・6号）東から



1



2



3



4



5



6



7



8

その他の時代の遺物

昭和60年3月20日 印刷
昭和60年3月30日 発行

新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 V

-No 2 遺跡-

-No 10 遺跡-

発行 新 東 京 国 際 空 港 公 団
東京都中央区日本橋本町2-4

財団法人 千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻1-3-13

印刷 有限会社 みつわ軽印刷社
千葉県千葉市神明町542

「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書V」正誤表

頁	行	誤	正
25	3	平坦面	平坦面
31	5	出入口には	出入口は
79	7	A-1号跡	A-7号跡
79	9	A-1号跡	A-7号跡
90	5	明黄褐色ローム層	明黄褐色ローム層
90	6	暗褐色帶	暗色帶
94	19	ビエスエスキーエ	ビエスエスキーユ
126	1	剝方	剝片
132	第104図	3段目の左から2番目486	
136	14	再生削片	再生剝片
212	6	色調な	色調は
233	第166図	土層断面図K-K'において1のすぐ右が9	
254	19と20の間に挿入	橋本勝雄他(1984)『八千代市権現後遺跡—萱田地区埋蔵文化財調査報告書I—』財團法人千葉県文化財センター	
図版32		上段石器番号181、下段石器番号182	